EusLisp

EusLisp version 9.00/ irteus version 1.00

リファレンスマニュアル

-ロボットモデリングの拡張-

ETL-TR-95-19 + JSK-TR-10-03

平成 27 年 5 月 10 日

irteus 1.00

東京大学大学院

情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻

野沢 峻一, 植田 亮平, 岡田 慧

ueda@jsk.t.u-tokyo.ac.jp nozawa@jsk.t.u-tokyo.ac.jp k-okada@jsk.t.u-tokyo.ac.jp 〒 113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 2 号館 7 階 73B2

EusLisp 9.00

通商産業省 工業技術院

電子技術総合研究所 知能システム部

松井 俊浩, 原 功, 中垣 博文(九州電力)

 $matsui@etl.go.jp,\ hara@etl.go.jp,\ nakagaki@etl.go.jp$

〒 305 茨城県つくば市梅園 1-1-4

目 次

第	I部	EusLisp 基本	1
1	はじ	めに	1
	1.1	EusLisp におけるオブジェクト指向プログラミング	1
	1.2	Euslisp の特徴	2
	1.3	Common Lisp との互換性	3
	1.4	開発履歴	3
	1.5	インストール	4
	1.6	ライセンス	4
	1.7	デモプログラム	6
2	= -	AT THE	-

	2.1	数値	7
	2.2	オブジェクト	7
	2.3	クラス継承	8
	2.4	型指定	13
3	左書	だと評価	14
	3.1	アトム (atom)	14
	3.2	スコープ	14
	3.3	一般化変数	14
	3.4	特殊書式	15
	3.5	マクロ	15
	3.6	関数	16
4	制御	和構造	18
	4.1	条件文	18
	4.2	逐次実行と Let	18
	4.3	ローカル関数	19
	4.4	ブロックと Exit	19
	4.5	- 繰返し	20
	4.6	述語	21
5	オフ	ブジェクト指向プログラミング	22
	5.1	クラスとメソッド	22
	5.2	メッセージ送信	23
	5.3	インスタンス管理	24
	5.4	基本クラス	25
6	数值		28
	6.1	-/^-/- 数值演算定数	28
	6.2	比較演算関数	
	6.3	整数とビット毎の操作関数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	6.4	一般数值関数	
	6.5		
7	cam	nbol とパッケージ	33
1	5y11 7.1	symbol	
		パッケージ	
	1.2	N97 2	30
8	列、	行列とテーブル	38
	8.1	一般列	
	8.2	リスト	
	0 9	ベクトルと行列	46

	8.4	文字と文字列	48
		8.4.1 日本語の扱い方	49
	8.5	Foreign String	50
	8.6	ハッシュテーブル	51
9	スト	リームと入出力	53
	9.1	ストリーム	53
	9.2	リーダ (reader)	55
	9.3	プリンタ (printer)	59
	9.4	プロセス間通信とネットワーク	61
		9.4.1 共有メモリ	61
		9.4.2 メッセージキューと FIFO	61
		9.4.3 ソケット	62
	9.5	非同期入出力	64
	9.6	パス名	65
	9.7	ファイルシステムインターフェース	36
10	評価	j ·	37
	10.1	評価関数	67
	10.2	最上位レベルの対話	70
	10.3	コンパイル	72
	10.4	プログラムロード・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	74
	10.5	デバッグ補助	76
	10.6	ダンプオブジェクト	78
		プロセスイメージ保存	
		最上位レベルのカスタマイズ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		その他の関数	
第	II 剖	S EusLisp 拡張	30
11			30
		メモリ管理	
	11.2	UNIX システムコール	
		11.2.1 時間	33
		11.2.2 プロセス	33
		11.2.3 ファイルシステムと入出力	35
		11.2.4 シグナル	37
		11.2.5 マルチスレッド	38
		11.2.6 低レベルメモリ管理	39
		11.2.7 IOCTL	90

		11.2.8 キーインデックスファイル)]
	11.3	UNIX プロセス	13
	11.4	C で書かれた Lisp 関数の追加	14
	11.5	他言語インターフェース 9	15
	11.6	VxWorks	ıς
		11.6.1 VxWorks 側の起動	ıς
		11.6.2 ホスト側の起動	ıς
10			
12		チスレッド 10	
	12.1	マルチスレッド Euslisp の設計	
		12.1.1 Solaris 2 オペレーティングシステムのマルチスレッド	
		12.1.2 Context Separation	
	10.0		
	12.2	非同期プログラミングと並列プログラミングの構築	
		12.2.2 スレッドの並列実行	
		12.2.3 同期の手法	
		12.2.4 同期障壁	
		12.2.5 同期メモリポート	
		12.2.6 タイマー	
		並列度の計測	
		スレッド生成	
	12.5	同期	16
13	幾何	[学関数 10	9
	13.1	実数ベクトル (float-vector)	96
	13.2	行列と変換	.(
	13.3	LU 分解	.2
	13.4	座標系	.4
	13.5	連結座標系	. 7
	414 I		_
		学モデリング	
		種々の幾何学関数	
		線とエッジ	
		平面と面	
		立体 (body)	
		基本 body の作成関数	
		body の合成関数	
		座標軸	
		立体の接触状態解析	
	14.9	多角形の Voronoi Diagram	1

15	視界とグラフィックス	143
	15.1 視界 (viewing)	. 143
	15.2 投影	. 144
	15.3 Viewport	. 146
	15.4 Viewer	. 147
	15.5 描画	. 151
	15.6 アニメーション	. 152
16	Xwindow インターフェース	154
	16.1 Xlib のグローバル変数とその他関数	. 154
	16.2 Xwindow	. 157
	16.3 Graphic Context	. 162
	16.4 色とカラーマップ	. 164
17	XToolKit	168
	17.1 X イベント	. 169
	17.2 パネル	. 170
	17.2.1 サブパネル (メニューとメニューバー)	. 172
	17.2.2 ファイルパネル	. 173
	17.2.3 テキスト表示パネル	. 173
	17.3 パネルアイテム	. 175
	17.4 キャンバス	. 180
	17.5 テキスト window	. 180
第	III 部 irteus 拡張	185
18	ロボットモデリング	185
	18.1 ロボットのデータ構造とモデリング	. 185
	18.1.1 ロボットのデータ構造と順運動学	. 185
	18.1.2 EusLisp による幾何情報のモデリング	. 185
	18.1.3 幾何情報の親子関係を利用したサンプルプログラム	. 186
	18.1.4 bodyset-link と joint を用いたロボット(多リンク系)のモデリング	. 186
	18.1.5 cascaded-link を用いたロボット (多リンク系)のモデリング	. 188
	18.2 ロボットの動作生成	
	18.2.1 逆運動学	. 190
	18.2.2 基礎ヤコビ行列	. 191
	18.2.3 関節角度限界回避を含む逆運動学	. 192
	18.2.4 衝突回避を含む逆運動学	. 193
	18.2.5 衝突回避のための関節角速度計算法	. 193
	18.2.6 衝突回避計算例	. 194

	18.2.7 非ブロック対角ヤコビアンによる全身協調動作生成	195
	$18.2.8$ リンク間重複があるヤコビアン計算と関節角度計算 \dots	195
	18.2.9 ベースリンク仮想ジョイントを用いた全身逆運動学法	196
	18.2.10 ベースリンク仮想ジョイントヤコビアン	196
	18.2.11 マスプロパティ計算	197
	18.2.12 運動量・角運動量ヤコビアン	197
	18.2.13 重心ヤコビアン	198
	18.3 ロボットの動作生成プログラミング	198
	$18.3.1$ 三軸関節ロボットを使ったヤコビアン,逆運動学の例 \dots	198
	18.3.2 irteus のサンプルプログラムにおける例	201
	18.3.3 実際のロボットモデル	202
	18.4 ロボットモデル	204
	18.5 センサモデル	218
	18.6 環境モデル	220
	18.7 動力学計算・歩行動作生成	220
19	ロボットビューワ	22 3
		223224
		22 4
	干涉計算	224 225
20	干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し	224 225 225
20	干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し	224 225
20 21	干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し 20.2 ロボット動作と干渉計算 BVH データ	224 225 225
202122	 干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し 20.2 ロボット動作と干渉計算 BVH データ Collada データ 	224 225 225 226
20212223	 干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し	224 225 225 226 229
2021222324	干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し 20.2 ロボット動作と干渉計算 BVH データ Collada データ ポイントクラウドデータ グラフ表現	224 225 225 226 229 231
2021222324	 干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し 20.2 ロボット動作と干渉計算 BVH データ Collada データ ポイントクラウドデータ グラフ表現 	224 225 225 226 229 231 233 238
2021222324	 干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し 20.2 ロボット動作と干渉計算 BVH データ Collada データ ポイントクラウドデータ グラフ表現 irteus 拡張 	224 225 225 226 229 231 233 238 238
2021222324	干渉計算 20.1 irteus から PQP の呼び出し 20.2 ロボット動作と干渉計算 BVH データ Collada データ ポイントクラウドデータ グラフ表現 irteus 拡張 25.1 GL/X 表示	224 225 225 226 229 231 233 238 240

第I部

EusLisp 基本

1 はじめに

EusLisp は、知能ロボットの研究を目的とした言語で、Common Lisp とオブジェクト指向型プログラミングをベースとしている。ロボットの研究では、センサデータの処理、環境認識、障害物回避動作計画、作業計画などが重要なテーマとして取り上げられるが、これらに共通するのは、ロボットと外界の3次元幾何モデルである。EusLisp を開発する動機となったのは、記号処理システムから簡単に使えて拡張性の高いソリッドモデラーの必要性を痛感したからである。既存のソリッドモデラーを調べてわかったことは、その実現にとって最も重要な機能は、数値演算ではなくモデル要素のトポロジーを表現、管理するためのリスト処理能力であった。もちろん、幾何演算も重要ではあるが、ベクトル・行列を操作する関数を組み込めば十分であることがわかった。

こうして、ソリッドモデラーは Lisp の上に実現されるべきであると言う基本方針が得られた。さらに、ソリッドモデラーは、3 次元物体モデルを定義し、動きをシミュレートし、物体の相互関係を表現し、グラフィックスを表示する機能を提供するが、先に述べた各種のロボット問題と結合されなければ意味がない。また、ロボットを完成されたシステムとして実現するには、これらのロボット問題を解くモジュールが効果的に統合されなければならない。EusLisp は、この統合の枠組をオブジェクト指向に求めた。オブジェクト指向は、モジュラープログラミングを促進し、継承機能により既存の機能を段階的に拡張することが容易になる。実際、上記のソリッドモデラーは、物体、面、エッジなどの物理的実体の振舞いをクラスに定義し、ロボット問題に依存する機能は、これらをサブクラスに拡張することで効率よく発展させられる。これは、ソフトウェア資源の再利用にもつながる。

こうして EusLisp は、オブジェクト指向と CommonLisp をベースとして 3 次元幾何モデラーを実現し、複数ロボットの協調動作に必要なタスク間通信機能、マンマシンインタフェースに重要なウィンドウ、グラフィックス、複合的プログラミングに必要な他言語インタフェース等を備え、さまざまなロボット問題への適用を可能にしたプログラミングシステムとして構築された。このほか、メモリ管理にも工夫を凝らし、メモリ容量以外に生じる領域の大きさに関する制約を極力排除し、ガーベージコレクションが効率的に行なわれ、ユーザがメモリ管理に関するパラメータを操作する必要がないように努めた。

このリファレンスマニュアルは、EusLisp の基礎と拡張に分かれ、前者が Common Lisp の機能とオブジェクト指向型プログラミングを、後者が幾何モデル、ロボットモデル、ウィンドウ、画像処理など、よりロボット応用に近い部分を扱っている。アップデート情報は、1.6 節に書かれているとおり、Euslisp のメーリングリストから入手することができる。

1.1 EusLisp におけるオブジェクト指向プログラミング

EusLisp は、その他の Lisp を基礎としたオブジェクト指向プログラム言語(例えば CLOS [?])と異なり、オブジェクト指向を基礎とした Lisp システムである。以前の考え方として、Lisp はオブジェクト指向プログラミングを実現するための言語として使用され、その中でシステムのデータ型がそれ相応のクラスを持っていなかったので、システム定義オブジェクトとユーザー定義オブジェクトとの間に明らかな区別があった。一方、EusLisp 内の数値を除く全てのデータ構造はオブジェクトで表現されている。そして、内部データ型(例えばcons や symbols)とユーザー定義クラスとの間に特別な違いはない。これは、システムの内部データ型でさえユーザー定義のクラスによって拡張(継承)できることを意味する。また、ユーザーが内部クラスのサブクラスとして自分独自のクラスを定義したとき、その新しいクラスに対して内部メソッドおよび内部関数を使用することができ、新しいプログラムを記述する量を減らすことができる。例えば、キューや tree やスタックな

どを定義するために、car や cdr と異なった特別な部分を持つように cons クラスを拡張したとする。これらのインスタンスでさえ、cons クラスの内部関数が型の継承を一定時間で認識するため、それらの関数をのロス時間なしで適用できる。したがって、EusLisp はシステムの全ての内部機能(拡張可能なデータ型の形式)をプログラマーに公開している。この画一性もまた、EusLisp の実行のために役に立つ。なぜなら、実行言語の中で defclass や send や instantiate のような僅かな核になる関数を定義した後は、内部データ型の内部構造にアクセスするための大部分の関数を EusLisp 自身で書くことができる。これは、EusLisp の確実性および維持性を改善するものである。

1.2 Euslisp の特徴

- オブジェクト指向プログラミング EusLisp は、単一継承オブジェクト指向プログラミングである。数値を除いた全てのデータ型は、オブジェクトで表現され、その動作はそれらのクラスの中に定義されている。
- Common Lisp EusLisp は、EusLisp のゴールやオブジェクト指向と一致する限りにおいて、[?] や [?] に書かれている Common Lisp の文法に従う。次の節に互換性について記述する。
- コンパイラ EusLisp のコンパイラは、インタプリタによる実行よりも 5~30 倍実行速度を上げることができる。コンパイラは、インタプリタと同一の構文を持っている。
- メモリ管理 フィボナッチバディ方法は、メモリ制御・GC・ロバスト制御に有効なため、メモリ管理手法として、使用されている。EusLisp は、比較的に平均的な量のメモリを持つシステムで動作できる。ユーザーは、それぞれのデータ型毎のページアロケーションの最適化を考える必要がない。
- 幾何学関数 数値は、いつも直接データとして表現されるため、数値計算によってゴミは発生しない。任意の 大きさのベクトル・行列におけるたくさんの幾何学関数は、内部関数となっている。
- 幾何学モデラー 立体モデルは、CSG の処理を使用して、基本的な形から定義することができる。質量や干渉 チェックや接触判別等を備えている。
- グラフィックス 描画時の陰線処理やレンダリング時の陰面処理を備えている。画像をポストスクリプトデータとして出力できる。
- 画像処理 エッジ抽出機能を備えている。
- マニピュレータモデル 6自由度を持つロボットマニピュレータを簡単にモデル化できる。
- Xwindow インターフェース Xlib の関数呼び出しと Xlib のクラスおよび独自の XToolKit クラスの 3 つのレベルの Xwindow インターフェースを備えている。
- 他言語インターフェース Cや他の言語で書かれた関数を EusLisp の中から呼び出すことができる。EusLisp と他言語間の両方向呼びだしを備えている。LINPACK のようなライブラリ内の関数は、このインターフェースを通して実行される。X toolkit の Call-back 関数は Lisp へ定義することができる。
- UNIX 依存関数 ほとんどの UNIX のシステム呼びだしおよびライブラリ関数は、Lisp 関数として揃っている。通信処理や非同期入出力も可能である。
- マルチスレッド グローバルデータを分割してマルチ処理を実現するマルチスレッドプログラミングが Solaris 2 オペレーティングシステムの上で可能となった。マルチスレッドは、非同期プログラミングを容易にし、実時間応答を改善する [?, ?]。もし、マルチプロセッサのマシン上で Euslisp を実行するならば、並列プロセッサの高い計算能力を利用することができる。

1.3 Common Lisp との互換性

Common Lisp は、よく本となっていて広く入手できる標準的な Lisp[?,?] となっている。そのため、EusLisp は Common Lisp の特徴をたくさん採用している。例えば、変数スコープルール・パッケージ・列・一般変数・プロック・構造体・キーワードパラメータなどであるが、非互換もまだ残っている。実現されていない特徴を次に列挙する。

- 1. 多值变数: multiple-value-call, multiple-value-prog1, etc.
- 2. いくつかのデータ型: complex number, bignum, ratio, character, deftype
- 3. いくつかの特殊書式: progv, compiler-let, macrolet

次の特徴は、まだ完全でない。:

- 4. closure 動的範囲のみ有効である。
- 5. declare, proclaim inline と ignore は認識されない。

1.4 開発履歴

- 1986 EusLisp の最初のバージョンが UNIX-System5/Ustation-E20 上で走った。フィボナッチバディのメモリ管理・M68020 のアセンブラコードを生成するコンパイラ・ベクトル / 行列関数がテストされた。
- 1987 新しい高速型チェック方法が実現された。他言語インタフェースと SunView インターフェースが組み込まれた。
- 1988 コンパイラは、中間コードとして、Cプログラムを生成するよう変更された。コンパイラが中央処理装置と無関係となったため、EusLisp は簡単に Ultrix/VAX8800 や SunOS3.5/Sun3 や/Sun4 の上に移植された。ソケットを使用した IPC 機能が追加された。ソリッドモデラーが実現された。Common Lisp の特徴の大部分が追加された。例えば、キーワードパラメータ、再帰的データオブジェクトを扱うための表示フォーマット、一般列関数、readtables, tagbody, go, flet, や labels special forms, 等。
- **1989** Xlib インターフェースが作られた。C のような数式表現を読み込む%マクロが作られた。マニピュレータのクラスが定義された。
- 1990 XView インターフェースが稲葉氏により作成された。レイトレーサが作成された。ソリッドモデラーが CSG 処理履歴を保持するよう修正された。非同期入出力が追加された。
- 1991 動作拘束プログラムが比留川氏により作成された。DEC station に移植された。Coordinates クラスが 2 次元と 3 次元の両方の座標系を扱えるよう変更された。Body 組立関数が接触オブジェクトを扱えるよう拡張された。接触オブジェクトのための CSG 処理が作られた。パッケージシステムが Common Lisp と互換になった。
- 1992 2 つの平面の結合や交差を求める face+や face*が追加された。画像処理機能が追加された。リファレンスマニュアルの第一版が発行され、配布された。
- **1993** Euslisp は、全く変更がなかった。
- 1994 Solaris 2 に移植された。Solaris のマルチスレッド機能を用いて、マルチタスクが実現された。XToolKit が構築された。マルチロボットシミュレータ MARS が國吉氏により作成された。福岡で開催された日本ロボット学会学術講演会において Euslisp のオーガナイズドセッションが開かれた。

表 1: *eusdir*のディレクトリ

FILES	このドキュメント
README	ライセンス・インストール・サンプル実行のガイド
VERSION	EusLisp のバージョン
bin/	実行ファイル (eus, euscomp と eusx)
c/	C で書かれた EusLisp のカーネル
1/	EusLisp で書かれたカーネル関数
comp/	EusLisp で書かれた EusLisp コンパイラ
clib/	C で書かれたライブラリ関数
doc/	ドキュメント (latex と jlatex のテキストとメモ)
geo/	幾何学関数とグラフィックプログラム
lib/	共有ライブラリ (.so) とスタートアップファイル
llib/	Lisp ライブラリ
llib2/	Lisp ライブラリ 2 (UTYO で開発)
xwindow/	X11 インターフェース
makefile@	makefile.sun[34]os[34],.vax 等へのシンボリックリンク
pprolog/	tiny prolog のインタープリタ
xview/	xview tool kit インターフェース
tool/	
vxworks/	リアルタイム OS VxWorks とのインターフェース
robot/	ロボットモデルとロボットシミュレータ (MARS)
vision/	画像処理プログラム
contact/	拘束動作解析 比留川氏作 [?, ?, ?]
demo/	デモプログラム
bench/	ベンチマークテスト用プログラム

- 1995 リファレンスマニュアルの第二版が発行された。
- **2010** 修正 BSD ライセンスに変更され、バージョンが 9.00 となった.
- 2011 Darwin OS サポートが追加された.モデルファイルが追加された.
- 2013 Cygwin 64Bit サポートが追加された, MAXSTACK が 65536 から 8388608 へ、KEYWORDPARAM-ETERLIMIT が 32 から 128 に拡張された.
- 2014 文書が UTF-8 になった . バージョンが 9.10 となった .
- **2015** \min/\max のエラーチェック , vplus 任意長対応, non-ttyp モードでのメッセージ表示消去. バージョンが 9.11 となった .
- **2015** ARM サポートが追加された、バージョンが 9.12 となった、

1.5 インストール

インストールの手続きは、README に記述されている。インストールされるディレクトリ("/usr/local/eus/"を仮定する)は、グローバル変数*eusdir*に設定される。この場所は、load やコンパイラが参照する。

*eusdir*のサブディレクトリは、表 1 に書いてあるとおり。これらの中で、c/, 1/, comp/, geo/, clib/, lib/ や xwindow/は、eus や eusx を作成するときの基本ファイルを含んでいる。その他は、付属ライブラリ・デモプログラム・ユーザーからの寄贈品である。

1.6 ライセンス

EusLisp は以下の修正 BSD ライセンスの元配布されている.

Copyright (c) 1984-2001, National Institute of Advanced Industrial Science All rights reserved.

ソースコード形式かバイナリ形式か、変更するかしないかを問わず、以下の条件を満たす場合に限り、再頒布および使用が許可されます。

ソースコードを再頒布する場合、上記の著作権表示、本条件一覧、および下記 免責条項を含めること。

バイナリ形式で再頒布する場合、頒布物に付属のドキュメント等の資料に、上記の著作権表示、本条件一覧、および下記免責条項を含めること。

書面による特別の許可なしに、本ソフトウェアから派生した製品の宣伝または 販売促進に、<組織>の名前またはコントリビューターの名前を使用してはなら ない。

本ソフトウェアは、著作権者およびコントリビューターによって「現状のまま」 提供されており、明示黙示を問わず、商業的な使用可能性、および特定の目的 に対する適合性に関する暗黙の保証も含め、またそれに限定されない、いかな る保証もありません。著作権者もコントリビューターも、事由のいかんを問わ ず、 損害発生の原因いかんを問わず、かつ責任の根拠が契約であるか厳格責 任であるか(過失その他の)不法行為であるかを問わず、仮にそのような損害 が発生する可能性を知らされていたとしても、本ソフトウェアの使用によって 発生した(代替品または代用サービスの調達、使用の喪失、データの喪失、利 益の喪失、業務の中断も含め、またそれに限定されない)直接損害、間接損 害、偶発的な損害、特別損害、懲罰的損害、または結果損害について、一切責 任を負わないものとします。

なお 8.25 版までは以下のライセンスで配布されていた.

ユーザーは、メーリングリスト (euslisp@etl.go.jp) に登録され、そこに $Q \& A \cdot$ バグ・アップデート情報を流す。この情報は、*eusdir*/doc/mails に蓄積されている。

- 1. EusLisp の著作権は作者(松井俊浩)および電子技術総合研究所に属する。ユーザーは、作者より使用許可を得る必要がある。
- 2. 軍事目的以外であればどんな目的のために EusLisp を使用してもよい。
- 3. EusLisp は ftp 経由で電子技術総合研究所から自由に得ることができる。
- 4. EusLisp はここの条項を守る限りにおいてコピーまたは販売しても構わない。ただし、販売する際、販売者はオリジナルの EusLisp が無料であることを消費者に通知しなければならない。
- 5. ライセンス取得者が EsuLisp を使用して研究・学習した結果を公表する際、EusLisp の使用を特定参考 文献として引用しなければならない。
- 6. ライセンス取得者は、EusLisp のソースコードを追加・変更してもよい。プログラム結果は、コードの 50%以上が変更されない限り EusLisp であり、変更していない部分については、これらの条項を守る必要がある。
- 7. EusLisp で開発されたプログラムの著作権は、開発者に属する。しかしながら、EusLisp 本体の著作権に付け加えることはできない。
- 8. 作者および電総研は使用に際して、どんな保証もしない。



drawn by ONDA

図 1: 衝突回避経路計画のアニメーション

1.7 デモプログラム

デモプログラムは、サブディレクトリ demo の中にある。*eusdir*へ cd した後、eusx 上で実行できる。

- ロボットアニメーション eusx より $\operatorname{demo/animdemo}.1$ をロードする。約 20 分の計算の後、 $\operatorname{ETA3}$ マニピュレータの滑らかなアニメーションが表示される。(図 1)
- レートレーシング もし、8 ビットの疑似カラーディスプレイを持っているなら、demo/renderdemo.1 をロードしてレイトレーシング画像を楽しむことができる。geo/render.1 が先にコンパイルされていることが必要。
- エッジ抽出 demo/edgedemo.1をロードすると、サンプル単色画像が表示される。微分オペレータとしきい値を選ぶためのパラメータを入力する。エッジが数秒のうちに探され、元の画像に上書きされる。

2 データ型

他の Lisp と同様に、型の決まったデータオブジェクトは変数ではない。どの変数もその値として、どんなオブジェクトも持つことができる。変数にオブジェクトの型を宣言することが可能であるが、一般的にコンパイラで高速なコードを生成するための情報としてのみ使用される。数値は、ポインタの中で直接値として表現され、そのほかは、ポインタにより参照されるオブジェクトにより表現される。Sun4 で実行する場合、ポインタおよび数値は図 2 で描かれているように long word で表現される。ポインタの LSB の 2 ビットは、ポインタ・integer・float を識別するための tag ビットとして使用されている。ポインタは tag ビットが全てゼロであり、オブジェクトのアドレスとして 32 ビット全て使用できるので、EusLisp は 4GB 以上のアドレス空間を利用することができる。



図 2: ポインタと直接値

2.1 数值

数値には、integer と float (浮動小数点) の 2 種類があり、両方とも 29 ビットの値と 1 ビットの符号で表現される。したがって、integer は -536,870,912 から 536,870,911 までの範囲となる。float は、正および負で 4.8E-38 から 3.8E38 までの範囲を表現でき、その有効数字は、十進数で約 6 桁すなわち浮動小数点誤差は 1/1,000,000 程度である。

数値は、いつもオブジェクトでなくポインタで表現される。これは、EusLisp のオブジェクト指向の唯一の例外事項である。しかしながら、数値は決してヒープメモリを無駄にすることがないため、数値を扱うアプリケーションでは、ガーベージコレクションの原因とならず有効に動作する。

EusLisp は、文字型を持たないため、文字列は integer で表現される。文字コード表と無関係なプログラムを書くためには、#\ 読みだしマクロが役に立つ。しかし、文字が読まれるとき、数値表現に変換されるため、プリンタは#\ の表記法に対してどのように再変換すればよいのか解らない。

数値は、図 2 の \log word の中に 2 つの \log ビットを持っている。それで、数値計算に使用するときは、シフトまたはマスクすることによりこのビットを消す必要がある。 \inf は数値シフトにより \inf の 2 ビットを無視し、 \inf はマスクにより \inf の 2 ビットを無視する。 \inf のようなアーキテクチャのために \inf も必要である。なぜなら、意味を持つ最小の大きさの \inf として右端の \inf が使用できないためである。

2.2 オブジェクト

数値でない全てのデータは、ヒープにおかれるオブジェクトで表現される。それぞれのオブジェクトのメモリセルは、オブジェクトヘッダーとオブジェクト変数のための固定数のスロットを持っている。ベクトルは、任意の要素から構成されるため、size スロットをヘッダーのすぐ後に持っている。図3はオブジェクトとベクトルおよびオブジェクトのヘッダーを描いたものである。ここに示す slot と element のワードだけがユーザーからアクセスすることができる。



図 3: オブジェクト・ベクトル・オブジェクトヘッダーの構造

ヘッダーは、6 つの部分で構成されている。MSB の 2 ビット m と b は、フィボナッチバディメモリ管理手法の中で、隣接セルの終端を示すために使用される。

mark部分には、3 つのマークビットがあり、それぞれガーベージコレクタ用のアクセス可能セルの認識、プリンタ用の環状オブジェクトの認識($\#n=\psi\#n\#$ 表記法でプリントアウトさせた時)、copy-object 用の分割オブジェクトのコピーとして使用される。elmt 部分は、ベクトル要素として使用可能な 7 つのデータ型(pointer, bit, character, byte, integer, float, foreign-string)のうち 1 つを識別するために使用される。しかしながら、elmt はクラスの中で利用可能なため、クラスの構造と無関係なメモリ管理ができ、要素の高速なアクセスができる。bid 部分は、メモリセルの物理的大きさを表現する。31 の違った大きさ(16MB 以上)のメモリセルをこの 5 ビットで表現する。下位の short word(16 ビット)は、クラス 1 D(10 Cid)として使用される。これは、システムのクラステーブルを経由してオブジェクトのクラスを引き出すために使用される。このクラス 10 は、伝統的な 10 Lisp の型 10 とみなすことができる。10 は下位 10 ビットのみが使用され、上位 10 ビットは無視される。したがって、クラスの最大数は 10 が限界であるけれども、システムのクラステーブルにもっとメモリを配置するように 10 Eus Lisp を再構築することによって 10 を 10 できる。10 できない。10 できる。10 できる。10 できない。10 できない。10

2.3 クラス継承

オブジェクトのデータ構造はクラスによって定義され、そして、それらの動作はクラス内のメソッドに定義されている。EusLisp において、数ダースのクラスが図 4 に書かれているように木構造化された継承のなかにすでに定義されている。class-hierarchy 関数を用いれば、実際の継承構造を見ることができる。左端のクラスのbject は、EusLisp 内の全てのクラスの根幹となるスーパークラスである。ユーザーが定義したクラスは、これらの内部クラスのどれでも継承することができる。

クラスは、defclass マクロか defstruct マクロで定義される。

```
object
     propertied-object
          symbol ---- foreign-pod
          package
          stream
               {\tt file-stream}
               broadcast-stream
          io-stream ---- socket-stream
          metaclass
               vectorclass
                    cstructclass
          read-table
          array
          thread
          barrier-synch
          synch-memory-port
          coordinates
               cascaded-coords
                    body
                    sphere
                    viewing
                         projection
                              viewing2d
                              parallel-viewing
                              perspective-viewing
                    coordinates-axes
               viewport
          line --- edge --- winged-edge
          plane
               polygon
                    face
                    hole
               semi-space
          viewsurface ---- tektro-viewsurface
     compiled-code
          foreign-code
          closure
          load-module
     label-reference
     vector
          float-vector
          integer-vector
          string
               socket-address
               cstruct
          bit-vector
          foreign-string
     socket-port
     pathname
     hash-table
     surrounding-box
     stereo-viewing
```

メソッドは、defmethod により定義される。defmethod は、特定のクラスについて何度でも存在することができる。

```
(defmethod class-name
(:method-name1 (parameter...) . body1)
(:method-name2 (parameter...) . body2)
...)
```

内部クラスにおける field 定義は、大部分が*eusdir*/c/eus.h のヘッダーファイルの中にある。

クラスは、(describe) 関数によりクラス内の全てのスロット、名前、スーパークラス、スロット名、スロット型、メソッドリスト、などを表示することができる。内部クラスの定義は次の通りである。クラス object はスーパークラスを持たないため、このスーパークラスは NIL である。

```
(defclass object :super NIL :slots ())
(defclass cons :super object :slots (car cdr))
(defclass propertied-object :super object
            :slots (plist))
                                  ;property list
(defclass symbol :super propertied-object
           :slots (value
                                   ;specially bound value
                                   ;const(0),var(1),special(2)
                    vtype
                    function
                                   ;global func def
                    pname
                                  ;print name string
                   homepkg))
                                   ;home package
(defclass foreign-pod :super symbol
           :slots (podcode
                                     ;entry code
                   paramtypes
                                    ;type of arguments
                   resulttype))
(defclass package :super propertied-object
            :slots (names
                                   ; list of package name and nicknames
                                   ;spread use-package list
                   uses
                    symvector
                                   ; hashed obvector
                                   ;number of interned symbols
                    symcount
                                   ; hashed obvector of internal symbols
                    intsymvector
                    intsymcount
                                   ; number of interned internal symbols
                                   ; shadowed symbols
                    shadows
                    used-by))
                                   ;packages using this package
```

```
buffer
                                ;buffer string
                    count
                                ; current character index
                    tail))
                                 ; last character index
(defclass file-stream :super stream
           :slots (fd
                             ;file descriptor (integer)
                   fname)) ;file name str; qid for msgq
(defclass broadcast-stream :super stream
            :slots (destinations))
                                         ;streams to which output is e livered
(defclass io-stream :super propertied-object
                    :slots (instream outstream))
(defclass socket-stream :super io-stream
                        :slots (address))
                                                      ; socket address
(defclass read-table :super propertied-object
                                 ; byte vector representing character types
            :slots (syntax
                                 ; 0:illegal, 1:white, 2:comment, 3:macro
                                 ; 4:constituent, 5:single_escape
                                 ; 6:multi_escape, 7:term_macro, 8:nonterm_macro
                                 ; character macro expansion function
                    dispatch-macro))
(defclass array :super propertied-object
           :slots (entity
                                 ; simple vector storing array entity
                                 ;number of dimensions: 0-7
                   rank
                    fillpointer ; pointer to push next element
                                 ;offset for displaced array
                    offset
                    dimO,dim1,dim2,dim3,dim4,dim5,dim6)) ;dimensions
(defclass metaclass :super propertied-object
            :slots (name
                              ; class name symbol
                              ;super class
                   super
                   cix
                              ;class id
                              ;var name vector including inherited vars
                    vars
                              ; type vector of object variables
                    types
                    forwards ; components to which messages are forwarded
                    methods)) ; method list
(defclass vectorclass :super metaclass
           :slots (element-type
                                   ;vector element type 0-7
                                    ;vector size; 0 if unspecified
                   size))
```

```
(defclass cstructclass :super vectorclass
            :slots (slotlist))
                                  ;cstruct slot descriptors
(defclass vector :super object :slots (size))
(defclass float-vector :super vector :element-type :float)
(defclass string :super vector :element-type :char)
(defclass hash-table :super propertied-object
            :slots (lisp::key
                                         ; hashed key vector
                    value
                                         ; value vector
                    size
                                         ; the size of the hash table
                    count
                                         ; number of elements entered in the table
                    lisp::hash-function
                    lisp::test-function
                    lisp::rehash-size
                    lisp::empty lisp::deleted ))
(defclass pathname :super propertied-object
            :slots (lisp::host device
                                                 ; not used
                    directory
                                                 ; list of directories
                    name
                                                 ; file name before the last "."
                    type
                                                 ; type field after the last "."
                    lisp::version))
                                                 ; not used
(defclass label-reference
                              ;for reading #n=, #n# objects
            :super object
            :slots (label value unsolved next))
(defclass compiled-code :super object
            :slots (codevector
                    quotevector
                                  ;0=func, 1=macro, 2=special
                    type
                    entry))
                                  ;entry offset
(defclass closure :super compiled-code
                  :slots (env1 env2));environment
(defclass foreign-code :super compiled-code
            :slots (paramtypes
                                     ; list of parameter types
                   resulttype))
                                     ;function result type
(defclass load-module :super compiled-code
         :slots (symbol-table
                                 ; hashtable of symbols defined
                 object-file
                                 ; name of the object file loaded, needed for unloadin
                 handle))
                                 ;file handle returned by ''dlopen''
```

2.4 型指定

Euslisp は、deftype 特殊書式を持っていないけれども、型名は宣言や結果あるいは中身の型の指定を要求する関数の中で使用される。例えば、coerce, map, concatenate, make-array など。一般に、クラス名は (concatenate cons "ab" "cd") = (97 98 99 100) のように型指定として使用することができる。このとき、Common Lisp では cons の代わりに (quote list) を使用する。

Euslisp は、数を表現するクラスを持っていないので、数の型はキーワードによって与える必要がある。:integer, integer, :int, fixnum, あるいは:fixnum が整数型を表現するために使用され、:float あるいは float が実数型を表現するために使用される。make-array の element-type 引数においては、文字列を作るために:character, character, :byte や byte を認識する。defcstruct, sys:peek や sys:poke のような低レベルの関数も、バイト毎にアクセスするために:character, character, :byte あるいは byte を認識し、short word 毎にアクセスするために:short あるいは short を認識する。どの場合においても、キーワードは pname と同じ名前を持つ lisp パッケージの symbol を選ぶべきである。

3 書式と評価

3.1 アトム (atom)

cons 以外のデータオブジェクトは、たとえ複雑な構造をしていたとしても、すべて atom である。空リストとして() でしばしば書かれる NIL も atom である。すべての atom は、symbol を除いていつもそれ自身評価されている。しかしながら、他の Common Lisp の実行のなかでは、atom の評価に引用符を要求されることがある。

3.2 スコープ

すべての symbol は、値と結び付いている。symbol は、主にくくられた文脈から決定される値によって評価される。ここに 2 種類の変数バインドがある。それは、ローカルまたは静的バインドとスペシャルまたは動的バインドである。ローカルにバインドされた変数は lambda 書式または let や let*の特殊書式において special と宣言されない限り外から見ることはできない。ローカルバインドは入れ子が可能で、外側のローカルバインドやスペシャルバインドを隠して、最も内側のレベルで定義されている 1 つのバインドのみ見ることができる。スペシャル変数は 2 つの方法で使用される。1 つは、グローバル変数として、もう 1 つは動的に覗けるローカル変数として用いる。このローカル変数は、バインドの効果の中にある限りローカルスコープの外にいてさえ見ることができる。後者の場合、スペシャル変数は special で宣言される必要がある。その宣言は、コンパイラだけでなくインタプリタでも認識される。Common Lisp によると、スペシャル変数は不明瞭なスコープと動的な広さを持っていると言われている。

あるスコープのなかで、ローカル変数が存在するとしても、同じ変数名を内部スコープの中で special として再宣言することができる。symbol-value 関数は、ローカルスコープに構わず special 値を引き出すために使用することができる。set 関数は、スペシャル変数としてのみ働く。すなわち、special として宣言していない限り、lambda や let 変数の値を変更するために使用することはできない。

symbol は、defconstant マクロにより定数として宣言することができる。一旦宣言すると、その後値を変更しようとするとエラーが発生する。そのうえ、そのような定数 symbol は、ローカル変数としてさえ変数名として使用されることを禁じられる。NIL や T は、そのような定数の例である。keyword パッケージの symbol は、いつも作成されるときに定数として宣言される。対照的に、defvar や defparameter マクロは、スペシャル変数として symbol を宣言する。defvar は、symbol がバインドされていない時のみ値の初期化を行い、値が既に割り当てられているときは何もしない。それに対して、defparameter はいつも値をリセットする。

symbol が参照され、symbol のためのローカルバインドがなかったとき、その special 値は、引き出される。 しかしながら、その special 値にまだ値が割り当ててなかったならば、unbound variable エラーが発生する。

3.3 一般化变数

一般的に、どんな値および属性もオブジェクトのスロット(またはスタック)で表現される。スロットの値を引き出すかまたは変えるときは、2つの基本的な命令、accessと update で行わなければならない。オブ

ジェクトの全てのスロットに対して 2 つの異なった基本命令を定義する代りに EusLisp では、Common Lisp のように、一般化変数コンセプトに基づいた画一的な更新命令を備えている。このコンセプトのなかで、共通書式は、値のアクセス書式あるいはスロットの位置指定として認識される。したがって、それぞれのスロットに対してアクセスする書式を覚えてさえおけば、更新はそのアクセス書式と setf マクロを組み合わせることにより実現できる。例えば、car 値をリストの外に取り出すのと同じ様に (setf (car (a b)) (c) として setf を使用したとき、(car (car (c

この方法は、ユーザーが定義したオブジェクト全てに対して適用できる。クラスや構造体が定義されるとき、それぞれのスロットに対する access や update 書式は、自動的に定義される。それらの書式は、それぞれマクロとして定義されている。その名前は、クラス名とスロット名の連結となる。例えば、cons の car は (cons-car '(a b c)) で処理することができる。

```
(defclass person :super object :slots (name age))
(defclass programmer : super person : slots (language machine))
(setq x (instantiate programmer))
(setf (programmer-name x) "MATSUI"
      (person-age x) 30)
(incf (programmer-age x))
(programmer-age x)
                   --> 31
(setf (programmer-language x) 'EUSLISP
      (programmer-machine x) 'SUN4)
 行列要素も同じ手法でアクセスすることができる。
(setq a (make-array '(3 3) :element-type :float))
(setf (aref a 0 0) 1.0 (aref a 1 1) 1.0 (aref a 2 2) 1.0)
a \longrightarrow #2f((1.0 \ 0.0 \ 0.0) \ (0.0 \ 1.0 \ 0.0) \ (0.0 \ 0.0 \ 1.0))
(setq b (instantiate bit-vector 10)) --> #*0000000000
(setf (bit b 5) 1)
b --> #*000010000
 特定のオブジェクトに特別な setf メソッドを定義するために defsetf マクロを用意している。
(defsetf symbol-value set)
```

(defsetf get (sym prop) (val) '(putprop ,sym ,val ,prop))

3.4 特殊書式

全ての特殊書式は、表 2 にリストされている。macrolet, compiler-let, や progv は、該当しない。特殊書式は、文脈の評価および制御フローの管理のための基本的な言語構造である。インタプリタとコンパイラは、これらの構造をそれぞれ正しく処理するために特殊な知識を持っている。それに対して、アプリケーションメソッドは全ての関数に対し画一的である。ユーザーは、独自の特殊書式定義を追加することはできない。

3.5 マクロ

マクロは、言語構造を拡張するために役立つメソッドである。マクロが呼び出されたとき、引数は評価されずにマクロの本体(マクロ拡張関数)へ受け渡される。それから、マクロ拡張関数は、引数を拡張し、新しい

衣 2:	EusLisp の特殊書式	

~ 4+ + + + + + +

and	flet	quote
block	function	return-from
catch	go	setq
cond	if	tagbody
declare	labels	the
defmacro	let	throw
defmethod	let*	unwind-protect
defun	progn	while
eval-when	or	

書式を返す。結果となった書式は、マクロの外側で再び評価される。引数のリストにマクロまたは特殊書式を 用いるとエラーになる。macroexpand 関数は、マクロ展開のために使用することができる。

インタプリタのときマクロはゆっくりと実行されるが、コンパイルすることにより実行速度の向上を図ることができる。なぜなら、マクロ展開はコンパイル時に一度だけ行われ、実行時にそのオーバーヘッドは残らない。しかし、マクロ関数の中における eval あるいは apply の呼出は、インタプリタの実行とコンパイル後の実行との間に違う結果をもたらす。

3.6 関数

関数は、単にリストの最初の要素が lambda であるような lambda 書式によって表現される。もし lambda 書式が defun を使って symbol を定義するとき、グローバル関数名として参照することができる。 lambda 書式は、次の文法で与えられる。

ここに EXPR,LEXPR,FEXPR などのような型の関数はない。関数への引数は、いつもその関数を実行する前に評価される。受ける引数の数は、lambda-list によって決定される。lambda-list は、lambda 書式のためにパラメータの列を記す。

&optional, &rest, &key や&aux はそれぞれ、lambda-list のなかに特殊な意味を持っていて、これらの symbol は、変数名として使用することはできない。&optional や&key パラメータの supplied-p 変数は、サポートされていない。

lambda 書式は、普通のリストデータと区別できないため、function 特殊書式を用いて、インタプリタやコンパイラに関数として認識するように知らせなければならない。 1 function は、関数の上に環境を固定するた

 $^{^{1}}$ CLtL-2 のなかで、引用式 lambda 書式は、もはや関数でない。そのような書式の適用はエラーとなる。

めに重要である。そのため、すべてのローカル変数はその関数が違ったローカルスコープの他の関数を通ってきたとしてさえ、アクセスすることができる。次のプログラムは、let の sum が lambda 書式の中に見えるため、インタプリタとコンパイル後のどちらも何もしない。

```
(let ((x '(1 2 3)) (sum 0))
(mapc '(lambda (x) (setq sum (+ sum x))) x))
```

予想した結果が得られるためには、次のように書くべきである。

```
(let ((x '(1 2 3)) (sum 0))
(mapc #'(lambda (x) (setq sum (+ sum x))) x ))
```

#'は、function の略語である。すなわち、#'(lambda (x) x)は(function (lambda (x) x))と同等である。ここは、funarg 問題と呼ばれる別の例を示す。

EusLisp の closure は、不定な大きさを持つことができない。すなわち、closure はその外側の大きさで可能な大きさまで持つことができる。これは closure が'generators' のプログラミングのために使用されないことを意味する。次のプログラムは何もしない。

```
(proclaim '(special gen))
(let ((index 0))
    (setq gen #'(lambda () (setq index (1+ index)))))
(funcall gen)
```

しかしながら、その同じ目的がオブジェクト指向プログラミングで実現できる。なぜなら、オブジェクトは それ自身の固定変数を持つことができるためである。

```
(defclass generator object (index))
(defmethod generator
  (:next () (setq index (1+ index)))
  (:init (&optional (start 0)) (setq index start) self))
(defvar gen (instance generator :init 0))
(send gen :next)
```

4 制御構造

4.1 条件文

and,or および cond は、Common Lisp においてマクロとして知られているが、EusLisp ではインタプリタ 時の効率を改善するために特殊書式として実行される。

and {form}* [特殊]

form は、NIL が現れるまで左から右に評価される。もし、全ての書式が non-NIL として評価されるならば、最後の値が返される。

or $\{form\}^*$

form は、non-NIL 値が現れるまで左から右に評価される。そして、その値が返される。もし、全ての書式が NIL として評価されるならば、NIL を返す。

if test then [else] [特殊]

if は、1つの then と else 書式のみを持つことができる。そこに多重書式を書きたいときは、progn を使ってグループ化しなければならない。

when test forms [マクロ]

if と違って、when と unless は、多重書式で書くことを許可している。test の評価が non-NIL のとき、when は実行され、評価が NIL のとき、unless は実行される。もう一方で、これらのマクロは else 書式を追加することを許可していない。

unless test forms [マクロ]

(when (not test) . forms) と同等である。

 $\mathbf{cond} \ (test \{form\}^*)^*$

任意の数の条件項は、cond の後に続けることができる。それぞれの条件項において、最初の書式 test が評価される。もし、non-NIL であったとき、その条件項の残りの書式は、続いて評価される。そして、最後の値が返される。もし、test のあとに書式がなかったならば、test の値が返される。test が失敗したとき、次の条件項は test が non-NIL 評価されるかまたは全ての条件項が尽きてしまうまで繰り返される。条件項が尽きてしまった場合、cond は NIL を返す。

case key {({label | ({lab} *) {form} *)} *

key と label が一致した条件項について、form が評価され、最後の値が返される。key と label の間の等価は、eq または memq で行われ、equal ではない。

4.2 逐次実行とLet

prog1 form1 &rest forms

[関数]

[マクロ]

form1 と forms は、次々と評価され、form1 から返される値が prog1 の値として返される。

progn { form} * [特殊]

form は次々に評価され、最後の form の値が返される。progn は特殊書式である。なぜなら、ファイル の最初に現れたとき特別な意味を持つからである。そのような書式がコンパイルされたとき、内部書式 はすべて最初に現れたとして見なす。マクロが defun や defmethod の連続で拡張される場合、それが 最初に現われなければならないときに役立つ。

 $\mathbf{setf} \; \{\mathit{access-form} \; \mathit{value}\} \, {}^*$

[マクロ]

value を一般化変数 access-form に割り当てる。

let ({var | (var [value])}*) {declare}* {form}*

[特殊]

ローカル変数を生成する。すべての value は評価され、並行して var に割り当てられる。すなわち、(let ((a 1)) (let ((a (1+ a)) (b a)) (list a b))) の結果は $(2\ 1)$ である。

let* ({var | (var [value])} *) {declare} * {form} *

[特殊]

ローカル変数を生成する。全ての *value* は次々に評価され、*var* に割り当てられる。すなわち、(let ((a 1)) (let*((a (1+ a)) (b a)) (list a b))) の結果は(2 2) である。

4.3 ローカル関数

flet $(\{(fname\ lambda-list\ .\ body)\}^*)\{form\}^*$

[特殊]

ローカル関数を定義する。

labels $(\{(fname\ lambda-list\ .\ body)\}^*)\ \{form\}^*$

[特殊]

ローカルなスコープとなる関数を定義する。flet と labels との違いは、flet で定義されたローカル関数は、その他の関数を参照または再帰できないが、labels は相互の参照を許可する。

4.4 ブロックと Exit

block tag {form} *

[特殊]

return-from によって脱出可能なローカルブロックを作る。tag は、ローカルにスコープされ、評価されない。

return-from tag value

[特殊]

tagによって示されたブロックを脱出する。return-from は、関数やメソッドから脱出するときに使用される。関数やメソッドは、その本体をすべて取り囲んだ部分をブロックとして自動的に確定され、その関数またはメソッドの名前を付ける。

return value

[マクロ]

(return x) は、(return-from nil x) と同等である。loop, while, do, dolist, dotimes は、暗黙的 に NIL と名前が付けられたブロックとして確定されるため、これらの特殊書式と組み合わせて使用する。

catch tag {form} *

[特殊]

 ${f throw}$ によって脱出または値を返すための動的なプロックを確定する。tag は評価される。

全て見える catch の tag は、sys:list-all-catchers から得ることができる。

throw tag value

[特殊]

catch ブロックから脱出または value を返す。 tag と value は評価される。

unwind-protect protected-form {cleanup-form}*

[特殊]

protected-form の評価が終った後、cleanup-form が評価される。unwind-protect の外側にブロックまたは catch ブロックを作っても構わない。

return-from や throw でさえ、そのようなブロックから抜け出すためには *protected-form* の中で実行される。 *cleanup-form* は、評価されることが保証されている。また、もし *protected-form* が実行されている間にエラーが起こったならば、 *cleanup-form* はいつも reset によって実行される。

4.5 繰返し

while test {form} * [特殊]

test が non-NIL と評価されている間、form は、繰返し評価される。while は、form のまわりに NIL と名付けられるブロックを自動的に確定する特殊書式である。return は、そのループから抜け出すために使用することができる。

 $tagbody \{tag \mid statement\}^*$ [特殊]

tag は、go のために名付けられる。tagbody の中のみ go を使用することができる。

 $\mathbf{go} \ tag$ [特殊]

ローカルにスコープされた tagbody のなかに現れる tag の直後の書式に制御を移す。ローカルスコープを横切って違う tagbody の tag に制御を移すことは禁止されている。

 prog ({var | (var [init])}*) {tag | statement}*
 [マクロ]

 prog はマクロで、以下のように展開される。

(block nil (let var (tagbody tag | statement)))

 $\mathbf{do} \ (\{(var \ init \ [next])\}^*) \ (endtest \ [result]) \{declare\} \ \{form\} \ ^*$

var はローカル変数である。それぞれの var に、init は並行に評価され、割り当てられる。つぎに、endtest が評価され、もし真のとき do は result を返す。(そうでないときは、NIL を返す) もし endtest が NIL を返したならば、それぞれの form は、順番に評価される。書式の評価後、next が評価され、その値はそれぞれの var に再割当され、次の繰返しが始まる。

do* ({var init [next]}*) (endtest [result]){declare} {form}* [マクロ] do*は、init と next の評価と var への割り当てが連続的に起こることを除いて、do と同様である。

dotimes (var count [result]) {forms}*

forms の評価を count 回行う。count は、一回のみ評価される。それぞれの評価の中で、var は整数のゼロから count-1 まで増加する。

[マクロ]

dolist $(var\ list\ [result])\ \{forms\}^*$ [$\forall D$]

list のそれぞれの要素は、var に連続的に与えられる。そして forms は、それぞれの値で評価される。 dolist は、他の繰返しより早く実行される。たとえば、mapcar や再帰的関数のようなものより。それは、dolist が関数の closure を作ったり適用したりする必要がなく、新しいパラメータのバインドが必要でないため。

until condition {forms}*

condition が満たされている間、forms を評価する。

loop {forms} *

forms を永遠に評価する。実行を止めるためには、return-from, throw または go が forms のなかで評価されなければならない。

4.6 述語

Common Lisp の typep と subtypep はないので、subclassp や derivedp で疑似実現すること。

 $\mathbf{eq} \ obj1 \ obj2$ [関数]

obj1 と obj2 が同じオブジェクトを指すポインタあるいは同じ数値のとき T を返す。例えば:(eq 'a 'a) は T、(eq 1 1) は T、(eq 1 . 1.0) は NIL、(eq "a" "a") は NIL である。

 $eql \ obj1 \ obj2$ [関数]

EusLisp の中で数値は全て直接値で表現されるため、eq と eql は同一である。

equal obj1 obj2 [関数]

いろんな構造のオブジェクトの等価性をチェックする。オブジェクトは、文字列・ベクトル・行列などで再帰的に参照してないことが保証されなければならない。obj1 や obj2 が再帰的に参照されていたとすると、equal は無限ループとなる。

superequal obj1 obj2 [関数]

superequal は、環状参照をチェックするので遅い。しかしロバストな等価が得られる。

null object [関数]

object が NIL のとき、T を返す。(eq object nil) を評価する。

not object [関数]

not は、null と同一である。

atom object [関数]

オブジェクトが cons のインスタンスである時のみ、NIL を返す。(atom nil) = (atom '()) = T) 注意:vectors, strings, read-table, hash-table などに対しては、それらがどんなに複雑なオブジェクトとなっていても atom は T を返す。

every pred & rest args [関数]

全ての args が pred について T を返した時のみ T を返す。every は、pred が全ての args に対して効力があるかどうかを検査する時に使用される。

some pred & erest args [関数]

args のうちどれか 1 つが pred について T を返したとき T を返す。some は、pred が args のどれかに対して効力があるかどうかを検査する時に使用される。

functionp object [関数]

object が apply や funcall で与えられる関数オブジェクトであるなら T を返す。

注意:マクロは apply や funcall を適用することができない。functionp は、object が、type=0 のコンパイルコードか、関数定義を持つ symbol か、lambda-form かあるいは lambda-closure であったとき、Tを返す。Examples: (functionp 'car) = T, (functionp 'do) = NIL

compiled-function-p object

[関数]

object が、コンパイルコードのインスタンスであったとき、T を返す。そのコンパイルコードが関数かまたはマクロかを知るためには、そのオブジェクトに:type メッセージを送り、その返り値が functionと macro のどちらになっているかを調べる。

5 オブジェクト指向プログラミング

オブジェクトの構造と動作は、クラスの中に記述されている。それらは、defclass マクロや defmethod 特殊書式により定義されている。defclass は、クラスの名前・そのスーパークラス・スロット変数名とオプションとして任意の型およびメッセージの前方への送信を定義する。defmethod は、メッセージが送られてきたとき呼び出されるメソッドを定義する。クラス定義は、symbol の特殊値として割り当てられる。クラスは、Common Lisp の sutructure の counter 部分と考えることができる。スロットアクセス関数と setf メソッドは、defclass によってそれぞれのスロットに自動的に定義される。

大部分のクラスは、内部クラス metaclass から派生している。metaclass のサブクラスであるクラス vector-class はベクトルのためのメタクラスである。もし、class-variables や class-methods を使いたいときは、metaclass のサブクラスとして自分独自のメタクラスを作り、メタクラスの名前を:metaclass のキーワードで defclass に与えればよい。

ベクトルは、その他の record-like オブジェクトと違っている。なぜなら、ベクトルのインスタンスは、任意の数の要素を持っているが、record-like オブジェクトは固定数のスロットを持っている。EusLisp のオブジェクトは、record-like オブジェクトかまたはベクトルであって、両方同時ではない。

要素の型が決められているかまたは要素が入れられないベクトルも defclass によって定義することができる。次の例の中で、クラス intvec5 は5つの integer 要素を持つクラスとして定義されている。自動型判定と型変換は、要素がインタープリタによってアクセスされたとき実施される。正しい宣言でコンパイルされたとき、高速なアクセスコードが生成される。

```
(defclass intvec5 :super vector :element-type :integer :size 5)
(setq x (instantiate intvec5)) --> #i(0 0 0 0 0)
```

メッセージがオブジェクトに送られたとき、一致するメッセージを最初そのオブジェクトのクラスから探し、次にそのスーパークラスから探して、スーパークラスが尽きるまで探す。もし、メソッドが定義されてなかったならば、前方のリストが探される。この前方探索は、疑似多重継承によって作られる。もし、探索が失敗したときは、:nomethod というメソッド名が探され、メソッドは、全ての引数のリストと一緒に呼び出される。次の例の中で、メッセージ:telephoneと:mail は person という型のオブジェクトスロット secretary に送られる。そして、メッセージ go-home はスロット chauffeur に送られる。

メソッドにおいて、2 つのローカル変数 (class ε self) が使用可能となる。これらの変数は変更すべきでない。もし、変更したならば、システムから供給された変数は隠され、send-super ε send self は正しい動作をしない。

5.1 クラスとメソッド

defclass classname &key :super object [マクロ]
:slots ({var | (var [:type type] [:forward selectors])}*)
:metaclass metaclass

 $: element-type \ t$

:size -1

クラスを生成または再定義する。異なったスーパークラスやスロットを持つクラスに再定義したとき、メ ソッドが新しいスロット配置を仮定するため、以前のクラスを継承する古いオブジェクトは予想できな い振舞いをする。

defmethod classname {(selector lambda-list . body)}*

[特殊]

classname の 1 つ以上のメソッドを定義する。それぞれの selector は、キーワード symbol でなければならない。

defclassmethod classname {(selector lambda-list . body)}*

[マクロ]

classp object

[関数]

object がクラスオブジェクトのとき ${
m T}$ を返す。そのオブジェクトは、クラス ${
m metaclass}$ かそのサブクラスのインスタンスである。

subclassp class super

[関数]

class が super のサブクラスであることを検査する。

vector-class-p x

[関数]

xが、vector-class のインスタンスであるとき、T を返す。

delete-method class method-name

[関数]

method-name のメソッド定義を class から除く。

class-hierarchy class

[関数]

class の下の継承構造を表示する。

system:list-all-classes

[関数]

今まで定義されたクラスを全てリストアップする。

system:find-method object selector

[関数]

selector に記述されたメソッドを object のクラスおよびそのスーパークラスの中から見つける。objectが、selector に応じることができるかどうかを知るために使用される。

system:method-cache &optional flag

[関数]

メソッドキャッシュのヒット率を調査し、ヒットとミスの2つの数値のリストを返す。もしflagがNILのとき、メソッドキャッシュは無効になる。もしnon-NILのflagが与えられたとき、メソッドキャッシュは初期化されキャッシュ可能になる。

5.2 メッセージ送信

send object selector {arg}*

[関数]

object に selector と arg で構成されるメッセージを送信する。object は、何でもよいが数値はいけない。selector はキーワードとして評価されなければならない。

send-message target search selector { arg} *

[関数]

send-super を実行するための低レベル命令である。

send* object selector &rest msg-list

[マクロ]

send*は、引数のリストに send-message を適用する。send と send*の関係は、funcall と apply あるいは list と list*の関係に似ている。

send-all receivers selector & rest mesq

[関数]

全ての receivers に同じメッセージを送信し、結果をリストとして集める。

send-super selector &rest msgs

「マクロ」

msgs を self に送信するが、メソッドが定義されているクラスのスーパークラスでのメソッドを探し始める。メソッドの外の send-super は、エラーとなる(すなわち、メソッド内でなければならない)。

send-super* selector &rest msg-list

[マクロ]

send-super*は、send-superのapply版である。

5.3 インスタンス管理

instantiate class &optional size

[関数]

class から新しいオブジェクトを作る低レベル命令である。もし class が $\mathbf{vector\text{-}class}$ ならば、size がなければならない。

instance class &rest message

[マクロ]

インスタンスが作られ、そこに message が送られる。

make-instance class &rest var-val-pairs

[関数]

classのインスタンスを作成し、スロット変数を var-val-pairs のように設定する。例えば、(make-instance cons : car 1 : cdr 2) は、(cons 1 2) と同等である。

copy-object object

[関数]

copy-object 関数は、参照トポロジー (再帰参照でも構わない)を保ったままコピーするために使用する。copy-object は、独自性の保存に触れない symbol やパッケージを除いて、object からアクセス可能などんなオブジェクトもコピーする。copy-object は、オブジェクトの中の全ての参照を 2 度妨害する。 1 度が、新しいオブジェクトを作り既にコピーされたオブジェクトのオリジナルにマークを付けるとき、そしてマークを消すときにもう 1 度。この 2 段階の処理は、copy-object を copy-seq よりも遅くする。 もし順番にコピーをしたいならば、copy-seq か copy-tree を使用することを薦める。

become object class

[関数]

object のクラスを class に変更する。古いクラスと新しいクラス両方のスロット構造は、一致しなければならない。普通、2要素ベクトル間のクラス変更にのみ安全に使用することができる。例えば、整数ベクトルからビットベクトルへの変更。

 ${\bf replace\text{-}object}\ \textit{dest src}$

[関数]

dest は、src のサブクラスのインスタンスでなければならない。

class object

[関数]

 object のクラスオブジェクトを返す。クラス名を得るために、クラスオブジェクトに: \mathtt{name} メッセージを送る。

derivedp object class

[関数]

derivedp は、*object が class* またはそのサブクラスからインスタンス化されているかどうかを判定する。subclassp と derivedp 関数は、クラス継承のなかを探索できない。したがって、一定時間内に型のチェックがいつも終了する。

slot object class (index | slot-name)

[関数]

スロット値の名前かインデックスを返す。

setslot object class (index | slot-name) value

[関数]

setslot は、内部処理関数でユーザーが使用できない。代りに、setfと slot の組み合せを使用する。

5.4 基本クラス

object

[クラス]

:super

:slots

object は、最も基本のクラスである。それは、クラス継承の最上位に位置する。スロット変数が定義されていないため、object はインスタンスを作るために使用しない。

:prin1 &optional stream &rest mesg

[メソッド]

標準の再読み込可能なオブジェクトフォーマットのなかにあるオブジェクトを表示する。そのクラス名とアドレスは、角括弧でくくられ、符号を前に置く。どのオブジェクトのサブクラスも mesg 文字列で説明するマクロ send-super を使ってもっと広範囲な情報と一緒にそれ自身を印刷するのにこの方法を使用することができる。オブジェクトは、もし#<で始まるなら、再読み込み可能である。そのクラス名・正確なアドレス・どの Lisp でも読み込可能な情報・>をあとに従えて。全てのデータオブジェクトは数値を除いて、object を継承している。この構文で書式の表示が得られる。(symbol や文字列でも構わない)この構文で述べることは、symbolに setq し忘れたデータオブジェクトを把握することができる。ただし、表示された後にガーベージコレクションが起こらない限りである。

:slots

変数名のリストおよびオブジェクトの全てのスロットと対になる値を返す。このリストに assoc を適用することにより、スロットの詳細値が得られる。しかしながら、それらを変更することはできない。

propertied-object

[クラス]

[メソッド]

:super **object** :slots plist

property-list を持つオブジェクトを定義する。他の Common Lisp と違って、EusLisp は、たとえ、symbol でなかったとしても、property-list を持つ propertied-object を継承するどんなオブジェクトも許可する。

:plist &optional plist

[メソッド]

もし plist が明記されるならば、このオブジェクトの plist スロットに設定する。そのため、以前の plist の値はなくなる。 plist は、((indicator1 . value1) (indicator2 . value2) ...) の書式にすべき である。それぞれの indicator は、eq 関数で等価性をテストされたどのような lisp 書式も可能である。 symbol が indicator として用いられたとき、内部パッケージを広く実行される等価性のチェックを確実 にするためにキーワードの使用を推薦する。:plist は、主な plist を返す。

:get indicator [メソッド]

plistのなかで indicator と結び付く値を返す。(send x :get :y) == (cdr (assoc :y (send x :plist)))

 $:\!\mathbf{put}\ indicator\ value$

[メソッド]

plist のなかで、value と indicator を結び付ける。

:remprop indicator

[メソッド]

plist から indicator と value の組を削除する。さらに、:get を試すと value として NIL を返す。

:name &optional name

[メソッド]

plist のなかの:name 特性を定義し、取り出す。この特性は、表示のために使用される。

:prin1 &optional stream &rest mesg

[メソッド]

再読み込み可能な書式のオブジェクトを表示する。もしオブジェクトが:name 特性を持っているならば、オブジェクトのアドレスの後に特性を表示する。

metaclass

[クラス]

:super propertied-object

:slots name super cix vars types forwards methods

metaclass は、複数クラスを定義する。独自のクラス変数を持つ複数クラスは、それらのスーパークラスとして metaclass を定義しなければならない。

:new

[メソッド]

このクラスのインスタンスを生成し、全てのスロットを NIL にした後、それを返す。

:super

[メソッド]

このクラスのスーパークラスオブジェクトを返す。一旦クラス定義したスーパークラスを変更することはできない。

:methods

[メソッド]

このクラスで定義された全てのメソッドのリストを返す。そのリストは、メソッド名とパラメータと本体を組みにしたリストによって構成されたリストである。

:method name

[メソッド]

name で関連づけられたメソッド定義を返す。もし見つからなければ、NIL を返す。

:method-names subname

[メソッド]

メソッド名のなかに *subname* を含む全てのメソッド名のリストを返す。メソッドは、このクラスのなかのみ探索される。

:all-methods

[メソッド]

このクラスとその全てのスーパークラスのなかで定義されているすべてのメソッドのリストを返す。言い替えると、このクラスのインスタンスは、これらのメソッドを実行することができる。

:all-method-names subname

[メソッド]

subname と一致する全てのメソッド名のリストを返す。その探索は、このクラスから object まで実行される。

:slots

「メソッド]

スロット名のベクトルを返す。

:name

[メソッド]

このクラスの symbol 名を返す。

icid [メソッド]

このクラスと同一であることを示すために、このクラスのインスタンスすべてに割り当てられた整数を返す。これは、システム内部のクラステーブルへのインデックスで、このクラスの下に新しいサブクラスが定義されたとき、変更される。

:subclasses [メソッド]

このクラスの直接のサブクラスのリストを返す。

:hierarchy [メソッド]

このクラスの下に定義された全てのサブクラスのリストを返す。全てのクラス継承の広範囲なリストを得るためには、class-hierarchy 関数を呼び出す。

$\mathbf{find}\textbf{-}\mathbf{method}\ \mathit{object}\ \mathit{selector}$

[関数]

object のクラスやそのスーパークラスのなかで、selector と一致するメソッドを探索する。この関数は、object のクラスが不確かで、その object がエラーなしにメッセージを受け取ってくれるかどうかを知りたい時に役立つ。

6. 数值演算 28

6 数值演算

6.1 数值演算定数

most-positive-fixnum [定数]

#x1ffffff=536,870,911。integer の正の最大値。

most-negative-fixnum [定数]

-#x20000000=-536,870,912。integer の負の最大値

short-float-epsilon [定数]

IEEE の浮動小数点表現形式である float は、21 ビットの固定小数 (うち符号が 1 ビット) と 7 ビットの指数 (うち符号が 1 ビット) で構成されている。したがって、浮動小数点誤差 ϵ は $2^{-21}=4.768368\times 10^{-7}$ となる。

single-float-epsilon [定数]

short-float-epsilon と同様に 2^{-21} である。

long-float-epsilon [定数]

Euslisp には、double も long float もないため、short-float-epsilon と同様に 2^{-21} である。

pi [定数]

π。 実際には 3.14159203 で、 3.14159265 ではない。

 2pi
 [定数]

 $2 \times \pi_{\circ}$

 $\mathrm{pi}/2$ [定数]

 $\pi/2_{\circ}$

-pi [定数]

-3.14159203

-2pi [定数]

 $-2\times\pi_{\rm o}$

-pi/2 [定数]

 $-\pi/2_{\rm o}$

6.2 比較演算関数

numberp object [関数]

object が integer か float の時、T を返す。その文字が数字で構成されているときも同様である。

integerp object [関数

object が integer の時、T を返す。float は round, trunc および ceiling 関数で integer に変換できる。

floatp object [関数]

object が float の時 T を返す。integer は float 関数で float に変換できる。

6. 数值演算 29

zerop number [関数]

number が integer のゼロまたは float の 0.0 の時、 T を返す。

plusp number [関数]

number が正 (ゼロは含まない) のとき、T を返す。

minusp number [関数]

number が負のとき、T を返す。

oddp integer [関数]

integer が奇数のとき、Tを返す。引数は integer のみ有効。

evenp integer [関数]

integer が偶数のとき、Tを返す。引数は integer のみ有効。

/= num1 num2 [関数]

num1が num2と等しくないとき、Tを返す。num1と num2は数値であること。

 $= num1 \ num2 \ \&rest \ more-numbers$ [関数]

num1 と num2 等しいときを、T 返す。num1 と num2 は数値であること。

> num1 num2 & erest more-numbers [関数]

< num1 num2 & rest more-numbers [関数]

>= num1 num2 & erest more-numbers [関数]

<= num1 num2 &rest more-numbers

[関数]

これらの比較演算は、数値のみ適用できる。誤差を含めた数値比較に対しては、14章に書かれている関数(これらの比較演算子の前に eps がついている)を使用する。

6.3 整数とビット毎の操作関数

以下の関数の引数は、すべて integer とする。

mod dividend divisor [関数]

dividend を divisor で割った余りを返す。(mod 6 5)=1, (mod −6 5)=−1, (mod 6 −5)=1, (mod −6 −5)=−1.

1- integer [関数]

integer − 1 を返す。コンパイラでは、引数を integer と仮定する。

1+ integer [関数]

integer+1 を返す。1+ と 1- の引数は、integer でなければならない。

logand & rest integers [関数]

integers のビット単位AND。

logior & rest integers [関数]

6. 数值演算 30

integers のビット単位OR。

logxor &rest integers

[関数]

integersのビット単位XOR。

logeqv &rest integers

[関数]

logeqv は (lognot (logxor ...)) と同等である。

lognand &rest integers

[関数]

integersのビット単位NAND。

lognor &rest integers

[関数]

integers のビット単位NOR。

lognot integer

[関数]

integer のビット反転。

logtest integer1 integer2

[関数]

(logand integer1 integer2) がゼロでないとき T を返す。

logbitp index integer

[関数]

integer が NIL でなければ、LSB から数えて index 番目のビットが 1 のとき T を返す。

ash integer count

[関数]

数値演算左シフト。もし count が正のとき、integer を左にシフトする。もし count が負のとき、integer を |count| ビット右にシフトする。

ldb target position width

[関数]

LoaD Byte. ldb や dpb の Byte 型は、 EusLisp にないため、代りに 2 個の integer を使用する。 target の LSB より position 番目の位置から MSB へ width ビットの範囲を抜き出す。例えば、(1db #x1234 4 4) は 3 となる。

dpb value target position width

[関数]

DePosit Byte. target の LSB より position 番目の位置へ value を width ビット置き換える。

6.4 一般数值関数

+ &rest numbers

[関数]

numbers の和を返す。

- num &rest more-numbers

[関数]

もし more-numbers が与えられたとき、num より引く。そうでないとき、num は符号反転される。

* &rest numbers

[関数]

numbers の積を返す。

/ num1 num2 &rest more-numbers

[関数]

[関数]

num1 を、num2 や more-numbers で割り算する。全ての引数が integer のとき、integer を返し、引数に 1 つでも float があったときは、float を返す。

abs number

6. 数值演算 31

number の絶対値を返す。

round number [関数]

number の小数第 1 位を四捨五入し integer を返す。(round 1.5)=2, (round -1.5)=2.

floor number [関数]

number の小数を切捨てる。(floor 1.5)=1, (floor -1.5)=-2.

ceiling number [関数]

number の小数を切り上げる。(ceiling 1.5)=2, (ceiling -1.5)=-1.

truncate number [関数]

number が正のときは切捨て、負のときは切り上げる。(truncate 1.5)=1, (truncate -1.5)=-1.

float number [関数]

number を float にして返す。

 $\max \ \mathscr{C}rest \ numbers$ [関数]

numbers の中から、最大値をさがす。

min &rest numbers [関数]

numbers の中から、最小値をさがす。

random range & optional (randstate *random-state*)

[関数]

0 あるいは 0.0 から range までの乱数を返す。もし range が integer のとき、integer に変換して返す。そうでないとき、float を返す。オプションの randstate は、決まった乱数列で表される。randstate に特別なデータの型はなく、2 つの要素からなる 整数ベクトルで表される。

incf variable &optional (increment 1)

[マクロ]

variable は一般の変数である。variable は、increment だけ増加され、variable に戻される。

decf variable &optional decrement

[マクロ]

variable は一般の変数である。variable は、decrement だけ減少され、variable に戻される。

reduce func seq [関数]

2 変数操作の func 関数を用いて、seq の中の全ての要素を結合させる。例えば、(reduce #'expt '(2 3 4)) = (expt (expt 2 3) 4)=4096.

rad2deg radian [関数]

ラジアン値を 度数表現に変換する。#R は同じものである。EusLisp の中での角度の表記はラジアンであり、EusLisp 内の全ての関数が要求する角度引数は、ラジアン表現である。

deg2rad degree [関数]

角度値をラジアン表現に変換する。また #D でも実行できる。

6.5 基本関数

sin theta [関数]

theta はラジアンで表される float 値。sin(theta) を返す。

cos theta [関数]

6. 数值演算 32

theta はラジアンで表される float 値。 $\cos(theta)$ を返す。

exp x

 $\mathbf{expt} \ a \ x$

 e^x を返す。

aのx乗を返す。

[関数] $an\ theta$ theta はラジアンで表される float 値。 $\tan(theta)$ を返す。 $\boldsymbol{\sinh}\ x$ [関数] hyperbolic sine、 $\frac{e^x-e^{-x}}{2}$ で表される。 $\cosh x$ [関数] hyperbolic cosine、 $\frac{e^x+e^{-x}}{2}$ で表される。 [関数] anh xhyperbolic tangent、 $\frac{e^x+e^{-x}}{e^x-e^{-x}}$ で表される。 $\mathbf{asin}\ number$ [関数] numberの arc sine を返す。 [関数] acos numbernumber の arc cosine を返す。 [関数] atan y &optional x atan が 1 つの引数だけのとき、arctangent を計算する。2 つの引数のとき、atan(y/x) を計算する。 a $\sinh x$ [関数] hyperbolic arc sine. [関数] a cosh xhyperbolic arc cosine. [関数] atanh xhyperbolic arc tangent. sqrt number [関数] number の平方根を返す。 $\log number$ [関数] number の自然対数を返す。

[関数]

7 symbol とパッケージ

7.1 symbol

symbol は、いつでも唯一であることが保証され、パッケージに収容される。1つのパッケージのなかに、その他の symbol としておなじ print-name を持っていることはあるが、symbol 自体がコピーされることはない。 symbol がリーダに読まれるとき、symbol オブジェクトは、自動的に生成され、1 つのパッケージに収容される。そのパッケージは、パッケージ名にコロン(:)を付け加えた接頭語によって記すことができる。そのようなパッケージ接頭語がないならば、symbol は lisp:*package* の値にある主なパッケージに収容される。全ての symbol は、1 つのホームパッケージを持っている。もし symbol がそのようなホームパッケージを持っていないならば、収容されていない symbol と言われる。収容されていない symbol は、gensym や make-symbol 関数によって作ることができ、表示のときは、"#:"接頭語がつけられる。これらの symbol は収容されていない。

ふつう、lisp リーダが symbol に出会ったとき、リーダは自動的に symbol の print-name 文字列を大文字に変換する。したがって、例えば (symbol-name 'car') と入力したとすると、EusLisp は、"car"の代りに"CAR"と答える。 (make-symbol "car") は、car や CAR の代りに |car| を返す。もし、小文字から構成される symbol をリーダに作らせたい場合、 \ や |...| のようなエスケープを用いること。

symbolp object [関数]

object がクラス symbol かそのサブクラスのインスタンスであったならば、 T を返す。

symbol-value symbol [関数]

symbolの特殊値を得る。ローカル変数値は、この関数では取り出すことはできない。

symbol-function symbol [関数]

symbolのグローバル関数定義を得る。ローカル関数は、この関数で得られない。

symbol-package sym [関数]

sym が収容されているパッケージを返す。

symbol-name sym

sym の print-name を返す。symbol-name は、string がコピーするのに反して、pname 文字列をコピーしない。したがって、もし symbol-name で返された文字列を変えるならば symbol は普通の内部手続きを通してアクセス不可能となる。

symbol-plist sym [関数]

sym の property-list(plist) を返す。EusLisp の plist は、関連リスト (association-list) と同じ様な書式を与える。それは、属性名とその値の組を点でつないだ構成である。これは、Common Lisp の定義が要求する plist (属性名と値の線形リスト)と非互換である。EusLisp において、plist は symbol に独特なものではない。propertied-object を継承するクラスから派生したどんなオブジェクトも、property-listを持つことができる。propertied-object の中のこれらの plist を設定したり、取りだしたりするために、propertied-object-plist マクロは、symbol-plist の代りに使用されるべきである。しかしながら、get と putprop はどのオブジェクトにも働く。

boundp symbol [関数]

symbolがグローバルな値を持っているかどうかを検査する。

注意:ローカル変数やオブジェクト変数として使用される symbol はいつも値を持っているため、boundp はこれらのローカル変数の格納状態を検査することができない。

fboundp symbol [関数]

symbol がグローバルな関数定義を持っているかどうかを検査する。

makunbound symbol

[関数]

symbol は、(特殊値を持たないように)強制的に unbound される。ローカル変数は、いつも値が割り当てられ、makunbound できない。

 ${f get}$ sym attribute

[関数]

symのplistの中でattributeに関連する値を取り出す。(cdr (assoc attribute (symbol-plist sym))) と等価である。

putprop sym val attribute

[関数]

putprop は、setfとgetの組み合せで置き換えるべきである。

 $\mathbf{remprop} \ sym \ attr$

[関数]

属性値 (attr) と sym の組を property-list から削除する。

setq {var value} *

[特殊]

value を var に割り当てる。var は、symbol か点で継った組である。var は、ローカル変数・オブジェクト変数・特殊変数の順番にその名前の中から探される。ただし、明確に special と宣言されてないものに限る。

set sym val

[関数]

val を sym の特殊値として割り当てる。set は、ローカル変数やオブジェクト変数に値を割当てることはできない。

defun symbol [documentation] lambda-list . body

[特殊]

symbol にグローバル関数を定義する。ローカル関数を定義するためには、flet か labels を使用すること。もし、documentation が与えられない場合、lambda-list に書かれているデフォルトの documentation 文字列が入力される。

defmacro symbol [documentation] lambda-list . body

[特殊]

グローバルマクロを定義する。EusLisp は、ローカルスコープマクロ定義の機能を持っていない。

defvar var Eoptional (init nil) doc

[マクロ]

もし var が特殊値を持っていれば、defvar は何もしない。もし var が unbound ならば、special として宣言し、init をその値として設定する。

defparameter var init &optional doc

[マクロ]

defparameter は、*var* を special として宣言し、*var* が既に値を持っていたとしても、*init* をその値として設定する。

defconstant sym val Goptional doc

[マクロ]

defconstant は、val を sym の特殊値として設定する。defvar, defparameter や setq と違い、その値は defconstant でのみ設定され、これらの書式で変更することができない。もし定数 symbol の値が、変更されようとしたならば、エラーが返される。しかし、defconstant は以前の定数値に上書きでき、上書きした場合は注意メッセージが出力される。

keywordp obj

[関数]

もし obj が symbol で、そのホームパッケージが KEYWORD のとき T を返す。

constantp symbol

[関数]

もし symbol が defconstant マクロで定数に宣言されているとき T を返す。

documentation sym &optional type

[関数]

sym のために提示文字列 (documentation string) を取り出す。

gensym &optional x

[関数]

g001 のような前置文字列と付属数字を組み合わせた新しい収容されていない symbol を作る。収容されてない symbol は、symbol に関連するパッケージがないため、パッケージ前置詞の部分に#:を示す。#:が前につく symbol は、読めない symbol で、リーダではこれらの symbol への参照を作成することができない。#2 は、整数か文字列が可能で、接頭 (prefix) インデックスか接尾 (suffix) 値として使用される。

gentemp & optional (prefix "T") (pkg *package*)

[関数]

pkg に収容される新しい symbol を作る。ほとんどのアプリケーションにおいて、gensym が gentemp よりも好まれる。なぜなら、収容されない symbol の方が高速に作ることができ、ガーベージコレクトも可能であるため。

7.2 パッケージ

パッケージは、symbol をグループ化するための区分された名前の付いた空間を与える。複数のプログラマが要求されるような膨大なソフトウェアシステムを開発しようとするとき、symbol (関数および変数名)が重複する問題を減少させるために Common Lisp でパッケージシステムが生まれた。それぞれのパッケージは、内部 symbol と外部 symbol を持つ。パッケージの中で symbol が作成されたとき、いつでも内部 symbol となる。export を使用することにより外部 symbol にすることができる。異なったパッケージの外部 symbol は、symbol の前にパッケージ名とコロン (:) をつけることにより参照することができる。例えば、x:*display*となる。他のパッケージの内部 symbol を参照する場合には、sys::free-threads のようにダブルコロン (::) を使用する。前にパッケージ名をつけることを省略するためには、import を用いる。その上、use-package を使用すれば、他のパッケージの全ての外部 symbol を import することができる。symbol を export あるいは import するとき、あらゆるパッケージ内の全ての symbol が独自の print-name を持つ必要があるため、symbol 名の重複を発見することができる。shadow は、パッケージから symbol を仮想的に削除することにより、存在する symbol と同じ名前の symbol を作成することができる。

Euslisp は次の8つのパッケージを定義する。

lisp: 全てのlisp 関数、マクロ、定数、など

keyword: キーワード symbol

unix: UNIX システムコールとライブラリ関数

system: システム管理または危険な関数; nicknames=sys,si

compiler: EusLisp コンパイラ; nicknames=comp

user: ユーザー領域

geometry: 幾何学クラスとその関数

xwindow: X-window インターフェース; nickname=x

これらのパッケージとユーザー定義パッケージは、システムの package-list に繋げられている。それは、listall-packages よって得ることができる。それぞれのパッケージは、内部および外部 symbol を探索・位置付け するために 2 つのハッシュテーブルを管理する。また、パッケージは、その名前 (string または symbol) と nick name のリストとそのパッケージが使う他のパッケージリストを記憶している。*package*は、読み込み・印

刷のための主なパッケージを持つグローバル変数である。もし*package*が user: でないならば、top-level プロンプトは、現在のパッケージを示すために mypkg: eus\$のように変更される。

lisp-package

[定数]

Lisp パッケージ。

user-package

[定数]

ユーザーパッケージ。

unix-package

[定数]

UNIX パッケージ。

system-package

[定数]

システムパッケージ。

keyword-package

[定数]

キーワードパッケージ。

find-symbol string &optional (package *package*)

[関数]

packageのなかで print-name として string をもつ symbol を見つける。もし見つかったとき、その symbol が返され、そうでないとき NIL が返される。

make-symbol string

[関数]

string で示される名前の新しい収容されていない symbol を作る。

intern string &optional (package *package*) (klass symbol)

[関数]

string と同じ print-name の symbol を見つけようとする。もし探索成功のとき、その symbol が返される。もし失敗したとき、string という print-name を持つ symbol が新しく作られ、package の中におかれる。

list-all-packages

[関数]

今までに作られた全てのパッケージのリストを返す。

find-package name

[関数]

パッケージの名前または nickname が name と同じものを探す。

make-package name &key:nicknames (:use '(lisp))

[関数]

name で示される名前の新しいパッケージを作る。name は、string あるいは symbol でよい。もしパッケージが既に存在している場合、エラーが報告される。

in-package pkg &key :nicknames (:uses '(lisp))

[関数]

現在のパッケージ (*pacakge*の値) を pkg に変える。

package-name pkg

[関数]

pkg パッケージの名前を文字列として返す。

package-nicknames pkg

[関数]

pkg の nickname のリストを返す。

 ${\bf rename\text{-}package}\ pkg\ new\text{-}name\ \mathcal{E}optional\ new\text{-}nicknames$

[関数]

pkg の名前を new-name に変更し、その nickname を new-nicknames に変更する。それらは、symbol か string または symbol か string のリストのどれでも可能である。

package-use-list pkg

[関数]

pkg で使用されるパッケージリストを返す。

packagep pkg

[関数]

もし pkg がパッケージのとき T を返す。

use-package pkg &optional (curpkg *package*)

[関数]

pkg を curpkg の use-list に付け加える。一旦追加すると、pkg のなかの symbol は、パッケージの前置詞なしで curpkg を見ることが可能になる。

unuse-package pkg &optional (curpkg *package*)

[関数]

curpkg の use-list から pkg を削除する。

shadow sym &optional(pkg *package*)

[関数]

存在する sym を隠すことによって、pkg 内に内部 symbol を作る。

export sym &optional (pkg *package*)

[関数]

sym は、symbol か symbol のリストである。export は、sym を他のパッケージから外部 symbol としてアクセス可能とする。実際に、sym は、pkg のなかの外部 symbol として記録される。もし symbol が export されると、パッケージマークとして single colon ":"を使ってアクセス可能となる。これに対して、export されていない symbol は double colon ":" で得られる。そのうえ、export された symbol は、use-package を使用したり、パッケージに import されたとき、コロンの必要がない。symbol が export されたかどうかは、それぞれの symbol にでなくそれが収容されているパッケージに属性付けられる。それで、symbol は 1 つのパッケージの内部にあり、その他の外部となる。export は、pkg が使用している他のパッケージの中の symbol 名と sym が重複していないかどうかを検査する。もし sym と同じ print name をもつ symbol があったならば、"symbol conflict"とエラーを報告する。

 $\mathbf{unexport}\ sym\ \mathcal{C}optional\ pkg$

[関数]

もし sym が pkg の外部 symbol であったならば、unexport され、内部 symbol となる。

import sym & optional (pkg *package*)

[関数]

sym は、symbol または symbol のリストである。import は、他のパッケージで定義された symbol を pkg からパッケージの前置詞なしで内部 symbol として見えるようにする。もし sym と同じ print-name を持った symbol が既にあったとき、"name conflict" とエラーを報告する。

do-symbols (var pkg) &rest forms

[マクロ]

pkg において、(内部あるいは外部) symbol に対して繰り返しをする。そのときの forms の評価が返される。

do-external-symbols (var pkg) &rest forms

[マクロ]

pkg において、外部 symbol に対して繰り返しをする。そのときの forms の評価が返される。

do-all-symbols (var [result]) & rest forms

[マクロ]

全てのパッケージにおいて、symbol に対して繰り返しをする。そのときの forms の評価が返される。もし、1 つ以上のパッケージの中にその symbol が現れたならば、forms は、1 度以上評価される。

8 列、行列とテーブル

8.1 一般列

ベクトル (1 次元行列) とリストは、一般の列である。文字列 (string) は、文字 (character) のベクトルなので、列である。

map, concatenate や coerce における結果の型を明記するためには、クラスオブジェクトが symbol にバインドされていないので、引用符なしで cons, string, integer-vector, float-vector などのクラス名 symbol を使う。

elt sequence pos [関数]

elt は、sequence の中の pos 番目の位置の値を得たり、(setf とともに) 置いたりする最も一般的な関数 である。sequence は、リストまたは任意のオブジェクト、bit, char, integer, float のベクトルである。elt は、多次元の行列に適用できない。

length sequence [関数]

sequence の長さを返す。ベクトルにおいて、length は一定の時間で終了する。しかし、リスト型においては、長さに比例した時間がかかる。length が、もし環状リストに適用されたとき、決して終了しない。代わりに list-length を使用すること。もし、sequence が fill-pointer を持つ行列ならば、length は行列全体のサイズを返すのではなく fill-pointer を返す。このような行列のサイズを知りたい場合には、array-total-size を使用すること。

subseq sequence start [end]

[関数]

sequence の start 番目から (end-1) 番目までをそっくりコピーした列を作る。 end は、デフォルト値として sequence の長さをとる。

copy-seq sequence [関数]

sequence のコピーした列を作る。このコピーでは、sequence のトップレベルの参照のみがコピーされる。入れこリストのコピーには copy-tree を使い、再帰参照を持つような列のコピーには copy-object を使うこと。

reverse sequence [関数]

sequence の順番を逆にし、sequence と同じ型の新しい列を返す。

nreverse sequence

[関数]

nreverse は、reverse の破壊 (destructive) バージョンである。reverse はメモリを確保するが、nreverse はしない。

concatenate result-type {sequence}*

[関数]

全ての sequence を連結させる。それぞれの sequence は、なにかの列型である。append と違って、最後の一つまで含めた全ての列がコピーされる。result-type は、cons,string,vector,float-vector などのクラスである。

coerce sequence result-type

[関数]

sequenceの型を変更する。例えば、(coerce '(a b c) vector) = #(a b c) や (coerce "ABC" cons) = (a b c) である。result-type 型の新しい列が作られ、sequence のそれぞれの要素はその列にコピーされる。result-type は、vector, integer-vector, float-vector, bit-vector, string, cons またはそれらの1つを継承したユーザー定義クラスのうちの1つである。coerce は、sequence の型が result-type と同一である場合、コピーをする。

map result-type function seq &rest more-seqs

[関数]

function は、seq と more-seqs のそれぞれの N 番目 $(N=0,1,\cdots)$ の要素からなるリストに対して適用され、その結果は result-type の型の列に蓄積される。

fill sequence item &key (:start 0) (:end (length sequence))

[関数]

sequence の start 番目から (end-1) 番目まで、item で満たす。

replace dest source &key :start1 :end1 :start2 :end2

[関数]

dest 列の中の start1 から end1 までの要素が、source 列の中の start2 から end2 までの要素に置き換えられる。start1 と start2 のデフォルト値はゼロで、end1 と end2 のデフォルト値はそれぞれの列の長さである。もし片方の列がもう一方よりも長いならば、end は短い列の長さに一致するように縮められる。

sort sequence compare &optional key

[関数]

sequence は、Unix の quick-sort サブルーチンを使って破壊的に (destructively) にソートされる。key は、キーワードパラメータでなく、比較用のパラメータである。同じ要素を持った列のソートをするときは十分気をつけること。例えば、 $(sort '(1 \ 1) \ \#'>)$ は失敗する。なぜなら、 $1 \ E \ 1$ の比較はどちらからでも失敗するからである。この問題を避けるために、比較として#'>= m''<= m

merge result-type seq1 seq2 pred &key (:key #'identity)

「関数

2 つの列 seq1 と seq2 は、result-type 型の 1 つの列に合併され、それらの要素は pred に記述された比較を満足する。

merge-list list1 list2 pred key

[関数]

2つのリストを合併させる。merge と違って、一般列は引数として許可されないが、merge-list はmerge より実行が速い

次の関数は、1 つの基本関数と-if や-if-not を後に付けた変形関数から成る。基本形は、少なくとも item と sequence の引数を持つ。sequence の中のそれぞれの要素と item を比較し、何かの処理をする。例えば、インデックスを探したり、現れる回数を数えたり、item を削除したりなど。変形関数は、predicate と sequence の 引数を持つ。sequence のそれぞれの要素に predicate を適用し、もし predicate が non-NIL を返したとき (-if version)、または NIL を返したとき (-if-not version) に何かをする。

position item seq &key :start :end :test :test-not :key (:count 1)

[関数]

seq の中から item と同一な要素を探し、その要素の中で:count 番目に現れた要素のインデックスを返す。 その探索は、:start 番目の要素から始め、それ以前の要素は無視する。デフォルトの探索は、eq1 で実行 されるが、test か test-not パラメータで変更できる。

position-if predicate seq &key :start :end :key

[関数]

position-if-not predicate seq &key :start :end :key

[関数]

find item seq &key :start :end :test :test-not :key (:count 1)

[関数]

seq の中の start 番目の要素から :end 番目の要素までの間で要素を探し、その探された要素の内、:count 番目の要素を返す。その要素は、:test か:test-not に#'eq1 以外のものが記述されていないなら、:tem と同じものである。

find-if predicate seq &key :start :end :key (:count 1)

[関数]

seg の要素の中で predicate が non-NIL を返す要素の内、:count 番目の要素を返す。

find-if-not predicate seq &key :start :end :key

[関数]

count item seq &key :start :end :test :test-not :key

[関数]

seq の中の:start 番目から:end 番目までの要素に item が何回現れるか数える。

count-if predicate seq &key :start :end :key

[関数]

predicate が non-NIL を返す seg 内の要素数を数える。

count-if-not predicate seq &key :start :end :key

[関数]

remove item seq &key :start :end :test :test-not :key :count

[関数]

seq の中の:start 番目から:end 番目までの要素のなかで、item と同一の要素を探し、:count (デフォルト値は)番目までの要素を削除した新しい列を作る。もし、item が一回のみ現れることが確定しているなら、無意味な探索を避けるために、:count=1 を指定すること。

remove-if predicate seq &key :start :end :key :count

[関数]

remove-if-not predicate seq &key :start :end :key :count

[関数]

remove-duplicates seq &key :start :end :key :test :test-not :count

[関数]

segの中から複数存在するitemを探し、その中の1つだけを残した新しい列を作る。

delete item seq &key:start:end:test:test-not:key:count

[関数]

delete は、seq 自体を修正し、新しい列を作らないことを除いては、 ${f remove}$ 同じである。もし、item が一回のみ現れることが確定しているなら、無意味な探索を避けるために、:count=1 を指定すること。

delete-if predicate seq &key :start :end :key :count

[関数]

delete-if-not predicate seq &key:start:end:key:count

[関数]

remove や delete の:count デフォルト値は、1,000,000 である。もし列が長く、削除したい要素が一回しか現れないときは、:count を 1 と記述すべきである。

substitute newitem olditem seq &key:start:end:test:test-not:key:count

[関数]

seq の中で:count 番目に現れた olditem を newitem に置き換えた新しい列を返す。デフォルトでは、全ての olditem を置き換える。

substitute-if newitem predicate seq &key:start:end:key:count

[関数]

substitute-if-not newitem predicate seq &key :start :end :key :count

[関数]

nsubstitute newitem olditem seq &key:start:end:test-not:key:count

[関数]

seq の中で count 番目に現れた olditem を newitem に置き換え、元の列 seq に返す。デフォルトでは、全ての olditem を置き換える。

nsubstitute-if newitem predicate seq &key:start:end:key:count

 $\mathbf{nsubstitute\text{-}if\text{-}not}\ \textit{newitem}\ \textit{predicate}\ \textit{seq}\ \mathcal{C}\textit{key}: \textit{start}\ :\textit{end}\ :\textit{key}\ :\textit{count}$

8.2 リスト

first list

```
listp object
                                                                                         [関数]
     オブジェクトが cons のインスタンスかもしくは NIL ならば、T を返す。
consp object
                                                                                         [関数]
     (not (atom object)) と同一である。(consp '()) は NIL である。
\operatorname{\mathbf{car}}\ list
                                                                                         [関数]
     listの最初の要素を返す。NILの car は NILである。atomの car はエラーとなる。(car '(1 2 3)) =
\mathbf{cdr}\ list
                                                                                         [関数]
     list の最初の要素を削除した残りのリストを返す。NIL の cdr は NIL である。atom の cdr はエラーと
    なる。(cdr '(1 2 3)) = (2 3)
                                                                                         [関数]
cadr list
     (cadr list) = (car (cdr list))
\mathbf{cddr}\ list
                                                                                         [関数]
    (cddr list) = (cdr (cdr list))
cdar list
                                                                                         [関数]
     (cdar list) = (cdr (car list))
caar list
                                                                                         [関数]
     (caar list) = (car (car list))
\mathbf{caddr}\ \mathit{list}
                                                                                         [関数]
     (caddr list) = (car (cdr (cdr list)))
caadr list
                                                                                         [関数]
     (caadr list) = (car (cdr list)))
cadar list
                                                                                         [関数]
     (cadar list) = (car (cdr (car list)))
caaar list
                                                                                         [関数]
     (caaar list) = (car (car (car list)))
cdadr list
                                                                                         [関数]
    (cdadr list) = (cdr (cdr list)))
                                                                                         [関数]
     (cdaar list) = (cdr (car (car list)))
\mathbf{cdddr}\ \mathit{list}
                                                                                         [関数]
     (cdddr list) = (cdr (cdr (cdr list)))
cddar list
                                                                                         [関数]
     (cddar list) = (cdr (cdr (car list)))
```

listの最初の要素を取り出す。second, third, fourth, fifth, sixth, seventh, eighth もまた定義されている。(first list) = (car list)

nth count list [関数]

list内の count 番目の要素を返す。(nth 1 list)は、(second list)あるいは(elt list 1)と等価である。

nthcdr count list [関数]

list に cdr を count 回適用した後のリストを返す。

last *list* [関数]

list の最後の要素でなく、最後の cons を返す。

butlast *list* & optional (n 1)

[関数]

 list の最後から n 個の要素を削除したリストを返す。

 $cons \ car \ cdr$ [関数]

car が car で cdr が cdr であるような新しい cons を作る。

list {element}*

element を要素とするリストを作る。

list* { element} *

element を要素とするリストを作る。しかし、最後の要素は cons されるため、atom であってはならない。例えば、(list* 1 2 3 $^{\prime}$ (4 5)) = (1 2 3 4 5) である。

list-length list [関数]

list の長さを返す。list は、環状リストでも良い。

make-list size &key (:initial-element nil)

[関数]

size 長さで要素が全て:initial-element のリストを作る。

rplaca cons a [関数]

cons の car を a に置き換える。setf と car の使用を推薦する。 $(rplaca\ cons\ a)$ = $(setf\ (car\ cons)$

 \mathbf{rplacd} cons d [関数]

cons の cdr を d に置き換える。setf と cdr の使用を推薦する。(rplacd cons d) = (setf (cdr cons) d)

memq item list [関数]

member に似ている。しかしテストはいつも eq で行う。

member item list &key :key :test :test-not

[関数]

[関数]

list の中から条件にあった要素を探す。list の中から item を探索し、:test の条件にあったものがなければ NIL を返す。見つかったならば、それ以降をリストとして返す。この探索は、最上位のリストに対して 行なわれる。:test のデフォルトは \sharp ' eq である。(member 'a '(g (a y) b a d g e a y))=(a d g e a y)

assq item alist [関数]

assoc item alist &key :key :test :test-not

alist の要素の car が:test の条件にあった最初のものを返す。合わなければ、NIL を返す。:test のデフォルトは#'eq である。(assoc '2 '((1 d t y)(2 g h t)(3 e x g))=(2 g h t)

rassoc item alist [関数]

cdr が item に等しい alist のなかの最初の組を返す。

pairlis l1 l2 &optional alist

[関数]

l1 と l2 の中の一致する要素を対にしたリストを作る。もし alist が与えられたとき、l1 と l2 から作られた対リストの最後に連結させる。

acons key val alist [関数]

alistに key val の組を付け加える。(cons (cons key val) alist)と同等である。

append $\{list\}^*$ [関数]

新しいリストを形成するために list を連結させる。最後のリストを除いて、list のなかの全ての要素はコピーされる。

 $\mathbf{nconc} \ \{list\}^*$ [関数]

それぞれの list の最後の cdr を置き換える事によって、list を破壊的に (destructively) 連結する。

subst new old tree [関数]

tree の中のすべての old を new に置き換える。

flatten complex-list [関数]

atom やいろんな深さのリストを含んだ *complex-list* を、1つの線形リストに変換する。そのリストは、 *complex-list* の中のトップレベルに全ての要素を置く。(flatten '(a (b (c d) e))) = (a b c d e)

push item place [マクロ]

place にバインドされたスタック (リスト) に item を置く。

pop stack [マクロ]

stack から最初の要素を削除し、それを返す。もし stack が空 (NIL) ならば、 NIL を返す。

pushnew item place &key :test :test-not :key [マクロ]

もし item が place のメンバーでないなら、place リストに item を置く。:test, :test-not と:key 引数は、member 関数に送られる。

adjoin item list [関数]

もし item が list に含まれてないなら、list の最初に付け加える。

union list1 list2 &key (:test #'eq) (:test-not) (:key #'identity)

[関数]

2 つのリストの和集合を返す。

subsetp list1 list2 &key (:test #'eq) (:test-not) (:key #'identity)

[関数]

list1 が list2 の部分集合であること、すなわち、list1 のそれぞれの要素が list2 のメンバーであることをテストする。

intersection list1 list2 &key (:test #'eq) (:test-not) (:key #'identity)

[関数]

2 つのリスト *list1* と *list2* の積集合を返す。

set-difference list1 list2 &key (:test #'eq) (:test-not) (:key #'identity)

[関数]

list1にのみ含まれていて list2に含まれていない要素からなるリストを返す。

set-exclusive-or list1 list2 &key (:test #'eq) (:test-not) (:key #'identity) [関数]

list1 および list2 にのみ現れる要素からなるリストを返す。

list-insert item pos list

[関数]

list の pos 番目の要素として item を挿入する (元のリストを変化させる)。もし pos が list の長さより大きいなら、item は最後に nconc される。(list-insert 'x 2 '(a b c d)) = (a b x c d)

copy-tree tree

[関数]

入れこリストである tree のコピーを返す。しかし、環状参照はできない。環状リストは、copy-objectでコピーできる。実際に、copy-tree は (subst t t tree) と簡単に記述される。

mapc func arg-list &rest more-arg-lists

[関数]

arg-list や more-arg-lists それぞれの N 番目 $(N=0,1,\cdots)$ の要素からなるリストに func を適用する。 適用結果は無視され、arg-list が返される。

mapcar func &rest arg-list

[関数]

arg-list のそれぞれの要素に func を map し、その全ての結果のリストを作る。mapcar を使う前に、dolist を試すこと。

mapcan func arg-list Grest more-arg-lists

[関数]

arg-list のそれぞれの要素に func を map し、nconc を用いてその全ての結果のリストを作る。nconcは NIL に対して何もしないため、mapcan は、arg-list の要素にフィルタをかける(選択する)のに合っている。

8.3 ベクトルと行列

7次元以内の行列が許可されている。1次元の行列は、ベクトルと呼ばれる。ベクトルとリストは、列としてグループ化される。もし、行列の要素がいろんな型であったとき、その行列は一般化されていると言う。もし、行列がfill-pointerを持ってなく、他の行列で置き換えられなく、拡張不可能であるなら、その行列は簡略化されたと言う。

全ての行列要素は、arefにより取り出すことができ、arefを用いて setfにより設定することができる。しかし、一次元ベクトルのために簡単で高速なアクセス関数がある。svref は一次元一般ベクトル、char と schar は一次元文字ベクトル(文字列) bit と sbit は一次元ビットベクトルのための高速関数である。これらの関数はコンパイルされたとき、アクセスは in-line を拡張し、型チェックと境界チェックなしに実行される。

ベクトルもまたオブジェクトであるため、別のベクトルクラスを派生させることができる。5 種類の内部ベクトルクラスがある。vector, string, float-vector, integer-vectorとbit-vectorである。ベクトルの作成を容易にするために、make-array 関数がある。要素の型は、:integer, :bit, :character, :float, :foreign かあるいはユーザーが定義したベクトルクラスの内の一つでなければならない。:initial-elementと:initial-contentsのキーワード引数は、行列の初期値を設定するために役に立つ。

array-rank-limit [定数]

7。行列の最大次元を示す。

array-dimension-limit

[定数]

#x1fffffff。各次元の最大要素数を示す。論理的な数であって、システムの物理メモリあるいは仮想メモリの大きさによって制限される。

vectorp object [関数]

行列は1次元であってもベクトルではない。objectが vector, integer-vector, float-vector, string, bit-vector あるいはユーザーで定義したベクトルなら T を返す。

vector *Erest elements* [関数]

elements からなる一次元ベクトルを作る。

make-array dims &key (:element-type vector) (:initial-contents nil)

[関数]

(:initial-element nil)

(:fill-pointer nil)

 $(:displaced\mbox{-}to\ nil)$

 $(:displaced\text{-}index\text{-}offset\ 0)$

 $(:adjustable\ nil)$

ベクトルか行列を作る。 dims は、整数かリストである。もし dims が整数なら、一次元ベクトルが作られる。

svref vector pos

[関数]

vector の pos 番目の要素を返す。vector は、一次元一般ベクトルでなければならない。

aref vector &rest (indices)

[関数]

vector の indices によってインデックスされる要素を返す。indices は、整数であり、vector の次元の数だけ指定する。aref は、非効率的である。なぜなら、vector の型に従うように変更する必要があるためである。コンパイルコードの速度を改善するため、できるだけ型の宣言を与えるべきである。

vector-push val array [関数]

array の fill-pointer 番目のスロットに val を保管する。array は、fill-pointer を持っていなければならない。val が保管された後、fill-pointer は、次の位置にポイントを 1 つ進められる。もし、行列の境界よりも大きくなったとき、エラーが報告される。

vector-push-extend val array

[関数]

array の fill-pointer が最後に到達したとき、自動的に array のサイズが拡張されることを除いては、vector-push と同じである。

arrayp obj

[関数]

もし obj が行列またはベクトルのインスタンスであるなら T を返す。

array-total-size array

[関数]

array の要素数の合計を返す。

fill-pointer array

[関数]

array の fill-pointer を返す。file-pointer を持っていなければ NIL を返す。

array-rank array

[関数]

array の次元数を返す。

array-dimensions array

[関数]

array の各次元の要素数をリストで返す。

array-dimension array axis

[関数]

array-dimension は、array の axis 番目の次元を返す。axis はゼロから始まる。

bit bitvec index

[関数]

bitvec の index 番目の要素を返す。ビットベクトルの要素を変更するには、setf と bit を使用すること。

bit-and bits1 bits2 &optional result

[関数]

 $\textbf{bit-ior} \ bits1 \ bits2 \ \mathcal{C}optional \ result$

[関数]

bit-xor bits1 bits2 &optional result

[関数]

bit-eqv bits1 bits2 &optional result

[関数]

bit-nand bits1 bits2 &optional result

[関数]

bit-nor bits1 bits2 &optional result

[関数]

bit-not bits1 Coptional result

[関数]

同じ長さの bits1 と bits2 というビットベクトルにおいて、それらの and, inclusive-or, exclusive-or, 等 価, not-and, not-or と not がそれぞれ返される。

8.4 文字と文字列

EusLisp には、文字型がない。文字は、integer によって表現されている。ファイル名を現わす文字列を扱うためには、9.6 節に書かれている pathname を使うこと。

digit-char-p ch [関数]

もし ch が#\0~#\9 なら T を返す。

alpha-char-p ch [関数]

もし ch が#\A~#\Z または#\a~#\z なら、T を返す。

upper-case-p ch [関数]

もし *ch* が#\A∼#\Z なら、T を返す。

lower-case-p ch [関数]

もし *ch* が#\a~#\z なら、T を返す。

alphanumeric-p ch [関数]

もし ch が#\0~#\9、#\A~#\Z または#\a~#\z なら、T を返す。

char-upcase ch [関数]

ch を大文字に変換する。

char-downcase ch [関数]

ch を小文字に変換する。

char string index [関数]

string の index 番目の文字を返す。

schar string index [関数]

string から文字を抜き出す。string の型が明確に解っていて、型チェックを要しないときのみ、schar を使うこと。

stringp string [関数]

string がバイト (256 より小さい正の整数) のベクトルなら、T を返す。

string-upcase str &key :start :end [関数]

str を大文字の文字列に変換して、新しい文字列を返す。

string-downcase str & key :start :end [関数]

str を小文字の文字列に変換して、新しい文字列を返す。

nstring-upcase str [関数]

str を大文字の文字列に変換し、元に置き換える。

 $nstring-downcase str egin{array}{c} start : end \end{array}$ [関数]

str を小文字の文字列に変換し、元に置き換える。

 string= str1 str2 &key :start1 :end1 :start2 :end2
 [関数]

もしstr1がstr2と等しいとき、Tを返す。string=は、大文字・小文字を判別する。

string-equal str1 str2 &key :start1 :end1 :start2 :end2 [関数]

str1 と str2 の等価性をテストする。string-equal は、大文字・小文字を判別しない。

string object [関数]

object の文字列表現を得る。もし object が文字列なら、object が返される。もし object が symbol なら、その pname がコピーされ、返される。(equal (string 'a) (symbol-pname 'a))==T であるが、(eq (string 'a) (symbol-pname 'a))==NIL である。もし object が数値なら、それを文字列にしたものが返される (これは Common Lisp と非互換である)。もっと複雑なオブジェクトから文字列表現を得るためには、最初の引数を NIL にした format 関数を用いること。

string< str1 str2 [関数]

string <= str1 str2 [関数]

string> str1 str2 [関数]

string>= str1 str2 [関数]

str1 と str2 を先頭から順番に比較して、比較演算が成立した位置を返す。もし、成立しなければ、NILを返す。文字の比較は、その文字のコードにに対して行なわれるため、A < Z である。。

string-left-trim bag str [関数]

 $string-right-trim \ bag \ str$

[関数]

str は、左(右)から探索され、もし bag リスト内の文字を含んでいるなら、その要素を削除する。一旦 bag に含まれない文字が見つかると、その後の探索は中止され、str の残りが返される。

string-trim bag str

bag は、文字コードの列である。両端に bag に書かれた文字を含まない str のコピーが作られ、返される。

substringp sub string [関数]

 sub 文字列が string に部分文字列として含まれるなら、 T を返す。大文字・小文字を判別しない。

8.4.1 日本語の扱い方

euslispで日本語を扱いたい時、文字コードは UTF-8 である必要がある。

例えば concatenate を用いると、リストの中の日本語を連結することが出来る。ROS のトピックとして一つずつ取ってきた日本語を、連結することで一つの string 型の言葉に変換したい時などに便利である。

(concatenate string "け" "ん" "し" "ろ" "う") "けんしろう"

最初から全ての文字がリストに入っていて、文字を連結したい時はこのようにすればよい。

(reduce #'(lambda (val1 val2) (concatenate string val1 val2)) (list "我" "輩" "は" "ピ" "ー" "ア" "ー" "ル" "ツ" "ー" "あ" "る"))

"我輩はピーアールツーである"

coerce を用いて、次のように書くことも出来る。

(coerce (append (coerce "私はナオより" cons) (coerce "背が高い" cons)) string)

"私はナオより背が高い"

8.5 Foreign String

foreign-string は、EusLispのヒープ外にあるバイトベクトルの1種である。普通の文字列は、長さとバイトの列を持ったオブジェクトであるが、foreign-string は、長さと文字列本体のアドレスを持っている。foreign-string は文字列であるが、いくつかの文字列および列に対する関数は適用できない。length、aref、replace、subseq と copy-seq だけが foreign-string を認識し、その他の関数の適用はクラッシュの原因となる恐れがある。

foreign-string は、/dev/a??d??(??は 32 あるいは 16) の特殊ファイルで与えられる I/O 空間を参照することがある。そのデバイスがバイトアクセスにのみ応答する I/O 空間の一つに割り当てられた場合、replace は、いつもバイト毎に要素をコピーする。メモリの large chunk を連続的にアクセスしたとき、比較的に遅く動作する。。

make-foreign-string address length

[関数]

addressの位置から length バイトの foreign-string のインスタンスを作る。例えば、(make-foreign-string (unix:malloc 32) 32) は、EusLisp のヒープ外に位置する 32 バイトメモリを参照部分として作る。

8.6 ハッシュテーブル

hash-table は、キーで連想される値を探すためのクラスである (assoc でもできる)。比較的大きな問題において、hash-table は assoc より良い性能を出す。キーと値の組数が増加しても探索に要する時間は、一定のままである。簡単に言うと、hash-table は 100 以上の要素から探す場合に用い、それより小さい場合は assoc を用いるべきである。

hash-table は、テーブルの要素数が rehash-size を越えたなら、自動的に拡張される。デフォルトとして、テーブルの半分が満たされたとき拡張が起こるようになっている。sxhash 関数は、オブジェクトのメモリアドレスと無関係なハッシュ値を返し、オブジェクトが等しい (equal) ときのハッシュ値はいつも同じである。それで、hash-table はデフォルトのハッシュ関数に sxhash を使用しているので、再ロード可能である。sxhash がロバストで安全な間は、列や tree の中のすべての要素を探索するため、比較的に遅い。高速なハッシュのためには、アプリケーションにより他の特定のハッシュ関数を選んだ方がよい。ハッシュ関数を変えるためには、hash-table に:hash-function メッセージを送信すれば良い。簡単な場合、ハッシュ関数を#'sxhash から#'sys:addressに変更すればよい。EusLisp 内のオブジェクトのアドレスは決して変更されないため、#'sys:address を設定することができる。

sxhash obj [関数]

obj のハッシュ値を計算する。equal な 2 つのオブジェクトでは、同じハッシュ値を生じることが保証されている。symbol なら、その pname に対するハッシュ値を返す。number なら、その integer 表現を返す。list なら、その要素全てのハッシュ値の合計が返される。string なら、それぞれの文字コードの合計をシフトしたものが返される。その他どんなオブジェクトでも、sxhash はそれぞれのスロットのハッシュ値を再帰的呼出しで計算し、それらの合計を返す。

[関数]

make-hash-table &key (:size 30) (:test #'eq) (:rehash-size 2.0)

hash-table を作り、返す。

gethash key htab [関数]

htab の中から key と一致する値を得る。gethash は、setf を組み合せることにより key に値を設定することにも使用される。hash-table に新しい値が登録され、そのテーブルの埋まったスロットの数が1/rehash-size を越えたとき、hash-table は自動的に 2 倍の大きさに拡張される。

remhash key htab [関数]

htab の中から key で指定されたハッシュ登録を削除する。

maphash function htab [関数]

htab の要素全てを function で map する。

hash-table-p x [関数]

もしxが hash-table クラスのインスタンスなら、T を返す。

hash-table [クラス]

 $: \! \mathbf{super} \qquad \mathbf{object}$

:slots (key value count

hash-function test-function rehash-size empty deleted)

hash-table を定義する。key と value は大きさが等しい一次元ベクトルである。count は、key や value が埋まっている数である。hash-functionのデフォルトは sxhash である。test-functionのデフォルトは eq である。empty と deleted は、key ベクトルのなかで空または削除された数を示す symbol(パッケージに

収容されていない)である。

$\textbf{:} \textbf{hash-function} \ \textit{newhash}$

[メソッド]

この hash-table のハッシュ関数を newhash に変更する。newhash は、1 つの引数を持ち、integer を返す関数でなければならない。newhash の 1 つの候補として sys:address がある。

9 ストリームと入出力

9.1 ストリーム

定義済みストリームは次のものであり、echo-stream と concatenated-stream は利用できない。

standard-input 標準入力 stdin fd=0

standard-output 標準出力 stdout fd=1

error-output 標準エラー出力 stderr fd=2 bufsize=1

terminal-io *standard-input*と*standard-output* で作られる入出力ストリーム

streamp object [関数]

object が stream, io-stream かそのサブクラスから作られているとき T を返す。

input-stream-p object [関数]

object がストリームで読み込み可能であれば、T を返す。

output-stream-p object [関数]

object がストリームで書き込み可能であれば、T を返す。

io-stream-p *object* [関数]

object が読み書き可能なストリームであれば、T を返す。

open path & elements :input [関数]

:if-exists :new-version

:if-does-not-exist

:permission #o644

:buffer-size 512

open は、path で指定されたファイルと結合されるストリームを作る。path は、文字列かパス名でよい。idirection は、:input,:output または:io のどれか 1 つでなければならない。いくつかの open オプション:append,:new-version,:overwrite,:error と NIL が:if-exists のパラメータとして許される。しかしながら、このパラメータはidirection が:input のとき無視される。if-does-not-exist には、:error,:create か NIL のどれか 1 つをとる。:new-version,:rename と:supersede は認識されない。デフォルトとして、idirection が:output か:io でファイルが存在するとき、そのファイルに上書きする。:input において、ファイルがないとき、エラーが報告される。ファイルの存在を知るために、probe-file を使うことができる。:buffer-size のデフォルト値は 512 バイト、:permission のデフォルト値は#0644 である。SunOS4 は、同時に 60 ファイルのオープンを許可している。

with-open-file (svar path . open-options) &rest forms

[マクロ]

path という名のファイルが、open-options でオープンされ、そのストリームは svar にバインドされる。 それから forms が評価される。ストリームは、forms の評価が終るかまたは throw, return-from やエラーで脱出したとき、自動的にクローズされる。with-open-file は、unwind-protect によって close とその内部書式を一緒にして定義されるマクロである。

close stream [関数]

stream がクローズされ、成功したら T を返す。stream が既にクローズされていた場合、NIL が返される。ストリームは、そのストリームオブジェクトが参照するものがないなら、GC によって自動的にクローズされる。

${\bf make\text{-}string\text{-}input\text{-}stream}\ \mathit{string}$

[関数]

string から入力ストリームを作る。

${\bf make\text{-}string\text{-}output\text{-}stream}\ size$

[関数]

size 長さの文字列のために出力ストリームを作る。その長さは自動的に拡張される。そのため、size は初期化時に配置する文字列のための補助情報である。

get-output-stream-string string-stream

[関数]

string-stream に文字列を出力する。

$\mathbf{make\text{-}broadcast\text{-}stream}\ \mathscr{C}\mathit{rest}\ \mathit{output\text{-}streams}$

[関数]

広報 (broadcast) ストリームを作り、このストリームに書かれたメッセージはすべての *output-streams* へ転送される。

9.2 リーダ (reader)

リーダのグローバル変数は:

read-base 読み込時の基数;デフォルトは10

readtable reader 構文を決定するカレント読み込みテーブル

Reader のデフォルトマクロ文字は:

(リスト読み込み

- " 文字列読み込み
- ' 引用符表現読み込み
- #マクロ変換
- ; コメント
- back-quote
- , list-time eval
- @ 追加
- % C 言語表記の数式読み込み

エスケープ文字:

│ 単一文字エスケープ|...| 多重文字エスケープ

エスケープされていない symbol が読まれると、全ての構成される文字はデフォルトで大文字に変換され、そして大文字の symbol は内部に蓄えられる。例えば、'abc と'ABC は同じ symbol とみなされる。エスケープは、それらを区別するのに必要である。'|ABC|, 'ABC と'abc は同一であるが、'|abc| と'abc は違う symbol である。デフォルトとして、大文字の symbol を入力したときでさえ、その symbol を表示するときは EusLisp のプリンタが内部の大文字表現から小文字に変換する。この変換は、プリンタによって実行されている。この変換は、:UPCASE を*print-case*に設定することにより、禁止される。

10. は整数の 10 として読まれ、実数の 10.0 ではない。':' がパッケージマーカーとして予約されているので、'|g:pcube| のように symbol を構成するものとして使うとき、エスケープ化しなければならない。この制限は、文字':' の構文により強制されないが、アルファベット順や letter の意味を決定する属性により強制される。その文字の属性は、リーダから堅く結ばれる (hardwired)。したがって、copy-readtable で新しい readtable を作ったり、set-syntax-from-char で文字のための構文的意味を組み直したりすることにより、ある文字の構文を変更可能であるが、その属性はどのようにしても変更することができない。その一方で、数字はいつも数字であり、アルファベットはアルファベットで、数値を表現するために'#\$%@' の様な文字を使用することはできない。

%は、EusLisp で拡張 read-macro 文字となっている。挿入記述により書かれた数式の前に%を付けることにより、その数式は lisp 用の式に変換される。具体例を上げると、%(1+2*3/4.0) は (+1(/*23)4.0) に変換され、結果は 2.5 となる。C の様な関数呼出や行列参照も、lisp 形式に変換される。従って、 $%(\sin(x)+a[1])$ は $(+(\sin x)(aref a 1))$ として評価される。1 つ以上の引数を持つ関数や 2 次元以上の行列は、func(abc...) や ary[1]2]3] のように記述し、func(a,b,c) や ary[1][2][3] のように書かない。相対表現や割り当てもまた、正しく扱われる。それで、%(a < b) は (<abc.) に変換され、%(a[0]=b[0]*c[0]) は (setf(aref a 0)(*(aref b 0)(aref c 0))) として得られる。単純な最適化は、

重複した関数呼出や行列参照をなくすことである。 $%(\sin(x) + \cos(x) / \sin(x))$ は(let* ((temp (sin x))) (+ temp (/ (cos x) temp))) のように変換される。

マクロ変換は#文字が前に付いている。数値 (integer) 引数は、#とマクロ変換文字の間に与えられる。これは、どの数字 (0...9) もマクロ変換文字として定義できないことを意味する。リーダの標準のマクロ変換文字は次の通り:

#nA(..) 行列

#B 2 進数

#D [度] から [ラジアン] への変換; #D180 = 3.14

#F(...) 実数ベクトル

#nF((...)) 実数行列; #2F((..) (..)) is matrix

#I(...) 整数ベクトル

#nI((...)) 整数行列

#J(...) 一般オブジェクト #J(myclass); 古**い**定義

#0 8 進数

#P パス名

#R [ラジアン] から [度] への変換; #R3.14 = 180.0

#S(classname slotname1 val1 slotname2 val2 ...) 構造体(あらゆるオブジェクト)

#V(...) ベクトル #V(vectorclass ...)

#X 16 進数

#(...) ベクトル

#n# ラベル参照

#n= ラベル定義

#' 関数; コンパイルコードあるいは lambda-closure

#\文字

#, 読み込み時に評価

#+ 条件読みだし (positive)

#- 条件読みだし (negative)

#* ビットベクトル

#: 収容されてない symbol

#|...|# コメント; 入れ子可能

いくつかのリーダ関数は、eof-error-p, eof-value や recursive-p のパラメータを持っている。最初の 2 つのパラメータは、リーダが end-of-file に出会ったときの動作を制御する。eof-error-p のデフォルトは、T である。これは、eof 時のエラーの原因となる。eof の発生を知りたかったり、snatch control にシステムエラーを渡したくないなら、eof-error-p に NIL を指定すること。それで、読み込みの最中に eof が現れたとき、リーダはエラーループに入る代りに eof-value を返す。eof-value のデフォルトは、NIL である。そのため、実際に NIL が読まれたのか eof が現れたのか判別できない。それらを判別するためには、ストリームに決して現れない値を与えること。そのような特殊データオブジェクトを作るには、cons か gensym を使用すること。

recursive-p は、read-macro 関数にしばしば使用される。それは、リーダを再帰的に呼び出す。recursive-p の non-NIL 値は、読み込み処理がどこかで始まっていて、#n=や#n#によってラベル付けされる書式の読み込みの ために内部テーブルを初期化すべきでないことをリーダに告げている。

read & optional stream (eof-error-p t) (eof-value nil) recursive-p

[関数]

s表現を1つ読み込む。

 $\textbf{read-delimited-list} \ \textit{delim-char} \ \mathcal{C}optional \ \textit{stream} \ \textit{recursive-p}$

[関数]

 $delim ext{-}char$ で終了する s 表現を読み込む。これは、コンマで区切られたリストや# $\$ のような特殊文字で終る数列を読むために役立つ。

read-line & optional stream (eof-error-p t) (eof-value nil)

[関数]

#\newline(改行)で終了する1行を読み込む。返された文字列には、最後の改行文字を含まない。

read-char & optional stream (eof-error-p t) (eof-value nil)

[関数]

1文字読み込み、その整数表現を返す。

read-from-string string Goptional (eof-error-p t) (eof-value nil)

[関数]

stringから s 表現を読み込む。最初の s 表現のみ読み込むことができる。もし、複数の s 表現を持つ stringからの連続読み込み処理が必要であるならば、make-string-input-stream で作られる string-stream を用いること。

unread-char char Coptional stream

[関数]

streamに charを戻す。1文字を越えて連続に戻すことはできない。

peek-char & optional stream (eof-error-p t) (eof-value nil)

[関数]

stream から 1 文字を読み込むが、stream のバッファからその文字を削除しない。これは read-char に続いて unread-char を実行したものと同じである。

y-or-n-p & optional format-string & rest args

[関数]

format-string と args を画面に表示して、"y か n か"を尋ねる。答えが"y" または "n" で始まらない場合、質問を繰り返す。y なら T そして n なら NIL を返す。 それ以外は起こらない。

yes-or-no-p &optional stream

[関数]

format-string と args を画面に表示して、"yes か no か"を尋ねる。答えが "yes" または "no" でない場合、質問を繰り返す。yes なら T そして no なら NIL を返す。 それ以外は起こらない。

以下に示す readtable の操作関数の中で、readtable のデフォルト値はグローバル変数*readtable*の値である。

readtable-px

[関数]

xが readtable なら、T を返す。

copy-readtable &optional from-readtable to-readtable

to-readtable が書かれていなければ、新しい readtable を作る。from-readtable のすべての情報が to-readtable に移される。含まれる情報は、syntax table, read-macro table と dispatch-macro table でそれ ぞれ 256 個の要素を持つ。

 ${\bf set\text{-}syntax\text{-}from\text{-}}{char}\ from\text{-}{char}\ from\text{-}{char}\ [from\text{-}{readtable}]$

[関数]

from-readtable の中の from-char の syntax と read-macro 定義を to-readtable の中の to-char にコピーする。

 ${\bf set\text{-}macro\text{-}character}\ \ char\ func\ \ [non\text{-}teminating\text{-}p\ \ readtable]$

[関数]

char の read-macro 関数として func を定義する。

get-macro-character char [readtable]

[関数]

charの read-macro 関数を返す。

set-dispatch-macro-character dispetar char func [readtable]

[関数]

dispchar と char の組み合せの dispatch read-macro 関数として func を定義する。

get-dispatch-macro-character dispchar char [readtable]

[関数]

dispchar と char の組み合せの dispatch read-macro 関数を返す。

9.3 プリンタ (printer)

以下に示すものは、プリンタの行動を制御するための特殊変数である。

print-case この定数が:downcase なら、全ての symbol は小文字で印刷される。しかし、symbol は内部的に大文字で表現されたままである。

print-circle 再帰的参照を残したオブジェクトを印刷する。

print-object 全てのオブジェクトの詳細を印刷する。

print-structure #書式を使ってオブジェクトを印刷する。

print-level 数列の印刷可能深さ

print-length 数列の印刷可能長さ

print-escape 現在使用されていない。

print-pretty 現在使用されていない。

print-base 印刷時の基数;デフォルトは10進数

再帰的参照を持つオブジェクトを印刷するためには、再度読み戻しが必要なため、*print-circle*と*print-structure*を両方 T に設定し、オブジェクトを印刷すること。ユーザーが定義するほとんどのオブジェクトは再読み込み可能な書式に表示されるが、クラス、オブジェクトモジュールやパッケージをその方法で dump することはできない。なぜなら、クラスとオブジェクトモジュールは再配置不可能な実行コードを含み、パッケージの再読みだしは、構成される symbol 中に影響があるからである。

print obj &optional stream

[関数]

prin1 に続いて terpri を行う。

prin1 obj &optional stream

[関数]

書式に沿ってs 表現を1 つ出力する。その出力は、read によって再度読み戻しが可能である。書式には、スラッシュ(エスケープ)や引用符を含んでいる。

princ obj &optional stream

[関数]

エスケープ (escape) や引用符 (quote) の追加 (add) がないことを除いて、print と同じである。princ によるオブジェクト表示は、読み戻しできない。例えば、(princ 'abc) の出力は、(princ "abc") の出力と同じであるため、リーダはそれらを区別することができない。

terpri & optional stream

[関数]

#\newline(改行) を出力して、stream を空にする。

finish-output &optional stream

[関数]

出力 stream を空にする。

princ-to-string x & optional (l 16)

[関数]

prin1-to-string x &optional (l 16)

[関数]

文字列への出力ストリームを作り、xを書き込む。そして、get-output-stream-string を実行する。

format stream format-string &rest args

 \sim A(ascii), \sim S(S-表現), \sim D(10 進数), \sim X(16 進数), \sim O(8 進数), \sim C(文字), \sim F(実数表現), \sim E(指数表現), \sim G(general float), \sim V(dynamic number parameter), \sim T(タブ) と \sim % (改行) のフォーマット識別子のみ認識する。

(format t "~s ~s ~a ~a ~10,3f~%" "abc" 'a#b "abc" 'a#b 1.2)
---> "abc" |A#B| abc a#b 1.200

pprint obj &optional (stream *standard-output*) (tab 0) (platen 75)

[関数]

objの最後の空白を除いたものを整形表示する。.

print-functions file &rest fns

[関数]

file に fns の関数定義の"defun"書式を書き出す。

write-byte integer stream

[関数]

write-word integer stream

[関数]

write-long integer stream

[関数]

integerを1,2または4バイトにして書く。

spaces n Eoptional stream

[関数]

空白を n 回出力する。

pf func &optional stream *standard-output*)

[マクロ]

関数 func を整形表示する。コンパイルされた関数は、印刷できない。

pp-method class selector & optional (stream *standard-output*)

[関数]

class クラスの中に定義された selector メソッドを整形表示する。

tprint obj tab Goptional (indent 0) (platen 79) (cpos 0)

[関数]

表形式で objを印刷する。

print-size obj

[関数]

印刷のときの obj の大体の長さを返す。

9.4 プロセス間通信とネットワーク

EusLisp は、4 種類の IPC 機能 (共有メモリ,メッセージキュー,FIFO やソケット)を備えている。 2 ー般的に、この命令により性能が悪くなる。もし、マルチスレッド機能を使用するならば、12 節に記述されている同期関数も通信手段として用いることができる。これらの機能のうちで使用できるものは、Unix のバージョンや構成に依存する。

9.4.1 共有メモリ

Euslisp は、System5 の shmem ではなく、SunOS の mmap によって共有メモリを提供する。共有メモリは、map-file 関数によって配置される。map-file は、EusLisp のプロセスメモリ空間内にファイルを配置し、foreign-string のインスタンスを返す。データはこの foreign-string に対する文字列関数を用いることにより書き込みと読みだしができる。共有メモリは、システム依存のページ境界に配置されるので、配置アドレスを指定すべきではない。:share のキーパラメータが NIL に設定されているかまたは:private が T に設定されているファイルを配置することは、ファイルをプライベート (排他的) にアクセスすべきであることを意味する。しかし、メモリの共有化の目的から外れるため、:share のデフォルト値は T である。2 人のユーザーでファイルが共有されるとき、読み書きの許可は両方のユーザーに正確に設定されなければならない。残念なことにSunOS は、ネットワークを通して異なったワークステーション間のファイルの共有ををサポートしていない。64 バイト長のファイルを 2 つの EusLisp で共有するプログラム例を下に示す。

```
;; 64 バイトのファイルを作る
(with-open-file (f "afile" :direction :output) (princ (make-string 64) f))
;; 配置する
(setq shared-string1 (map-file "afile" :direction :io))
;;
;; 他のプロセスの中で
```

(setq shared-string2 (map-file "afile" :direction :io))

その後、shared-string1 に書かれたデータはすぐに shared-string2 へ現れる。foreign string への書き込みは、replace か setfに aref を組み合せることにより可能である。

```
map-file filename &key (:direction :input) :length (:offset 0) (:share t) (:address 0) [関数] filename という名のファイルをメモリ空間に配置する。filename は、ローカルファイル、NFS でマウントされたリモートファイル、または/dev の中のメモリデバイスのどれでも可能である。この関数の結果として foreign-string が返される。その要素は、aref によってアクセス可能である。map-file によって:direction=:input という条件で配置された foreign-string にデータを書き込むことは、segmentation faultの原因となる。
```

9.4.2 メッセージキューと FIFO

メッセージキューは、make-msgq-input-stream か make-msgq-output-stream で作られる。それぞれファイルストリームのインスタンスを返す。そのストリームは、ファイルに接続された他のストリームと同じように、読みだしや書き込み処理が許可されている。メッセージキューのストリームの fname は、作られるときに、key から設定する。

 $^{^2}$ UNIX における伝統的なプロセス間通信機構であるパイプは、'fork' との組み合せでいつも使用されている。EusLisp は、11.3~節で説明する piped-fork 関数を備えている。

FIFO に対するストリームを作るために、最初に unix:mknod 関数で、2 番目の引数を mode=#o10000 に 設定した上で FIFO ノードを作り、ノーマルファイルとしてオープンする。メッセージキューと FIFO は、機械の上でローカルに作られ、機械内での通信チャンネルとしてのみ与えられる。

メッセージキューと FIFO は、自分のプロセスが終了した後でさえもシステムから削除されない。削除するためには、unix:msgctlかipcrm コマンドが必要である。

 ${\bf make\text{-}msgq\text{-}input\text{-}stream}\ key\ {\it \&optional}\ (\textit{buffer-size}\ 128)$

[関数]

keyで示すメッセージキューに繋がる入力ファイルストリームを返す。

make-msgq-output-stream key &optional (buffer-size 128)

[関数]

key で示すメッセージキューに繋がる出力ファイルストリームを返す。

9.4.3 ソケット

ソケットは、他の通信手段に比べて多才な機能を持っている。なぜなら、UNIX 領域の狭いホスト内とインターネット領域の広いネットーワーク内の両方で機能することができるためである。通信指向のソケット (SOCK_STREAM) と接続されないソケット (SOCK_DGRAM) の 2 つがサポートされている。両方ともまず make-socket-address 関数でソケットアドレスのオブジェクトを作らなければならない。 make-socket-address は、socket-address のインスタンスを返す。 UNIX 領域では、ソケットアドレスに UNIX ファイルシステム内のパス名を入れる。インターネット内では、ソケットアドレスにホスト名とポート番号と必要ならプロトコル番号を結合したものを入れる。もし、ポート番号が/etc/services に定義されていれば、service 名によって指定された symbol を通して参照される。 unix:getservbyname 関数が symbol 化された service 名からポート番号を引き出すために使用される。 1024 より小さいポート番号は、root ユーザーのために予約されている。特権のないユーザーは、1024 より大きなポート番号を個人的なソケットとして使用することを推奨する。

接続されたストリームは、両方向通信チャンネルとして供給されるが、接続確定処理は、入力・出力で別々である。片方がサーバーとして参照され、もう一方がクライアントとして参照される。サーバーとなった端 (service access point) は、最初に確定される。これは、make-socket-port 関数により作成される。この関数は、socket-port のインスタンスを返す。ソケットポートのオブジェクトは、make-server-socket-stream によって1つまたは複数のクライアントからの接続を受けるために使用される。make-server-socket-stream への呼び出しは、クライアントからの接続要求が実際に起こるまで実行待ち状態となる。クライアントは、ソケットアドレスを指定することによって make-client-socket-stream でソケットストリームを複数作ることができる。

```
;;; an example of IPC through a socket stream:
;;; server side
(setq saddr (make-socket-address :domain af_inet :host "etlic2" :port 2000))
(setq sport (make-socket-port saddr))
(setq sstream (make-server-socket-stream sport))
;;;
;;; client side
(setq caddr (make-socket-address :domain af_inet :host "etlic2" :port 2000))
(setq cstream (make-client-socket-stream caddr))
```

データベースや移動ロボットの環境シミュレータのようなアプリケーションでは、1 つのサーバーと複数のクライアント間の $multiple\ connection\ service$ (多重接続サービス) が要求される。この型のサーバーは、

open-server 関数によりプログラムすることができる。カレントホスト名と与えられたポート番号から open-server は、接続要求にしたがってソケットポート (service access point) を作る。このポートは非同期なので、open-server は遮断されず、直ちに返信する。その後、接続要求はそれぞれ Euslisp のメインループを中断し、ソケットストリーム が非同期に作成される。このソケットストリームも非同期モードで働く。open-server の2 番目の引き数にある非同期入力処理は、新しいデータがこのストリームに現れたときはいつでも呼び出される。30 以上の接続が可能であるため、同時に多くのクライアントがサーバーのデータにアクセスすることができる。

```
;; server side
(defun server-func (s)
    (case (read s) ... ; do appropriate jobs according to inputs
(open-server 3000 #'server-func)
... do other jobs in parallel
;; client-1 through client-N
(setq s (connect-server "etlmmd" 3000))
(format s "..." ...) (finish-output s) ;issue a command to the server
(read s) ;receive response
```

確実な通信チャンネルとして供給される接続指向 ストリームと対照的に非接続 ソケットは、不確実な通信チャンネルである。メッセージがなくなったり、重複したり、故障したりする可能性がある。しかしながら、非接続 ソケットは、それぞれの接続にファイルディスクリプタを割り当てる必要が無いし、また、データやバッファのオーバーフローの読み込みをしないレシーバーでさえ送信処理を中断することができないという利点がある。

非接続ソケットを作るためには、以下の命令を使用する。メッセージは unix:sendto と unix:recvfrom によって変換される。

```
;;; receiver side
(setq saddr (make-socket-address :domain af_inet :host "etlic2" :port 2001))
(setq sock
           (make-dgram-socket saddr))
(unix:recvfrom sock)
;;;
;;; client side
(setq caddr (make-socket-address :domain af_inet :host "etlic2" :port 2001))
(setq sock (unix:socket (send caddr :domain) 2 0))
(unix:sendto sock caddr "this is a message")
;;; how to use echo service which is registered in /etc/services.
(setq caddr (make-socket-address :domain af_inet :host "etlic2"
                                 :port (car (unix:getservbyname "echo"))))
(setq echosock (unix:socket (send caddr :domain) 2 0))
(unix:sendto echosock caddr "this is a message")
(unix:recvfrom echosock) --> "this is a messge"
```

make-socket-address &key :domain :pathname :host :port :proto :service

[関数]

ソケットアドレスのオブジェクトを作る。

 $\mathbf{make} ext{-}\mathbf{sock} addr$

[関数]

サーバー側のソケットポートを作る。この関数は、クライアントとの接続を確立するために使用される。

make-server-socket-stream sockport &optional (size 100)

[関数]

クライアントからの接続要求を受けて、双方向ストリームを返す。

make-client-socket-stream sockaddr &optional (size 100)

[関数]

サーバーのポートと接続をし、双方向ストリームを返す。

open-server port remote-func

[関数]

インターネット領域内でホスト名と port で指定されるソケットポートを準備し、非同期に接続要求を待つ。接続が要求されたとき、それを受け新しいソケットストリームがオープンされる。ソケットポートにメッセージが到着したとき、remote-func は、ソケットポートを引き数として呼び出される。

connect-server host port

[関数]

make-socket-address と make-client-socket-stream を連続的に呼び出しを行うための関数である。
host と port で指定されるソケットストリームを返す。このソケットストリームは、クライアントがサーバーと通信を行うためのものである。ポートは、インターネット領域内用に作られる。

9.5 非同期入出力

select-stream stream-list timeout

[関数]

stream-list の中で、入力処理が準備されているストリームを見つけリストで返す。もし、timeout 秒が経つまでにどのストリームも準備が出来ないときは、NIL を返す。select-stream は、入力ストリームのリストからアクティブなストリームを選ぶときに役立つ。そのストリームでは、入力処理が非同期で可能となる。timeout は、選択処理が失敗するまでの時間を示す。これは、実数でもよい。もし、timeout の指定がないときは、最低 1 つのストリームから入力が到着するまで select-stream は続けられる。もし、timeout が指定されどのストリームからも入力が現れなかったならば、select-stream は失敗し NIL を返す。

def-async stream function

[マクロ]

stream にデータが到着したときに呼び出される function を定義する。stream は、ファイルストリームかソケットストリームのどちらかである。ファイルストリームにデータが来たとき又はソケットポートに接続要求が現れたとき、そのストリームを引き数として function が呼び出される。このマクロは、SIGIO ハンドラーとして装備され、ユーザーから与えられる実際の入力処理を実行するための function に置き換えられる。そして、stream が読み込み可能となったとき、非同期に SIGIO を発するために stream に関して unix:fnctl が使用される。

9.6 パス名

パス名は、OS に依存しないようにファイル名を解析あるいは構成する方法として与えられるものである。典型的なパス名は、次のような構成で成り立っていると仮定されている。host:device/directory1/.../directory-n/name.type.version。Euslisp は、UNIX の上で動作している限り、ホスト・デバイス・バージョンを無視する。pathname 関数は、文字列をディレクトリ要素・名前・型に分解し、パス名オブジェクトを返す。そのパス名は、#P を先頭につけた文字列として表示される。

pathnamep name

[関数]

もし name がパス名ならば、T を返す。

pathname name

[関数]

name はパス名または文字列で、パス名に変換される。最後の名前がディレクトリ名を示すために name の最後に"/"をつけることを忘れないこと。逆変換は namestring で実現される。

 ${\bf pathname\text{-}directory}\ \mathit{path}$

[関数]

path からディレクトリ名のリストを返す。"/"ディレクトリは:ROOT と表現される。path は、文字列あるいはパス名である。

pathname-name path

[関数]

path からファイル名の部分を返す。 path は、文字列あるいはパス名である。

pathname-type path

[関数]

path からファイルの型の部分を取り出す。 path は、文字列あるいはパス名である。

make-pathname &key :host :device :directory :name :type :version defaults

[関数]

directiory,name と type から新しいパス名を作る。UNIX 上では、他のパラメータは無視される。

merge-pathnames name & optional (defaults *default-pathname-defaults*)

[関数]

namestring path

[関数]

path の文字列表現を返す。

parse-namestring name

[関数]

truename path

[関数]

path で名前付けされているファイルの絶対パス名を見つける。

9.7 ファイルシステムインターフェース

probe-file path [関数]

path という名のファイルがあるかどうかをチェックする。

file-size path [関数]

path という名のファイルのサイズをバイト数で返す。

directory-p path [関数]

path がディレクトリならば、T を返す。そうでなかったとき(path が存在しなかったときを含める)は NIL を返す。

find-executable file [関数]

U *file* という名の UNIX コマンドを探し、フルパス名で返す。find-executable は、自分の path-list から実行できるファイルを探す UNIX の which コマンドとほとんど同じ関数である。

file-write-date file [関数]

file が最後に変更された日時を整数表現で返す。(unix:asctime (unix:localtime (file-write-date file))) で文字列表現が得られる。

file-newer $new \ old$ [関数]

もし、newファイルが oldファイルよりも最近に変更されているならば、T を返す。

object-file-p file [関数]

もし、 file がヘッダー内のファイルの magic number を見ることによりオブジェクトファイルであったならば、T を返す。

directory & optional (path ".")

[関数]

path の中の全てのファイルのリストを作る。

dir &optional (dir ".") [関数]

dir で指定されたディレクトリ内のファイル名を表示する。

10 評価

10.1 評価関数

エラーやシグナル (signal) に関する振る舞いを示すために、あらかじめそれぞれ特別の変数*error-handler*と*signal-handler*に適当な関数を設定する。修正あるいは続行できるエラーはない。エラーを解析後、現在の実行を reset または上位レベルへの適当な throw によって停止しなければならない。Euslisp の最上位レベルで 0 と名付けられた catch frame を作成しているので、reset は、(throw 0 NIL)と同等である。

エラーハンドラーは、 $code\ msg1\ form\ {\it @optional}\ (msg2)\ {\it endo}3$ つあるいは 4 つの引き数を持つ関数として定義しなければならない。 $code\$ はエラーコードで、システムで定義されたエラーを示す。例えば、 $14\$ が'引き数が合わない'、 $13\$ が'関数が定義されていない'となる。これらの定義は、"c/eus.h"の中に定義されている。 $msg1\ {\it endo}3$ は、ユーザーに示されるメッセージである。form は、エラーによって生じた s 表現である。

シグナルハンドラーは、sig と code の 2 つの引き数を受ける関数として定義されなければならない。sig は、1 から 30 までのシグナル番号である。code は、シグナル番号の中に定義された補助番号である。

最上位レベルでの $^{\circ}$ D(end-of-file) は、Euslisp の活動を停止させる。これは、Euslisp をフィルターとしてプログラムされているとき役に立つ。

eval-dynamic は、let や lambda 変数として使用される symbol に結び付く動的な変数を捜す関数である。 デバッグするときに役に立つ。

identity obj [関数]

obj 自身を返す。idnetity と quote との違いに注意すること。identity が関数であるのに対して quote は、特殊書式 (special form) である。したがって、(identity 'abc) は abc と評価されるが、(quote 'abc) == (quote (quote abc)) は abc と評価される。identity は、多くの一般列関数の:keyパラメータのデフォルト値としてしばしば用いられる。

eval form [environment]

[関数]

form を評価して、その値を返す。もし、*evalhook*に form や environment を受ける関数を設定するならば、hook 関数を評価に入る前に呼び出すことができる。

apply func &rest args

[関数]

args に func を適用する。func は、関数 symbol か lambda 書式か closure でなければならない。マクロと特殊書式 (special form) は適用出来ない。args の最後の要素は、他の args が空の引き数であるなら引き数のリストでなければならない。このように、もし、args の最後が NIL であったならば、apply はほとんど funcall と同じである。ただし、apply は funcall より 1 つ多くの引き数を持つことができる。 (apply # max 2 5 3 (8 2)) --> 8.

funcall func &rest args

[関数]

argsに func を適用する。args の数は、func で要求されている引き数の数と一致しなければならない。

quote obj

[特殊]

obj 自身を評価する。

function func

[特殊]

closure 関数を作る。もし、funcが symbol ならば、その関数定義が検索される。

evalhook hookfunc form [env]

[関数]

hookfun を*evalhook*に結び付けた後、form を一度評価する。

eval-dynamic variable

[関数]

スタックにある *variable*(symbol) の値を捜す。

macroexpand form

[関数]

もし、form がマクロ call であるなら、それを展開する。もし、展開したものがまだマクロ call を含んでいるならば、マクロ call のない結果となるまでくり返し展開する。

eval-when situation {form}*

[特殊]

situation は compile, load, eval のリストである。form は、現在の実行モードが situation と一致するときに評価される。eval-when は、コンパイラでの動作や環境を制御するために重要なものである。もし、compile が指定されたならば、form はコンパイラによって評価されるので、その結果はコンパイル結果に影響を及ぼすことになる。例えば、defmacro はコンパイル時にマクロ call を展開するためにコンパイラで評価されなければならない。もし、load が situation のリストに与えられたならば、form は load 時に load または評価されるためにコンパイルされる。すなわち、load 時にコンパイルされた関数が定義される。これは、コンパイラに期待される一般的な機能である。load は、コンパイラの環境を制御するために使用される。もし、eval が situation のリストに含まれているならば、form はソースコードが load されるときに評価される。

the type form

[特殊]

form を type として宣言する。type は、:integer, :fixnum, :float で示されるクラスオブジェクトのどれかである。

declare declaration*

[特殊]

それぞれ declaration は、宣言指定や整数あるいは目的の symbol のリストである。宣言は、コンパイラが高速なコードを生成するために重要である。

special 特殊変数を宣言する。

type 変数の型を宣言する。; (type integer count); 有効な型指定子は integer, :integer, fixnum, :float と float である。型指定子がここに示したものの 1 つであるならば、type キーワードを削除しても良い。そのため、(integer count) は正しい宣言である。float-vector,integer-vector などのような、その他の型 (クラス)では、(type float-vector vec1) のように type を前に付ける必要がある。

ftype 関数の結果の型を宣言する。

optimize コンパイラの*optimize*パラメータに値 (0-3) を設定する。

safety コンパイラの*safety*パラメータに値(0-3)を設定する。

space コンパイラの*space*パラメータに値(0-3)を設定する。

inline 認識しない。

not-inline 認識しない。

proclaim proclamation

[関数]

変数やコンパイラオプションをグローバルに宣言する。同様な宣言は、 $\operatorname{declare}$ 特殊書式によって記述することができる。しかしながら、 $\operatorname{proclaim}$ は、1 つの引数を持つ関数であり、宣言を評価する。

warn format-string &rest args

[関数]

format-string と args で与えられる警告メッセージを*error-output*に出力する。

error format-string &rest args

[関数]

*error-handler*に結び付く現在のエラーハンドラー関数を呼び出す。デフォルトのエラーハンドラー'euserror' を*error-output*に最初に出力し format-string と args を format を用いて出力する。その後、新しい最上位レベルのセッション (session) に入る。プロンプトには、エラーセッションの深さを示す。throw にその番号を与えることにより、低いエラーレベルのセッションへ戻ることができる。

マルチスレッド Euslisp において、特殊変数はスレッド間で共有され、同じ*error-handler*が異なったスレッドから参照される。この不自由を避けるために、マルチスレッド Euslisp は install-error-handler 関数を備えている。その関数は、それぞれのスレッドに対して異なったエラーハンドラーをインストールする。

install-error-handler handler

[関数]

handler を現在のスレッドのエラーハンドラーとしてインストールする。

10.2 最上位レベルの対話

EusLisp の標準の最上位レベルの入力・評価・出力のループ (loop) は、eustop により制御されている。 euslisp が呼び出されたとき、eustop は、ホームディレクトリから".eusrc"というファイルをあるいは EUSRC 環境変数で指定されたファイルをロードする。それから、euslisp は、引き数リストで指定されたファイルをロードする。これらのロードが終了後、eustop は、普通の対話セッション (session) に入る。

*standard-input*にユーザーの TTY が接続されたとき、eustop は、*prompt-string*(デフォルトとして"eus\$"が設定されている)に設定されたプロンプトを出力する。そして、*terminal-io*ストリームから命令を入力する。もし、その入力がカッコで括られた行ならば、eval によって lisp 書式として扱われる。もし、入力行の最初の symbol に関数定義があった場合、その行に自動的にカッコが入れられ、評価される。もし、関数定義が見つからなかった場合、その特殊値 (special value) が調査され、その値が出力される。もし、その symbol になにも定義されてないならば、その行は UNIX 命令とみなされ、sh(Bourn's shell) へ渡される。もし、sh が一致する UNIX 命令を捜せなかったとき、"command unrecognized"というメッセージを出力する。このように、eustop は lisp のインタープリタおよび UNIX のシェルとして動作する。もし、入力を UNIX 命令として実行したくないとき、行の最初にコンマ','を付ければよい。これは、対話実行 (interpretive execution)でエラーが発生したとき、動的な値を見るときに役に立つ。Euslisp はローカルなスコープ (lexical scope) を採用しているのでローカル変数の値を special として宣言されていない限リスコープの外から調査することは出来ない。

入力は、それぞれ行番号とともに*history*ベクトルに記憶される。csh の上と同じ様に!関数を入力することにより入力の詳細を呼び出すことができる。csh の履歴との違いは、!が関数であるため!の次に最低 1 つのスペースが必要である。また、コントロールキーを用いることにより emacs のように対話的に行を編集することができる。

通常^D (EOF) で Euslisp は終了する。上位レベル (普通は csh) に異常終了コードを返すためには、適当な条件コードをつけた exit を使用すること。

eustop は、SIGINT と SIGPIPE のためにシグナルハンドラーを設定する。そして、他のシグナルは catch しない。このため、SIGTERM や SIGQUIT のようなシグナルで Euslisp を終了できる。終了を避けたいとき、これらのシグナルを catch するためには、unix:signal 関数でユーザーで定義したシグナルハンドラーを設定すること。

- 現在の入力 + [変数] 直前の入力 ++ 2つ前の入力 +++ [変数] 3つ前の入力 * [変数] 直前の結果

[変数]

3つ前の結果

2つ前の結果

prompt-string

[変数]

eustop で使用されるプロンプト文字列

program-name

[変数]

この Euslisp が呼び出された命令。例えば、eus,eusx,eusxview やユーザーで作った euslisp など。

eustop &rest argv

[関数]

デフォルトの最上位ループ

 $eussig \ sig \ code$

[関数]

SIGPIPE のデフォルトシグナルハンドラー。eussig は、SIGPIPE が到着したり他の最上位レベルループに入るときシグナル番号を出力する。

sigint-handler sig code

[関数]

SIGINT(control-C) のデフォルトシグナルハンドラー。このシグナルで新しい最上位セッションへ入る。

euserror code message &rest arg

[関数]

デフォルトのエラーハンドラーで、message を出力し、新しいエラーセッションへ入る。

reset

[関数]

エラーループから脱出して、最後の eustop セッションへ戻る。

exit &optional termination-code

[関数]

Euslisp プロセスを終了し、プロセスの状態コードとして termination-code (0..255) を返す。

 \mathbf{h}

[関数]

*history*の中に記憶されている入力履歴を関連する列番号とともに出力する。

! Eoptional (seq 0)

[関数]

列番号 seq に関連する入力行を呼び出す。seq が 0 のとき、もっとも最近の命令が呼び出される。もし、seq が負の場合、現在行から相対的な位置にある行が呼び出される。呼び出された行が表示され、その行の最後にカーソルを移動する。次のコントロールキーが使用出来る。control-H (backspace) か control-B で 1 文字戻る。control-F か control-K で 1 文字進む。control-A で行の最初に移動する。control-L で行の最後に移動する。control-C で行の修正をキャンセルする。control-M (carriage-return) か control-J (line-feed) で行修正を終了して、修正した行を評価する。もし、seq が番号でなく symbol または文字列の場合、履歴リストを古い方に向かって検索し、symbol または文字列が含まれている命令行を返す。

new-history depth

[関数]

depth の長さを持つように*history*を初期化する。depth 行が記憶される。現在の*history*に記録された入力行は、すべて消滅する。

10.3 コンパイル

Euslisp コンパイラは、Lisp プログラムの実行を高速化するために使用される。実行時間の 5 ~ 30 倍の高速化とマクロ展開によるガーベージコレクション時間の大幅な減少が期待できる。

euscomp は、計算処理とベクトル処理のための最適化を行う。ときどきコンパイラが最適化を効率良く実行するために、固有の型宣言が必要となる。

compile-function は、1 つずつ関数をコンパイルする。compile-file は、すべてのソースファイルをコンパイルする。compile-file を実行している間、ファイル内のすべての書式が読み込まれ評価される。これは、現在の Euslisp の環境を変化させる。例えば、defparameter は symbol に新しい値を設定するし、defun はコンパイルされていない関数をコンパイルされた関数に置き換える。これらの予期しない影響を避けるためには、compile 指定のない eval-when を使用したり、euscomp を使用して別プロセスとしてコンパイラを実行したりする。

euscomp は UNIX のコマンドで、普通 eus にシンボリックリンクされている。幾つかのオプションを持っている。-O フラグは C コンパイラの最適化を指示し、-O1,-O2, -O3 はそれぞれ Euslisp コンパイラの最適化のレベルを指示する。これは、(optimize 1 or 2 or 3) と宣言するのと同等である。-S0, -S1, -S2, -S3 は、compiler:*safety*に 0,1,2,3 を設定する。もし*safety*が 2 より小さければ、割り込みチェックのためのコードを発行しない。もし、プログラムが無限ループに入ったとき、制御を失うことになる。もし*safety*が 0 のときは、引き数の数をチェックしない。-V フラグは、コンパイルされている関数名を表示する。-c フラグは、cc の実行や fork を防ぐ。-D は、*features*リストに続く引き数を置く。これは、読み込みマクロ#-と#+ を用いた条件付きコンパイルのために使用することができる。

コンパイラは"xxx.l"という名の Euslisp ソースプログラムを中間 C プログラムファイル"xxx.c" とヘッダーファイル"xxx.h"に変換する。それから、C コンパイラが実行され、"xxx.o"が生成される。中間ファイル"xxx.c"と"xxx.h"はクロスコンパイルの目的のために残される。したがって、違うアーキテクチャーの機械の上で使用したいとき、UNIX 命令の cc で"xxx.c"ファイルをコンパイルするだけでよい。コンパイルされたコードは、'(load "xxx")'によって Euslisp にロードされる。

中間ファイルはそれぞれ、"eus.h"ヘッダーファイルを参照する。このファイルは、*eusdir*/c ディレクトリに置かれていると仮定している。*eusdir*は、EUSDIR環境変数からコピーされる。もし設定されてなければ、/usr/local/eus/がデフォルトディレクトリとして扱われる。

リンクがロード時または実行時に実行されるので、eus のカーネルがバージョンアップされても再コンパイルする必要はない。もう一方で、実行時リンクは不便なことがある。 2 つの関数 A と B が"x.I"ファイルにあり A が B を呼び出していると仮定する。"x.I"をコンパイル後、"x.o"をロードし内部で B を呼び出している A を呼び出そうとする。それから、B の中で B を見つけると、たぶん B を再定義しようとするだろう。ここで、コンパイルされた A とコンパイルされていない B とができる。再び A を呼び出したとすると、A はまだ古いコンパイルされている B を呼び出す。これは、A が最初に B を呼び出したとき固定的にリンクされるからである。この問題を避けるためには、A を再定義しなおすかあるいは"x.o"がロードされた直後で A を呼び出す前に B を再定義しなければならない。

コンパイルされたコードがロードされるとき、一般的に defun や defmethod の列である最上位コードが実行される。この最上位コードはロードモジュールのエントリ関数として定義されている。コンパイラがそのエン

トリ関数の名前を付け、ローダがこの関数の名前を正確にわからなければならない。状況を簡単にするために、コンパイラとローダの両方ともそのエントリ関数の名前としてオブジェクトファイルの basename と同一のものと仮定する。例えば、もし"fib.l"をコンパイルしたならば、コンパイラは"fib.c"のエントリ関数として"fib(...)"を生成する。そして、ローダはオブジェクトファイル"fib.o"の中から"fib"を探す。最終的にオブジェクトファイルは Unix の"cc"や"ld"で生成されるので、このエントリ関数名は、C 関数の命名ルールを満足しなければならない。したがって、ファイル名として C の予約キーワード (例えば、"int", "struct", "union", "register", "extern"など)や"c/eus.h"に定義されているプライベート指示語 (例えば、"pointer", "cons", "makeint"など)を避けなければならない。もし、ソースファイルの名前としてこれらの予約語の内の1つを使用しなければならないならば、コンパイラやローダの:entry 引数を別に指定すること。

closure の使用には制限がある。closure の中の return-from 特殊書式と unwind-protect の中の clean-up 書式はいつも正しくコンパイルされるわけではない。

disassemble は、実現されていない。コンパイルされたコードを解析するためには中間 C プログラムを見るかあるいは adb を使用する。

euscomp {filename} *

[UNIX コマンド]

Euslisp コンパイラを呼びだす。

compile-file srcfile &key (:verbose nil)

[関数]

(:optimize 2) (:c-optimize 1) (:safety 1) (:pic t)

;optimization level ;generate position independent code to build library

 $(:cc\ t)$; run c compiler

(:entry (pathname-name file))

ファイルをコンパイルする。".I"が srcfile の拡張子として仮定される。もし、:verbose が T ならば、コンパイルされた関数やメソッド名が表示される。これは、エラーが発生した箇所を簡単に探すのに役立つ。 :optimize, :c-optimize と:safety は、最適化のレベルを指定する。モジュールが作成中に Euslisp のコアにハードリンクされていないかぎり、:pic は、T に設定すべきである。

compile functione

[関数]

関数をコンパイルする。compile は、最初に関数定義をテンポラリファイルに出力する。そのファイルは、compile-file によってコンパイルされ、それから load によってロードされる。テンポラリファイルは削除される。

compile-file-if-src-newer srcfile &key compiler-options

[関数]

srcfile が対応するオブジェクトファイルよりも新しい(最近変更された)ならば、コンパイルする。そのオブジェクトファイルは、".o"拡張子を持っていると仮定される。

optimize

[変数]

コンパイラの最適化レベルを制御する。

verbose

[変数]

non-NIL が設定されたとき、コンパイルされている関数名やメソッド名そしてコンパイルに要した時間を表示する。

safety

[変数]

安全性レベルを制御する。

10.4 プログラムロード

load fname &key :verbose *load-verbose* [関数]

:package *package*

:entry (pathname-name fname) :symbol-input "/usr/local/bin/eus"

 $:symbol-output \qquad \qquad "a.out" \\ :ld-option \qquad \qquad ""$

load はソースファイルあるいはコンパイルされたオブジェクトファイルを Euslisp に読み込むための 関数である。もし、fname で指定されたファイルが存在するとき、Euslisp はロードする。そのファイルがソースとバイナリーの内どちらかは、magic number を見ることにより自動的にチェックされる。もし、そのファイルが存在しないが'.o' の型のファイルが存在する場合、そのファイルをオブジェクトファイルとしてロードする。その他、'.l' のファイルが見つかったならば、ソースプログラムとしてロードする。もし、ファイル名の最初に"/"を付ける絶対パスを指定していない場合、load は、グローバル変数*load-path*に指定されているディレクトリの中からファイルを検索する。例えば、*load-path*が("/user/eus/" "/usr/lisp/")であり、fnameとして"llib/math"が与えられたとき、loadは"/user/eus/llib/math.o", "/usr/lisp/llib/math.o", "/user/eus/llib/math.1", "/usr/lisp/llをこの順番に捜す。適当なファイルが見つからなければ、エラーを返す。

:entryオプションは、ロードモジュールを初期化する入力アドレスを指定する。たとえば、:entry "_myfunc" オプションは_myfunc から実行を始めることを意味する。デフォルト入力アドレスは、10.3 節に記述されているようにロードされたファイル名の basename である。ライブラリモジュール名は:ld-option オプション文字列の中に指定することができる。たとえば、suncore ライブラリを使用するモジュールをリンクするために、:ld-option には "-1suncore -1sunwindow -1pixrect -1m -1c" を与える必要がある。Solaris システム以外では、ライブラリがリンクされるとき 1d は 2 度実行される。 1 度はサイズを決定するため、2 度目は固有のメモリーに実際にリンクするため。

symbol-input とsymbol-output オプションはあるオブジェクトモジュールから他のモジュールへの参照を解決するため、あるいはライブラリーの 2 重ロードを避けるために使用される。A,B 2 つのオブジェクトモジュールがあり,B が A の中で定義されている symbol を参照しているとする。symbol-output ="a.out"を指定してモジュール A をロードする。このリンクによって生成された symbol 情報は、a.out に書き込まれる。モジュール B をロードするためには、B から A への参照を解決するsymbol-input = "a.out"を指定しなければならない。

Solaris2 OS において、コンパイルコードのロードは、動的ロードライブラリの中の dlopen を呼び出すことにより実行している。dlopen の使用は、共有オブジェクトに制限されている。そのオブジェクトは、位置に依存するようにコンパイルされるために、"-K pic"オプションを指定する。また、dlopen は同じファイルを 2 度オープンすることができないので、既にロードされているファイルに関しては、dlclose を最初に実行する。

load-files & rest files [関数]

:verbose に T を設定し、files を連続的にロードする。

modules

これまでにロードされたモジュールの名前のリストを持つ。

provide module-name [関数]

module-name をすでにロードされたモジュールの名前として*module*の中に加える。module-name は symbol あるいは文字列でなければならない。require の呼び出しは、完全なモジュールを構成するファイルの最初に存在しなければならない。

require module-name &optional file

[関数]

*modules*の中に module-name が見つからなかったとき file をロードする。provide と require は、モジュールの中の依存を制御し、基本モジュールの 2 重ロードを避けるために使用される。1 つの基本モジュール" A" と 2 つの応用モジュール" B" と" C" があったとし、"B" と" C" は互いに依存しないが" A" に依存しているとする。それぞれのファイルの最初に provide でモジュール名を宣言する。"A" モジュールがどのモジュールにも依存していないなら、なにも require しなくてよい。"B" や"C" の中の provide 呼び出しに続いて(require "A" "a.o")が実行される。もし"B"をロードするとき、*modules*の中に"A" が見つからなければ"a.o"もロードし、*modules*に"A" と"B"のモジュール名を追加する。その後、もし"C"がロードされるなら、"A" モジュールはロードされず、"C"が*modules*に追加されるのみである。

バイナリファイルをロードしリンクする。

system:txtload fname

[関数]

10.5 デバッグ補助

describe obj &optional (stream *standard-output*)

[関数]

describe はオブジェクトの slot ごとの中身を表示する。

describe-list list &optional (stream *standard-output*)

[関数]

list 内のそれぞれの要素に describe を実行する。

inspect obj

[マクロ]

inspect は describe の対話版である。オブジェクトのそれぞれの slot を表示するためにサブ命令を受けたとき、slot の中に深く入ったりあるいは新しい値を slot に設定したりする。'?' 命令でサブ命令のメニューを見ることができる。

more &rest forms

[関数]

*standard-output*にテンポラリーファイルを結び付けて *forms* を評価した後、そのテンポラリーファイルを UNIX の'more' 命令を使用して*standard-output*に出力する。more は describe のような関数によって発生した長い出力を見るときに役に立つ。

break &optional (prompt ":: ")

[関数]

break ループに入る。現在バインドされている環境が実施されている間、入力の前に","を付けることによりローカル変数を見ることができる。break を終了したいとき、control-D を入力する。

help topic

[関数]

help は、topic に関して短い説明を表示する。topic は、ふつう関数 symbol である。文章は KCL のマニュアルから借りているため、説明が Euslisp 関数のものといつも合っているとは限らない。

apropos key

[関数]

apropos は、関数や変数の正確な名前を忘れていて、その一部あるいは不確かな名前しか知らないときに役に立つ。symbol-nameの中に部分文字列として key を含むすべての symbol を表示する。

apropos-list key

[関数]

appropos と似ているが表示はしない、しかしリストとして結果を返す。

constants &optional (string "") (pkg *package*)

[関数]

pkg の中に定数として定義され string と合う symbol をすべてリスト出力する。

variables &optional (string "") (pkg *package*)

[関数]

pkg の中にグローバル値として割り当てられ string と合う symbol をすべてリスト出力する。

functions & optional (string "") (pkg *package*)

[関数]

pkg の中にグローバル関数として定義され string と合う symbol をすべてリスト出力する。

btrace & optional (depth 10)

[関数]

depth レベルの履歴を呼び出し表示する。

step-hook form env

[関数]

 $\mathbf{step}\; form$

[関数]

stepとtraceは関数の上でのみ正確に働く。マクロや特殊書式では働かない。

trace &rest functions

[関数]

functions のトレースを始める。functions が呼び出されたときはいつでも、その引き数と結果を表示する。

untrace &rest functions

[関数]

トレースを終了する。

timing count &rest forms

[マクロ]

forms を count 回実行し、forms の 1 回の実行に要する時間を計算する。

 $\mathbf{time}\ function$

[マクロ]

function によって経過した時間を測定し始める。

sys:list-all-catchers

[関数]

すべての catch タグを返す。

sys:list-all-instances aclass [scan-sub]

[関数]

すべてのヒープの中から aclass で指定されるインスタンスをすべて探し、集める。もし、scan-sub が NIL なら、aclass の確実なインスタンスをリストする。そうでなければ、aclass のインスタンスあるいは サブクラスが集められる。

sys:list-all-bindings

[関数]

バインドされるスタックを探し、アクセス可能な値すべてをリストで返す。

sys:list-all-special-bindings

[関数]

スタックを捜し、値をすべてリストアップする。

10.6 ダンプオブジェクト

EusLisp のリーダとプリンタは、どのようなオブジェクトも再読みだし可能な書式でファイルに出力できるように設計されている。オブジェクトは相互参照あるいは再帰参照を持っていてもよい。*print-circle*と*print-object*にTを設定したとき、この特徴はは可能となる。次の関数はこれらの変数をTにし、ファイルをオープンし、オブジェクトを表示する。これらの関数のもっとも重要な用途は、相互参照を持つ3Dモデルの構造体をダンプすることである。

dump-object file &rest objects

[関数]

dump-structure file &rest objects

[関数]

再び読み戻しができるような書式で file に objects をダンプする。

dump-loadable-structure file &rest symbols

[関数]

symbol にバインドされたオブジェクトを file にダンプする。その file は簡単にロードすることによって読み戻すことができる。

10.7 プロセスイメージ保存

このプロセスイメージ保存は、Solaris の動的ロード機能に深く依存しているため、Solaris2 の Euslisp においてサポートされていない。Solaris の動的ロード機能は、共有するオブジェクトを sbrk 点の上の位置に依存した形でロードする。

save path & optional (symbol-file "") starter

[関数]

save は、現在の Euslisp 処理の環境をファイルにダンプする。そのファイルは、後で UNIX 命令として呼び出すことができる。もし関数名が starter によって指定されているなら、その関数はその命令の実行が始まるときに評価される。それぞれの命令行の引き数は Euslisp の中で強制的に文字列にされ、引き数として starter に受け渡される。それで、命令行を解析できる。*standard-input*と*standard-output*を除くすべてのストリームを確実にクローズしていなければならない。ファイルがオープンされた状態を保存することはできない。また、mmap を試そうとしてはならない。mmap はインターネットのソケットストリームを作るとき、見えない所で実行されている。Sun のネットワークライブラリは host-by-name のような NIS 情報をメモリ上にいつも展開し、プロセスの最上位に置くため保存できない。そのため、保存されたイメージが実行されるても、ネットワークライブラリへのアクセスはどれも失敗し、コアダンプが生じる。Xwindow もこのライブラリを使用している。それで、一度 Xserver に接続されたプロセスイメージを保存することはできない。

10.8 最上位レベルのカスタマイズ

Euslisp が UNIX から呼び出されるとき、*toplevel*にバインドされる最上位関数によって実行が始められる。この関数は、eus の中の eustop と eusx の中の xtop である。save の 3 番目の引き数に独自の関数を指定することによりこの最上位関数を変更することができる。

この最上位関数は、任意の数の引き数を受け取れるようにプログラムすべきである。その命令行の上の引き数はそれぞれ、強制的に文字列にされ、最上位関数に渡される。以下に示すプログラムは、最初の引き数に与えられたファイルからくり返し読み込み、2番目の引き数のファイルに整形表示する。

一度これらの関数を Euslisp の中に定義すれば、(save "ppcopy" "" 'pprint-copy-top) で ppcopy という名の UNIX で実行可能な命令を作る。

Solaris 上の Euslisp において、save がないので、最上位評価関数はこの手法では変更できない。代わりに、独自の最上位評価関数を定義するために lib/eusrt.1 を修正し、*toplevel*に設定することができる。lib/eusrt.1 には、Euslisp の起動時に評価される初期化手続きを定義している。

10.9 その他の関数

lisp-implementation-type

[関数]

"EusLisp"を返す。

lisp-implementation-version

[関数]

この Euslisp の名前、バージョン、作成日を返す。この文字列が起動時にも表示される。"MT-EusLisp 7.50 X 1.2 for Solaris Sat Jan 7 11:13:28 1995"

第II部

EusLisp 拡張

11 システム関数

11.1 メモリ管理

メモリ管理の設計は、オブジェクト指向言語の柔軟性と効率性にたいへん影響を及ぼす。Euslisp は、フィボナッチバディ法を基本に統一した方法でオブジェクトをメモリに割り当てる。この方法は、chunk と呼ばれる大きなメモリのプールを小さなセルに分割する。それぞれのセルは、サイズが等しくなく、フィボナッチ数がそれぞれ割り当てられる。chunk メモリは、symbol,cons,string,float-vector などのような様々な型のオブジェクトのための同次なデータ容器である。それらのサイズは chunk と一致する長さである。chunk は、固定、動的、再配置可能、交替可能などのようなどんな特別な属性も持っていない。EusLisp のヒープメモリは、chunk の集合である。そして、ヒープは UNIX より新しい chunk を得ることにより動的に拡張することができる。拡張は、動作中に自動的に発生するかあるいはユーザーが system:alloc 関数を呼び出すことにより発生する。自動的に処理されるとき、使用可能なメモリサイズは合計のヒープサイズの約 25%に保つ。この比率は、sys:*gc-margin*パラメータに 0.1 から 0.9 までの値を設定することにより変更することができる。

すべてのヒープメモリを使いきったとき、mark-and-sweep 型のガーベージコレクション (GC) を始める。ルート (パッケージ , クラスやスタック) からアクセス可能なセルは , 同じアドレスのままである。他のアクセス不可能なセルは、矯正され free-lists にリンクされる。GC の間にコピーやコンパクト化は発生しない。ガーベージされるセルが矯正されるとき、その隣接セルが free かどうかチェックされる。そして、できるだけ大きなセルを構成するようにマージされる。しかしながら、このマージは、ときどき意味の無いものになる。なぜなら、もっとも頻繁に呼び出されるメモリアロケータである cons が、そのマージされたセルを最も小さなセルに分割することを要求するからである。したがって、Euslisp は cons の高速化のためにマージされないある特定の量のヒープを残すことを許可している。この比率は、sys:*gc-merge*パラメータによって決定される。その値のデフォルトは <math>0.3 である。sys:*gc-merge*に大きな値を設定することにより、マージされないヒープを多く残す。これは、cons が要求されるとき、buddy-cell の分割が滅多に起こらないので、cons の性能を改善する。これは、<math>staure また staure 次元ベクトルのような相対的に小さなセルのアロケーションについてすべて成り立つ。

sys:gc は、明示的にガーベージコレクターを呼び出す。そして、ヒープに配置された空いているワード数と全体のワード数 (バイト数ではない)を示す 2 つの整数のリストを返す。

もし、実行中に"fatal error: stack overflow"が報告され、そのエラーが無限ループあるいは再帰処理によるものでないと確信するならば、sys:newstackで Lisp のスタックの大きさを拡張すれば回避できる。sys:newstackを設定する前には、reset を実行しなければならない。なぜなら、スペシャルバインドと unwind-protect の整理用の書式が現在のスタックの中からすべて捨てられるためである。

新しいスタックが配置された後、オープニングメッセージを表示するところから実行を始める。デフォルトのスタックサイズは、16Kword である。Lisp のスタックは、システムのスタックと別物である。前者は、ヒープ上に配置され、後者は、オペレーティングシステムによってスタックセグメント内に配置される。もし、"segmentation fault"エラーが発生したならば、システムのスタックが小さいことにより発生したことが考えられる。csh のコマンド limit で、システムのスタックサイズを増加することにより、解決できる可能性がある。

sys:reclaim と sys:reclaim-tree 関数は、オブジェクトにより占有されているセルをメモリマネージャーに戻す。そのため、ガーベージコレクションを呼び出すことなしにその後も再使用をすることができる。しかし、それらのセルが他のセルから参照されていないことが確実でなければならない。

memory-report と room 関数は、メモリの使用に関する統計をセルのサイズやクラスによりソートして

表示する。

address は、オブジェクトのバイト換算したアドレスを返す。このアドレスはプロセスに独自のものであるから、この関数はハッシュテーブルが使用するハッシュ関数に有用である。

peek と poke は、メモリから直接データを読み書きできる関数である。アクセスする型は、:char,:byte,:short,:long,:integer,:float,:doubleのどれかにすべきである。例えば、(SYS:PEEK (+ 2 (SYS:ADDRESS '(a b))):short) は、cons セルのクラス ID (ふつう 1 である)を返す。

'list-all-' を名前の前に付けている幾つかの関数がある。これらの関数は、システムのリソースあるいは環境のリストを返し、動的なデバッグに有用である。

sys:gc [関数]

ガーベージコレクションを実行する。割り当てられている中で空いているワード数および全体のワード数のリストを返す。

sys:gctime [関数]

3つの整数のリストを返す。1 つは、G C を呼び出した回数。2 つは、セルをマーキングするために使用した時間(1 ユニットに 1/60 秒)。3 つが、矯正(マーキングを外し、マージする)のために使用した時間。

sys:alloc size [関数]

ヒープに少なくとも size ワードのメモリを配置し、実際に配置されたワード数を返す。

sys:newstack size [関数]

現在のスタックを廃棄し、size ワードの新しいスタックを配置する。

sys:*gc-merge*

メモリ管理用のパラメータ。*gc-merge*は、GC によりマージされずに残すヒープメモリの比率を示す。このマージされない領域は、すぐに cons のような小さなセルに満たされる。デフォルトの値は、0.3 である。この値を 0.4 のように大きくすると、マージされない空きヒープが 40% であることを示し、cons のためには役立つが、実数ベクトルやエッジや面などのような大きなセルの確保には、害を及ぼす。

sys:*gc-margin* [变数]

メモリ管理用のパラメータ。*gc-margin*は、全体のヒープに対する空きヒープの比率を決定する。メモリは、UNIX から獲得したものであるため、空き空間はこの比率より小さくならない。デフォルトは、0.25 であり、GC の際に 25%以上の空き空間が維持されることを意味する。

sys:reclaim object [関数]

ごみとして object を廃棄する。そのオブジェクトは、他のどのオブジェクトからも絶対に参照されないことが保証されなければならない。

[関数]

[関数]

sys:reclaim-tree object

object から通過できる symbol を除いてすべてのオブジェクトを矯正する。

sys:btrace num [関数]

Lisp のスタックの num 番目の深さの情報をトレースして表示する。

sys:memory-report &optional strm

セルのサイズでソートしたメモリ使用のテーブルを strm ストリームに出力する。

sys:room output-stream [関数]

クラスで整列したメモリ配置の情報を出力する。

sys:address object

[関数]

プロセスのメモリ空間内にある object のアドレスを返す。

sys:peek [vector] address type

[関数]

address で指定されたメモリ位置のデータを読みだし、それを整数として返す。 type は、:char,:byte,:short,:long,:float,:double の内の1つである。もし、vector が与えられなかったなら、そのアドレスは、UNIX の処理空間として扱われる。例えば、Sun において a.out のヘッダーは#x2000 に置かれるため、(sys:peek #x2000 :short) は magic number (ふつうは#o403) を返す。Solaris2 は、ELF ヘッダーを#10000 に置くため、(sys:peek #x10000 :long) が"ELF"を表現する文字列である#xff454c46を返す。もし、vector が与えられたならば、それは foreign-string であり、アドレスは vector の起点からのオフセットとして認識される。(sys:peek "123456" 2 :short) は、"34"を表現する short word を返す。(#x3334(13108) である)

アドレス位置については十分注意すること。short, integer, long. float, double word を奇数アドレスから読み出すと、"bus error"になる。

sys:poke value [vector] address value-type

[関数]

value を address で指定された位置に書き込む。プロセスのメモリ空間内のどこでも書き込むことができるため、特に注意をしなければならない。プロセスの空間の外へ書き込んだなら、確実に"segmentation fault"が発生する。short, integer, long. float, double word を奇数アドレスに書き込んだ場合、"bus error"が発生する。

sys:list-all-chunks

[関数]

配置されたすべてのヒープの chunk をリストアップする。他に有用な実行関数はない。

sys:object-size obj

[関数]

objからアクセス可能なセルとワードの数を計算する。objから参照可能なすべてのオブジェクトが探索される。そして、3つの数のリストが返される。1つ目は、セルの数。2つ目は、これらのオブジェクトに論理的に配置されたワード数(すなわち、ユーザーからアクセスできるワード数)。3つ目は、物理的に配置されたワード数。これは、ヘッダーとメモリ管理のための特別なスロットを含む。探索は、symbol で停止する。すなわち、property-list あるいは print-name string のような symbol から参照されるオブジェクトは、カウントされない。

11.2 UNIX システムコール

EusLisp は、UNIX オペレーティングシステムのシステムコールとライブラリ関数とに直接関連する関数を取りそろえている。これらの関数の詳細については、UNIX system interface (2) を調べること。*unix-package*に定義されているこれらの低レベル関数の使用は、ときどき危険をはらむ。できるだけ他のパッケージに定義されている高レベル関数を使用すること。例えば、unix:socket,unix:bind,unix:connect などの代わりに 9.4 節に記述されている IPC 機能を使用すること。

11.2.1 時間

unix:ptimes [関数]

経過時間、システム時間、ユーザー時間、サブプロセスのシステム時間とサブプロセスのユーザー時間の5つの要素を持つリストを返す。この関数は旧いので、unix:getrusageの使用を推奨する。

unix:runtime [関数]

プロセスのシステムとユーザー時間の合計を返す。単位は、1/60秒である。

unix:localtime [関数]

現在の時間と月日を整数ベクトルで返す。要素は、秒、分、時、日、年、曜日である。

 $unix:asctime tm_intvector$

[関数]

整数ベクトルで表現されるローカル時間を文字列表現に変換する。(unix:asctime (unix:localtime)) は、現在の実際の時間の文字列表現を返す。

11.2.2 プロセス

unix:getpid [関数]

このプロセスのプロセス ID(16 ビット整数) を返す。

unix:getppid [関数]

親プロセスのプロセス ID を返す。

unix:getpgrp [関数]

このプロセスのグループ ID を返す。

unix:setpgrp integer [関数]

新しいプロセスのグループ ID を設定する。

unix:getuid [関数]

このプロセスのユーザー ID を返す。

unix:geteuid [関数]

このプロセスの使用可能なユーザー ID を返す。

unix:getgid [関数]

このプロセスのユーザーグループ ID を返す。

unix:getegid [関数]

このプロセスの使用可能なユーザーグループ ID を返す。

unix:setuid integer

[関数]

このプロセスの使用可能なユーザー ID を設定する。

unix:setgid integer

[関数]

このプロセスの使用可能なユーザーグループ ID を設定する。

unix:fork [関数]

他の Euslisp を作成する。サブプロセスに 0 が返され、親プロセスに fork されたプロセスの pid が返される。パイプで接続されたプロセスを作成するためには、11.3 節に書かれている system:piped-fork を使用すること。

unix:vfork

[関数]

他の Euslisp を fork し、その新しい Euslisp のプロセスが終了するまで親プロセスの実行を一時停止する。

unix:exec path

[関数]

Euslisp から他のプログラムへ実行を移す。

unix:wait

[関数]

サブプロセスの中の1つのプロセスの終了を待つ。

unix:exit code

[関数]

実行を終了し、codeを終了状態として返す。ゼロは通常の終了を意味する。

unix:getpriority which who

[関数]

このプロセスが持つ最大の優先順位を返す。which は、0(プロセス)、1(プロセスグループ)、2(ユーザー) のうちの 1 つである。

unix:setpriority which who priority

[関数]

which と who で決定されるリソースの優先順位を priority に設定する。which は、0,1,2 の内の 1 つである。who は、which から相対的に解釈される (which=0 ならプロセスを示し、which =1 ならプロセスグループを示し、which =2 ならユーザーの ID を示す)。who がゼロのとき、現在のプロセス、プロセスグループ、ユーザーを示す。Euslisp プロセスに低い優先順位を指定することは、大きい値を設定することであり、これはプロセスを不利にする。(unix:setpriority 0 0 10) は、優先順位を 10 に設定する。

unix:getrusage who

[関数]

who プロセスについてのシステムリソースの使用情報のリストを返す。要素は、以下のような順番になっている。もっと多くの情報が、lisp:rusage より得られる。

```
float ru_utime (sec.) /* user time used */
float ru_stime (sec.) /* system time used */ \,
                 /* maximum resident set size */
int ru_maxrss;
int ru_ixrss;
                   /* currently 0 */
int ru_idrss;
                   /* integral resident set size */
int ru_isrss;
                   /* currently 0 */
int ru_minflt;
                   /* page faults without physical I/O */
int ru_majflt;
                   /* page faults with physical I/O */
int ru_nswap;
                   /* number of swaps */
                   /* block input operations */
int ru_inblock;
                   /* block output operations */
int ru_oublock;
/* messages received */
int ru_nsignals;
                   /* signals received */
```

int ru_nvcsw; /* voluntary context switches */
int ru_nivcsw; /* involuntary context switches */

unix:system [command]

[関数]

サブシェルで command を実行する。command は、Bourn-shell で認識されるものでなければならない。

 $\mathbf{unix:getenv}\ \mathit{env-var}$

[関数]

env-var の環境変数の値を返す。

unix:putenv env

[関数]

プロセスの環境変数リストに env を追加する。env は、"VARIABLE=value"のように変数と値の等価を表す文字列である。

unix:sleep time

[関数]

time 秒間このプロセスの実行を一時停止する。

unix:usleep time

[関数]

time マイクロ秒間このプロセスを一時停止する。($\mathbf u$ は、マイクロを表現する。) $\mathbf u$ sleep は、Solaris2 あるいは他の System5 系のシステムには実現されていない。

11.2.3 ファイルシステムと入出力

unix:uread stream [buffer] [size]

[関数]

stream から size バイト読み込む。stream は、ストリームオブジェクトあるいはファイルディスクリプタ (fd) を表現する整数である。もし、buffer が与えられるとき、入力はそこに蓄積される。そうでないならば、入力は stream のバッファに蓄積される。したがって、もし stream が fd なら、buffer は与えられなければならない。unix:uread は、新しい文字列バッファを配置しない。unix:uread は、実際に読み込まれたバイト数を返す。

unix:write stream string &optional size

[関数]

stream に string の size バイトを書き込む。もし、size が省略されたならば、string の全部の長さが出力される。

unix:fcntl stream command argument

[関数]

unix:ioctl stream command buffer

[関数]

unix:ioctl_ stream command1 command2

[関数]

 $\mathbf{unix:ioctl_R}\ \mathit{stream\ command1\ command2\ buffer\ [size]}$

[関数]

unix:ioctl_W stream command1 command2 buffer [size]

[関数]

unix:ioctl_WR stream command1 command2 buffer [size]

[関数]

unix:close fd [関数]

fd で指定されるファイルをクローズする。

 $\mathbf{unix:}\mathbf{dup}\;fd$ [関数]

fdで指定されるファイルディスクリプタを2重化して返す。

unix:pipe [関数]

パイプを作成する。このパイプの入出力ストリームを返す。

unix:lseek stream position [whence 0]

[関数]

stream のファイルポインタを whence から position の位置に設定する。

unix:link path1 path2

[関数]

hard リンクを作る。

unix:unlink path

[関数]

path で指定されたファイルの hard リンクを取り去る。もし、ファイルに参照が残っていないなら、削除される。

unix:mknod path mode

[関数]

ファイルシステムに inode を作る。path は、pathname オブジェクトでなく文字列でなければならない。

unix:access path mode

[関数]

path へのアクセス権利をチェックする。

unix:stat path [関数]

path の inode 情報を得て、以下に示す整数のリストを返す。

st_ctime ; file last status change time

st_mtime ; file last modify time
st_atime ; file last access time

st_size ; total size of file, in bytes

st_gid ; group ID of owne
st_uid ; user ID of owner

st_nlink; number of hard links to the file

st_rdev ; the device identifier (special files only)

st_dev ; device file resides on st_ino ; the file serial number

st_mode ; file mode

 $\mathbf{unix:}\mathbf{chdir}\ \mathit{path}$

[関数]

現在のディレクトリを path に変更する。

unix:getwd

現在のディレクトリを返す。

unix:chmod path integer

[関数]

[関数]

path のアクセスモード (permission) を変更する。

unix:chown path integer

[関数]

path ファイルのオーナーを変更する。

unix:isatty (stream | fd)

[関数]

もし、stream が TTY 型のデバイス (シリアルポートあるいは仮想 TTY) に接続されているなら T を返す。

unix:msgget key mode

[関数]

keyによってアドレスされるメッセージキューを作成し、配置する。

unix:msgsnd qid buf [mtype [flag]]

[関数]

unix:msgrcv qid buf [size [mtype [flag]]]

[関数]

unix:socket domain type &optional proto

[関数]

domain に定義されている名前を持ち type を抽象型とするソケットを作成する。type は、1 (SOCK_STREAM), 2 (SOCK_DGRAM), 3 (SOCK_RAW), 4 (SOCK_RDM), 5 (SOCK_SEQPACKET) の内の 1 つである。

unix:bind socket name

[関数]

name と socket を関連付ける。もし、ソケットが UNIX 領域内で定義されているならば、name は、UNIX のパス名でなければならない。

unix:connect socket addr

[関数]

socket と addr で指定される他のソケットを接続する。

unix:listen socket Goptional backlog

[関数]

socket から接続要求を受け始める。backlog は、接続の確定を待つためのキューの長さを指定する。

unix:accept socket

[関数]

socket から接続要求を受け、両方向にメッセージを交換できるファイルディスクリプタを返す。

unix:recvfrom socket Coptional mesq from flag

[関数]

socket からデータを書いたメッセージを受ける。そのソケットは、unix:bind により名前を割り当てられなければならない。mesg は、入ってきたメッセージが蓄積されるための文字列である。もし、mesg が与えられたならば、unix:recvfrom は受け取ったバイト数を返す。もし省略されたなら、メッセージを蓄積するための新しい文字列を作成し、その文字列を返す。

unix:sendto socket addr mesg &optional len flag

[関数]

addrによって指定される他のソケットへデータの書かれたメッセージを送る。socket は、名前が割り当てられてないデータ書き込み型のソケットでなければならない。mesg は、送るための文字列であり、lenは文字列の最初から数えたメッセージの長さである。もし、省略されたなら、すべての文字列を送る。

 ${\bf unix:getservbyname}\ service name$

[関数]

/etc/services あるいは NIS データベースに記録されている servicename のサービス番号を返す。

unix:gethostbyname hostname

[関数]

hostname の ip アドレスとアドレス型のリストを返す。(一般にいつも AF_INET==2).

unix:syserrlist errno

[関数]

errno のエラーコードに対するエラー情報が記述された文字列を返す。

11.2.4 シグナル

unix:signal signal func Coptional option

[関数]

signal に対してシグナルハンドラー func をインストールする。BSD4.2 システムにおいて、システムコール処理の間に捕まえたシグナルは、システムコールのリトライに起因する。これは、もしその処理がシ

ステムコールの呼び出しを発行するならば、シグナルを無視することを意味する。もし、option=2 が指定されたならば、シグナルは system-5 の手法で処理される。そのシグナルは、システムコールの失敗に起因する。

unix:kill pid signal

[関数]

pid で名前付けされるプロセスに signal を送る。

unix:pause

[関数]

シグナルが到着するまでこのプロセスの実行を一時停止する。

unix:alarm time

[関数]

time 秒後にアラーム時計シグナル (SIGALRM 14) を送る。time=0 で unix:alarm を呼び出すと、アラーム時計をリセットする。

unix:ualarm time

[関数]

time がマイクロ秒単位であることを除いて unix:alarm と同じである。ualarm は、Solaris2 あるいは System5 系のシステムに実現されていない。

unix:getitimer timer

[関数]

timer は、0 (ITIMER_REAL), 1 (ITIMER_VIRTUAL), 2(ITIMER_PROF) の内の1つである。秒単位の時間 (timer) と間隔 (interval) の 2 つの要素を持つリストを返す。

unix:setitimer timer value interval

[関数]

timerにvalueとintervalを設定する。timerは、0 (ITIMER_REAL), 1 (ITIMER_VIRTUAL), 2(ITIMER_PROF) の内の1つである。ITIMER_REALは、valueが終了したとき、SIGALRM を発行する。ITIMER_VIRTUALは、SIGVTALRMを発行し、ITIMER_PROFは、SIGPROFを発行する。

unix:select inlist outlist exceptlist timeout

[関数]

inlist, outlist と exceptlist は、ファイルディスクリプタを示すビットベクトルである。そのファイルディスクリプタの入出力イベントは、テストされなければならない。例えば、もし inlist=#b0110 で outlist=#b100 で exceptlist=NIL であるなら、fd=1 あるいは fd=2 で読み込み可能かあるいは fd=2 で書き込み可能であるかどうかをテストする。timeout は、unix:select が待つために許される秒数を指定する。inlist で指定されているポートの 1 つに入力データが現れるかあるいは outlist に指定されるポートの 1 つに書き込み可能となるかあるいは exceptlist で指定されるポートの 1 つに例外条件が起こるとすぐに unix:select は、inlist, outlist, exceptlist のそれぞれにおいてアクセス可能なポートとして設定されたポートの中で、入力処理可能なポート番号を返す。

unix:select-read-fd read-fdset timeout

[関数]

入出力の選択は、ふつう入力処理のときのみ意味がある。unix:select-read-fd は、select fdset nil nil timeout の速記法である。read-fdset は、ビットベクトルでなく、設定された読み込み fd を指定する整数である。

11.2.5 マルチスレッド

スレッド内でシグナルを生成することはできない。したがって、1 つのシグナルスタックと1 つのタイマーが Euslisp のプロセスの中で実現されている。Solaris2 の上では、メインの最上位レベルが分割されたスレッド内で実行する。

unix:thr-self [関数]

現在実行されているスレッドの ID(整数) を返す。

unix:thr-getprio id

[関数]

id で指定されたスレッドの実行優先順位を返す。

unix:thr-setprio id newprio

[関数]

id で指定されたスレッドの実行優先順位に newprio を設定する。 newprio が小さい数値の場合、優先順位が高いことを意味する。言い替えれば、 newprio よりも大きな数値を持つスレッドは、CPU にアクセスされることが少なくなる。ユーザーは、実行優先順位をプロセスの値(普通はゼロ)よりも高くすることはできない。

unix:thr-getconcurrency

[関数]

並列に実行できるスレッドの数で表現される並列度 (整数) を返す。

unix:thr-setconcurrency concurrency

[関数]

concurrency の値は、プロセス内の LWP の数である。もし、concurrensy がデフォルトの 1 ならば、生成されたたくさんのスレッドがすべて実行可能であったとしても順番に 1 つの LWP に割り当てられる。もし、プログラムがマルチプロセッサマシン上で実行され、同時に複数の CPU を利用したいならば、concurrency に 1 より大きい値を設定しなければならない。concurrency に大きな値を設定すると、オペレーティングシステムのリソースをたくさん消費する。普通、concurrency はプロセッサの数と同じかあるいは小さくすべきである。

unix:thr-create func arg-list Goptional (size 64*1024)

[関数]

size ワードの lisp スタックを持ち、size バイトの C スタック持つ新しいスレッドを作成し、そのスレッド内で arg-list に func を適用する。スレッドは、どんな結果も呼びだし側に返すことができない。この関数の使用は避けること。

11.2.6 低レベルメモリ管理

unix:malloc integer

[関数]

Euslisp のメモリ空間の外にメモリを配置する。

unix:free integer

[関数]

unix:malloc で配置されたメモリブロックを開放する。

unix:valloc integer

[関数]

unix:mmap address length protection share stream offset

[関数]

unix:munmap address length

[関数]

unix:vadvise integer

[関数]

11.2.7 IOCTL

Unix はターミナルデバイスを ioctl の 2 番目の引数に命令を設定することにより制御することができるが、Euslisp はインクルードファイルの参照や命令コードとしての引数の論理和を省略するために、関数で備えている。詳しい内容は、Unix の termio のマニュアルを参照すること。

ターミナルの入出力制御には、TIOC*と TC*という 2 つの命令系がある。自分のオペレーティングシステムにこれらの関数が実現されているがどうかについて気を付けなさい。基本的に、BSD 系は TIOC*の入出力をサポートし、System5 系が TC*をサポートしている。

SunOS 4.1 TIOC*と TC*の両方サポート

Solaris2 TC*のみサポート

unix:tioclbic stream buf

unix:tioclset stream buf

mips, ultrix? TIOC*のみサポート

unix:tiocgetp stream [sgttybuf] パラメータを得る。	[関数]
unix:tiocsetp stream sgttybuf パラメータを設定する。	[関数]
unix:tiocsetn stream [sgttybuf]	[関数]
unix:tiocgetd stream [sgttybuf]	[関数]
unix:tiocflush stream バッファをすべて出力する。	[関数]
unix:tiocgpgrp stream integer プロセスのグループ ID を得る。	[関数]
unix:tiocspgrp stream integer プロセスのグループ ID を設定する。	[関数]
unix:tiocoutq stream integer	[関数]
unix:fionread stream integer	[関数]
unix:tiocsetc stream buf	[関数]
unix:tioclbis stream buf	[関数]

[関数]

[関数]

unix:tioclget stream buf

[関数]

unix:tcseta stream buffer

[関数]

ターミナルパラメータをすぐに設定する。

unix:tcsets stream buffer

[関数]

ターミナルパラメータを設定する。

unix:tcsetsw stream buffer

[関数]

出力として列をなす全ての文字を転送した後、ターミナルパラメータを設定する。

unix:tcsetsf stream buffer

[関数]

出力として列をなす全ての文字を転送し、入力として列をなす全ての文字列を廃棄した後、ターミナル パラメータを設定する。

unix:tiocsetc stream buffer

[関数]

unix:tcsetaf stream buffer

[関数]

unix:tcsetaw stream buffer

[関数]

unix:tcgeta stream buffer

[関数]

unix:tcgets stream buffer

[関数]

unix:tcgetattr stream buffer

[関数]

unix:tcsetattr stream buffer

[関数]

11.2.8 キーインデックスファイル

近年 UNIX は、キーインデックスファイルの管理のために dbm あるいは ndbm ライブラリを提供する。このライブラリを使用することにより、キーとデータの組みで構成されるデータベースを構築することができる。以下に示す関数は、clib/ndbm.c に定義されている。Sun において、そのファイルは、cc -c -Dsun4-Bstatic でコンパイルし、(load "clib/ndbm":ld-option "-lc")で Euslisp にロードすること。

dbm-open dbname mode flag

[関数]

dbm-open は、データベースファイルを作るときと、そのデータベースに読み込み / 書き込みをするとき、最初に呼び出されなければならない。dbname は、データベースの名前である。実際に、ndbmanager は".pag"と".dir"の拡張子を持つ 2 つのファイルを作成する。mode は、ファイルのオープンモードを指定する。0 は読み込み専用、1 は書き込み専用、2 は読み書き用を示す。また、最初にファイルを作成するときは、200 を論理和すべきである。21 は21 は、22 に動している。23 は、24 なのデータベースを確認するための

整数を返す。この値は、他の dbm 関数によってデータベースを確認するために使用される。言い換えれば、同時に幾つかのデータベースをオープンすることができる。

dbm-store db key datum mode

[関数]

key と datum の組み合わせを db に蓄積する。db は、データベースを確認するための整数である。key と datum は文字列である。mode は 0(挿入) あるいは 1(置き換え) のどちらかである。

 $\mathbf{dbm-fetch} \ db \ key$ [関数]

db の中の key に関連付けられているデータを呼び出す。

11.3 UNIX プロセス

Euslisp から UNIX 命令を実行ために unix:system 関数を使用すること。piped-fork は、標準出力を標準入力がパイプを通して Euslisp の双方向ストリームに接続されるサブプロセスを作成する。piped-fork はストリームを返す。以下に示す関数は、"wc"を使用することにより、ファイルに含まれる行の数を数えるものである。

(defun count-lines (file) (read (piped-fork "wc" file)))

次の例は、他のワークステーション"etlic0"の上に eus プロセスを作成し、分散計算をするためのポートを提供する。

```
(setq icOeus (piped-fork "rsh" "etlicO" "eus"))
(format icOeus "(list 1 2 3)~%")
(read icOeus) --> (1 2 3)
```

ソースコードを修正するために、Euslisp から ez を呼び出すことができる。スクリーンエディター ez は、メッセージキューを通して Euslisp と接続する。もし、既に ez プロセスを Euslisp と並列に実行しているならば、ez は ez プロセスを再スタートし、ターミナル制御を得る。ez の中で esc-P あるいは esc-M 命令を発行することにより、テキストは戻され、Euslisp で評価される。ファイルに少しの変更を加えたとき、全部のファイルをロードする必要がないので、デバッグするのにこれは便利である。emacs の上でも M-X run-lisp 命令でおなじことが可能である。

cd & optional (dir (unix:getenv "HOME"))

[関数]

現在のディレクトリを変更する。

ez &optional key

[関数]

ez エディターの画面に入る。それから Lisp 書式を読み込み、評価する。

piped-fork & optional (exec) & rest args

[関数]

プロセスを fork し、両方向ストリームを Euslisp とサブプロセスの間に作る。

rusage

[関数]

このプロセスのリソースの使用状況を表示する。

11.4 Cで書かれた Lisp 関数の追加

ファイルに含まれるCを重く参照したり、行列にしばしばアクセスするようなプログラムにおいては、Euslispで記述するよりはむしろCあるいは他の言語で記述した方が効率が良く、記述もわかり易い。EusLispは、Cで書かれたプログラムをリンクする方法を備えている。

任意の数の実数の算術平均を計算する C の関数 AVERAGE のサンプルコードは、以下に示す通りである。この例において、引数から実数値を得る方法、実数のポインタを作る方法、特殊変数 AVERAGE にポインタを設定する方法やエントリ関数 ave に関数や symbol を定義する方法を知ることができる。'cc -c -Dsun4-DSolaris2 -K pic'でこのプログラムをコンパイルする。c/eus.h 内の正しい定義を選択するために、-Dsun4や-DSolaris2 が必要である。-K pic は、ロード可能な共有オブジェクトのために、位置に依存するコードをC コンパイラで生成させるために必要である。その後、コンパイルの結果である'.o'ファイルが Euslisp にロードすることができる。もっと完全な例は*eusdir*/clib/*.c に置かれている。これらの例は、ここで書かれた方法で定義され、ロードされる。

```
/* ave.c */
/* (average &rest numbers) */
#include "/usr/local/eus/c/eus.h"
static pointer AVESYM;
pointer AVERAGE(ctx,n,argv)
context *ctx;
int n;
pointer argv[];
{ register int i;
 float sum=0.0, a, av;
 pointer result;
 numunion nu;
 for (i=0; i<n; i++) {
   a=ckfltval(argv[i]);
   sum += a;} /*get floating value from args*/
  av=sum/n;
 result=makeflt(av);
  AVESYM->c.sym.speval=result; /*kindly set the result in symbol*/
 return(result);}
ave(ctx,n,argv)
context *ctx;
int n;
pointer argv[];
{ char *p;
 p="AVERAGE";
  defun(ctx,p,argv[0],AVERAGE);
```

```
AVESYM=intern(ctx,p,strlen(p),userpkg); /* make a new symbol*/
}
```

11.5 他言語インターフェース

Euslisp とのリンクを考慮していない C の関数も Euslisp にロードすることができる。これらの関数は、他言語関数と呼ばれる。そのようなプログラムは load-foreign マクロによりロードされる。そのマクロは、foreign-module のインスタンスを返す。オブジェクトファイルの中の外部 symbol 定義は、モジュールオブジェクトの中に登録されている。defforeign は、Euslisp から呼び出すための C 関数に対するエントリーを作るために使用される。defun-c-callable は、C から呼び出し可能な lisp 関数を定義する。呼び出し可能な C の関数は、パラメータを変換し関連する Euslisp の関数へ制御を移すために pod-code と呼ばれる特別なコードを持つ。pod-address は、この特別なコードのアドレスを返す。そのアドレスは C の関数に通知されるべきである。

これは、C のプログラムのサンプルと Euslisp への関数インターフェースである。

```
/* C program named cfunc.c*/
static int (*g)(); /* variable to store Lisp function entry */
double sync(x)
double x;
{ extern double sin();
 return(sin(x)/x);}
char *upperstring(s)
char *s;
{ char *ss=s;
  while (*s) { if (islower(*s)) *s=toupper(*s); s++;}
 return(ss);}
int setlfunc(f)
                    /* remember the argument in g just to see */
int (*f)();
                     /* how Lisp function can be called from C */
{ g=f;}
int callfunc(x)
                /* apply the Lisp function saved in g to the arg.*/
int x;
{ return((*g)(x));}
;;;; Example program for EusLisp's foreign language interface
;;;; make foreign-module
(setq m (load-foreign "cfunc.o"))
;; define foreign functions so that they can be callable from lisp
(defforeign sync m "sync" (:float) :float)
(defforeign toupper m "upperstring" (:string) :string)
(defforeign setlfunc m "setlfunc" (:integer) :integer)
(defforeign callfunc m "callfunc" (:integer) :integer)
```

Euslispのデータ表現は、以下に示す方法でCのデータ表現に変換される。EusLispの30ビット整数(文字列を含む)は、符号拡張され、スタックを通してCの関数に渡される。30ビット実数は、倍精度実数 (double)に拡張され、スタックを通して渡される。文字列と整数ベクトルと実数ベクトルについては、その最初の要素のアドレスのみがスタックに渡され、行列自体はコピーされない。Euslispには、2次元以上の配列を渡す方法がない。2次元以上の配列はすべての要素を線形に保持する1次元ベクトルを持つ。このベクトルは、array-entityマクロにより得られる。もし、2次元行列をFORTRANのサブルーチンに送る場合、FORTRANにおいて列と行が反対となっているためその行列を転置しなければならないことに注意すること。

実数の Euslisp 表現は、いつも単精度であるので、倍精度の実数のベクトルに渡すとき変換を要する。変換関数、 $double 2 float \ 2 float 2 double$ は、この目的で clib/double の中に定義されている。例えば、もし 3x3 の実数行列があり、CF のいう名の C の関数にそれを倍精度実数の行列として渡したいなら、以下のように使用すればよい。

```
(setq mat (make-matrix 3 3))
(CF (float2double (array-entity mat)))
```

C の構造体は、defstruct マクロにより定義することができる。defstruct は、次のようなフィールド定義書式により struct-name を受け取る。

```
(defcstruct <struct-name>
   {(<field> <type> [*] [size])}*)
```

たとえば、以下に示す構造体の定義は、つぎの defstruct によって表現される。

```
/* C definition */
struct example {
   char a[2];
   short b;
   long *c;
   float *d[2];};

/* equivalent EusLisp definition */
(defcstruct example
   (a :char 2)
   (b :short)
   (c :long *)
```

```
(d :float * 2))
```

load-foreign objfile &key symbol-input symbol-output (symbol-file objfile) ld-option)

Euslisp 以外の言語で書かれたオブジェクトモジュールをロードする。Solaris2 において、load-foreign は:entry パラメータに null 文字列を与えた load を呼び出す。コンパイルされたコードのオブジェクトが返される。この結果は、後に defforeign を呼び出すことによってモジュールの中の関数のエントリーを作ることが必要である。ライブラリーは ld-option に指定することができる。しかしながら、ライブラリの中に定義された symbol はデフォルトの symbol-output ファイルで獲得することができない。ライブラリの中に定義された関数の呼び出しを Euslisp に許可するために、symbol-output と symbol-file が明示的に与えられなければならない。(もし、objfile からのみそれらを参照するならば、これらの引き数は必要ない。) load-foreign は、指定されたライブラリとグローバル変数と一緒に objfile を Euslisp のコアにリンクし、リンクされたオブジェクトを symbol-output に書き込む。それから、symbol-file の中の symbol は、検索され、他言語モジュールの中にリストアップされる。symbol-file のデフォルトが objfile であるので、もし symbol-file が与えられないなら、objfile に定義されている symbol のみ認識される。objfile とライブラリの両方のグローバルエントリーをすべて見るために、load-foreign の最初のプロセスリンクの結果であるリンクされた(マージされた)symbol テーブルは確かめられなければならない。このような理由で、symbol-output と symbol-file の両方に同一のファイル名を与えなければならない。

以下に示されるように、中間の symbol ファイルは unix:unlink によって削除することができる。しかしながら、もし同じライブラリを参照する 2 つ以上の他言語モジュールをロードするとき、ライブラリの 2 重化を避けたいなら、symbol-output 引き数を使用しなければならない。上記の例として、"linpack.a" のすべての関数をロードしており、次に"linpack.a"の関数を呼び出している他のファイル"linapp.o"を呼びだそうとしていると仮定する。次の load-foreign 呼び出しは、"euslinpack"を unlink する前に発行しなければならない (load-foreign "linapp.o": symbol-input "euslinpack")。 load-foreign と defforeign のもっと完全な例は、*eusdir*/llib/linpack.1 で見ることができる。

```
(setq linpack-module
```

```
(load-foreign "/usr/local/eus/clib/linpackref.o"
   :ld-option "-L/usr/local/lib -llinpack -lF77 -lm -lc"
   :symbol-output "euslinpack"
   :symbol-file "euslinpack"
   ))
```

(unix:unlink "euslinpack")

defforeign function module chame paramspec resulttype

[マクロ]

[マクロ]

他言語モジュールの中の関数エントリーを作る。funcname は、Euslisp に作られる symbol である。module は、load-foreign によって返されるコンパイルされたコードのオブジェクトである。cname は、他言語プログラムの中で定義されている C の関数の名前である。その名前は"myfunc"のような文字列である。paramspec は、パラメータの型指定のリストである。それは、Euslisp から C の関数に引き数を渡すときに、データの型変換と強制 (coercion) を行うために使用される。データ変換がなかったり、あるいは型チェックが必要ないとき、paramspec は NIL で構わない。:integer、:float、:string、(:string n)の内の1つが resulttype に与えられなければならない。:integer は、C の関数が char,short,int(long) のいずれかを返すことを意味する。:float は、返す値が float あるいは double のときに指定する。:string は、C 関数が string へのポインターを返すことを意味し、Euslisp は Euslisp の文字列に変更するために string に long-word のヘッダーを追加する。文字列の長さは strlen によって見つけられる。string の直前に書き込まれるヘッダーは、悲惨な結果を引き起こすことがあることに注意。もう一方で、(:string n) は、安全だが遅い。なぜなら、n の長さを持つ Euslisp の文字列が新しく作成され、C の文字列の内容がそこにコピーされるからである。(:string 4) は、整数へのポインターを返す C の関数に使用で

きる。FORTRAN ユーザーは、FORTRAN の関数あるいはサブルーチンのあらゆる引き数は、call-by-refference によって渡されることに注意すべきである。したがって、1 つの整数あるいは実数型の引き数でさえ FORTRAN へ渡される前に整数ベクトルあるいは実数ベクトルに置かれなければならない。

defun-c-callable function paramspec resulttype . body

[マクロ]

他言語のコードから呼び出すことができる Euslisp の関数を定義する。funcname は、Euslisp の関数として定義されている symbol である。paramspec は、defforeign の中の型指定のリストである。defforeign の paramspec と違い、defun-c-callable の paramspec は、関数が引き数を全く受け取らない場合以外、省略することができない。:integer は、int,char,short のすべての型に使用すべきである。:float は、float と double に使用する。resulttype は、Lisp 関数の型である。resulttype は、型のチェックあるいは整数から実数に型の強制を必要とする場合を除いて、省略することができる。body は、この関数が C から呼び出されるとき、実行される lisp 表現である。defun-c-callable で定義されている関数は、Lisp 表現からでも呼び出すことができる。defun-c-callable は funcname を返す。その返り値は、symbol のようであるが、そうではなく、symbol のサブクラスである foreign-pod のインスタンスである。

pod-address functione

[関数]

defun-c-callable で定義された C で呼び出し可能な Lisp 関数 funcname における他言語と Euslisp とのインターフェースコードのアドレスを返す。これは、他言語プログラムに Lisp 関数の位置を知らせるために使用される。

array-entity array-of-more-than-one-dimension

[マクロ]

多次元配列の要素を保持する1次元ベクトルを返す。これは、多次元あるいは一般の配列を他言語に渡すために必要である。しかし、1次元のベクトルは直接渡すことができる。

float2double float-vector [doublevector]

[関数]

float-vector を倍精度実数の表現に変換する。その結果は、float-vector であるが、最初の引き数の長さの2倍になっている。

double2float doublevector [float-vector]

[関数]

倍精度実数表現が単精度の float-vector に変換される。

11. VxWorks 99

11.6 VxWorks

ホストと VxWorks との通信機能が"vxworks/vxweus.l"ファイルで提供されている。VxWorks 上に vxwserv サーバを常駐させることにより、ホスト上の EusLisp から vxwserv にコネクションを張り、vxws プロトコルに従ったコマンドを送ることにより、VxWorks の関数を起動し、引数を送り、結果を受け取ることができる。

VxWorks のソフトは Sun の c コンパイラによって開発することができる上、データ表現が sun3, sun4, VME147 の間で共通であることを利用して、vxws プロトコルは、バイナリモードで動作することができる。

11.6.1 VxWorks 側の起動

VxWorks にログインし、"*eusdir*/vxworks/vxwserv.o"をロードする。その後、vxwserv タスクを spawn する。vxwserv は VxWorks 上の 2200 番ポートを listen する。2200 が塞がっている場合、2201, 2202, ... を 試す。正しく bind されたポート番号が表示される。

% rlogin asvx0 (あるいは etlic2上であれば、% tip asvx[01] も可能)

- -> cd "atom:/usr/share/src/eus/vxworks"
- -> ld <vxwserv.o
- -> sp vxwserv

port 2200 is bound.

VxWorks の i コマンドで、vxwserv タスクが常駐したことを確かめる。同じ要領で、eus から呼び出したい VxWorks のプログラムを VxWorks 上にロードする。その後、Euslisp と VxWorks とのコネクションが張られると、vxwserv を走らせた TTY に、次のようなメッセージが出力される。

```
CLIENT accepted: sock=9 port = 1129: family = 2: addr = c01fcc10: VxWserv started with 16394 byte buffer
```

11.6.2 ホスト側の起動

任意のマシンの上で eus を起動し、"vxworks/vxweus"をロードする。connect-vxw 関数を用いて vxwserv に接続する。接続後、ソケットストリームが*vxw-stream*にバインドされる。以下に、コネクトの例を示す。この例では、VxWorks 上の sin, vadd 関数を euslisp の関数 VSIN,VAD として定義している。

```
(load "vxworks/vxweus")
(setq s (connect-vxw :host "asvx0" :port 2200 :buffer-size 1024))
(defvxw VSIN "_sin" (theta) :float)
(defvxw VAD "_vadd" (v1 v2) (float-vector 3))
```

VxWorks 上に作成される関数が、vxws を通じて呼び出されるためには、次の条件を満たさなければならない。

- 1. 引数は、32 個以内であること、引数に受け取るベクタの容量の合計が connect-vxw の:buffer-size で指定した値を越えないこと
- 2. struct を引数にしないこと、必ず struct へのポインタを引数にすること
- 3. 結果は、int, float, double または、それらの配列のアドレスであること
- 4. 配列のアドレスを結果とする場合、その配列の実体は、関数の外部に取られていること

11. VxWorks 100

 $\mathbf{connect\text{-}vxw} \ \mathscr{C}key \ \ (:host \ "asvx0")$

[関数]

(:port 2200) (:buffer-size 16384) (:priority 1280) (:option #x1c)

:host に対して vxws プロトコルによる通信のためのソケットストリームを作成し、そのストリームを返す。:host には、ネットワークにおける VxWorks のアクセス番号あるいはアクセス名を指定する。:port には、VxWorks 上の vxwserv がバインドしたポートを捜すための最初のポート番号を指定する。このポート番号から、増加方向に接続を試行する。:option のコードについては、VxWorks の、spawn 関数を参照のこと。コネクションは、同時に複数張ってよい。

vxw vxw-stream entry result-type args

[関数]

vxw は、vxw-stream に接続されている VxWorks の関数 entry を呼び出し、その関数に引き数 args を与えて result-type で指定された結果を得る。vxw-stream には、connect-vxw で作成したソケットストリームを与える。entry には、VxWorks の関数名をストリングで指定するか、あるいは関数のアドレスを整数で指定する。関数のアドレスを知るには、VxWorks の findsymbol を呼び出す。知りたいシンボルは、通常、"-"で始まることに注意。entry がストリングの場合、VxWorks 上でシンボルテーブルの逐次探索が行われる。result-type には、結果のデータ型 (:integer または:float)、あるいはデータを受け取るベクタ型を指定する。ベクタは、float-vector、integer-vector、string のインスタンスである。general vector(lisp の任意のオブジェクトを要素とするベクタ) は指定できない。結果型は、必ず、実際の VxWorks 関数の結果型と一致しなければならない。args には、entry に与える引き数を指定する。引数に許される EusLisp データは、integer、float、string、integer-vector、float-vector、integer-matrix、float-matrix である。ポインタを含んだ一般のオブジェクト、一般のベクトルは送れない。また、送られたベクトルデータは、一旦 vxwserv が獲得したバッファの中に蓄積される。例えば、VxWorks に定義された関数"sin"を呼び出すためには、次のように実行すればよい。(vxw *vxw-stream* "sin":float 1.0)

 $\mathbf{defvxw} \ \mathit{eus-func-name} \ \mathit{entry} \ \mathit{args} \ \mathit{\mathfrak{C}optional} \ (\mathit{result-type} \ \mathit{:integer})$

[マクロ]

defvxw は、findsymbol を用いて vxw を呼び出して、VxWorks の関数の高速な呼び出しを実現するためのマクロである。VxWorks の関数 entry を呼び出すための Euslisp の関数 eus-func-name を定義する。このマクロを実行後は、eus-func-name を呼び出すことにより、VxWorks の関数を呼び出すことができる。このとき、呼び出しに使用されるソケットストリームは*vxw-stream*に固定されている。ただし、VxWorks 側で、関数をコンパイルし直して再ロードした場合、新しい関数定義が呼ばれるようにするためには、eus 側で、defvxw をもう一度実行し直して、最新のエントリアドレスが指定されるようにする必要がある。

12. マルチスレッド 101

12 マルチスレッド

マルチスレッドは、Solaris オペレーティングシステム上の並列プログラミングや非同期プログラミングの機能である。非同期プログラミングは、プログラムの状態と無関係に発生する様々なセンサを経由した外部イベントに応答するためのプログラムに要求される。並列プログラミングは、画像処理や経路計画の干渉チェックのようなプロセス向きの計算の効率を改善する場合に効果的である。

12.1 マルチスレッド Euslisp の設計

12.1.1 Solaris 2 オペレーティングシステムのマルチスレッド

マルチスレッド Euslisp(MT-Eus) は、複数のプロセッサを持った Solaris 2 オペレーティングシステム上で動作する。Solaris のスレッドは、 共有メモリと異なった環境を持つような従来の UNIX プロセスを CPU に配置するためのユニットである。Solaris OS によって提供されるスレッドのライブラリは、それぞれのスレッドを単一の LWP(light weight process) に配置する。このプロセスがカーネルのリソースである。UNIX のカーネルは、それぞれのスレッドに割り当てられたスレッドの優先権に基づいて複数の物理 CPU に LWP の配置を計画する。図 5 は、スレッドと LWP と CPU の関係を表わしたものである。Euslisp の環境およびメモリ管理の設計について、マルチスレッドの能力を引き出すために 2 つの大きな変更がされた。

12.1.2 Context Separation

MT-Eus は、それぞれのスレッドに対し個別にスタックと環境を配置する。そのため、他のスレッドと独立に実行することができる。symbol や cons のようなオブジェクトは、これまでの Euslisp のように共有ヒープメモリ上に配置される。したがって、block label や catch tag やローカル変数のようなスレッドの個別データは、他のスレッドから保護される。ところが、グローバル変数によって示される値(オブジェクト)は、情報の変更が許可されているすべてのスレッドから見ることができる。

環境は C-stack と binding-stack および lambda, block, catch, let, flet などのローカルブロックに繋がるフレームポインタにより構成されており、新しいスレッドが作成されたときに設置される。複数の環境が本当のマルチプロセッサマシンの上で同時に動作できるので、グローバル変数の中の現在の環境に対して単一なポインタを持つことができない。むしろ、環境のポインタを最上位の評価から低レベルのメモリ管理に変換するために、すべての内部関数にもう一つ引き数を付け加えなければならない。



図 5: Solaris オペレーティングシステムのスレッドモデル

12. マルチスレッド



図 6: 並列スレッドのメモリ要求とガーベージコレクトに並列実行

12.1.3 メモリ管理

EusLisp は、すべての型のオブジェクトに対して単一のヒープの中でフィボナッチバディを用いたメモリ管理方法を採用している。異なったメモリ要求を持つプログラムを実行した後、フィボナッチバディが様々な大きさのオブジェクトを等しく高速に配置することができ、コピーなしに素早くガーベージコレクトができ、かつ、高いメモリ利用率(内部損失が $10 \sim 15\%$ で外部損失は無視できる)を示すことを確信した。マルチスレッドのためには、2 つ目のポイントすなわちコピーなしのガーベージコレクトが重要である。もし、オブジェクトのアドレスがガーベージコレクトのコピーにより変化したならば、すべてのスレッド環境のスタックおよびCPU のレジスタ内のポインタを新しいアドレスに書き換えなければならない。しかし、この書き換えは不可能かあるいは大変困難である。

すべてのメモリ配置要求は、低レベルの alloc 関数によって処理される。alloc は、mutex-locking をする。なぜなら、大きさを持たないリストのグローバルデータベースを扱うからである。ガーベージコレクトの始まる時期およびどのスレッドによってガーベージコレクトが生じるのかを予言できないので、すべてのスレッドは突発的に起こるガーベージコレクトのために準備をしておかなければならない。生きているオブジェクトへのすべてのポインタは、ゴミとして掃除されないように保護するためいつでもガーベージコレクトからアクセスできるよう調整されなければならない。これは、スタックの上に保存されていることを信用する代わりに、それぞれの環境の固定されたスロットの中に極最近に配置されたオブジェクトに対するポインタを蓄積することによって達成される。

図 6 は、スレッドのメモリ要求と fork されたガーベージコレクト内部での marking および sweeping を並列 に行っている流れ図を示したものである。メモリ要求およびポインタの処理を行わないスレッドはガーベージ コレクトと並列に実行することができ、信号処理や画像獲得のような低レベルのタスクの実時間応答を改善することに注意すること。



図 7: スレッド間で制御やデータを受け渡すためのスレッドオブジェクト (左)とスレッドプール内に置かれたスレッドの集まり(右)

12.2 非同期プログラミングと並列プログラミングの構築

12.2.1 スレッド作成とスレッドプール

Solaris において複数のプロセッサ上で並列にプログラムを実行するためには、そのプログラムは関数の集まりとして書かれる必要がある。その関数はそれぞれプロセスの中で動的に作成されるスレッドによって実行される。スレッドを作成するために要求される時間は、プロセスを作成するよりも速くなければならないが、スタックを配置しスタックのオーバーフローを発見するためのページ属性を設定した後にスレッドが動き始めるまでに Euslisp において数ミリ秒かかる。この遅れは関数実施と比較して我慢できないため、評価時間におけるシステムコールに対する所要時間を排除する目的で、あらかじめ make-thread 関数により十分な数のスレッドが作られ、システムのスレッドプールに置かれる。スレッドプールの中のそれぞれのスレッドは、図7で示されるようにスレッド ID と同期のためのセマフォと引き数や評価結果を転送するためのスロットから構成されるスレッドオブジェクトにより表現される。

12.2.2 スレッドの並列実行

スレッドによる並列実行の配置のために、スレッド関数が使用される。スレッドは、スレッドプールから 1 つの空きスレッドを取り、共有メモリを経由して引き数を渡し、図 7 に示されるようなセマフォ信号によりスレッドを立ち上げ、停止することなしに呼出側へスレッドオブジェクトを返す。立ち上げられたスレッドは、呼び出したスレッドと並列に実行され、引き数を評価し始める。呼出側は、fork されたスレッドから評価結果を受けとるために wait-thread を使用する。plist マクロは、引き数の並列評価を記述するために大変便利な書式である。plist は、それぞれの引き数を評価するためにスレッドを割り当て、すべてのスレッドが評価し終わるのを待って結果をリストアップする。

12.2.3 同期の手法

MT-Eus は、mutex lock, condition variable, セマフォと呼ばれる3種類の同期手法を持っている。mutex lock は、スレッド間の共有変数の連続アクセスのために使用される。condition variable は、ロックの仮開放あるいは再獲得によって mutex-lock された部分の条件が true になることを待つことをスレッドに許可する。セマフォは、イベントの発生を通知するためあるいはリソースの分割を制御するために使用される。Solaris のカーネルが時間分割スケージューリングを基本として何気なしにタスク切り替えを発生するのと異なり、これらの同期手法は、任意の環境切り替えを引き起こす。



図 8: 同期障壁と同期メモリポート

12.2.4 同期障壁

barrier-synch は、複数のスレッドを同時に同期させるための機構である (図 8)。この目的において、barrier クラスのインスタンスが作成され、同期に関係するスレッドがオブジェクトに登録される。その後、それぞれのスレッドは barrier オブジェクトに:wait メッセージを送り、そのスレッドは停止する。オブジェクトに登録された最後のスレッドが:wait メッセージを送ったとき、待ちが解除され、すべての待ちスレッドが T の返り値を得る。barrier-sync は、マルチロボットシミュレーションのグローバルタイムという重要な役割を演じている。

12.2.5 同期メモリポート

同期メモリポート (synch-memory-port) は、スレッド間でデータを交換するための 1 種のストリームである (図 8)。プロセス内のすべてのスレッドはヒープメモリを共有しているので、もし 1 つのスレッドがグローバル変数にオブジェクトを割り当てた場合、直ちに他のスレッドから見れるようになる。しかしながら、共有メモリはグローバルデータが更新されたというイベントを送るための能力が不足している。同期メモリポートは、共有オブジェクトをアクセスするためのこの同期機能を保証する。同期メモリポートオブジェクトは、1つのバッファスロットと同期読み書きのために使用される 2 つのセマフォによって構成されている。

12.2.6 タイマー

実時間プログラムは、予定された時間に実行される関数や、特定の間隔で繰り返される関数をしばしば要求する。これまでの EusLisp は、Unix のインターバルタイマーによって定期的に生成される信号によって発生するユーザー関数を実行することができた。MT-Eus において、この実行はデッドロックを引き起こす。なぜなら、割り込みが mutex-lock されたブロック内から発生する可能性がある。したがって、制御は eval の最初のように安全な場所で渡されなければならない。上記の同期によって引き起こされる遅れを避けるために、MT-Eus はセマフォを経由して信号通知 (signal-notification) も提供する。言い換えれば、信号関数は呼び出されるかあるいは信号の到着を知らせる関数あるいはセマフォのどちらかをとる。セマフォは、低レベルで告示されるので、同期により隠れているところは最小である。

以下に示すものは、マルチスレッド機能を用いた画像処理のプログラム例である。画像入力スレッドとフィルタースレッドが生成される。samp-image は、33msec 毎に通知される samp-sem を待つことにより、定期的

processors	1	2	4	8	GC (ratio)
(a) compiled Fibonacci	1.0	2.0	4.0	7.8	0
(b) interpreted Fibonacci	1.0	1.7	2.7	4.4	0
(c) copy-seq	1.0	1.3	0.76	0.71	0.15
(d) make-cube	1.0	0.91	0.40	0.39	0.15
(e) interference-check	1.0	0.88	0.55	0.34	0.21

表 3: マルチプロセッサ上で実行されたプログラムの並列度

に画像データをとる。2 つのスレッドは thread-port の読み書きを通じて同期する。filter-image は、フィルターの並列計算のために複数のスレッドを使用している。

12.3 並列度の計測

表 3 は、32CPU で構成される Cray Superserver の上で測定した並列実行効率を示したものである。コンパイルされたフィボナッチ関数において線形な並列度が得られた。なぜなら、共有メモリへのアクセスがなく、それぞれのプロセッサのキャッシュメモリに十分ロードできるほどちいさなプログラムであったためである。それに反して、同じプログラムをインタープリターで実行したとき、キャッシュメモリを使い果たしたため、線形な高効率を達成することができなかった。さらにまた、頻繁に共有メモリを参照するようなプログラムやメモリ配置を要求するようなプログラムは1個のプロセッサで実行したときよりも良い性能を得ることができなかった。これは、頻繁なキャッシュメモリの入れ替えが原因と考えられる。

12.4 スレッド生成

スレッドは、計算を割り当てる単位であり、普通 lisp 書式を評価するための単位である。Euslisp のスレッドは、thread クラスのインスタンスによって表現される。このオブジェクトは、内容を表現するスレッド全体というよりはむしろ、実際に引き数と結果を渡すためのスレッドの制御ポートであり、評価を始めるものである。

lsize ワードの lisp スタックと csize ワードの C-スタックを持つスレッドを num 個だけ生成し、システムのスレッドプールに置く。スレッドプール内のすべてのスレッドは、sys:*threads*に束ねてあり、make-thread が呼び出されたときに拡張される。thread 関数によって、計算はスレッドプールの中で空いたスレッドの1つに割り当てられる。したがって、指定された計算がどのスレッドに割り当てられるか制御できないため、スレッドのスタックサイズを変更する方法が無い。

sys:*threads* [变数]

make-thread によって作成されたすべてのスレッドのリストを持つ。

sys::free-threads [関数]

スレッドプール内の空いたスレッドのリストを返す。もし、結果が NIL ならば、スレッドへのタスクの新しい付託は現在実行されているスレッドのどれかの評価が終了するかあるいは make -thread によってスレッドプールに新しいスレッドを生成するまで停止される。

sys:thread func &rest args

[関数]

スレッドプールから空いたスレッドを 1 つ取り出し、(func . args) の評価のためにそれを割り当てる。 sys:thread は、args を展開したリストに func を適用するが、関数の適用結果を受け取らないため、非同期の funcall とみなすことができる。むしろ、sys:thread は funcall に割り当てられたスレッドオブジェクトを返すので、実際の結果は sys:wait-thread によって後から得ることができる。

```
(defun compute-pi (digits) ...)
(setq trd (sys:thread \#'compute-pi 1000)) ;assign compute-pi to a thread
... ;; other computation
```

(sys:wait-thread trd) ;get the result of (compute-pi 1000)

sys:thread-no-wait func &rest args

[関数]

空いたスレッドの1つに計算を割り当てる。スレッドは、wait-thread されることなしに、評価が終了したとき、スレッドプールに戻される。

sys:wait-thread thread

[関数]

thread に sys:thread 関数によって与えられた funcall の評価が終了するのを待ち、その結果を受け取り、返す。もし、スレッドに sys:thread によって評価が割り当てられたならば、sys:wait-thread は、必須である。なぜなら、スレッドは結果を転送し終わるまでスレッドプールに戻らないためである。

sys:plist &rest forms

[マクロ]

異なったスレッドにより並列に forms を評価し、すべての評価が終了するのを待ち、結果のリストを返す。sys:plist は、リスト化されたそれぞれの form が関数呼び出しされることを除いて、parallel-list としてみなされるだろう。

12.5 同期

Solaris オペレーティングシステム内には、マルチスレッドプログラムのために 4 つの同期手法がある。Euslisp は、mutex-lock と condition variable とセマフォを提供している。reader-writer lock は実現されてない。これらの手法に基づいて、同期メモリポートや同期障壁のような高レベルの同期機構が実現されている。

sys:make-mutex-lock

[関数]

mutex-lock を作り、返す。mutex-lock は、6 つの要素を持つ整数ベクトルで表現されている。

sys:mutex-lock mlock [関数]

mutex-lock の mlock をロックする。もし、mlock が既に他のスレッドからロックされているなら、mutex-lock はロックが外されるまで待つ。

$sys:mutex-unlock \ mlock$

[関数]

mlockを解除し、このロックを待っている他のスレッドの内の1つが再び実行され始める。

sys:mutex mlock &rest forms

[マクロ]

mutex-lock と mutex-unlock は、組みで使用されなければならない。mutex は、重要な部分をひとまとまりにしたマクロである。mlock は、評価する forms が評価される前にロックされる。そして、評価が終了したときに、ロックが解除される。このマクロは、以下の progn form に展開される。unwind-protectは、forms の評価中にエラーが発生したときでさえ、ロックの解除を保証するために使用されることに注意すること。

(progn

(sys:mutex-lock mlock)
(unwind-protect
 (progn . forms)
 (sys:mutex-unlock mlock)))

sys:make-cond

[関数]

4 つの要素を持つ整数ベクトルである condition variable オブジェクトを作る。condition variable の返り値としては、ロックされてない状態でである。

sys:cond-wait condvar mlock

[関数]

condvar に信号が出されるまで待つ。もし、condvar が他のスレッドによってすでに獲得されていたならば、mlock を解除し、condvar に信号が出されるまで待つ。

sys:cond-signal condvar

[関数]

condvar で示される condition variable に信号を出す。

sys:make-semaphore

[関数]

20 の要素を持つ整数ベクトルによって表現されるセマフォオブジェクトを作る。

sys:sema-post sem

[関数]

sem に信号を出す。

sys:sema-wait sem

[関数]

sem に信号が来るまで待つ。

sys:barrier-synch

[クラス]

:super **propertied-object**

:slots threads n-threads count barrier-cond threads-lock count-lock

同期障壁のための構造を表現する。同期を待っているスレッドは、thread-lockによって相互に排除されるthreadに置かれる。barrier-synch オブジェクトが生成されたとき、count は、ゼロに初期化される。同期しているスレッドは、:add メッセージを送ることによって、threads リストに置かれる。この barrier-synch オブジェクトに:wait を送ることは、count を増加させることの原因となり、送られたスレッドは待ち状態になる。threads の中のすべてのスレッドに:wait メッセージが送られたとき、待ちが解除され、すべてのスレッドの実行が再び始まる。同期は、count-lockの mutex-lockと barrier-condの condition-variableの組み合わせによって実行される。

init [メソッド]

この barrier-synch オブジェクトを初期化する。2 つの mutex-lock と 1 つの condition-variable が生成される。

:add thr

threads リストの中に thr スレッドが追加される。

:remove thr

threads リストの中から thr スレッドを削除する。

:wait [メソッド]

threads リストの中のすべてのスレッドに:wait が配布されるのを待つ。

sys:synch-memory-port

[クラス]

:super propertied-object

:slots sema-in sema-out buf empty lock

1 方向の同期されたメモリポートを実現する。このオブジェクトを通じてデータを転送するために、2 つのスレッドを同期させる。転送制御は、セマフォを用いて実現されている。

:read [メソッド]

この synch-memory-port にバッファされているデータを読む。もし、まだ書かれていなかったならば、:read は停止する。

:write datum [メソッド]

バッファに datum を書き込む。1 ワードのバッファのみ存在するので、もし他のデータが既に書かれておりまだ読まれていなかったならば、:write は:read によってそのデータが読み込まれるまで待つ。

:init [メソッド

この sync-memory-port を初期化する。これには 2 つのセマフォが生成され、:write 動作が可能な状態になっている。

13 幾何学関数

13.1 実数ベクトル (float-vector)

float-vector は、要素が実数である 1 次元ベクトルである。float-vector は、どんなサイズでも良い。result が 引き数リストで指定されているとき、その result は float-vector であるべきである。

float-vector &rest numbers

[関数]

numbers を要素とする float-vector を新しく作る。(float-vector 1 2 3) と#F(1 2 3) の違いに注意すること。前者は、呼ばれたときはいつでもベクトルが生成されるが、後者は読み込まれたときのみ生成される。

float-vector-p obj

[関数]

objが float-vector であるならば、T を返す。

v+ fltvec1 fltvec2 &optional result

[関数]

2つの float-vector を加える。

v- fltvec1 & optional fltvec2 result

[関数]

2 つの float-vector を差し引く。もし、fltvec2 が省略されているならば、fltvec1 の符号が反転される。

v. fltvec1 fltvec2

[関数]

2 つの float-vector の内積を計算する。

v* fltvec1 fltvec2 & optional result

[関数]

2 つの float-vector の外積を計算する。

v.* fltvec1 fltvec2 fltvec3

[関数]

スカラー3重積を計算する。(v.* A B C)=(V. A (V* B C))=(V. (V* A B) C)

v< fltvec1 fltvec2

[関数]

もし、fltvec1 の要素が fltvec2 の対応する要素よりすべて小さいとき、T を返す。

 $\mathbf{v} > fltvec1 \ fltvec2$

[関数]

もし、fltvec1 の要素が fltvec2 の対応する要素よりすべて大きいとき、T を返す。

vmin &rest fltvec

[関数]

fltvec の中のそれぞれの次元における最小値を捜し、その値で float-vector を新しく作る。vmin と vmax は、頂点の座標から最小の minimal-box を見つけるために使用される。

vmax &rest fltvec

[関数]

fltvec の中のそれぞれの次元における最大値を捜し、その値で float-vector を新しく作る。

minimal-box v-list minvec maxvec [err]

[関数]

与えられた v-list に対して minimal bounding box を計算し、その結果を minvec と maxvec に蓄積する。もし、実数 err が指定されているならば、minimal box はその比率によって成長する。すなわち、もし err が 0.01 のとき、 minvec のそれぞれの要素は minvec と maxvec との距離の 1%減少する。そして、maxvec のそれぞれの要素は 1%増加する。minimal-box は、minvec と maxvec との距離を返す。

scale number fltvec Goptional result

[関数]

fltvec のすべての要素をスカラー number 倍する。

norm fltvec [関数]

fltvec のノルムを求める。 $\|fltvec\|$

norm2 fltvec [関数]

fltvec のノルムの2乗を求める。 $||fltvec||^2$ =(v. fltvec fltvec)

normalize-vector fltvec & optional result

[関数]

fltvec のノルムが 1.0 となるように正規化する。

distance fltvec1 fltvec2

[関数]

2 つの float-vector の距離を返す。|fltvec - fltvec2|

distance2 fltvec1 fltvec2

[関数]

2 つの float-vector の距離の 2 乗を返す。 $|fltvec - fltvec 2|^2$

homo2normal homovec &optional normalvec

[関数]

同次ベクトル homovec を正規表現に変換する。

homogenize normalvec &optional homovec

[関数]

正規ベクトル normalvec を同次表現に変換する。

midpoint p p1 p2 Goptional result

[関数]

p は実数で、p1,p2 は同次元の float-vector である。p1-p2 を p:(1-p) の比率で等分した点 $(1-p)\cdot p1+p\cdot p2$ を返す。

rotate-vector fltvec theta axis &optional result

[関数]

2 次元あるいは 3 次元の fttvec を axis 回りに theta ラジアン回転する。axis は、:x,:y,:z,0,1,2,または NIL の内の一つである。axis が NIL のとき、fttvec は 2 次元として扱われる。3 次元空間の任意の軸の回りにベクトルを回転するためには、rotation-matrix で回転行列を作り、そのベクトルにかければよい。

13.2 行列と変換

行列は、要素がすべて実数の 2 次元の配列である。ほとんどの関数において行列はどんなサイズでもよいが、 v^* , v^* , euler-angle, rpy-angle 関数では 3 次元の行列のみ扱うことができる。transform, m^* と transpose は、行列を正方行列に限定せず、一般の n^*m 行列に対して処理を行う。

result パラメータを受けた関数は、計算結果をそこに置く。そのため、ヒープは使用しない。すべての行列 関数は、正規座標系における変換を考慮しており、同次座標系は考慮していない。

rpy-angle 関数は、回転行列をワールド座標系における z,y,x 軸回りの 3 つの回転角に分解する。euler-angle 関数は rpy-angle と同様に分解するが、回転軸がローカル座標系の z,y,z 軸となっている。角度が反対方向にも得られるため、これらの関数は 2 つの解を返す。

```
; Mat is a 3X3 rotation matrix.
(setq rots (rpy-angle mat))
(setq r (unit-matrix 3))
(rotate-matrix r (car rots) :x t r)
(rotate-matrix r (cadr rots) :y t r)
(rotate-matrix r (caddr rots) :z t r)
;--> resulted r is equivalent to mat
```

3次元空間の位置と方向の組みを保つために、13.4節に記載されている coordinates と cascaded-coords クラスを使用すること。

matrix & rest elements [関数]

elementsから行列を新しく作る。Row x Col = (elementsの数) x (最初の element の長さ) elements は、どの型の列 ((list 1 2 3) や (vector 1 2 3) や (float-vector 1 2 3)) でもよい。それぞれの列は行列の行ベクトルとしてならべられる。

make-matrix rowsize columnsize Coptional init

[関数]

rowsize × columnsize の大きさの行列を作る。

matrixp obj [関数]

もし、 obj が行列のとき、すなわち、 obj が 2 次元の配列でその要素が実数であるとき、T を返す。

matrix-row mat row-index

[関数]

行列 mat から row-index で示される行ベクトルを抽出する。matrix-row は、setf を使用することにより行列の特定の行にベクトルを設定することにも使用される。

matrix-column mat column-index

[関数]

行列 mat から coloumn-index で示される列ベクトルを抽出する。matrix-column は、setf を使用することにより行列の特定の列にベクトルを設定することにも使用される。

m* matrix1 matrix2 &optional result

[関数]

matrix1 と matrix2 の積を返す。

transpose matrix & optional result

[関数]

matrix の転置行列を返す。すなわち、matrix の列と行を入れ替える。

unit-matrix dim

[関数]

 $dim \times dim$ の単位行列を作る。

replace-matrix dest src

[関数]

行列 dest のすべての要素を同一な行列 src で置き換える。

scale-matrix scalar mat

[関数]

mat のすべての要素に scaler を掛ける。

copy-matrix matrix

[関数]

matrix のコピーを作る。

transform matrix fltvector & optional result

[関数]

行列 matrix をベクトル fltvector の左から掛ける。

transform fltvector matrix Goptional result

[関数]

行列 matrix をベクトル fltvector の右から掛ける。

rotate-matrix matrix theta axis &optional world-p result

[関数]

rotate-matrix で行列 matrix を回転させるとき、回転軸(:x,:y,:z または 0,1,2)はワールド座標系 あるいはローカル座標系のどちらかを与えられる。もし、world-p に NIL が指定されているとき、ローカル座標系の軸に沿った回転を意味し、回転行列を左から掛ける。もし、world-p が non-NIL のとき、ワールド座標系に対する回転行列を作り、回転行列を右から掛ける。もし、axis に NIL が与えられたとき、行列 matrix は 2 次元と仮定され、world-p の如何にかかわらず 2 次元空間の回転が与えられる。

rotation-matrix theta axis &optional result

[関数]

axis 軸回りの 2 次元あるいは 3 次元の回転行列を作る。軸は:x,:y,:z,0,1,2,3 次元ベクトルあるいは NIL のどれかである。2 次元回転行列を作るとき、axis は NIL でなければならない。

rotation-angle rotation-matrix

[関数]

rotation-matrixから等価な回転軸と角度を抽出し、実数と float-vector のリストを返す。rotation-matrixが単位行列のとき、NIL が返される。また、回転角が小さいとき、結果がエラーとなる。rotation-matrixが 2 次元のとき、1 つの角度値が返される。

rpy-matrix ang-z ang-y ang-x

[関数]

ロール、ピッチ、ヨー角で定義される回転行列を作る。最初に、単位行列をx軸回りにang-xラジアン回転させる。次に、y軸回りにang-yラジアン、最後にz軸回りにang-zラジアン回転させる。すべての回転軸はワールド座標系で与えられる。

rpy-angle matrix

[関数]

matrix の 2 組のロール、ピッチ、ヨー角を抽出する。

Euler-matrix ang-z ang-y ang2-z

[関数]

3 つのオイラー角で定義される回転行列を作る。最初に単位行列を z 軸回りに ang-z 回転させ、次に y 軸回りに ang-y 回転させ、最後に z 軸回りに ang2-z 回転させる。すべての回転軸はローカル座標系で与えられる。

Euler-angle matrix

[関数]

matrix から 2 組のオイラー角を抽出する。

13.3 LU 分解

lu-decompose と lu-solve は、線形の連立方程式を解くために用意されている。最初に、lu-decompose は行列を下三角行列を上三角行列に分解する。もし、行列が特異値なら、lu-decompose は NIL を返す。そうでなければ、lu-solve に与えるべき順列ベクトルを返す。lu-solve は、与えられた定数ベクトルの解を LU 行列で計算する。この手法は、同じ係数行列と異なった定数ベクトルのたくさんの組に対して解を求めたいときに効果的である。simultaneous-equation は、1 つの解だけを求めたいときにもっとも手軽な関数である。lu-determinant は、LU 分解された行列の行列式を計算する。inverse-matrix 関数は、lu-decompose を 1 回と lu-solve を n 回使って逆行列を求める。3*3 行列での計算時間は約 4ms である。

$\textbf{lu-decompose}\ \textit{matrix}\ \mathcal{C}optional\ \textit{result}$

[関数]

matrixにLU分解を実行する。

lu-solve lu-mat perm-vector bvector [result]

[関数]

 ${
m LU}$ 分解された 1 次連立方程式を解く。 perm-vector は、 ${
m lu-decompose}$ で返された結果でなければならない。

lu-determinant lu-mat perm-vector

[関数]

LU 分解された行列の行列式を求める。

simultaneous-equation mat vec

[関数]

係数が mat で、定数が vec で記述される 1 次連立方程式を解く。

inverse-matrix mat

[関数]

正方行列 mat の逆行列を求める。

pseudo-inversemat特異値分解を用いて擬似逆行列を求める。

[関数]

13.4 座標系

座標系と座標変換は、coordinates クラスで表現される。4*4 の同次行列表現の代わりに、Euslisp 内で座標系は、高速性と一般性のために 3*3 の回転行列と 3 次元位置ベクトルの組で表現される。

coordinates [クラス]

:super **propertied-object** :slots (pos:type float-vector

rot:type array)

位置ベクトルと 3x3 の回転行列の組みで座標系を定義する。

coordinates-p obj [関数]

objが coordinates クラスかまたはそのサブクラスのインスタンスのとき、T を返す。

:rot [メソッド]

この座標系の 3x3 回転行列を返す。

:pos [メソッド]

この座標系の3次元位置ベクトルを返す。

:newcoords newrot &optional newpos

[メソッド]

newrot と newpos でこの座標系を更新する。newpos が省略された時は newrot には coordinates のインスタンスを与える。この座標系の状態が変化するときはいつでも、このメソッドを用いて新しい回転行列と位置ベクトルに更新するべきである。このメッセージはイベントを伝えて他の:update メソッドを呼び出す。

:replace-coords newrot &optional newpos

[メソッド]

:newcoords メソッドを呼び出さずに rot と pos スロットを変更する。 newpos が省略された時は newrot には coordinates のインスタンスを与える。

:coords [メソッド]

:copy-coords &optional dest

[メソッド]

もし dest が与えられなかったとき、:copy-coords は同じ rot と pos スロットを持つ座標系オブジェクトを作る。もし、dest が与えられたとき、dest 座標系にこの座標系の rot と pos をコピーする。

:reset-coords [メソッド]

この座標系の回転行列を単位行列にし、位置ベクトルをすべてゼロにする。

:worldpos [メソッド]

:worldrot [メソッド]

:worldcoords [メソッド]

このオブジェクトのワールド座標系における位置ベクトル・回転行列・座標系を計算する。その座標系は、いつもワールド座標系で表現されていると仮定され、これらのメソッドは簡単に pos と rot と self を返すことができる。これらのメソッドは cascaded-coords クラスと互換性がとられている。cascaded-coords ではワールド座標系での表現と仮定していない。

:copy-worldcoords &optional dest

[メソッド]

最初に、ワールド座標系が計算され、dest にコピーされる。もし、dest が指定されてないとき、新たに coordinates オブジェクトを作る。

:rotate-vector vec

[メソッド]

この座標系の回転行列によって *vec* を回転させる。すなわち、この座標系で表現される方向ベクトルをワールド座標系における表現に変換する。この座標系の位置は、回転に影響を与えない。

:transform-vector vec

[メソッド]

この座標系で表現される vec をワールド座標系の表現に変換する。

:inverse-transform-vector vec

[メソッド]

ワールド座標系における vec をローカル座標系の表現に逆変換する。

:transform trans &optional (wrt :local)

[メソッド]

wrt 座標系で表現される trans によってこの座標系を変換する。trans は座標系の型でなければならないし、wrt は:local,:parent,:world のキーワードあるいは coordinates のインスタンスでなければならない。もし wrt が:local のとき、trans をこの座標系の右から適用する。もし wrt が:world,:parent のとき、trans を左から掛ける。もし wrt が coordinates の型であるとき、wrt 座標系で表現される trans は最初にワールド座標系の表現に変換され、左から掛ける。

:move-to trans &optional (wrt :local)

[メソッド]

wrt で表現される trans でこの座標系の rot と pos を置き換える。

:translate p & optional (wrt :local)

[メソッド]

このオブジェクトの位置を wrt 座標系で相対的に変更する。

:locate p & optional (wrt :local)

[メソッド]

この座標系の位置を wrt 座標系で絶対的に変更する。もし、wrt が: local のとき、: $\mathbf{translate}$ と同一な効果を生む。

:rotate theta axis & optional (wrt :local)

[メソッド]

axis 軸回りに theta ラジアンだけ相対的にこの座標系を回転させる。axis は、軸キーワード (:x, :y, :z) あるいは任意の float-vector である。axis は wrt 座標系で表現されていると考える。よって、もし wrt が:local で axis が:z であるとき、座標系はローカル座標系の z 軸回りに回転される。もし wrt が:world,:parent であるとき、ワールド座標系の z 軸回りに回転される。言い換えると、もし wrt が:local のとき、回転行列はこの座標系の右から掛けられる。そして、もし wrt が:world あるいは:parent のとき、回転行列は左から掛けられる。wrt が:world あるいは:parent でさえ、この座標系の pos ベクトルは変化しない。本当にワールド座標系の軸回りに回転するためには、回転を表現する coordinates クラスのインスタンスを:transform メソッドに与えなければならない。

:orient theta axis &optional (wrt :local)

[メソッド]

rot を強制的に変更する。:rotate メソッドの絶対値版である。

:inverse-transformation

[メソッド]

この座標系の逆変換を持つ座標系を新しく作る。

:transformation coords (wrt :local)

[メソッド]

この座標系と引き数で与えられる coords との間の変換を作る。もし、wrt が:local であるとき、ローカル座標系で表現される。すなわち、もしこの:transformation の結果を:transform の引き数として wrt=:local と一緒に与えたとき、この座標系は coords と同一な座標系に変換される。

:Euler az1 ay az2 [メソッド]

オイラー角 (az1, ay, az2) で表現される回転行列を rot に設定する。

:roll-pitch-yaw roll pitch yaw

[メソッド]

ロール・ピッチ・ヨー角で表現される回転行列を rot に設定する。

:4x4 Coptional mat44

「メソッド]

もし、mat44 として 4x4 行列が与えられるとき、3x3 回転行列と 3 次元位置ベクトルの座標表現に変換される。もし、mat44 が与えられないとき、この座標系の表現を 4x4 の同次行列表現に変換して返す。

:init &key :pos #f(0 0 0)

[メソッド]

 $#2f((1 \ 0 \ 0) \ (0 \ 1 \ 0) \ (0 \ 0 \ 1))$

:rpy roll pitch yaw :Euler az ay az2 :axis rotation-axis :angle rotation-angle :4X4 4x4 matrix

 $: coords \qquad another \ coordinates$

:properties a list of (ind . value) pair

:name name property

この coordinates オブジェクトを初期化し、rot と pos を設定する。それぞれのキーワードの意味は、以下に示す通りである。

:dimension 2 あるいは3 (デフォルトは3)

:pos 位置ベクトルを指定する (デフォルトは #f(0 0 0))

:rot 回転行列を指定する(デフォルトは単位行列)

:Euler オイラー角として3つの要素の列を与える

:rpy ロール・ピッチ・ヨー角として3つの要素の列を与える

:axis 回転軸 (:x,:y,:z あるいは任意の float-vector)

:angle 回転角 (:axis と一緒に使用)

:wrt 回転軸を示す座標系 (デフォルトは :local)

:4X4 4X4 行列 (pos と rot を同時に指定)

:coords coords から rot と pos をコピーする

:name :name 値を設定する。

:angle は:axis と組みで唯一使用することができる。その軸は:wrt 座標系で決定される。:wrt と関係なした:Euler はローカル座標系で定義されるオイラー角(az1, ay と az2)をいつも指定する。また、:rpy はワールド座標系の z, y と x 軸回りの角度を指定する。:rot, :Euler, :rpy, :axis, :4X4 の中から 2 つ以上を連続で指定することはできない。しかしながら、指定してもエラーは返さない。axis と:angle パラメータには列を指定することができる。その意味は、与えられた軸回りの回転を連続的に処理する。属性とその値の組みのリストを:properties の引き数として与えることができる。これらの組みは、この座標系の :properties の引き数として与えることができる。これらの組みは、この座標系の :properties の :proper

13.5 連結座標系

cascaded-coords [クラス]

:super coordinates

:slots (parent descendants worldcoords manager changed)

連結された座標系を定義する。cascaded-coords は、しばしば cascoords と略す。

:inheritance [メソッド]

この cascaded-coords の子孫をすべて記述した継承 tree リストを返す。もし、a と b がこの座標系の 直下の子孫で c が a の子孫であるとき、((a (c)) (b)) を返す。

 $\textbf{:assoc} \ childcoords \ \mathscr{C}optional \ relative\text{-}coords$

[メソッド]

childcoords は、この座標系の子孫として関係している。もし、childcoords が既に他の cascaded-coords に assoc されているとき、childcoords はそれぞれの cascaded-coords が 1 つの親しか持っていないなら dessoc される。ワールド座標系における childcoords の方向あるいは位置は変更されない。

:dissoc childcoords [メソッド]

この座標系の子孫リストから *childcoords* を外す。ワールド座標系における *childcoords* の方向あるいは 位置は変更されない。

:changed [メソッド]

この座標系の親座標系が変更されていることを通知する。また、もっとあとでワールド座標系が要求されたとき、ワールド座標系を再計算する必要がある。

:update [メソッド]

現在のワールド座標系を再計算するために:worldcoords メソッドを呼び出す。

:worldcoords [メソッド]

ルートの座標系からこの座標系までの全ての座標系を連結させることにより、この座標系をワールド座標系で表現した coordinates オブジェクトで返す。その結果は、このオブジェクトが持ち、後に再利用される。よって、この結果の座標系を変更すべきでない。

:worldpos [メソッド]

ワールド座標系で表現したこの座標系の rot を返す。

:worldrot [メソッド]

ワールド座標系で表現したこの座標系の pos を返す。

:transform-vector vec [メソッド]

vec をこのローカル座標系での表現とみなして、ワールド座標系での表現に変換する。

:inverse-transform-vector vec [メソッド]

ワールド座標系で表現される vec をこのローカル座標系の表現に逆変換する。

:inverse-transformation [メソッド]

この座標系の逆変換を表現する coordinates のインスタンスを作る。

:transform trans & optional (wrt :local) [メソッド]

:translate fltvec Eoptional (wrt :local) [メソッド]

:locate fltvec &optional (wrt :local)

[メソッド]

:rotate theta axis &optional (wrt :local)

[メソッド]

:orient theta axis &optional (wrt :local)

[メソッド]

coordinates クラスの記述を参照すること。

make-coords &key :pos :rot :rpy :Euler :angle :axis :4X4 :coords :name

[関数]

make-cascoords &key:pos:rot:rpy:Euler:angle:axis:4X4:coords:name

[関数]

coords &key:pos:rot:rpy:Euler:angle:axis:4X4:coords:name

[関数]

cascoords &key :pos :rot :rpy :Euler :angle :axis :4X4 :coords :name

[関数]

これらの関数は、すべて coordinates あるいは cascaded-coords を新しく作る。キーワードパラメータについては、coordinates クラスの:init メソッドを見ること。

transform-coords coords1 coords2 &optional (coords3 (coords))

[関数]

coords1 が coords2 に左から適用(乗算)される。その積は coords3 に蓄積される。

transform-coords* & rest coords

[関数]

coords にリスト表現されている変換を連結させる。連結された変換で表現される coordinates のインスタンスを返す。

wrt coords vec

[関数]

vec を coords における表現に変換する。その結果は (send coords: transform-vector vec) と同一である。



図 9: 頂点とエッジと面の分類

14 幾何学モデリング

Euslisp は、3次元の幾何学モデルの内部表現として Brep (境界表現)を採用している。Brep 内の要素は edge, plane, polygon, face, hole, や body クラスによって表現される。基本 body の作成関数と body の 合成関数は、これらのクラスの新しいインスタンスを作る。もっと属性を持った独自の幾何学クラスを使用するためには、*edge-class*, *face-class*と*body-class*の特殊変数に独自のクラスオブジェクトを設定すること。

14.1 種々の幾何学関数

vplus vector-list [関数]

vector-list のすべての要素の合計を実数ベクトルとして新しく作り、返す。 $\mathbf{v}+$ との違いは、 \mathbf{vplus} が 2 つ以上の引数について合計を計算し、結果のベクトルが指定できない点である。

vector-mean vector-list [関数]

vector-list の平均ベクトルを返す。

triangle a b c & optional (normal #f(0 0 1))

[関数]

a, b, c は、2 次元または 3 次元の実数ベクトルである。normal は、a,b,c が置かれる平面の正規ベクトルである。triangle は a,b,c で形作られる三角形の領域の 2 倍の大きさを返す。normal と同じ方向から見たときに a,b,c が時計方向に回転するならば、triangle は正である。言い換えると、もし triangle が正ならば、c は a-b の線分の左手側に位置し、b は a-c の右手側に位置している。

 $triangle-normal\ a\ b\ c$ [関数]

a b c で定義される三角形に対して垂直方向の正規ベクトルを見つける。

vector-angle v1 v2 & optional (normal (v* v1 v2))

[関数]

2 つのベクトルの角度を計算する。これは次の式であらわされる $atan(normal\cdot(v1\times v2), v1\cdot v2)$ 。v1,v2 と normal は正規ベクトルでなければならない。normal が与えられないとき、v1,v2 の共通垂線の正規ベクトルが使用される。この場合、結果は 0 から π までの範囲の正の角度になる。符号付きの角度を得るためには、normal を指定しなければならない。

${\bf face\text{-}normal\text{-}vector}\ \textit{vertices}$

[関数]

同じ平面の上にあるベクトルのリストから面の正規化ベクトルを計算する。

farthest p points

[関数]

3次元ベクトルのリスト points の中から p より最も遠い点を捜す。

farthest-pair points

[関数]

3次元ベクトルのリスト points からもっとも遠い点の組を捜す。

maxindex 3D-floatvec

[関数]

3D-floatvecの3つの要素の中で絶対値が最大の要素の位置を捜す。

random-vector & optional (range 1.0)

[関数]

3次元デカルト空間の中で同次的に分散されるランダムベクトルを発生する。

random-normalized-vector & optional (range 1.0)

[関数]

3次元の正規化ランダムベクトルを返す。

random-vectors count range

[関数]

range の大きさのランダムベクトルを count 個つくり、そのリストを返す。

line-intersection p1 p2 p3 p4

[関数]

p1, p2, p3, p4 は、すべて 2 次元以上の実数ベクトルである。p1-p2 と p3-p4 が平面上の 2 つの線分として定義される。line-intersection は、これらの 2 つの線分の交差する点のパラメータ(線分に置ける交点の位置の比率)を 2 要素のリストで返す。3 次元で使用するとき、p1, p2, p3, p4 は共通平面内になければならない。

collinear-p p1 p2 p3 &optional tolerance

[関数]

p1, p2, p3は、すべて3次元の実数ベクトルで3つの点を表現している。collinear-pは、もし $\|((p2-p1)\times(p3-p1))$ が*coplanar-threshold*より小さければ、p1-p3の線分の上に p2を投影したときのパラメータを返す。そうでなければ、NILを返す。

find-coplanar-vertices p1 p2 p3 vlist

[関数]

p1, p2, p3 は、3 次元の実数ベクトルで、この3 つのベクトルから平面を表現している。find-coplanar-vertices は、その平面内にある点を vlist の中から捜す。

find-connecting-edge vertex edgelist

[関数]

vertex に接続された edgelist の中からエッジを捜す。

make-vertex-edge-htab bodfacs

[関数]

bodfacs は、body あるいは face のリストである。make-vertex-edge-htab は、bodfacs の中の頂点を抽出し、それに接続されるエッジの検索ができるハッシュテーブルを作る。

left-points points p1 p2 normal

[関数]

points, p1, p2 は、正規化ベクトル normal で表現される平面内にあるものと仮定する。left-points は、

p1, p2 間の線分の左側に置かれている点を points の中から捜し、集める。

right-points points p1 p2 normal

[関数]

points, p1, p2 は、正規化ベクトル normal で表現される平面内にあるものと仮定する。right-points は、p1, p2 間の線分の右側に置かれている点を points の中から捜し、集める。

left-most-point points p1 p2 normal

[関数]

points, p1, p2 は、正規化ベクトル normal で表現される平面内にあるものと仮定する。left-most-points は、p1, p2 で決定される線分の左側に置かれている点を points の中から捜し、その中でもっとも遠い点を返す。

right-most-point points p1 p2 normal

[関数]

points, p1, p2 は、正規化ベクトル normal で表現される平面内にあるものと仮定する。right-most-points は、p1, p2 で決定される線分の右側に置かれている点を points の中から捜し、その中でもっとも遠い点を返す。

eps= num1 num2 [(tolerance *epsilon*)]

[関数]

2 つの実数 num1 と num2 を比較して、torelance の誤差範囲内で等しいかどうかを返す。

eps< num1 num2 [(tolerance *epsilon*)]

[関数]

num1 が明らかに num2 よりも小さいとき T を返す。すなわち、num1<num2-tolerance である。

eps<= num1 num2 [(tolerance *epsilon*)]

[関数]

num1が多分 num2よりも小さいときあるいは等しいとき T を返す。すなわち、num1 < num2 + toleranceである。

eps> num1 num2 [(tolerance *epsilon*)]

[関数]

num1が明らかに num2 よりも大きいとき T を返す。すなわち、num1>num2-tolerance である。

eps>= num1 num2 [(tolerance *epsilon*)]

[関数]

num1が多分 num2 よりも大きいときあるいは等しいとき T を返す。すなわち、num1>num2+toleranceである。

bounding-box

[クラス]

 $: super \qquad \mathbf{object}$

:slots (minpoint maxpoint)

xy-,yz-や zx-平面に平行な面を境界とする最小の四角柱を定義する。bounding-box は、初期に与えられるベクトルの次元によって、どんな次元でも使用することができる。bounding-box は、surrounding-box の名前で定義されていた。

:box

[メソッド]

この bounding-box のオブジェクト自身を返す。

:volume

[メソッド]

この bounding-box の体積を返す。

 $: \mathbf{grow} \ \mathit{rate}$

[メソッド]

この bounding-box のサイズを rate 率で増加または減少させる。 rate が 0.01 のとき、1%拡大される。

:inner point

[メソッド]

point がこの bounding-box 内にあれば T を返し、そうでないときは NIL を返す。

:intersection box2 &optional tolerance

[メソッド]

この bounding-box と box2 との共通 bounding-box を返す。もし、torelance が与えられたならば、この box はその誤差で拡大される。もし、共通部分がなければ、NIL を返す。

:union box2 [メソッド]

この bounding-box と box2 を結合した bounding-box を返す。

:intersectionp box2 [メソッド]

この bounding-box と box2 との間に共通領域があれば T を返し、そうでなければ NIL を返す。このメソッドは、:intersection よりも速い。なぜなら、新しい bounding-box のインスタンスを作らないためである。

 $: {\bf extreme-point} \ \mathit{direction}$

[メソッド]

この bounding-box の8つの頂点の中で、direction との内積が最大のものを返す。

:corners [メソッド]

この bounding-box のすべての頂点のリストを返す。もし、この box が2 次元であれば、4 点が返される。同様に3 次元の場合、8 点が返される。

:below box2 & optional (direction #(0 0 1)

「メソッド]

この bounding-box が box2 に対して direction の示すベクトルの下の方向にあれば T を返す。この boundign-box が direction の方向に動かされるとき、2 つの box に共通部分でできるかどうかをチェックするために使用される。

:body [メソッド]

この bounding-box によって内包される立方体を表現する body を返す。

 $\textbf{:init} \ vlist \ \mathcal{E}optional \ tolerance$

[メソッド]

minpoint とmaxpoint スロットを vlist から設定する。もし、torelance が指定されたなら、この bounding-box はその量で増大される。

make-bounding-box points [tolerance]

[関数]

points のリストの中から最小と最大の座標値を見つけ、bounding-box のインスタンスを作る。

bounding-box-union boxes [tolerance *contact-threshold*]

[関数]

boxes の結合で表現される bounding-box のインスタンスを作る。その結果は、tolerance によって拡張される。

bounding-box-intersection boxes [tolerance *contact-threshold*]

[関数]

boxes の共通領域を表現する bounding-box のインスタンスを作る。その結果は、tolerance によって拡張される。

14.2 線とエッジ

頂点の順番やエッジの順番の向きは、body を外から見たときに反時計方向に整列するように定義される。 pvertex やnvertex やpface やnface は、pface が外から見たときエッジの左側に位置しているとき、pvertex から nvertex に向かう方向にエッジを定義する。

line [クラス]

 $: super \qquad \textbf{propertied-object}$

:slots ((pvert :type floatvector) (nvert :type floatvector))

pvert と nvert の上を通る線分を定義する。線分は、 *pvert* から *nvert* に向かう方向を持つ。t · pvert +(1-t)nvert

:vertices [メソッド]

pvert と nvert のリストを返す。

:point p [メソッド]

この線分の上でpパラメータで示される位置の3次元のベクトルを返す。p · pvert + (1-p)nvert

:parameter point [メソッド]

この線分の上の point に対するパラメータを計算する。これは、:point メソッドの逆メソッドである。

:direction [メソッド]

pvert から nvert へ向かう正規化ベクトルを返す。

[メソッド]

この線分の他の端点を返す。すなわち、もしvが pvert に等しいとき、nvert を返す。もしvが nvert に等しいとき、pvert を返す。それ以外のとき、NIL を返す。

:box [メソッド]

この線分の bounding-box を作成し、返す。

:boxtest box

box とこの線分の bounding-box の共通部分をチェックする。

:length [メソッド]

この線分の長さを返す。

:distance point-or-line [メソッド]

この線分と point-or-line の間の距離を返す。もし点からこの線分におろした垂線の足が pvert と nvert の間になければ、最も近い端点までの距離を返す。このメソッドを使うことにより、2 つの線分の間の距離を計算することができるため、2 つの円柱の間の干渉をテストすることができる。

:foot point [メソッド]

point からこの線分へおろした垂線の足である点を示すパラメータを見つける。

:common-perpendicular l

この線分と lとに垂直な線分を見つけ、2 つの 3 次元ベクトルのリストとして返す。2 つの線分が平行で共通な垂線が一意に決定できないとき、:parallel を返す。

「メソッド」

:project plane [メソッド]

plane に pvert と nvert を投影した 2 つの点のリストを返す。

:collinear-point point & optional (tolerance *coplanar-threshold*)

[メソッド]

collinear-p を用いて torelance の誤差範囲内で point がこの線分と一直線上にあるかどうかをチェックする。もし、point がこの線分と一直線上にあるとき、その線分のその点に対するパラメータを返す。そうでなければ、NIL を返す。

:on-line-point point &optional (tolerance *coplanar-threshold*)

[メソッド]

point がこの線分と一直線上にあり、pvert とnvert との間にあるかどうかをチェックする。

:collinear-line ln &optional (tolerance *coplanar-threshold*)

[メソッド]

 ln がこの線分と共通線上にあるとき、すなわち ln の両端がこの線分上にあるとき T を返し、そうでないとき NIL を返す。

:coplanar ln &optional (tolerance *coplanar-threshold*)

[メソッド]

ln とこの線分が共通平面上にあるかどうかをチェックする。この線分の両端と ln の 1 つの端点で平面が定義される。もし、ln の他の端点がその平面上にあるとき、T を返す。そうでなければ、NIL を返す。

:intersection ln [メソッド]

ln は、この線分と共通平面上にあるとする。:intersection は、これら 2 つの線分の交点に対する 2 つのパラメータのリストを返す。パラメータは 0 から 1 までの実数である。これは、両端で区切られた線分の内分点を示す。 2 つの線が平行であるとき NIL を返す。

:intersect-line ln [メソッド]

lnは、この線分と共通平面上にあるとする。交点のパラメータが:parallel, :collinearや:intersectのようなシンボル情報と共に返される。

edge [$p \ni \lambda$]

:super line

:slots (pface nface

(angle :type float)

(flags:type integer))

2 つの面の間の交差線分として定義されるエッジを表現する。pface と nface がスロットの中に定義されているが、それらの解釈はこのエッジの方向によって相対的に決まる。例えば、このエッジが pvert から nvert に向かっていると考えたとき、pface が正しい pface を表現している。そのため、:pface や:nface メソッドで適当な面を選択するためには、pvert と nvert の解釈を与えなければならない。

make-line point1 point2

:body

[関数]

point1を pvert とし、point2を nvert とする line のインスタンスを作る。

:pvertex pf

[メソッド]

pfをこのエッジの pface とみなした pvertex を返す。

:nvertex *pf*pfをこのエッジの pface とみなした nvertex を返す。

[メソッド]

このエッジを定義する body オブジェクトを返す。

[メソッド]

[メソッド]

:pface pv nv

仮想的に pv と nv をこのエッジの pvert と nvert に解釈したときの pface を返す。

:nface pv nv [メソッド]

仮想的に pv と nv をこのエッジの pvert と nvert に解釈したときの nface を返す。

:binormal aface [メソッド]

このエッジと aface の正規化ベクトルに垂直な方向ベクトルを見つける。

:angle [メソッド]

このエッジでつながった2つの面の間の角度を返す。

:set-angle [メソッド]

このエッジでつながった2つの面の間の角度を計算し、それをangleスロットに置く。

:invert [メソッド]

:set-face pv nv f

fを pface とし、pv を pvertex とし、nv を nvertex として設定する。このメソッドは、このエッジの pface あるいは nface を変更することに注意すること。

:contourp viewpoint [メソッド]

もし、このエッジが輪郭エッジであれば、すなわち、このエッジの pface あるいは nface のどちらかが viewpoint から見え、もう一方が見えないなら T を返す。

:approximated-p [メソッド]

このエッジが円柱の側面のような曲面を表現するための近似エッジであるならば、T を返す。近似エッジは部分直線で曲線を表現するのに必要である。

:set-approximated-flag &optional (threshold 0.7)

[メソッド]

Euslisp では、どんな曲面もたくさんの平面で近似される。flags の LSB は、このエッジの両側の面が曲面であるかどうかを示すために使用される。

もし、2 つの面の間の角度が threshold より大きいなら、:set-approximated-flag は、このフラグを T に設定する。

:init &key:pface:nface:pvertex:nvertex [メソッド]

14.3 平面と面

plane オブジェクトは、その平面の正規化ベクトルと座標原点から平面までの距離で表現される。2 対の正規化ベクトルと距離が plane オブジェクトに記録される。1 つは、変換後の現状を表現し、もう1 つが平面を定義したときの正規化ベクトルと距離を表現する。

plane [クラス]

:super propertied-object

:slots ((normal :type float-vector)

(distance:float))

平面方程式を定義する。平面は境界がなく、無限に広がっているものとする。

:normal [メソッド]

この平面の正規化ベクトルを返す。

:distance point [メソッド]

この平面と point との間の距離を計算する。

:coplanar-point point [メソッド]

もし、pointがこの平面の上に置かれているならTを返す。

:coplanar-line line [メソッド]

もし、lineがこの平面の上に置かれているなら、Tを返す。

:intersection point1 point2 [メソッド]

point1 と point2 を端点とする線分とこの平面との交点を計算する。その線分の上の交点に対するパラメータを返す。もし、線分とこの平面が平行であるなら、:parallel を返す。

:intersection-edge edge [メソッド]

この平面と point1 と point2 で表現される線分あるいはエッジとの交点のパラメータを返す。

:foot point [メソッド]

この平面上に point を直角に投影した位置の 3 次元ベクトルを返す。

:init normal point [メソッド]

point を通り normal を面の正規化ベクトルとする平面を定義する。normal は、正規化されていなければならない。|normal|=1

polygon [752]

:super plane

:slots (convexp edges vertices

(model-normal float-vector) (model-distance :float))

polygon は、平面の上の輪で表現される。convexp は、その輪が凸面であるかどうかを示す論理フラグである。edges は、この輪の輪郭や頂点のリストである vertices で形成されるエッジのリストである。

:box &optional tolerance [メソッド]

この多角形のための bounding-box を返す。

$\textbf{:boxtest}\ \textit{box2 & Goptional tolerance}$

[メソッド]

この多角形のための bounding-box を作成し,その boundign-box と box2 との共通領域を返す。もし,共通領域がなかった場合,NIL を返す。

:edges

[メソッド]

この多角形のエッジのリストを返す。そのリストは,この平面の正規化ベクトルに沿ってその多角形を見たとき,時計方向の順番になっている。もし,正規化ベクトルをねじと考えると,そのエッジはねじを入れる方向に回転させる向きの順番になっている。多角形または面が立体オブジェクトの面を表現するために使用されているとき,その正規化ベクトルはその立体の外側に向かっている。多角形をそのオブジェクトの外側から見たとき,エッジは反時計方向の順番になっている。

:edge n

[メソッド]

エッジのn番目の要素を返す。

:vertices

[メソッド]

この多角形の頂点をエッジと同じ順番にならべたものを返す。最初の頂点は,そのリストの最後に重複してコピーされているため,そのリストは実際の頂点の数より1だけ長くなっていることに注意すること。これは,頂点のリストを用いてエッジへの変換を簡単にするためである。

:vertex n

[メソッド]

頂点の n 番目の要素を返す。

:insidep point &optional (tolerance *epsilon*)

[メソッド]

この領域に対して相対的に置かれた *point* の位置にしたがって:inside,:outside **あるいは**:border を 返す。

:intersect-point-vector point vnorm

[メソッド]

point と正規化方向ベクトル vnorm によって定義される擬似線分との交点を計算する。

:intersect-line p1 p2

[メソッド]

p1 と p2 で指定される線分との交点を計算する。その結果は、交点がなければ NIL を返し, 交点があればその交点の位置のパラメータのリストを返す。

:intersect-edge edge

[メソッド]

edge で指定される線分との交点を計算する。その結果は , 交点がなければ NIL を返し、交点があれば交点の位置のパラメータのリストを返す。

:intersect-face aregion

「メソッド」

もし,この領域が aregion と交差しているなら,T を返す。

:transform-normal

[メソッド]

:reset-normal

[メソッド]

この多角形の現在の vertices リストから面の正規化ベクトルを再計算する。

:invert

[メソッド]

:area

[メソッド]

この領域の面積を返す。

:init &key:vertices:edges:normal:distance

[メソッド]

face [クラス]

:super **polygon**

:slots (holes mbody primitive-face id)

穴を持った面を定義する。 mbody と type は、基本 body と body 内の面の属性(:top, :bottom, :side) を表現する。

:all-edges [メソッド]

:all-vertices [メソッド]

この面および内部ループ(穴)の輪郭のエッジあるいは頂点をすべて返す。:edges と:verticles メソッドは,輪郭を構成するエッジと頂点のみを返す。

:insidep point [メソッド]

point がこの面の内部にあるかどうかを決定する。もし point がこの面の外側の輪郭の中にあり、どれかの穴の範囲内にあるならば、外側として分類される。

:area [メソッド]

この面の面積を返す。これは、外側のエッジで囲まれる面積から穴の面積を引いたものである。

:centroid & optional point

[メソッド]

この面の重心を表現する実数と実数ベクトルのリストを返す。もし,point が与えられないならば,最初の数はこの多角形の面積を表わし,2 番目のベクトルがこの多角形の重心の位置を示す。もし,point が与えられたならば,この多角形を底面としその点を頂点とするような多角錐を考え,その体積と重心のベクトルを返す。

:invert [メソッド]

この面の向きをひっくり返す。正規化ベクトルが逆方向とされ,エッジループの順番も反転される。

:enter-hole hole [メソッド]

この面に穴 hole を加える。

:primitive-body [メソッド]

この面を定義する基本 body を返す。

:id [メソッド]

(:bottom), (:top) や (:side seq-no.) の中の1つを返す。

:face-id [メソッド]

基本 body の型とこの面の型をリストで返す。例えば,円柱の側面は((:cylinder radius height segments):side id)を返す。

:body-type [メソッド]

この面を定義する基本 body を返す。

:init Ekey :normal :distance :edges :vertices :holes [メソッド]

hole [クラス]

:super **polygon** :slots (myface)

穴は,面の内部ループを表現する多角形である。face のオブジェクトは、自分の holes スロットの中に hole のリストを持っている。

:face [メソッド]

この hole を含む面を返す。

:enter-face face [メソッド]

この hole を囲んでいる面 face ヘリンクを作る。このメソッドは、face クラスの: enter-hole メソッド と共に使用されるものである。

:init &key :normal :distance :edges :vertices :face [メソッド]

14.4 立体 (body)

body [75]

:super cascaded-coords

:slots (faces edges vertices model-vertices box convexp evertedp csg)

3次元形状を定義する。

:newcoords rot &optional pos

:magnify rate [メソッド]

この body のサイズを rate で変更する。拡大は, csg リストの中に記録される。

:translate-vertices vector [メソッド]

モデルの頂点を相対移動する。*vector* はローカル座標系で与えられなければならない。変換は csg リストに記録される。

:rotate-vertices angle axis [メソッド]

モデルの頂点を axis 軸回りに angle ラジアン回転させる。回転は csg リストに記録される。

:reset-model-vertices [メソッド]

座標系を rot や pos を用いて変更する。 pos が省略された時は newrot には coordinates のインスタンスを与える。

[メソッド]

:vertices [メソッド]

この body のすべての頂点のリストを返す。

:edges [メソッド]

この body のすべてのエッジのリストを返す。

:faces [メソッド]

この body を構成するすべての面のリストを返す。

:box [メソッド]

この body の bounding-box を返す。

:Euler [メソッド]

この body のオイラー数を計算する。これは, faces+vertices-edges-2-holes である。これは, -2rings と等しくなるべきである。

:perimeter [メソッド]

すべてのエッジの長さの合計を返す。

:volume *&optional* (reference-point #f(0 0 0)) [メソッド]

この body の体積を返す。

:centroid Eoptional (point #f(0 0 0) [メソッド]

この body が均質な立体と仮定し,重心の位置を返す。

:possibly-interfering-faces box [メソッド]

:common-box body [メソッド]

この body と他の body の共通な最小の box を返す。もし,2 つの body が干渉しているならば,その交差部分はこの共通 box の中に存在するはずである。

:insidep point [メソッド]

もし,point がこの body に属するなら,:inside を返す。もし,point がこの body の表面上にある場合,:border を返す。そうでなければ,:outside を返す。

:intersect-face face [メソッド]

もし,この body の面と $\operatorname{\it face}$ の間に干渉がある場合, T を返す。

:intersectp body [メソッド]

この body と他の body との間の交差部分を返す。

:evert [メソッド]

すべての面とエッジの方向を反転させる。そのため、この body の内部は外部になる。

:faces-intersect-with-point-vector point direction

[メソッド]

point から direction の方向に伸びるベクトルと交差する面をすべて集める。

:distance target [メソッド]

target は,実数ベクトルあるいは平面オブジェクトである。:distance メソッドは, target から最も近い面を見つけ,その面と距離のリストを返す。

:csg [メソッド]

body が構築された履歴である csg スロットを返す。

:primitive-body [メソッド]

この body を構築する基本 body のリストを返す。

:primitive-body-p [メソッド]

もし,この \mathbf{body} が 14.5 節で示される関数の内の 1 つから作られた基本 \mathbf{body} であるなら, $\mathrm T$ を返す。

:creation-form [メソッド]

この body を作るための Lisp 表現を返す。

:body-type [メソッド]

もし,この body が基本 body あるいはこの body の表現が複雑 (に構成された) body なら,作成パラメータのリストを返す。

:primitive-groups [メソッド]

2 つの要素をもつリストを返す。最初の要素は,この \mathbf{body} を構成するために追加 $(\mathbf{body}+)$ された基本 \mathbf{body} のリストである。次の要素は,差し引かれた基本 \mathbf{body} のリストである。

:get-face body Coptional face id

[メソッド]

body は,この body を構成している body のインスタンスであり,基本 body 型の 1 つである。例えば,:cube,:prism,:cone,:solid-of-resolution などかあるいは NIL である。もし,face も id も与えられないならば,body に一致する面をすべて返す。もし,face が与えられたなら,その上にフィルターが実行される。face は,:top,:bottom と:side の内の 1 つでなければならない。(send abody :get-face :cylinder :top)は,abody を構成する円柱の上面すべてを返す。もし,face が:side なら,id で番号付けされた面を取り出すことができる。(send abody nil :side 2)は,id が 0 から始まるため,abody を構成する body の側面から 3 番目の面をすべて返す。

 $\textbf{:init} \quad \mathcal{C}key: faces: edges: vertices$

[メソッド]

:faces よりこの body を初期化する。:faces は,必要な引き数である。:faces,:edges と:vertices は完全な立体モデルを定義するために矛盾のない関係を持っていなければならないので,矛盾した引き数でこのメソッドを呼び出すことは,意味の無いことである。:faces,:edges と:vertices は完全な立体モデルを定義するために:faces,:edges と:vertices は完全な立体モデルを可能ないることに:faces,:edges と:vertices は完全な立体モデルを可能ないることに:faces,:edges と:vertices は:faces,:edges は:faces,:edges と:vertices は:faces,:edges は:faces

:constraint b [メソッド]

この body が b に接触しているとき,この body の拘束を返す。このメソッドの詳細な説明は 14.8 節を参照すること。

14.5 基本 body の作成関数

make-plane &key :normal :point :distance

[関数]

point を通り, normal の方向を向いた plane オブジェクトを作る。 point を与える代わり distance を指定することもできる。

xy-plane [变数]

yz-plane [变数]

zx-plane [变数]

make-cube xsize ysize zsize &key :name :color

[関数]

x,y,z 軸の方向に大きさが xsize,ysize,zsize である,直方体を作る。この直方体の原点は \mathbf{body} の中心に置かれる。

make-prism bottom-points sweep-vector &key :name :color

[関数]

sweep-vector に沿った bottom-points により定義される形状を積み上げることにより角柱を作る。もし、sweep-vector が実数ベクトルでなく数字であれば、z 方向の角柱の高さとして扱われる。bottom-points は,この body の底面を定義する順番になっていなければならない。例えば,(make-prism '(#f(1 1 0) #f(1 -1 0) #f(-1 1 0)) #f(-1 1 0)) 2.0) は,高さ 2.0 の直方体を作る。

make-cylinder radius height &key (:segments 12) :name :color

[関数]

半径 radius と高さ height で指定される円柱を作る。底面は,xy-平面に定義され,座標系の原点は底面の中心に置かれる。

make-cone top bottom &key (:segments 16) :color :name

[関数]

頂点が top で底面が bottom である角錐を作る。top は , 3 次元ベクトルである。bottom は , 底面の頂点のリストあるいは半径である。もし , 頂点のリストなら , 順番を慎重にしなさい。 $(make-cone \ \#f(0 \ 0))$ (list $\#f(10 \ 0 \ 0)$) $\#f(0 \ 10 \ 0)$ $\#f(0 \ 10 \ 0)$

make-solid-of-revolution points &key (:segments 16) :name :color

[関数]

points は,z 軸まわりの時計方向に回転される。もし、points のリストの 2 つの端点が z 軸上に置かれてないならば,曲面を作る。したがって,(make-solid-of-revolution '(#f(0 0 1) #f(1 0 0))) は、円錐を作り、(make-solid-of-revolution '(#f(1 0 1) #f(1 0 0))) は、円柱を作る。points は、順番が重要であり、z 軸の高い方から低い方へ整列しておくことが望まれる。

make-torus points &key (:segments 16) :name :color

[関数]

ドーナッツのような torus 形状を作る。 points は,断面上の頂点のリストである。

make-icosahedron & optional (radius 1.0)

[関数]

正20面体を作る。それぞれの面は正三角形である。

make-dodecahedron & optional (radius 1.0)

[関数]

正 12 面体を作る。それぞれの面は,正五角形である。

make-gdome abody [関数]



図 10: 基本 body

abody の三角面を 4 つの面に小分けすることにより測地ドームを新しく作る。abody は , 最初正 20 面体とすべきである。それから , make-gdome の結果を再帰的に make-gdome に与えることができる。それぞれの呼び出しで , 測地ドームの面の数は , 4 倍に増加する。すなわち , 20, 80, 320, 1280, 5120 などになる。

(setq g0 (make-icosahedron 1.0)); 20 facets(setq g1 (make-gdome g0)); 80 facets(setq g2 (make-gdome g1)); 320 facets

. . .

grahamhull vertices & optional (normal #f(0 0 1))

[関数]

Graham のアルゴリズムを用いて,2次元上で凸状の覆いを計算する。quickhull よりも遅い。

quickhull vertices & optional (normal #f(0 0 1))

[関数]

2分探索法を用いて2次元上で凸状の覆いを計算する。

convex-hull-3d vertices

[関数]

gift-wrapping 法を用いて3次元上で凸面の覆いを計算する。

make-body-from-vertices vertices-list

[関数]

矛盾しない順番になっている面のループを定義する頂点のリストから body を返す。

14.6 body の合成関数

face + face 1 face 2 [関数]

face* face1 face2 [関数]

face1 と face2 は,3 次元上で共通平面上にある。face+は,これらの面の結合を構築し,面のオブジェクトとして返す。もし,交差領域がないなら,元の2 つの面が返される。face*は,これらの面の交差領域を返す。もし,交差領域がなければ,NIL を返す。

cut-body body cutting-plane

[関数]

body を cutting-plane で切断し,その切断面に作られる面のリストを返す。

body+ body1 body2 &rest more-bodies

[関数]

body- body1 body2 [関数]

body* body1 body2 [関数]

2 つあるいはそれ以上の body の和,差あるいは積を計算する。それぞれの body は,body+,body-,body*の処理を行う前にコピーされ,元の body は変更されない。その結果の body の新しい座標系の位置・姿勢は,ワールド座標系のものと一致している。もし,しきい値パラメータ*coplanar-threshold*,*contact-thresを正確に設定するなら,2つの body が面同士で接触している場合でもこれらの関数は正しく働くであるう。しかしながら,もし body の頂点が他の body の頂点あるいは面に接触している場合,どの処理も失敗する。

body/ body plane [関数]

make-plane で作られた plane クラスのインスタンスである plane で body を切断する。新しく作られた body が返される。

 $\textbf{body-interference} \ \mathscr{C}rest \ bodies$

[関数]

bodies の中で 1 対 1 の組み合わせにおける干渉をチェックし , 交差している 2 つの body のリストを返す。

14.7 座標軸

coordinates-axes クラスは,画面上に表示可能な3次元座標軸を定義する。それぞれの軸とz軸の頂点の矢印は,line オブジェクトで定義される。このクラスは,cascaded-coords を継承しているので,このクラスのオブジェクトは,bodyのような他の cascaded-coords を元とするオブジェクトに付けることができる。このオブジェクトは,bodyの座標軸あるいは他の座標の相対座標系を見るために使用される。

coordinates-axes [75]

 $: super \qquad \textbf{cascaded-coords}$

:slots (size model-points points lines)

表示可能な3次元座標軸を定義する。

14.8 立体の接触状態解析

この節のメソッドおよび関数は、次のファイルに記述されている。contact/model2const.l, contact/inequalities.l, contact/drawconst.l

constrained-motion c

[関数]

拘束 c を満たしている動作のリストを返す。

 ${\bf constrained\text{-}force}\ m$

[関数]

拘束されている body から拘束している body に加わる力を返す。m は、constrained-motion から返される動作のリストである。

draw-constraint c

[関数]

拘束 cを描く。

draw-motion $m \ a \ b$

[関数]

a が b に接触しているときに取り得る動作を描く。リターンキーを押すことにより描画を始める。

Example

```
;;
;;
        peg in a hole with 6 contact points
;;
(in-package "GEOMETRY")
(load "view")
(load "../model2const.1" :package "GEOMETRY")
(load "../inequalities.l" :package "GEOMETRY")
(load "../drawconst.l" :package "GEOMETRY")
(setq x (make-prism '(#f(50 50 0) #f(50 -50 0) #f(-50 -50 0) #f(-50 50 0))
                    #f(0 0 200)))
(setq x1 (copy-object x))
(send x1 :translate #f(0 0 -100))
(send x1 :worldcoords)
(setg a1 (make-prism '(#f(100 100 -150) #f(100 -100 -150)
                       #f(-100 -100 -150) #f(-100 100 -150))
                     #f(0 0 150)))
(setq ana (body- a1 x1))
(send x : translate #f(0 -18.30127 -18.30127))
(send x:rotate -0.523599:x)
(send x :worldcoords)
(setq c (list (send x :constraint ana)))
(setq m (constrained-motion c))
(setq f (constrained-force m))
(hidd x ana)
(draw-constraint c)
```

(draw-motion m)

拘束の例を次の図で示す。図の小さな矢印は,ペグに対する拘束を示す。



☑ 11: Constraints for a peg in a hole.

ペグを穴に入れる作業において取り得る動作の例を次の図で示す。この例は , 上記のプログラムと一致している。



 $\ensuremath{\boxtimes}$ 12: Possible motions of a peg in a hole

14.9 多角形の Voronoi Diagram

著者: Philippe PIGNON, 電総研ゲスト研究者

このプログラムは, Common Lisp で書かれている。"A sweepline algorithm for Voronoi diagrams", Proceedings of the 2nd Annual ACM symposium on computational geometry, 1986, 313-322. を手法として用い、多角形の場合への応用を行った。これは,サンプルプログラム付きの簡単な説明である。このプログラムは,ETLの Euslisp 環境で書かれているため,画像への出力もサポートしている。どの Common Lisp 上でも使用することはできるが,utilities.1で与えられている画像への関数を自分のディスプレイ環境へ合うように書き換える必要がある。この節の最後にその関数を示す。

目的: 多角形の集合の voronoi diagram の計算を行う。語彙を理解するために上記の文献を読んで、使用してください。ここでは、このプログラムに対する説明をしません。

入力: 多角形のリストと囲むための枠は,次のように定義する。

囲む枠は、DATA内のどの位置にも配置することができる。また、内部と外部が矛盾しないように時計方向の順番でなければならない。多角形は交差の無い簡単な図形でなければならない。一直線あるいは平坦なエッジは受け付けない。独立した点あるいは線分も受け付けない。

出力: *diagram*:2 重に接続されたエッジリストのリスト (utilities.l ファイルを参照) を返す。それぞれのエッジは, symbol であり, 次に示すような field を含む property-list を持っている。

```
(start <pointer to a vertex>)
        (end <pointer to a vertex>)
        (pred <pointer to an edge>)
        (succ <pointer to an edge>)
        (left <pointer to a site>)
        (right <pointer to a site>)
        (type <:endpoint or :point-point or :segment-segment or :point-segment>)
        (outflag <t or nil>)
```

vertex は, symbol で"pos" field を含む property-list を持つ。この field は, cons(x,y) を含み, vertex の平面座標を示す。pred と succ の field は, decl 形式にしたがって反時計方向の前者と後者を与える (Shamos と Preparata の, Computational Geometry: An introduction, 1985, pp 15-17 を参照)。site も symbol であり, 関連した情報を含む property-list を持つ。site は,元の入力データを記述しており,多角形の頂点である point あるいは多角形のエッジである segment を持つ。

type は,2 等分線の中点であり,それを分割する site の型より決定される。規約により,外側は start-end エッジの右側である。voronoi diagram は,2 等分線の内部と同様に外側を計算する。必要とする outflag を保つために outflag をソートする。

サンプル: サンプルプログラムを実行するためには,以下のようなステップを実施してください。

1. 自分の環境に以下のプログラムをコピーする。

utilities.l 幾何学ユーティリティ関数と eusx の画像出力関数

polygonalvoronoi.l プログラム本体

testdata.l 上記の書式によるデモデータ

- 2. もし, Euslisp を使用しないなら, 命令にしたがって utilities.l を書き換え, "compatibility package"を修正する。。
- 3. 以下の3つのファイルをコンパイルしてロードするか、あるいはそのままロードする。 utilities.l

polygonalvoronoi.l

testdata.l 上記の書式によるデモデータを含んでいる。

4. (pv demoworld) でデモデータ上でプログラムが実行される。グローバル変数*diagram*には, voronoi diagram の 2 等分線が含まれている。

eusx(Xwindow インターフェースを持つ Euslisp) のもとでは , 以下の命令で diagram の結果を画面上に表示することができる。

 \mathbf{pv} data [関数]

上記の書式で書かれた data から多角形の voronoi diagram を計算する。



図 13: viewing 座標系と投影画面

15 視界とグラフィックス

15.1 視界 (viewing)

viewing オブジェクトは、viewing 座標系を処理する。この座標系の原点は仮想カメラの位置に置かれる。-z 軸方向がオブジェクトの視線方向で、xy 平面が投影画面である。viewing が cascaded-coords クラスを継承 するので、:translate や:rotate や:transform のような座標変換メッセージを受け付ける。また、cascaded-coords から得られる他のオブジェクトを張り付けることができる。したがって、移動物体上のカメラシステムのシミュレーションができる。viewing の主な目的は、ワールド座標系で表現されるベクトルをカメラ座標系に変換することである。変換は、一般の座標変換に対して逆方向で与えられる。このローカル座標系内のベクトルはワールド座標系における表現に変換される。したがって、viewing は viewcoords スロットに逆変換された左手系変換を持つ。このスロットは、viewing 座標系として普通参照される。

viewing [クラス]

:super cascaded-coords :slots (viewcoords)

viewing 変換を定義する。

:viewpoint [メソッド]

この viewing の原点のベクトル位置を返す。

:view-direction [メソッド]

viewing の原点から画面の中心までのベクトルを返す。これは、viewing 座標系の z 軸方向である。

15. 視界とグラフィックス 144

:view-up [メソッド]

ワールド座標系におけるこの viewing の y 軸ベクトルを返す。y 軸は、viewport の上方である。

:view-right [メソッド

ワールド座標系におけるこの viewing の x 軸ベクトルを返す。x 軸は、viewport の水平右方向である。

:look from &optional (to #f(0 0 0))

[メソッド]

:look は、その目が from に位置されており、to の位置を見ているとして viewing 座標系を設定する。

:init &key :target $\#f(0\ 0\ 0)$

[メソッド]

 $: view\text{-}direction \quad nil \\$

:view-up $\#f(0.0 \ 0.0 \ 1.0)$)

:view-right nil & & allow-other-keys

viewing は、cascaded-coords を継承するので、:pos や:rot や:euler や:rpy などの:init のパラメータ はすべて viewing 座標系の位置や姿勢を指定することに使用できる。しかしながら、viewing の:init は 回転を決定する簡単な方法を持っている。もし、:target だけが与えられたとき、視線方向は視点から target 位置の方向に決定され、:view-right ベクトルはワールド座標系の xy 平面に平行な x 軸に決定される。:view-direction を:target の代わりに指定しても同じ様な効果を得られる。もし、:view-up または :view-right パラメータを:target あるいは:view-direction に加えて指定するならば、3 つの回転パラメータをすべて自分自身で決定することができる。

15.2 投影

projection [75]

:super viewing

:slots (screenx screeny hither yon projection-matrix)

4x4 行列であらわされる投影変換を定義する。

15. 視界とグラフィックス 145

もし、*pmat* が与えられたならば、projection-matrix のスロットに設定する。:projection は、現在の 4x4 投影行列を返す。

:project vec [メソッド]

vec は、4 要素を持つ 3 次元同次ベクトルである。vec は、投影行列により変換される。そして、変換された結果である同次表現が返される。

:project3 vec [メソッド]

vec は、標準の 3D ベクトル。vec は、投影行列により同次化され変換される。そして、変換された結果である同次表現が返される。

:view vec [メソッド]

vec に viewing 変換と投影変換を連続的に適用する。そして、変換された結果である同次表現が返される。

:screen xsize (&optional (ysize xsize))

[メソッド]

viewing 画面の大きさを変える。大きくすると、広い view が得られる。

:hither depth-to-front-clip-plane

[メソッド]

視点からクリップ前面までの距離を決定する。このクリップ前面よりも前にあるオブジェクトはクリップから除外される。

:yon depth-to-back-clip-plane

[メソッド]

視点からクリップ後面までの距離を変える。このクリップ後面よりも後ろにあるオブジェクトはクリップから除外される。

:aspect &oiptional ratio

[メソッド]

アスペクト比は、screen-y と screen-x との比である。もし、*ratio* が与えられたならば、アスペクト比は変えられ、screen-y は screen-x * *ratio* に設定される。:aspect は、現在のアスペクト比を返す。

:init &key :hither 100.0

[メソッド]

 :yon
 1000.0

 :aspect
 1.0

 :screen
 100.0

 :screen-x
 screen

:screen-y (* screen-x aspect)

 ${\it \& allow-other-keys}$

viewing と projection を初期化する。

parallel-viewing

[クラス]

:super **projection** :slots ()

平行投影を定義する。hid(陰線消去関数)は平行投影では扱うことが出来ない。

:make-projection

[メソッド]

perspective-viewing

[クラス]

:super **projection** :slots (viewdistance) 透視投影変換を定義する。

:make-projection [メソッド]

[メソッド]

視点から正規化画面の上にある (u,v) への単位方向ベクトルを返す。

:viewdistance &optional vd

[メソッド]

viewdistance は、視点から画面迄の距離である。もし、vd が与えられたならば、viewdistance に設定される。viewdistance は、カメラの焦点距離と一致する。vd を大きくすれば、ズームアップされた view を得ることができる。:viewdistance は、現在の viewdistance を返す。

:view-angle $\mathscr{C}optional$ ang

[メソッド]

画面の対角線を見込む角度が ang ラジアンであるように画面の大きさを設定する。20 度 (約 0.4 ラジアン) から 50 度 (約 0.9 ラジアン) までの角度が自然な透視 view を生成することができる。角度を大きくすると歪んだ view を生成する。そして、狭くすると直角 (平行)viewing のような平坦な view が生成される。:view-angle は、現在の視角あるいは新しい視角をラジアンで返す。

:zoom &optional scale [メソッド]

もし、scale が与えられたならば、画面は scale によって現在の大きさを相対的に変化させる(viewdistance は変化しない)。もし、scale に 0.5 を与えるならば、以前の view より 2 倍広い view を得られる。:zoom は、新しい視角をラジアンで返す。

:lookaround alfa beta

[メソッド]

視点を移動し回転させる。回転中心は、視線の上で hither 平面と yon 平面の中間点に与えられる。 viewing 座標系は、ワールド座標系の z 軸回りに alfa ラジアン回転し、ローカル座標系の x 軸回りに beta ラジアン回転される。:lookaround は、viewing の中心にあるオブジェクト回りに視線を動かすことができる。

:look-body bodies [メソッド]

視線、画面の大きさおよび hither/yon をすべての bodies に適合する viewport となるよう変える。視点は変化しない。視線は、すべての bodies の bounding box の中心を通る視線から選択される。

 $\textbf{:init} \quad \textit{\&key (:} view distance \ 100.0) \ \textit{\&low-other-keys}$

[メソッド]

15.3 Viewport

viewport クラスは、正規デバイス座標系 (NDC) の中の 3 次元 viewport のクリップを実行する。そして、デバイスに依存する座標系に結果を作る。viewport は、画面上の見える四角領域の境界表現である。viewport の物理的な大きさ(x 軸と y 軸方向のドット数)は、:init メッセージの中の:width と:height との引き数で与えられなければならない。:xcenter と:ycenter 引き数は、viewport の物理的な位置を決定する。画面の原点からのそれぞれの次元が絶対的に与えられているテクトロニクス 4014 のような基本的なディスプレイデバイスを使っているとき、これら 2 つのパラメータは、実際に画面の上にオブジェクトを描く位置を決定する。もし、位置が親 window から相対的に決まる X window のような精巧なディスプレイデバイスを使っているなら、viewport を動かすために viewport のパラメータを変える必要はない。なぜなら、これらのパラメータは、実際のディスプレイ位置に依存しないからである。。

 ${f viewport}$ クラスは、四角領域の左下を ${f viewport}$ の原点と仮定している。そして、 ${f y}$ 軸は上方向に伸びてい

15. 視界とグラフィックス 147

るとする。しかし、多くの window システムやディスプレイデバイスでは原点を左上とし、y 軸が下方向に伸びているとしている。この問題を回避するために、height パラメータに負の値を与えればよい。

homo-viewport-clip v1 v2

[関数]

v1 と v2 は、4 要素を持つ同次ベクトルであって、3 次元空間の線分として表現される。その線分は、x=-1, x=1, y=-1, y=1, z=0, z=1 の境界でクリップされる。そして、2 つのベクトルのリストを返す。もし、その線分が viewport の外側に完全に置かれているならば、NIL を返す。

viewport

[クラス]

:super coordinates

:slots

viewport 変換は、デバイスで指定される座標系に NDC (正規化デバイス座標系)を作る。coordinates クラスを継承しているため、viewport はサイズと投影画面の相対位置を定義している。

:xcenter &optional xcenter

[メソッド]

この viewport の x 軸の中心を返す。もし、xcenter が与えられていれば、設定を行う。

:ycenter &optional ycenter

[メソッド]

この viewport の y 軸の中心を返す。

:size &optional size

[メソッド]

この viewport の x 軸と y 軸方向の大きさのリストを返す。

:width &optional width

[メソッド]

この viewport の幅を width に設定する。

:height &optional height

[メソッド]

この viewport の高さを height に設定する。

:screen-point-to-ndc p

[メソッド]

p は、物理的画面の中の位置を表現する実数ベクトルである。p は、正規化デバイス座標系 (NDC) の中での表現に変換される。

:ndc-point-to-screen p

[メソッド]

この viewport の NDC 表現である p を画面の物理的位置に変換する。

:ndc-line-to-screen p1 p2 &optional (do-clip t)

[メソッド]

2 つの 3 次元ベクトル p1 と p2 は、NDC の中の線分を定義する。これらの 2 つの端点は、画面空間の表現に変換される。もし、do-clip が non-NIL なら、その線分はクリップされる。

 $\textbf{:init} \ \mathscr{E}key \ (:xcenter \ 100) \ (:ycenter \ 100) \ (:size \ 100) \ (width \ 100) \ (height \ 100)\\$

[メソッド]

新しい viewport オブジェクトを作る。

15.4 Viewer

画面の上に描画するためには、4 つのオブジェクトが必要である。1 つは描かれたオブジェクト、2 つは viewing 座標系と投影で定義される viewing、3 つは NDC の中でのクリップ処理のための viewport と NDC から物理 的画面座標系への変換、4 つは物理的ディスプレイデバイスの上に描画関数を実行する viewsurface。viewer オブジェクトは、viewing と viewport と viewsurface オブジェクトを持ち、座標系変換を連続的に制御す

15. 視界とグラフィックス 148

る。15.5 節に記述される draw と hid 関数は viewer のインスタンスを使用する。

viewer [クラス]

:super object

:slots (eye :type viewint)

(port :type viewport)

(surface :type viewsurface)

viewing から viewport を経由して viewsurface へ移る Cascaded Coordinates の変換を定義する。

:viewing &rest msg [メソッド]

もし、msg が与えられたならば、msg は viewing(eye) オブジェクトに送られる。そうでなければ、viewing(eye) オブジェクトが返される。

:viewport &rest msg [メソッド]

もし、msg が与えられたならば、msg は viewport(port) オブジェクトに送られる。そうでなければ、viewport(port) オブジェクトが返される。

:viewsurface &rest msg [メソッド]

もし、msg が与えられたならば、msg は viewsurface(surface) オブジェクトに送られる。そうでなければ、viewsurface(surface) オブジェクトが返される。

:adjust-viewport [メソッド]

viewsurface の大きさが変えられたとき、:adjust-viewport は port に固有のメッセージを送ることにより viewport の変換を変える。

:resize width height [メソッド]

viewsurfaceに:resize メッセージを送り、viewportに:size メッセージを送ることにより viewsurface の大きさを変える。

:draw-line-ndc p1 p2 &optional (do-clip t)

[メソッド]

[メソッド]

NDC の中に定義される 2 つの端点 p1,p2 を結ぶ線を描く。

:draw-polyline-ndc polylines
NDC の中に定義される端点を結ぶ多角形を描く。

[メソッド]

:draw-star-ndc center & optional (size 0.01)
NDC の中に十字マークを描く。

 $\textbf{:draw-box-ndc}\ \mathit{low-left}\ \mathit{up-right}$

NDC の中に四角形を描く。

[メソッド]

 $\textbf{:draw-arc-ndc} \ point \ width \ height \ angle \textit{1} \ angle \textit{2} \ \mathcal{G}optional \ color$

[メソッド]

NDC の中に円弧を描く。この viewer に結び付く viewsurface オブジェクトは、:arc メッセージを受けなければならない。

:draw-fill-arc-ndc point width height angle1 angle2 &optional color

[メソッド]

NDC の中に塗り潰し円弧を描く。

:draw-string-ndc position string @optional color

[メソッド]

NDC の中に定義される position に string を描く。

[メソッド] :draw-image-string-ndc position string &optional color :draw-rectangle-ndc position width height &optional color [メソッド] [メソッド] :draw-fill-rectangle-ndc point width height &optional color :draw-line p1 p2 &optional (do-clip t) [メソッド] ワールド座標系に定義される2つの端点p1,p2を結ぶ線を描く。 :draw-star position & optional (size 0.01) [メソッド] ワールド座標系の position 位置に十字マークを描く。 :draw-box center &optional (size 0.01) [メソッド] ワールド座標系の center に四角形を描く。 :draw-arrow p1 p2[メソッド] p1 から p2 へ向けての矢印を描く。 :draw-edge edge[メソッド] :draw-edge-image edge-image [メソッド] :draw-faces face-list &optional (normal-clip nil) [メソッド] :draw-body body &optional (normal-clip nil) [メソッド] :draw-axis coordinates &optional size [メソッド] coordinates で定義される軸を size の長さで描く。 :draw &rest things [メソッド] 3次元の幾何学オブジェクトを描く。もし、オブジェクトが3次元ベクトルならば、その位置に小さな十 字マークを描く。もし、3 次元ベクトルのリストであれば、多角形を描く。もし、thing が:draw メッセー

ジを受けたならば、この viewer を引き数としてそのメソッドが呼び出される。もし、オブジェクトが

:drawners メソッドを定義しているならば、:draw メッセージは:drawners の結果に送られる。line, edge, polygon, face および body オブジェクトは、viewer に定義されている:draw-xxx(xxx にその

オブジェクトのクラス名が入る) メソッドによって描かれる。

[メソッド] :erase &rest things

背景色で things を描く。

[メソッド] :init &key :viewing :viewport :viewsurface

viewing, viewport および viewsurface をこの viewer のスロット eye, port と surface に設定する。

view &key (:size 500) (:width size) (:height size) [関数] (:x 100) (:y 100) (:title "eusx")

```
(:border-width 3)

(:background 0)

(:viewpoint #f(300 200 100)) (:target #f(0 0 0))

(:viewdistance 5.0) (:hither 100.0) (:yon 10000.0)

(:screen 1.0) (:screen-x screen) (:screen-y screen)

(:xcenter 500) (:ycenter 400)
```

新しい viewer を作り、*viewer*リストに置く。

15.5 描画

draw [viewer] & rest thing

[関数]

viewer に *thing* を描く。*thing* は、座標系、立体、面、エッジ、ベクトル、2 つのベクトルのリストのどれでも可能である。(progn (view) (draw (make-cube 10 20 30))) は、xwindow に立方体を描く。

draw-axis [viewer] [size] & rest thing

[関数]

viewer の中に thing の座標系の軸を size の長さで描く。thing は、座標系から得られるどのオブジェクトでも可能である。

draw-arrow p1 p2

[関数]

*viewer*に p1 から p2 に向かう矢印を描く。

hid |viewer| &rest thing

[関数]

viewer に陰線処理された画像を描く。thing は、face または body が可能である。

hidd [viewer] &rest thing

[関数]

陰線を点線で描くことを除いて、hid と同じである。

hid2 body-list viewing

[関数]

edge-image オブジェクトで表現される陰線処理画像を生成する。その結果は*hid*に置かれる。

render &key :bodies :faces (:viewer *viewer*)

[関数]

(:lights *light-sources*)

(colormap *render-colormap*) (y 1.0)

bodies と faces にレイトレーシングを行い、陰面消去した画像を生成する。viewing, viewport および viewsurface は、viewer から得られる。lights は、light-source (光源) オブジェクトのリストである。colormap は、Xwindow の colormap オブジェクトである。それぞれの bodies と faces は、割り当てられるカラー属性を持たなければならない。colormap に定義されているカラー LUT の名前を:color メッセージで送ることによりカラー属性を設定できる。一般にこの関数は、Xlib 環境下でのみ働く。demo/renderdemo.1 のサンプルプログラムを見ること。

make-light-source pos & optional (intensity 1.0)

[関数]

posの位置に光源オブジェクトを作る。intensity は、デフォルトの光の強さを増す拡大比である。もっと正確に強さを決定するためには、光源の:intensity メソッドを使用する。

tektro file &rest forms

[マクロ]

*tektro-port*ストリームのために file をオープンし、forms を評価する。これは、tektro 描画の出力を直接 file に書き込むために使用される。

kdraw file &rest forms

[マクロ]

kdraw は、kdraw または idraw で読み込めるポストスクリプトファイルを生成するためのマクロ命令である。kdraw は、:output モードで file をオープンし、*viewer*を置き換えるための kdraw-viewsurfaceと viewport を作り、forms を評価する。それぞれの forms は、draw や hid のような描画関数のどれかを呼び出す。これらの forms からの描画メッセージは、kdraw-viewsurfaceに直接出力される。この出力は idraw や kdraw で認識できるポストスクリプト表現にメッセージを変換する。そして、file に蓄積する。idraw または kdraw が呼び出され file がオープンされたとき、EusViewer window に書いたものと同一の図形を見ることができる。その図形は、idraw の機能で変更することができる。そして、最終描画は epsfile 環境を用いることにより IATEX ドキュメントに組み込むことができる。この機能は、"llib/kdraw.l"のファイルに記述されている。

pictdraw file &rest forms

[マクロ]

pictdraw は、MacintoshのPICTフォーマットで画像ファイルを生成するためのマクロである。pictdraw は、file を:output モードでオープンし、pictdraw-viewsurface を作り、*viewer*の viewport に置き換え、forms を評価する。forms は、それぞれ draw あるいは hid のような描画関数のどれかを呼び出すものである。これらの書式からの描画メッセージは、kdraw-viewsurface に直接出力された後、PICTフォーマットへのメッセージに変換され、file へ蓄積される。このPICTフォーマットは、Macintoshのmacdrawやteachtextで認識することができる。

hls2rgb hue lightness saturation & Optional (range 255)

[関数]

HLS(Hue, Lightness, Saturation) で表現される色を、RGB 表現に変換する。HLS は、しばしば HSL として参照される。hue は、rainbow circle(0 から 360) の色で表現される。0 が赤で 45 が黄で 120 が緑で 240 が青で 270 が紫そして 360 が再び赤となる。lightness は、0.0 から 0.1 の値を持ち、黒から白までの明るさを表現する。lightness が 0 のときは、hue や saturation にかかわらず黒となる。そして、lightness が 1 のときは、白となる。saturation は、0.0 から 1.0 までの値を持ち、色の強さを表現する。saturation の値が大きいと鮮明な色調を生成し、小さい値は弱く濁った色調を生成する。range は、RGB 値の限界を示す。もし、それぞれの色に 8 ビットの値が割り当てられているカラーディスプレイを使っているならば、range は 255 とすべきである。もし、RGB に 16 ビットの整数が仮想的に割り当てられている Xwindowを使っているならば、range は 65536 とすべきである。HSV と HLS との違いに注意すること。HLS では、鮮明な (rainbow) 色は 1ightness=0.5 で定義されている。

 $\mathbf{rgb2hls}\ red\ green\ blue\ \mathcal{E}optional\ (range\ 255)$

[関数]

RGB の色表現を、HLS 表現に変換する。

15.6 アニメーション

EusLisp のアニメーションは、グラフィックアクセラレータを持たない普通のワークステーション上での擬似リアルタイムグラフィックス機能を備えている。その基本的な考え方は、長い時間かかって生成された 1 連の画像を高速に再表示することである。画像は 2 つの方法で保存される。1 つは、完全なピクセル画像を持つたくさんの Xwindow pixmap を保存する。もう 1 つは、陰線処理で得られる線分データを保存する。前者は、高速で陰面処理された画像を表示するための方法であるが、長いアニメーションではたくさんのメモリーを X server に要求するため適さない。後者は、メモリーが少なくて済み、データをディスクに蓄積するのに適する。しかし、線分の数が増加したならば、性能を悪化させる。

他の方法として、描かれるオブジェクトの構成を得て、*viewer*に描画を生成する関数をユーザーが作ることもできる。pixmap-animation は、count 引数で指定された数と同じ回数この関数を呼び出す。それぞれの呼び出し後、Xwindow と仮定される viewsurface の内容は、新しく作られた Xwindow pixmap にコピーされる。これらのpixmap は、playback-pixmap で再表示される。同様に、hid-lines-animation は hid の結果から見える線分を抜き出し、リストに蓄積する。そのリストは、playback-hid-lines によって再表示される。

以下に示す関数は、"llib/animation.l"に定義されており、"llib/animdemo.l"の中には ETA3 マニピュレータのモデルに関して hid-lines-animation を用いたアニメーションのサンプルプログラムを含んでいる。

pixmap-animation count &rest forms

[マクロ]

forms は、count 回評価される。それぞれの評価後、*viewsurface*の内容は新しいpixmap にコピーされる。count 枚の pixmap のリストが、返される。

playback-pixmaps pixmaps & optional (surf *viewsurface*)

[関数]

pixmaps リストのなかの pixmap はそれぞれ、surf に連続的にコピーされる。

15. 視界とグラフィックス

$\textbf{hid-lines-animation} \ \ count \ \ \mathscr{C}rest \ forms$

[マクロ]

153

hid への呼び出しを含む forms が count 回評価される。それぞれの評価後、*hid*が持つ hid の結果は検索され、見える線分は 2 点一組のリストの形で集められる。count 長さのリストが返される。

 $\mathbf{playback\text{-}hid\text{-}lines}\ \mathit{lines}\ \mathit{\mathscr{C}optional}\ (\mathit{view}\ \ ^*\!\mathit{viewer}\ ^*\!\!)$

[関数]

lines は、2 点一組のリストである。view の上に線分を連続的に描く。他の pixmap を割り当てるときにフリッカーフリーアニメーションを生成するために 2 重パッファ技法が使用される。

${\bf list\text{-}visible\text{-}segments}\ \mathit{hid\text{-}result}$

[関数]

hid-result の edge 画像のリストから見える線分を集める。

16 Xwindow インターフェース

Euslisp 上の Xwindow インターフェースは、'eusx' という名前で Euslisp が呼び出されたとき、実行可能となる。³eusx は、起動時に環境変数"DISPLAY"を参照して Xserver に接続を試みるため、自分の Xsever に環境変数"DISPLAY"が正しく設定されていなければならない。

Xlib 関数は、Xwindow システムへの低レベルインターフェースで、foreign 関数として定義されている。これらの Xlib 関数は、パラメータの型チェックあるいはパラメータの数のチェックを実行していないため、十分注意して使用しなければならない。例えば、すべての Xlib の呼び出しにおいて Xserver との接続を確認するために x:*display*を引き数として要求する。もし、指定し忘れたならば、Xlib はエラーを通知し、そのプロセスは死ぬ。このような不便を避け、オブジェクト指向のインターフェースを作るために、2 番めのレベルのインターフェースである Xlib クラスが備わっている。この節では、この2 番めのレベルのインターフェースに焦点を当てる。XToolKit と呼ばれるもっと高レベルの Xwindow ライブラリは、次節で説明されている。

この節に記述されているクラスは、以下の継承の階層を持っている。

```
propertied-object
  viewsurface
       x:xobject
       x:gcontext
       x:xdrawable
       x:xpixmap
       x:xwindow
colormap
```

16.1 Xlib のグローバル変数とその他関数

[変数]

x:*whitepixel*

 $^{^{3}}$ eusx は、eus へのシンボリックリンクである。

白色の pixel 値 = 0

lightblue2

x:*fg-pixel* [変数] window 作成時に参照されるデフォルトの文字色の pixel 値、ふつう*blackpixel*。 x:*bg-pixel* [変数] window 作成時に参照される背景色の pixel 値、ふつう*whitepixel。 x:*color-map* [変数] システムのデフォルトカラーマップ x:*defaultGC* [変数] pixmap 生成時に参照されるデフォルト gcontext x:*whitegc* [変数] 文字色が白色の gcontext x:*blackgc* [変数] 文字色が黒色の gcontext *gray-pixmap* [変数] (make-gray-pixmap 0.5) の結果。 *gray25-pixmap* [変数] 1/4 のピクセルが*fg-pixel*であり、3/4 が*bg-pixel*である 16x16 の pixmap。 *gray50-pixmap* [変数] 1/2 のピクセルが*fg-pixel*である 16x16 の pixmap。 *gray75-pixmap* [変数] 3/4 のピクセルが黒色である 16x16 の pixmap。 *gray25-gc* [変数] *gray25-pixmap*から作る 25%のグレー GC。 *gray50-gc*[変数] *gray50-pixmap*から作る 50%のグレー GC。 *gray75-gc* [変数] *gray75-pixmap*から作る 75%のグレー GC。 *gray* [変数] "#b0b0b0" *bisque1* [変数] "#ffe4c4" *bisque2*[変数] "#eed5b7" *bisque3* [変数] "#cdb79e"

[変数]

```
"#b2dfee"
*lightpink1*
                                                                                     [変数]
    "#ffaeb9"
*maroon*
                                                                                     [変数]
    "#b03060"
*max-intensity*
                                                                                     [変数]
    65535
                                                                                     [変数]
font-cour8
    (font-id "*-courier-medium-r-*-8-*")
font-cour10
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-courier-medium-r-*-10-*")
font-cour12
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-courier-medium-r-*-12-*")
font-cour14
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-courier-medium-r-*-14-*")
font-cour18
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-courier-medium-r-*-18-*")
                                                                                     [変数]
font-courb12
    (font-id "*-courier-bold-r-*-12-*")
font-courb14
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-courier-bold-r-*-14-*")
font-courb18
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-courier-bold-r-*-18-*")
font-helvetica-12
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-Helvetica-Medium-R-Normal-*-12-*")
                                                                                     [変数]
font-lucidasans-bold-12
    (font-id "lucidasans-bold-12")
                                                                                     [変数]
font-lucidasans-bold-14
    (font-id "lucidasans-bold-14")
font-helvetica-bold-12
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-Helvetica-Bold-R-Normal-*-12-")
                                                                                     [変数]
    (font-id "*-fixed-medium-r-normal-*-14-*")
x:*xwindows*
                                                                                     [変数]
    Euslisp による子 window を含んだ全ての window のリストを保持する。
```

[変数]

x:*xwindow-hash-tab*

drawable ID から xwindow オブジェクトを探すためのハッシュテーブル。x:nextevent で得られるイベント構造は window ID であるため、x:window-main-loop はこのテーブルを使用して一致する xwindow オブジェクトを知るために x:event-window を呼び出す。

xflush [関数]

Xlib のコマンドバッファに保有するコマンドをすべて Xserver に送る。Xlib バッファが Xserver に出力するため、Xserver に発行されたコマンドは、すぐに実行されない。これは、ネットワークの渋滞およびプロセスの切替え頻度を減少させるために必要である。コマンドの効果を見るためにコマンドバッファを掃き出す方法として、xflush を使用するかあるいは:flush メッセージを xwindow オブジェクトに送る。

16.2 Xwindow

Xobject [752]

:super **geometry:viewsurface**

:slots

すべての Xwindow に関連するクラスの共通のスーパークラスである。現在、スロットもメソッドも定義されていない。

Xdrawable [クラス]

:super Xobject

:slots (drawable idrawable idrawable

gcon ; this drawable's default graphic context object

bg-color ; background color

width height ; horizontal and vertical dimensions in dots

Xdrawable は、線分や文字列のようなグラフィックオブジェクトを描くための四角領域を定義する。 Xdrawable は、xwindow や xpixmap のための共通メソッドを定義するための抽象クラスであり、このクラスのインスタンスは何の効果も持っていない。

:init id [$\mathsf{X}\mathsf{Y}\mathsf{v}\mathsf{F}$]

id は、この drawable の ID として drawable スロットに設定される。新しい GC(graphic context) が生成され、この drawable オブジェクトのデフォルト GC として gcon に設定される。

:drawable [メソッド]

drawable ID を返す。

:flush [メソッド]

Xlib のバッファに保有されるコマンドを掃き出す。

igeometry [メソッド]

7 つの幾何学属性のリストを返す。そのリストは、root-window-id, x 座標, y 座標, 幅, 高さ, 枠線の幅, visual の深さである。

:height [メソッド]

この Xdrawable の高さ (y 軸方向のドット数)を返す。

:width [メソッド]



図 14: 描画の基本

この Xdrawable の幅 (x軸方向のドット数)を返す。

:gc &rest newgc [メソッド]

もし、newgc が与えられない場合、現在の GC オブジェクトを返す。もし、newgc が gcontext のインスタンスなら、この Xdrawable の gc に設定する。そうでなければ、newgc はメッセージとみなされ、現在の gc に送られる。

:pos [メソッド]

この Xdrawable の位置を示す整数ベクトルを返す。位置は親 window の相対位置としていつも定義され、window マネージャの仲介のもとにルート window の直接の子 window として生成された window は、ルート window の本当の位置に関わらず、環境のタイトル window の固定座標を返す。

:x [メソッド]

この Xdrawable の親 window との相対的な現在の x 座標を返す。

:y [メソッド]

この Xdrawable の親 window との相対的な現在の y 座標を返す。

:copy-from drw [メソッド

drw は、他の drawable オブジェクト (Xwindow または pixmap) である。drw の内容がこの Xdrawable にコピーされる。

:point x y & optional (gc gccon)

[メソッド]

(x,y) の位置にオプションの gc で点を描く。

:line x1 y1 x2 y2 &optional (gc gcon)

[メソッド]

(x1,y1) から (x2,y2) ヘオプションの gc を用いて線分を描く。x1,y1,x2,y2 は整数でなければならない。

 $\textbf{:rectangle}\ x\ y\ width\ height\ \mathcal{C}optional\ (gc\ gcon)$

[メソッド]

(x,y) を中心として width の幅と height の高さを持つ四角形を描く。

:arc x y width height angle1 angle2 &optional (gc gcon)

[メソッド]

(x,y) を中心として width の幅と height の高さを持つ四角形に内接する楕円の円弧を描く。 angle1 が始まりの角度を示し、angle2 が終わりの角度を示す。これらの角度の単位はラジアンである。

:fill-rectangle x y width height & optional (gc gcon)

[メソッド]

四角領域を埋める。

:fill-arc x y width height angle1 angle2 &optional (gc gcon)

[メソッド]

円弧の中を埋める。

:string x y str &optional (gc gcon)

[メソッド]

(x,y) の位置から文字列 str を表示する。背景は、書かない。

:image-string x y str &optional (gc gcon)

[メソッド]

文字列 str を表示する。文字列は、背景色で満たされる。

:getimage &key:x:y:width:height(:mask #fffffff)(:format 2)

[メソッド]

server から ximage を取り、ピクセルデータを文字列として返す。server から送られるピクセルデータは、一端 Xlib の ximage 構造に蓄積される。その後、行毎に文字列にコピーされる。ximage 構造は、自動的に破壊される。:getimage により得られた画像文字列は、pixel-image を作るために使用できる。また、??節に書かれているように pbm フォーマットのファイルに書き込むことができる。

:putimage image &key:src-x:src-y:dst-x:dst-y:width:height ((:gc g) gc)

[メソッド]

この Xdrawable の指定された位置に image を表示する。image は、文字列あるいは ximage 構造への アドレスポインターである。

:draw-line from to

[メソッド]

:line メソッドと同じである。他の viewsurface クラスとの互換性を提供できる。

:line-width &optional dots

[メソッド]

この Xdrawable のデフォルト GC の線の幅を設定する。:gc :line-width メッセージの使用を推薦する。

:line-style &optional dash

[メソッド]

この Xdrawable のデフォルト GC の線スタイルを設定する。:gc :line-style の使用が好まれる。

:color &optional c

[メソッド]

この Xdrawable の色を設定する。

:clear

[メソッド]

全画面を消去する。この関数は、:clear-area を呼び出す。

:clear-area &key :x :y :width :height :gc

[メソッド]

:fill-rectangle メソッドを用いて四角領域を消去する。

Xpixmap

[クラス]

:super Xdrawable

: slots

pixmap は、画像バッファあるいは背景のパターンとしてしばしば用いられる drawable である。xwindow と異なり、xwindow にコピーされるまで pixmap 自身を見ることはできないし、pixmap はどんなイベントも発生しない。

: \mathbf{init} id

「メソッド]

この pixmap を初期化する。

:create &key (:width 500) (:height 500) (:depth 1) (:gc *defaultgc*)

[メソッド]

デフォルト GC として:gc を持つ、width×heightの pixmap を作成する。

:create-from-bitmap-file fname

[メソッド]

file で指定される bitmap ファイルから pixmap を作る。

:write-to-bitmap-file fname

[メソッド]

[メソッド]

この pixmap の内容を fname で指定される bitmap ファイルに書き込む。このファイルは、:create-from-bitmap-file メソッドで pixmap を作り、読み戻すことができる。

:destroy [メソッド]

この pixmap を破壊し、X resource を開放する。

Xwindow [75]

:super Xdrawable

:slots (parent subwindows backing-store)

Xwindow は、画面の見える四角領域を定義する。これは、text-window やグラフィックオブジェクトを描くための canvas だけでなく、window というよりはむしろグラフィックオブジェクトのようなたくさんの panel-item や scroll-bars からも継承される。

:event-mask (:key :button :enterLeave :configure :motion)

xwindow 生成し、初期化する。:parent が与えられたとき、この window は:parent の子 window として 生成され、:parentのsubwindowsリストに蓄積される。:x,:y,:size,:width,:heightと:border-widthは、 この window の位置と寸法を決定する。:save-under と:backing-store は、window が再マップされたとき に生じる Xserver の行動を制御する。:backing-store は:notUseful, :WhenMapped, :Always のどれか であるが、:save-under は T あるいは NIL である。:backing-pixmap が T のとき、この window と同じサ イズの pixmap が Euslisp により生成され、もし Xserver が backing-store の容量を持っていない場合 は、backing-store として蓄積される。:border と:background は、border_pixel と background_pixel 属性をそれぞれ指定する。もし、panel の中の panel-button としてたくさんの小さな window を作 成するような場合で、この window が生成後にすぐ表示されるべきでないならば、map は Mindow にセ ットされなければならない。:title は、window のタイトルバーに現れる window のタイトルである。 :name は、この window の plist に蓄積される window の名前であり、プリンタにより表示される名前 である。この window への X のイベントは、:event-mask によって決定される。それはビットで構成 される event-mask の整数表現あるいは次の symbol のリストである。:key, :button, :enterLeave, :motionと:configure。もし、もっと正確な制御が必要ならば、次のsymbolをそれぞれのイベントに指 定することができる。:keyPress, :keyRelease, :ButtonPress, :ButtonRelease, :EnterWindow, :LeaveWindow, :PointerMotion, :PointerMotionHint, :ButtonMotion, :KeyMapState, :Exposure, :VisibilityChange, :StructureNotify, :ResezeRedirect, :SubstructureNotify, :SubstructureRedirect, :FocusChange, :PropertyChange, :ColormapChange & :OwnerGrabButton。:keyは、:keyPressと:KeyReleaseの両方が指定でき、:buttonは、:ButtonPress と:ButtonRelease の両方が指定できる。サーバからイベントが送られてきたとき、window-mainloop は、そのイベント構造を解析し、:KeyPress, :KeyRelease, :buttonPress, :ButtonRelease, :EnterNotify, :LeaveNotify, :MotionNotify, :ConfigureNotify メッセージをそのイベントが発

生した window に送る。

:map [メソッド]

この Xwindow とその子 window を全て表示する。

:unmap [メソッド]

この Xwindow をとその子 window を全て非表示にする。

:selectinput event-mask

[メソッド]

event-mask は、整数かあるいはイベントマスク symbol のリストである。ビットが 1 となっているかあるいは event-mask リストに列挙されているイベントは、それぞれこの window に通知される。

:destroy [メソッド

この Xwindow を破壊し、X resource を開放する。window オブジェクトは、ガーベージコレクトされないため、*xwindow*や*xwindow-hash-tab*の中の一致するエントリも削除される。全ての子 window も:destroy を送ることにより削除する。この window は、親 window の子 window のリストから削除される。drawableID は、NIL に設定される。

:parent [メソッド]

親 window オブジェクトを返す。

:subwindows [メソッド]

全ての子 window のリストを返す。子 window は、もっとも最近作られたものがリストの最初である。この window の直接の子 window だけがリストされ、子 window の子 window はリストされない。

:associate child [メソッド]

この window の子 window として child window を登録する。

:dissociate child [メソッド]

子 window のリストから child window を削除する。

:title title

この window のタイトル名を変更する。そのタイトル名は Xserver に送られるため、一旦蓄積され、window manager によって表示される。

:attributes [メソッド]

この window の属性を表現する整数ベクトルを返す。

:visual [メソッド]

この Xwindow の visual resource ID を返す。

:screen [メソッド]

この Xwindow の screen resource ID を返す。

:root [メソッド]

root window ID を返す。

:location [メソッド]

この window の x と y 座標を記述する 2 次元の整数ベクトルを返す。

:depth [メソッド]

この window の深さ (カラープレーンの数) を返す。

:size [メソッド]

この window のサイズ (高さと幅) を返す。

:colormap [メソッド]

この window の colormap resource ID を返す。

:move newx newy [メソッド]

この window の位置を (newx,newy) に変更する。位置は、親 window の相対位置で与えられる。

:resize width height [メソッド]

この window のサイズを変更する。たぶん、大きさのパラメータがクライアント側の Xlib に中にキャッシュされるため、:resize の直後に:geometry メッセージを送ると誤った(古い)結果を返す。

:raise [メソッド]

この window を前面に持ってくる。

:lower [メソッド]

この window を後ろに置く。

:background pixel [メソッド]

背景のピクセル値(カラーマップのインデックス)を *pixel* に変更する。 *pixel* 値は、bg-color スロットにも保存される。: clear 処理は、現在の背景を指定された *pixel* で埋める。

:background-pixmap pixmap

[メソッド]

[メソッド]

[関数]

背景の pixmap 値を pixmap に変更する。

:border pixel [メソッド]

この window の枠線の色を pixel に設定する。

:set-colormap cmap [メソッド]

colormap を設定する。

:clear [メソッド]

この Xwindow 内を全て消去する。

:clear-area &key :x :y :width :height

この Xwindow の指定された四角領域を消去する。

make-xwindow &rest args

引き数 args で示される Xwindow を作る。

init-xwindow & optional (display (getenv "DISPLAY")) [関数]

eusx が起動するときに最初に呼び出される関数である。init-xwindow は、display で指定される Xserver に接続し、16.1 節に記述されているデフォルト変数を初期化する。init-xwindow は、デフォルトフォントをロードし、グローバル変数に設定する。例えば、font-courb12, lucidasans-bold-12 など。このフォントロードは、起動時に時間遅れを引き起こす。フォントロードの数を減らしたり、ワイルドカード文字"*"を使用せずに正確なフォント名を指定することにより、その遅れを短くできる。

16.3 Graphic Context

gcontext [クラス]

:super Xobject

:slots (gcid GCValues)

graphic context(GC) を定義する。Euslisp の中で、全ての window はデフォルト GC を持っている。

:create &key (:drawable defaultRootWindow)

[メソッド]

(:foreground *fg-pixel*) (:background *bg-pixel*)

: function: plane-mask

: line-width: line-style: cap-style: join-style

:font :dash

与えられた属性で GC を作成する。 drawable は、画面と画面の深さを知るために Xserver により使用される。 結果の GC は、同じ画面上で作成される限り、どの drawable でも使用できる。

:gc

[メソッド]

XのGCIDを返す。

:free

[メソッド]

この GC を開放する。

:copy

[メソッド]

この GC のコピーを作る。

:foreground & optional color

[メソッド]

もし、color が与えられたならば、文字色に color を設定する。color はピクセル値である。

:background &optional color

[メソッド]

もし、colorが与えられたならば、背景色に colorを設定する。colorはピクセル値である。

:foreback fore back

[メソッド]

一度に文字色と背景色を設定する。

:planemask &optional plane-mask

[メソッド]

plane-mask を設定する。

: function x

[メソッド]

描画機能を設定する。xは、以下に示す数字かキーワードの内の1つである。0=Clear, 1=And, 2=AndReverse, 3=Copy, 4=AndInverted, 5=NoOp, 6=Xor, 7=Or, 8=Nor, 9=Equiv, 10=Invert,

11=XorReverse, 12=CopyInverted, 13=OrInverted, 14=Nand, 15=Set, :clear, :and,

:andReverse, :copy, :andInverted, :NoOp, :Xor, :Or, :Nor, :Equiv, :Invert, :XorReverse, :CopyInverted, :OrInverted, :Nand, :Set

:font x

[メソッド]

この GC のフォント属性を設定する。x は、フォント名あるいはフォント ID である。もし、x がフォント名(文字列)であったならば、:font はフォント ID を決めるために x:LoadQueryFont を呼び出す。もし、見つからなかった場合、"no such font ..."が警告される。もし、x が NIL (与えられなかった)ならば、この GC の現在のフォント ID が返される。

:line-width x

[メソッド]

線幅をピクセル数 x で設定する。

:line-style x

[メソッド]

線スタイル (実線、点線など)を設定する。

:dash &rest x

xのそれぞれの要素は、整数である。:dash は、線スタイルの点線パターンを設定する。

:tile pixmap [メソッド]

pixmap をこの GC のタイルパターンに設定する。

stipple pixmap [メソッド]

pixmap をこの GC の点画に設定する。

:get-attribute attr [メソッド]

属性値を得る。attrは、:function, :plane-mask, :foreground, :background, :line-width, :line-style :cap-style, :join-style, :fill-style, :fill-rule, :fontの内の1つである。属性値を表す整数が返される。

:change-attributes &key :function :plane-mask :foreground :background

[メソッド]

:line-width :line-style :cap-style :join-style :font :dash

属性値を変更する。同時に複数の属性値を変更できる。

font-id fontname [関数]

もし、fontname が整数であるなら、フォント ID とみなしてその値を返す。もし、fontname が文字列であるなら、x:LoadQueryFont を使用してフォント構造を得て、そのフォント ID を返す。fontname は、正確な名前の略語でも良い。例えば、24 ポイントのクーリエフォントとして"*-courier-24-*"を指定できる。もし、フォントが見つからなければ、can't load fontの警告を出力する。

textdots str font-id [関数]

str文字列の ascent descent width をドット単位に示す3つの整数のリストを返す。

16.4 色とカラーマップ

colormap [クラス]

:super object

:slots (cmapid planes pixels LUT-list)

Xwindow のカラーマップおよびアプリケーション指向のカラールックアップテーブルを定義する。カラーは RGB 値で表現され、その範囲は $0 \sim 65535$ である。カラーマップのカラーセルは、8 ビットの擬似カラーディスプレイの上の $0 \sim 255$ の範囲の値に設定される。

ここで、8 ビットの擬似カラーディスプレイの機能があり、256 色を選択することができると仮定する。基本的にカラーマップを使用する 2 つの方法がある。1 つは、システムデフォルトのカラーマップを共有する方法で、もう1 つはプロセスに独自のカラーマップを作成する方法である。もし、システムのデフォルトカラーマップを使用する場合、マップのすべてのカラーセルを使いきらないように注意しなければならない。なぜなら、マップは多くののプロセスから共有されているからである。もし、独自のカラーマップを使用する場合、他のプロセスを気にすることなく 256 色すべてを使用することができる。しかし、そのマップは明確に独自のwindow に設定しなければならない。マウスのポインターが window 内のどこかに動かされたとき、カラーマップは window manager により活性化される。

システムデフォルトのカラーマップは eusx が実行される最初に x:colormap のクラスのインスタンスとして、x:*color-map*に設定されている。もし、独自のカラーマップを使用するとき、x:colormap のインスタ

ンスを作る。これらのインスタンスは、x server で定義された colormap オブジェクトと一致しており、それぞれのインスタンスの cmapid に示されている。

システムデフォルトのカラーマップを使用するとき、他のプロセスと共有するカラーを読み込み専用 (read-only) に、Euslisp の独自カラーを読み書き可能 (read-write) に定義することができる。"読み込み専用"は、カラーセルに割り当てられる任意のカラーに定義することができる。しかし、割り当てた後変更することができない。もう一方で、"読み書き可能"カラーは定義した後でさえ、変更することができる。共有カラーは、他のプロセスが変更を予期していないため"読み込み専用"である。この"読み込み専用"と"読み書き可能"の属性は、それぞれのカラーに付けられる。(しばしば、カラーセルとして参照される)

colormap オブジェクトは、color ID から RGB の物理的な表現への変換を定義する。しかしながら、これらの論理的な color ID は、任意に選択することができない。特に、システムのデフォルトのカラーマップを使用しているとき、使用できない。color ID (しばしば'pixel' として参照される)は、カラーマップの特別な色のインデックスである。Xlib は、割り当ての要求があると、共有カラーのために空いたインデックスの1つを選択する。したがって、たくさんのグレー階調のカラーを連続的に割り当てることを保証することあるいは最初(0番目)のインデックスから始めることはできない。

アプリケーションの観点から、もっと論理的なカラー名が必要とされる。例えば、グレー階調の数は明るさをインデックスとして参照すべきである。レイトレーシングプログラムは、HLSで定義される違った明るさのカラーのグループのために連続的なインデックスの割り当てを要求する。

この問題に対処するために、Euslisp のカラーマップはルックアップテーブル (LUT) と呼ばれる別の変換 テーブルを提供している。論理的なカラーグループのために、LUT を定義でき、symbol 名を付けることができる。1つ以上のLUT をカラーマップとして定義できる。LUT は、Xserver が認識できるように、アプリケーションが指定した論理カラーのインデックスを物理ピクセル値に変換するために整数ベクトルである。

:id [メソッド]

cmapid を返す。

:query pix [メソッド]

指定されたピクセル数の RGB 値を返す。

:alloc pix r g b

このメソッドは、:store nil r g b と同一である。新しいカラーセルがこのカラーマップに配置され、指定された RGB 値に割り当てられる。

store pix r g b [メソッド]

pix 番目のカラーセルの RGB 値を設定する。

store pix color-name [メソッド]

store は、カラーマップに色を設定する低レベルメソッドである。 1 つの書式として、RGB 値を 0 ~ 65535 で指定する方法である。他の書式として、"red" や"navy-blue"のようなカラー名で指定する。もし、color-name がなければ、NIL を返す。ピクセルはカラーマップのインデックスあるいは NIL である。もし整数なら、カラーセルは読み書き可能でなければならない。もし NIL なら、共有の読み込み専用カラーセルが割り当てられている。:store は、カラーマップ内のカラーセルのインデックスを返す。

:store-hls pix hue lightness saturation

[メソッド]

 $\operatorname{HLS}(\operatorname{Hue, Lightness}\ \operatorname{and Saturation})$ で指定される色をカラーマップの pix 番目に蓄積する。もし、 pix が NIL なら、共有の読み込み専用のカラーセルが割り当てられる。:store-hls は、カラーセルに割り当てられるインデックスを返す。

:destroy [メソッド]

この colormap を破壊し、リソースを空にする。

:pixel LUT-name id [メソッド]

LUTの中から id 番目を調べて、ピクセル値を返す。LUT-name は、: define-LUT で定義されたルックアップテーブルの名前である。

: allocate-private-colors num

[メソッド]

独自のカラーマップに num 個のカラーセルを割り当てる。

:allocate-colors rqb-list [private]

[メソッド]

rgb-list のそれぞれの要素は、red,green,blue のリストである。カラーセルは、それぞれの RGB 値が割り当てられ、ピクセル値を要素とする整数ベクトルを返す。

 $\textbf{:define-LUT} \ \textit{LUT-name} \ \textit{rgb-list} \ [\textit{private}]$

[メソッド]

rgb-list に記述されたカラーが割り当てられ、LUT が LUT-name のシンボリック名で登録される。独自のカラーセルを定義するためには、private を T に設定すること。

:define-gray-scale-LUT LUT-name levels [private]

[メソッド]

線形のグレースケールカラーで表現される levels 階調のカラーセルを割り当て、LUT を返す。例えば、(send x:*color-map* :define-gray-scale-LUT 'gray8 8) は、システムのデフォルトカラーマップの中に8つのグレーカラーを配置し、#i(29 30 31 48 49 50 51 0)のような整数ベクトルを返す。物理ピクセル値は、:pixel メッセージを送ることにより得られる。例えば、(send x:*color-map* :pixel 'gray8 2) は、31 を返す。

:define-rgb-LUT LUT-name red green blue [private]

[メソッド]

RGB 表現を縮小した LUT を定義する。例えば、もし、red=green=blue=2 なら、カラーセルには $2^{2+2+2}=2^6=64$ が割り当てられる。

:define-hls-LUT LUT-name count hue low-brightness high-brightness saturation [private] [メソッド] HLS で使用する count 数のカラーを配置する。hue (0..360),saturation (0..1),low-brightness と high-brightness の明るさの差をカラーマップに蓄積される。LUT-name で名付けられる LUT も作られる。

:define-rainbow-LUT LUT-name count

[メソッド]

(hue-start 0) (hue-end 360)

 $(brightness\ 0.5)$

(saturation 1.0) (private nil)

HLS モデルを用いて count の色を配置する。brightness~(0..1) と saturation~(0..1) と, hue-start と hue-end 間の異なった hue を持つ色をカラーマップに蓄積する。LUT-name を名付けられた LUT も生成される。

:LUT-list

[メソッド]

このカラーマップに定義されている全ての LUT のリストを返す。リストのそれぞれのエントリは、LUT 名と整数ベクトルの組である。

:LUT-names [メソッド]

このカラーマップの全ての LUT の名前のリストを返す。

:LUT name

name で指定される整数ベクトル (LUT) を返す。

:size LUT [メソッド]

LUTの長さを返す。

:planes [メソッド]

このカラーマップのプレーンを返す。

:set-window xwin [メソッド]

このカラーマップを xwin の window と関連付ける。このカラーマップは、xwin にカーソルが入ったとき活性化される。

:free pixel - LUT [メソッド]

pixel の場所にあるカラーセルを開放するかあるいは LUT のすべてを開放する。

:init [cmapid] [メソッド]

このカラーマップを cmapid で初期化する。登録された LUT はすべて捨てられる。

:create & key (planes 0) (colors 1) (visual *visual*) (contiguous i l) [メソッド] 新しいカラーマップを作成する。

XColor [クラス]

(blue :short) (flags :byte) (pad :byte))

RGB モデルのカラーを定義する。それぞれのスロットに値を割り当てるには、setf を用いる。 RGB 値は、符合拡張され、最大値は -1 と表現される。

:red [メソッド]

この XColor の赤色の値を返す。

:blue [メソッド]

この XColor の青色の値を返す。

:green [メソッド]

この XColor の緑色の値を返す。

:color [メソッド]

この XColor の RGB 値のリストを返す。

:init pix R G B &optional (f 7) [メソッド]

XColor を初期化する。

 $\mathbf{find\text{-}visual}\ type\ depth\ \mathcal{C}optional\ (screen\ 0)$

[関数]

typeと depth で指定される visual-ID を見つける。type は、:StaticGray, :GrayScale, :StaticColor, :pseudoColor, :TrueColor あるいは:DirectColor のどれかである。ふつう、depth は 1,8 または 24 である。

17 XToolKit

XToolKit は、ボタン、プルダウンメニュ、テキスト window などの GUI 要素を使用して GUI (Graphical User Interface) を作成するのを容易にするための高レベル Xwindow インターフェースである。Xlib クラスとの大きな違いは、XToolKit が Xserver から送られる Xevent と一致するユーザーが定義した対話ルーチンを呼び出し、それらの対話指向 window パーツと一致した外観を提供することである。XToolKit に含まれるクラスは、以下の継承構造を持っている。

```
xwindow.
     panel
          menubar-panel
          menu-panel
          filepanel
          textviewpanel
          confirmpanel
     panel-item
          button-item
               menu-button-item
               bitmap-button-item
               menu-item
          text-item
          slider-item
          choice-item
          joystick-item
     canvas
     textwindow
          buffertextwindow
               scrolltextwindow
          textedit
     scroll-bar
          horizontal-scroll-bar
```

以下に示す xwindow クラスは XToolKit の 5 つの基本クラスである。panel, panel-item, canvas, textWindow と scroll-bar。menubar-panel と menu-panel は、panel の下に定義される。新しいアプリケーション window を作り、イベントの上でそれを実行させるための基本的な方策は、以下の通りである。

- 1. アプリケーションクラスの定義 アプリケーションクラス window は、XToolKit の要素を置く能力を持つ panel のサブクラスとして定義されなければならない。
- 2. イベントハンドラの定義 アプリケーションクラスにおいて、ボタンが押されたり、メニューアイテムが 選択されたりしたときに呼び出されるイベントハンドラを定義する。イベントハンドラは、panel-item の指定された引数を持つメソッドとして定義すべきである。
- 3. サブパネルの定義 もし、menubar-panel を使用するなら、アプリケーション window の一番上におかれる。したがって、:create-menubar によって最初に作成されなければならない。同様に、menu-panel は、その menu-panel と関連する menu-button-item より前に定義する必要がある。
- 4. パネルアイテムの作成 button-item, text-item, slider-item などのようなパネルアイテムは、(send-super :create-item class label object method) によって作成することができる。上記で定義されたイベ

ントハンドラは、それぞれのパネルアイテムと接続される。これらの初期化手続きは、アプリケーション window クラスの:create メソッドの中で定義すべきである。必要なときはいつでもイベント送信を停止するための quit ボタンを定義することを忘れないこと。どんな textWindow と canvas も、:locate-item メソッドを経由してアプリケーション window の中に置くことができる。

- 5. **window** 全体の作成:create メッセージをアプリケーションクラスに送ることで、windowに XToolKit の要素を正しく置いたアプリケーション window を作成する。
- 6. イベント送信の実行 Xserver からイベントを受け、一致する window に配るためには、window-main-loop を実行すること。Solaris2 上では、イベントを配るための異なったスレッドである window-main-thread で実行する。window-main-thread では、最上位レベルの対話が活きている。window-main-thread を 2 回以上実行してはならない。

17.1 X イベント

現在の実行において、イベント構造は固定イベントバッファ(25要素の整数ベクトル)から受け、同じバッファが全てのイベントに関して再使用される。イベント構造は、同時に2つ以上のイベントを参照する必要があるとき、コピーされなければならない。

window-main-loop は、Xserver から送られる全てのイベントを捕獲し、イベントが発生した window に配るための関数である。

event [变数]

もっとも最近のイベント構造を持つ25要素の整数ベクトル

next-event [関数]

event の中にイベント構造を蓄積し、もし1つでも未決定のイベントがあればそれを返し、なければ NIL を返す。

event-type event [関数]

event のイベント型を表現するキーワード symbol 返す。イベント型キーワードは、:KeyPress (2), :KeyRelease (3), :ButtonPress (4), :ButtonRelease (5), :MotionNotify (6), :EnterNotify (7), :LeaveNotify (8), :FocusIn (9), :FocusOut (0), :KeymapNotify (1), :Expose (12), :GraphicsExpose (13), :NoExpose (14), :VisibilityNotify (15), :CreateNotify (16), :DestroyNotify (17), :UnmapNotify (18), :MapNotify (19), :MapRequest (20), :ConfigureNotify (22), :ConfigureRequest (23), :GravityNotify (24), :ResizeRequest (25), :CirculateNotify (26), :CirculateRequest (27), :PropertyNotify (28), :SelectionClear (29), :SelectionRequest (30), :SelectionNotify (31), :ColormapNotify (32), :ClientMessage (33), :MappingNotify (34), :LASTEvent (35) である。

event-window event [関数]

event が発生した window オブジェクトを返す。

event-x event [関数]

event からそのイベントが発生した x 座標を抜き出す。(すなわち、window 内におけるマウスポインタの横方向の相対的な位置)

event-y event [関数]

event からそのイベントが発生した y 座標を抜き出す。(すなわち、window 内におけるマウスポインタの縦方向の相対的な位置)

event-width event [関数]

:configureNotify イベントに幅パラメータを表現する event の 8 つの要素を返す。

event-height event [関数]

:configureNotify イベントに高さパラメータを表現する eventの8つの要素を返す。

event-state event [関数]

キーの状態で変更されたマウスボタンを表現するキーワードのリストを返す。キーワードは、:shift, :control, :meta, :left, :middle と:right である。例えば、もしシフトキーが押されている状態で左のボタンが押されたならば、(:shift :left) が返される。

display-events [関数]

x:nextevent によって捕獲された全ての xwindow イベントを表示する。Control-C は、この関数を停止させる唯一の方法である。

window-main-loop &rest forms

[マクロ]

Xevent を受け、イベントが発生した window オブジェクトにそれを配る。イベントの型に沿って、:KeyPress,:KeyRelease,:ButtonPress,:ButtonRelease,:MotionNotify,:EnterNotify,:LeaveNotify:ConfigureNotifyと名付けられた window クラスのメソッドが *event* を引数として呼び出される。もし、*forms* が与えられたならば、到着したイベントがチェックされるとき毎にそれらを評価する。

window-main-thread [関数]

スレッドであることを除いて window-main-loop と同じことをする。window-main-thread は、Solaris2 でのみ実現されている。window-main-thread は、read-eval-print が入力されないエラーハンドラをインストールしている。エラー情報を表示した後、そのイベントは処理を続ける。

17.2 パネル

panel [75]

:super xwindow

:slots (pos items fontid

rows columns ;total number of rows and columns

next-x next-y

item-width item-height)

panel は、パネルアイテムや他の panel を含んだどんな xwindow も置くことができる xwindow である。 panel オブジェクトは、panel の中で生成されたパネルアイテムへのデフォルトフォントを供給する。アプリケーション window は、panel のサブクラスとして定義去れなければならない。

:create &rest args &key ((:item-height iheight) 30) ((:item-width iwidth) 50) [メソッド]
(:font font-lucidasans-bold-12) ((:background color) *bisque1*)

& allow-other-keys)

panel を生成し、初期化する。スーパークラスの: create が呼び出されるため、xwindow に対する全ての生成用パラメータ (:width,:height,:border-widthなど)が許される。:item-heightと:item-widthは、最小の高さと幅をそれぞれのパネルアイテムに与える。

:items [メソッド]

関連するアイテムを全てリストで返す。



図 15: panel のアイテムレイアウト

:locate-item item & optional x y

[メソッド]

item は、xwindow オブジェクト(ふつうはパネルアイテム)である。もしxとyが与えられたならば、アイテムはそこに置かれる。そうでなければ、item は、もっとも最近に置かれたアイテムに隣接するように置かれる。アイテムは、図 15 のように上から下に向かって、また左から右に向かって置かれていく。:locate-item は、また items や subwindows リストに item を追加し、:map を送ることにより見えるようにする。

:create-item klass label receiver method &rest args

[メソッド]

&key ((:font fontid)
&allow-other-keys)

klassで指定されるパネルアイテムのクラス(すなわち、button-item, menu-button-item, slider-item, joystick-item など), のインスタンスを作り、:locate-item を用いて panel にアイテムを置く。args は、klassの:create メソッドに送られる。label は、パネルアイテムの中に書かれる識別文字列である。receiverと method は、一致するイベントを呼び出すイベントハンドラを指定する。

:delete-items [メソッド]

パネルアイテムを全て削除する。

:create-menubar & rest args

[メソッド]

&key (:font fontid) &allow-other-keys

menubar-panel を作成し、panel の最上部に置く。

以下に示すメソッドは、イベントがイベントハンドラのないpanelに送られたとき、"subclass's responsibility" 警告メッセージを避けるために提供されている。ユーザーのアプリケーションでは、これらのメソッドを上書きしなければならない。

:quit &rest a [メソッド]

window-main-loop に:quit メッセージを送り、イベント処理を停止する。

:KeyPress event [メソッド]

NIL を返す。

:KeyRelease event [メソッド]

NIL を返す。

:ButtonPress event [メソッド]

NIL を返す。

:ButtonRelease event [メソッド]

NIL を返す。

:MotionNotify event [メソッド]

NIL を返す。

:EnterNotify event [メソッド]

NIL を返す。

:LeaveNotify event [メソッド]

NIL を返す。

17.2.1 サブパネル (メニューとメニューバー)

menu-panel [75]

:super panel

:slots (items item-dots item-height

charwidth charheight

height-offset
highlight-item
color-pixels
active-color)

menu-panel は、panel-button と menu-item のみを含むことができるパネルの一種である。panel と異なり、menu-panel はふつう見えないし、menu-panel と関連した button-item が押された時に表示される。もし、menu-panel がいつも見えるように作られたならば、ピンを刺したメニューとなる。マウスイベントに対する menu-item の応答は、アイテムの外のどこかで押されたマウスボタンのようにふつうの menu-button と全く異なっている。menu-panel を使用するためには、最初に作成し、その中にbutton-item を置く。それから、menu-button-item が panel の中あるいは menubar の中に:menu の引数として menu-panel と一緒に作成される。

:create &rest args &key (:items) (:border-width 0) (:font font-courb12) [メソッド]
(:width 100) (:height-offset 15) (:color *bisque1*) (:active *bisque2*)

(.wew. 100) (.meight offset 10) (.com obsque1) (.ueme obsque2)

 ${\it \&ellow-other-keys})$

menu-panel window を作成する。その window の大きさは、新しい menu-item が追加される時に拡張される。

:add-item label name &optional (receiver self) &rest mesg

[メソッド]

この **menu-panel** window の中に menu アイテムを追加し、対応する行動を張り付ける。マウスボタンがアイテムの上で外されたとき、*receiver* オブジェクトは *mesg* を受け取る。

menubar-panel

[クラス]



図 16: ファイルパネル window

:super panel :slots

menubar-panel は、親 panel の最上部にいつも置かれるサブパネルである。メニューバーに置かれるパネルアイテムは、menu-button-item でなければならない。menubar-panel は、panel の: create-menubar メソッドにより生成される。

17.2.2 ファイルパネル

FilePanel は、ファイルやディレクトリを対話的に処理するアプリケーション window である。cd や go-up ボタンを使用することにより、どんなディレクトリも見に行くことができるし、以下の ScrollTextWindow の中にディレクトリ内に含まれるファイルを表示する。テキストファイルは、異なった window(TextViewPanel) の中に表示することができる。ファイルは、また印刷することができ、削除することができ、ボタンをクリックすることにより簡単にコンパイルすることができる。ファイルを印刷するとき、a2ps $file \mid 1$ pr コマンドが fork されたプロセスとして実行される。

17.2.3 テキスト表示パネル

TextViewPanel は、テキストファイルを表示するためのアプリケーション window クラスである (図 17)。 プログラムテキストは、もっとも簡単なアプリケーション window の 1 つがどのように記述されているかを見れる。: create メソッドにおいて、quit ボタンと find ボタンとファイルの中を捜すための文字列を供給するための text-item を作成する。view-window は、縦と横にスクロールバーを持ちファイルを表示するための ScrollTextWindow である。TextViewPanel は、window マネージャーにより一番外側のタイトル window の大きさを変えたとき view-window の大きさを変えるために: ConfigureNotify イベントを捕獲する。



図 17: テキスト表示パネル window

```
(defmethod TextViewPanel
(:create (file &rest args &key (width 400) &allow-other-keys)
   (send-super* :create :width width args)
   (setq quit-button
          (send self :create-item panel-button "quit" self :quit))
   (setq find-button
          (send self :create-item panel-button "find" self :find))
   (setq find-text
          (send self :create-item text-item "find: " self :find))
   (setq view-window
            (send self :locate-item
                (instance ScrollTextWindow :create
                   :width (setq width (- (send self :width) 10))
                   :height (- (setq height (send self :height)) 38)
                   :scroll-bar t :horizontal-scroll-bar t
                   :map nil
                                 :parent self)))
   (send view-window :read-file file))
(:quit (event)
                (send self :destroy))
(:find (event)
   (let ((findstr (send find-text :value)) (found)
          (nlines (send view-window :nlines)))
        (do ((i 0 (1+ i)))
            ((or (>= i nlines) found))
           (if (substringp findstr (send view-window :line i)) (setq found i)))
        (when found
           (send view-window :display-selection found)
           (send view-window :locate found))))
(:resize (w h)
   (setq width w height h)
   (send view-window :resize (- w 10) (- h 38)))
```

17.3 パネルアイテム

panel-item [クラス]

:super xwindow

:slots (pos notify-object notify-method

fontid label labeldots)

panel-item は、パネルアイテム window のすべての種類において、アイテムが指定するイベントが発生したとき notify-object の notify-method を呼び出すための抽象クラスである。

:notify &rest args [メソッド]

notify-object の notify-method を呼び出す。イベント応答や notify-method へ送るための引き数がアイテムにより区別される。

button-item ボタンは、同じ button-item の押し、外し時に応答。引き数は button-item オブジェクト である。

menu-button-item メニューアイテムの選択時に応答。引き数は、menu-button-item オブジェクトである。

choice-item 新しい選択ボタンの選択時に応答。引き数は、choice-item オブジェクトとその選択番号である

text-item 改行あるいはリターンの入力時に応答。引き数は、text-item オブジェクトと入力行(文字列)である。

slider-item スライダーノブは、つかみと移動時に応答。引き数は、slider-item オブジェクトと新たな値である。

joystick-item ジョイスティックは、つかみと移動時に応答。引き数は slider-item オブジェクトと新しい x と y の値である。

:create name reciever method &rest args

[メソッド]

&key ((:width w) 100) ((:height h) 100) (:font font-courb12) &allow-other-keys

パネルアイテムを作成する。パネルアイテムは、抽象クラスである。このメソッドは、サブクラスによって send-super を通してのみ呼び出すべきである。

button-item [752]

:super panel-item :slots

button-item は、簡単なパネルアイテムである。button-item は、四角ボックスとその中のラベル文字列を持っている。クリックされたとき、button-item は panel-item オブジェクトを唯一の引き数として notify-object の notify-method を呼び出す。

:draw-label &optional (state :top) (color bg-color) (border 2) (offset)

[メソッド]

button-item のラベルを書く。

:create label revciever method &rest args

[メソッド]

&key:width:height(:font(send parent:gc:font))
(:background(send parent:gc:background))
(:border-width 0)
(:state:top)

&allow-other-keys

button-item を作成する。もし、ボタンの幅と高さが与えられないなら、サイズは与えられたフォントを用いて書かれたラベル文字列に合わせて自動的に設定される。:border-width はデフォルトで 0 であるが、擬似 3 次元表現でボタンを浮き出しにする。背景やフォントは親 window(すなわち、panel) で定義されているものをデフォルトとする。

:ButtonPress event

[メソッド]

もし、ボタンであれば、背景色をグレーにする。

:ButtonRelease event

[メソッド]

event の背景色を標準に変更する。

menu-button-item

[クラス]

:super button-item

:slots (items item-dots item-labels

charwidth charheight

menu-window window-pos high-light)

プルダウンメニューを定義する。menu-button-item は、button-itemのようであるが、menu-button-item は、ボタンの下の関連する menu-panel が押されたとき、notify-object にすぐにメッセージを送る代わりに、活性化させる。メニューアイテムの1つの上でマウスボタンが外されたときに、本当のメッセージが送られる。

:create label reciever method

[メソッド]

&rest args

&key (:menu nil) (:items) (:state :flat)

&allow-other-keys

プルダウンメニューを作成する。receiverと method 引き数は、影響を与えない。

:ButtonPress event

[メソッド]

プルダウンメニューのボタンを反転させ、ボタンの下に関連する menu-panel をさらす。

:ButtonRelease event

[メソッド]

このボタンの下の menu-panel を消し、このボタンを元に戻す。

bitmap-button-item

[クラス]

:super button-item

:slots (pixmap-id bitmap-width bitmap-height)

bitmap-button-item の関数は、button-item に似ているが、表現が異なっている。button-item の場合にボタンの上に簡単なラベル文字列を描く代わりに、bitmap-button-item では、ボタンが作られたときに bitmap ファイルからロードされる pixmap を描く。

 $\ \, : \mathbf{create} \ \, \mathit{bitmap-file} \,\, \mathit{reciever} \,\, \mathit{method} \,\,\, \mathit{\mathfrak{C}rest} \,\, \mathit{args} \,\,$

[メソッド]

&key:width:height &allow-other-keys)

bitmap-button-item を作成する。最初の引き数 *bitmap-file* は、button-item の *label* 引き数を置き換えたものである。

 $\textbf{:draw-label} \ \mathcal{E}optional \ (state \ :flat) \ (color \ bg\text{-}color) \ (border \ 2)$

[メソッド]

ボタンの上に bitmap か pixmap を描く。

:create-bitmap-from-file fname

[メソッド]

fname という名の bitmap ファイルから pixmap を作り、pixmap-id にその ID を入れる。

choice-item

[クラス]

 $: super \qquad \textbf{button-item}$

:slots (choice-list active-choice transient-choice

choice-dots choice-pos button-size)

choice-item は、丸い選択ボタンの集合である。1つの選択はいつも活性化しており、同時に1つの選択だけが活性化することができる。choice-item は、ラジオボタンと同様な機能を提供する。

 $\textbf{:create} \ label \ reciever \ method \ \ \mathcal{C}rest \ args$

[メソッド]

&key (:choices '("0" "1")) (:initial-choice 0) (:font (send parent :gc :font)) (:button-size 13) (:border-width 0)

choice-item-button を作成する。それぞれの選択ボタンは:button-size の半径を持つ円である。新しい 選択ボタンが選択されたとき、notify-object の notify-method が choice-item オブジェクトと選択された選択ボタンの番号と一緒に呼び出される。

:value & optional (new-choice) (invocation)

[メソッド]

もし、new-choice が与えられたならば、現在の活性化選択ボタンとして設定し、対応する円が黒色になる。もし invocation も指定されているなら、notify-object の notify-method が呼び出される。:value は、現在の(あるいは新しい)選択ボタンの番号を返す。

 $\textbf{:draw-active-button} \ \ \mathscr{C}optional \ (old\text{-}choice \ active-choice) \ (new\text{-}choice \ active-choice)$

[メソッド]

ボタンを活性化として書く。

:ButtonPress event

[メソッド]

もし、選択ボタンのどこかでマウスボタンが押されているなら、その番号が transient-choice に記録される。マウスボタンが外されるまでそれ以上の行動は、起こさない。

:ButtonRelease event

[メソッド]

もし、既に押されていたところと同じボタンの上でマウスボタンが外されたなら、active-choice が更新され、notify-object の notify-method が呼び出される。

slider-item

[クラス]

:super panel-item

:slots (min-value max-value value

minlabel maxlabel valueformat

bar-x bar-y bar-width bar-height valuedots label-base nob-x nob-moving charwidth)

choice-item が離散的な値の選択に使用されるのに対し、slider-item は min-value と max-value の間の範囲の連続的な値に対して使用される。それぞれ値が変化した瞬間、slider-item オブジェクトと新しい値が引き数として一緒に notify-object の notify-method が呼び出される。

:create label reciever method &rest args

[メソッド]

```
Ekey (:min 0.0) (:max 1.0) (:parent)
(:min-label "") (:max-label "") (:value-format " 4,2f")
(:font font-courb12) (:span 100) (:border-width 0) (:initial-value min)
```

slider-item を作成する。スライドのノブは、バーの上に小さな黒の四角として表示される。左端が :min 値を表現し、右端が:max 値を表現する。バーの長さは、:span ドットに引き伸ばす。現在の値は、:value-format で slider-item の右に表示する。

:value &optional newval invocation

[メソッド]

もし、newval が与えられたなら、現在の値として設定され、ノブは対応する位置にスライドする。もし、invocation も non NIL に指定されていたなら、notify-object の notify-method が呼び出される。:value は、現在の(新しい)値を返す。

joystick-item

[クラス]

:super panel-item

:slots (stick-size min-x min-y max-x max-y

center-x center-y stick-x stick-y

value-x value-y

stick-return stick-grabbed

fraction-x fraction-y)

joystick-item は、2 次元の slider-item としてみなすことができる。2 つの連続値はクモの巣のような同心円図の上を動く黒い円によって指定することができる (図 18)。

:create name reciever method &rest args

[メソッド]

```
&key (:stick-size 5) (:return nil)

(:min-x -1.0) (:max-x 1.0)

(:min-y -1.0) (:max-y 1.0)

&allow-other-keys)
```

:stick-size は、スティックの黒い円の半径である。同心円図の円の大きさは、joystick-item window の幅と高さに合うように決定される。もし、:return が non NIL であるなら、ジョイスティックは、マウスボタンが外された時の原点に帰る。そうでないなら、ジョイスティックは、外された位置に残る。

:value &optional (newx) (newy) (invocation)

[メソッド]

もし、newx と newy が与えられたなら、現在の位置として設定され、ジョイスティックは同心円図の対応する位置に移動する。もし、invocation も non NIL に指定されたなら、notify-object $oldsymbol{0}$ の notify-method が、 $oldsymbol{1}$ が、 $oldsymbol{1}$ joystick-item オブジェクトと $oldsymbol{x}$, $oldsymbol{y}$ 値を引き数として一緒に呼び出される。: value は、現在の (新しい) 値のリストを返す。

以下に上に記述されている panel-item を使った短いプログラムを示し、図 18 がパネルの中にどのように表示されるかを示したものである。



図 18: panel の中に作成された panel-item

```
(in-package "X")
(defclass testPanel :super panel
        :slots (quit joy choi sli))
(defmethod testPanel
(:create (&rest args)
    (send-super* :create :width 210 :height 180
                 :font font-courb12 args)
    (send-super :create-item button-item "quit" self :quit :font font-courb14)
    (send-super :create-item choice-item "choice" self :choice
                :choices '(" A " " B " " C ")
                :font font-courb12)
    (send-super :create-item slider-item "slider" self :slider
                :span 90)
    (send-super :create-item joystick-item "joy" self :joy)
    self)
(:choice (obj c) (format t "choice: ~S ~d~%" obj c))
(:slider (obj val) (format t "slider: ~S ~s~%" obj val))
(:joy (obj x y) (format t "joy: \tilde{S} \tilde{s} \tilde{s}''" obj x y)) )
(instance testPanel :create)
(window-main-thread)
```

text-item [クラス]

:super **panel-item** :slots (textwin)

text-item は、ファイル名のような短いテキストを表示したり入力したりするために使用する。text-item は、ラベル文字列とその右側に小さなテキスト window を持っている。テキスト window 内にポインタが置かれたとき、キー入力が可能となり、入力された文字がバッファに入れられる。テキスト window 内の行修正が可能である。control-Fと control-B は前後に1文字動かし、del はカーソルの左の1文字を削除し、control-D はカーソル位置の文字を削除し、カーソル位置にはどんなグラフィック文字も挿入できる。マウスボタンをクリックすれば、クリックされた文字にカーソルを移動させる。enter(改行)キーを打つことにより、バッファされたテキストが notify-object の notify-method に送られる。

:create label revciever method &rest args

[メソッド]

Ekey (:font font-courb12) (:columns 20) (:initial-value) (:border-width 0)

text-item を作成する。テキスト window の行バッファには、長さの制限が無いけれども、見える部分は columns 文字に制限されている。

:getstring

[メソッド]

キーバッファ内の文字列を返す。

17.4 キャンバス

canvas [クラス]

:super xwindow

:slots (topleft bottomright)

canvas は、図や画像を入れるための Xwindow である。現在、領域選択機能のみ実現されている。ButtonPress イベントにより、canvas は押された位置を左上の端とし、現在の位置を右下の端とする四角を描き始める。ButtonRelease により、notify-object の notify-method が送られる。canvas 内に図や画像を描くためには Xdrawable のメソッドが使用される。

17.5 テキスト window

TextWindow と BufferTextWidnow と ScrollTextWindow の3つのテキスト window がある。

textWindow [752]

:super xwindow

:slots (fontid

charwidth charheight charascent dots

win-row-max win-col-max

win-row win-col ;physical current position in window

ху

charbuf ; for charcode conversion

keybuf keycount ;for key input

echo

show-cursor cursor-on ;boolean

kill delete ;control character

notify-object notify-method

)

メッセージを表示するために使用可能な仮想端末を実現する。表示される内容は、バッファされないし、TextWindowに既に表示された文字や行を引き出す方法はない。基本的に、TextWindowはカーソル移動、行削除、領域削除、表示テキストのスクロール、文字列挿入などを持つダンプ端末と似た能力を持っている。また、テキストカーソルはマウスポインタで指示された位置に移動することができる。

:init id [$\mathsf{X}\mathsf{Y}\mathsf{v}\mathsf{F}$]

id 番目のテキスト window を初期化する。

:create &rest args [メソッド]

&key :width :height (:font font-courb14) :rows :columns (:show-cursor nil) (:notify-object nil) (:notify-method nil)

&allow-other-keys

text-window を作成する。window の大きさは、:width と:height かあるいは:rows と:columns で指定されたものとなる。:notify-object の:notify-method は、改行文字が入力されたときに呼び出される。

:cursor flag

flag は、:on, :off, :toggle のどれかが可能である。テキストカーソルは、win-row と win-col の位置である。もし、flag が:on であれば、テキストカーソルは表示され、flag が:off ならば、消される。また、flag が toggle ならば、反対になる。このメソッドは、カーソルの位置の文字を更新するときはいつでも、呼び出されなければならない。

:clear [メソッド]

テキスト window 内を消去する。

:clear-eol & optional (r win-row) (c win-col) (csr :on) [メソッド]

rとcで指定される位置の文字以降の残りの行を消去する。カーソル位置の文字も含む。

:clear-lines lines Eoptional (r win-row) [メソッド]

r番目の行以降の複数行を消去する。

:clear-eos & optional (r win-row) (c win-col) [メソッド]

rとcで指定される位置から画面の最後までの領域を消去する。

:win-row-max [メソッド]

この window に表示可能な最大行数を返す。

:win-col-max [メソッド]

この window に表示可能な最大列数を返す。

:xy Eoptional (r win-row) (c win-col) [メソッド]

rとcで指定される位置の文字のピクセル座標を計算する。

:goto r c Eoptional (cursor :on) [メソッド]

r番目の行のc番目の列にカーソルを移動する。

:goback &optional (csr:on) [メソッド]

カーソルを1文字戻す。

:advance Eoptional (n 1) [メソッド]

n 文字だけカーソルを進める。

:scroll &optional (n 1) [メソッド]

n 行だけ縦方向にテキスト window をスクロールする。

:horizontal-scroll & optional (n 1) [メソッド]

*n*列だけ横方向にテキストをスクロールする。

:newline [メソッド]

次の行の最初にカーソルを移動する。

:putch ch [メソッド]

カーソル位置に文字 ch を挿入する。行の残りは、1文字前方に進められる。

:putstring str &optional (e (length str))

[メソッド]

カーソル位置に str を置く。

:event-row event [メソッド]

:event-col event [メソッド]

event における、テキストカーソルの位置をを返す。

:KeyPress event [メソッド]

カーソル位置に入力された文字を挿入する。もし、文字が改行であったなら、notify-object に通知する。

TextWindowStream

[クラス]

:super stream :slots (textwin)

TextWindowStream は、TextWdinowに接続された出力ストリームである。print, format, write-byte などによってこのストリームに出力される文字や文字列が TextWdindow に表示される。通常のファイルストリームとしては、出力データはバッファされる。

:flush

バッファされたテキスト文字列を掃き出し、TextWindow に送る。finish-output やこのストリームへの改行文字の書き込みは、このメソッドを自動的に呼び出す。

 ${\bf make\text{-}text\text{-}window\text{-}stream}\ \textit{xwin}$

[関数]

text-window-stream を作り、そのストリームオブジェクトを返す。

BufferTextWindow

[クラス]

 $: super \qquad \textbf{TextWindow}$

:slots (linebuf expbuf max-line-length row col)

TextWindow の内容を表現する行バッファを保持する。linebuf は、行のベクトルである。exbuf は、タブ拡張されたテキストを持つ。window に表示可能な行のみが保持される。BufferTextWindow は、数行のテキストを持つ簡単なテキストエディタとして使用することができる。text-item は、表示可能な行バッファとして BufferTextWindow を使う。

:line n [メソッド]

n 番目の行の内容を文字列として返す。

:nlines [メソッド]

linebuf の行数を返す。

:all-lines

文字列のベクトルである linebuf を返す。

:refresh-line &optional (r win-row) (c win-col) [メソッド]

r番目の行の c番目の列以降を再書き込みする。

:refresh &optional (start 0)

[メソッド]

start 番目の行以降の行を再書き込みする。

:insert-string string

[メソッド]

カーソル位置に string を挿入する。

:insert ch

[メソッド]

カーソル位置に文字を挿入する。

:delete n

[メソッド]

カーソル以降の n 文字を削除する。

expand-tab src &optional (offset 0)

[関数]

src は、タブを含んだ可能性のある文字列である。これらのタブは、タブの停止位置が 8 の倍数であると仮定して空白文字に置き換えられる。

ScrollTextWindow

[クラス]

:super BufferTextWindow

:slots (top-row top-col

; display-starting position

scroll-bar-window

horizontal-scroll-bar-window

selected-line)

ScrollTextWindow は、行数制限がなく、縦と横にスクロールバーを持った BufferTextWindow を定義する。ScrollTextWindow は、スクロールバーを伴って window の大きさを変更するため、あるいはテキストを再表示するために:configureNotify イベントを扱うことができる。クリックすることによって、行を選択することができる。

:create &rest args &key (scroll-bar nil) (horizontal-scroll-bar nil) &allow-other-keys

[メソッド]

スクロールバーが必要なとき、それぞれのキーワードの引き数に T を指定する。

:locate n

[メソッド]

window の上部から n 番目の行にバッファされたテキストを表示する。

:display-selection selection

[メソッド]

selection は、選択された行の位置を表現する。選択された行がすべて高輝度で表示される。

:selection

[メソッド]

選択された行(文字列)を返す。

 $\textbf{:read-file}\ fname$

[メソッド]

fname で指定されるテキストファイルを linebuf に読み込み、タブを拡張し、window に表示する。カーソルは、画面の最初に置かれる。

:display-string strings

[メソッド]

strings は、行(文字列)の列である。strings は、linebuf にコピーされ、window に表示される。

:scroll n

[メソッド]

n 行、縦にスクロールする。

:horizontal-scroll n

[メソッド]

n列、横にスクロールする。

[メソッド]

マウスポインタが置かれている行が選択される。もし、window が作成されたときに notification が指定されているならば、notify-object の notify-method が呼び出される。

:resize $w\ h$

[メソッド]

windowの大きさを変更し、新しいサイズに合うように内容を再表示する。もし、スクロールバーがあれば、同じメッセージが送られる。

第III部

irteus 拡張

18 ロボットモデリング

18.1 ロボットのデータ構造とモデリング

18.1.1 ロボットのデータ構造と順運動学

ロボットの構造はリンクと関節から構成されていると考えることが出来るが,ロボットを関節とリンクに分割する方法として

- (a) 切り離されるリンクの側に関節を含める
- (b) 胴体, あるいは胴体に近いほうに関節を含める

が考えられる.コンピュータのデータ構造を考慮し,(a) が利用されている.その理由は胴体以外のすべてのリンクにおいて,必ず関節を一つ含んだ構造となり,すべてのリンクを同一のアルゴリズムで扱うことが出きるためである.

この様に分割されたリンクを計算機上で表現するためにはツリー構造を利用することが出来る.一般的には ツリー構造を作るときに二分木にすることでデータ構造を簡略化することが多い.

ロボットのリンクにおける同次変換行列の求め方としては,関節回転座標系上に原点をもつ Σ_j を設定し,親リンク座標系からみた回転軸ベクトルが a_i, Σ_j の原点が b_i であり,回転の関節角度を q_i とする.

このとき Σ_i の親リンク相対の同次変換行列は

$${}^{i}T_{j} = \left[\begin{array}{ccc} e^{\hat{a}_{j}q_{j}} & b_{j} \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{array} \right]$$

と書くことが出来る.

ここで, $e^{\hat{a}_jq_j}$ は,一定速度の角速度ベクトルによって生ずる回転行列を与える以下の Rodrigues の式を用いている.これを回転軸 a 周りに wt[rad] だけ回転する回転行列を与えるものとして利用している.

$$e^{\hat{\omega}t} = E + \hat{a}sin(wt) + \hat{a}^2(1 - cos(wt))$$

親リンクの位置姿勢 p_i, R_i が既知だとすると, Σ_i の同次変換行列を

$$T_i = \left[\begin{array}{cc} R_i & p_i \\ 0 \ 0 \ 0 & 1 \end{array} \right]$$

と作ることができ,ここから

$$T_j = T_i^{\ i} T_j$$

として計算できる.これをロボットのルートリンクから初めてすべてのリンクに順次適用することでロボットの全身の関節角度情報から姿勢情報を算出することができ,これを順運動学と呼ぶ.

18.1.2 EusLisp による幾何情報のモデリング

Euslisp の幾何モデリングでは,基本モデル (body) の生成, body の合成関数,複合モデル (bodyset) の生成 3 つの段階がある.

これまでに以下のような基本モデルの生成,合成が可能な事を見てきている.

```
(setq c1 (make-cube 100 100 100))
(send c1 :locate #f(0 0 50))
(send c1 :rotate (deg2rad 30) :x)
(send c1 :set-color :yellow)
(objects (list c1))
(setq c2 (make-cylinder 50 100))
(send c2 :move-to
      (make-coords
       :pos #f(20 30 40)
       :rpy (float-vector 0 0 (deg2rad 90)))
      :world)
(send c2 :set-color :green)
(objects (list c1 c2))
(setq c3 (body+ c1 c2))
(setq c4 (body- c1 c2))
(setq c5 (body* c1 c2))
 bodyset は irteus で導入された複合モデルであり, body で扱えない複数の物体や複数の色を扱うためのもの
である.
(setq c1 (make-cube 100 100 100))
(send c1 :set-color :red)
(setq c2 (make-cylinder 30 100))
(send c2 :set-color :green)
                              ;;; これを忘れいように
(send c1 :assoc c2)         ;;
(setq b1 (instance bodyset :init
                   (make-cascoords)
                   :bodies (list c1 c2)))
(objects (list b1))
```

18.1.3 幾何情報の親子関係を利用したサンプルプログラム

```
(setq c1 (make-cube 100 100 100))
(setq c2 (make-cube 50 50 50))
(send c1 :set-color :red)
(send c2 :set-color :blue)
(send c2 :locate #f(300 0 0))
(send c1 :assoc c2)
(objects (list c1 c2))
(do-until-key
  (send c1 :rotate (deg2rad 5) :z)
  (send *irtviewer* :draw-objects)
  (x::window-main-one) ;; process window event
)
```

18.1.4 bodyset-link と joint を用いたロボット (多リンク系)のモデリング

irteus ではロボットリンクを記述するクラスとして bodyset-link(irtmodel.l) というクラスが用意されている.これは機構情報と幾何情報をもち,一般的な木構造でロボットの構造が表現されている.また,joint クラスを用いて関節情報を扱っている.

ジョイント(関節)のモデリングは joint クラス (irtmodel.l) を用いる. joint クラスは基底クラスであり,実際には rotational-joint, linear-joint 等を利用する. joint の子クラスで作られた関節は,:joint-angle メソッドで関節角度を指定することが出来る.

```
(defclass joint
  :super propertied-object
  :slots (parent-link child-link joint-angle min-angle max-angle
default-coords))
(defmethod joint
  (:init (&key name
               ((:child-link clink)) ((:parent-link plink))
               (min -90) (max 90) &allow-other-keys)
         (send self :name name)
         (setq parent-link plink child-link clink
               min-angle min max-angle max)
         self))
(defclass rotational-joint
  :super joint
  :slots (axis))
(defmethod rotational-joint
  (:init (&rest args &key ((:axis ax) :z) &allow-other-keys)
         (setq axis ax joint-angle 0.0)
         (send-super* :init args)
         self)
  (:joint-angle
   (&optional v)
   (when v
        (setq relang (- v joint-angle) joint-angle v)
        (send child-link :rotate (deg2rad relang) axis)))
     joint-angle))
  ここでは, joint, parent-link, child-links, defualt-coords を利用する.
  簡単な1関節ロボットの例としてサーボモジュールを作ってみると
(defun make-servo nil
  (let (b1 b2)
    (setq b1 (make-cube 35 20 46))
    (send b1 :locate #f(9.5 0 0))
    (setq b2 (make-cylinder 3 60))
    (send b2 : locate #f(0 0 -30))
    (setq b1 (body+ b1 b2))
    (send b1 :set-color :gray20)
    b1))
(defun make-hinji nil
  (let ((b2 (make-cube 22 16 58))
        (b1 (make-cube 26 20 54)))
    (send b2 :locate \#f(-4\ 0\ 0))
    (setq b2 (body- b2 b1))
    (send b1 :set-color :gray80)
    b2))
(setq h1 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list (make-hinji))))
(setq s1 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list (make-servo))))
(setq j1 (instance rotational-joint :init :parent-link h1 :child-link s1 :axis :z))
;; instance cascaded coords
(setq r (instance cascaded-link :init))
(send r :assoc h1)
(send h1 :assoc s1)
(setq (r . links) (list h1 s1))
(setq (r . joint-list) (list j1))
(send r :init-ending)
  となる.
```

ここでは ,h1 ,s1という bodyset-linkと , j1という rotational-jointを作成し ,ここから cascaded-link

という,連結リンクからなるモデルを生成している.cascaded-linkはcascaded-coordsの子クラスであるため,r(cascaded-link),h1,s1の座標系の親子関係を:assocを利用して設定している.

(r. links) という記法はrというオブジェクトのスロット変数 (メンバ変数) である links にアクセスしている.ここでは, links および joint-list に適切な値をセットし, (send r:init-ending) として必要な初期設定を行っている.

これで r という 2 つのリンクと 1 つの関節情報を含んだ 1 つのオブジェクトを生成できる.これで例えば (objects (list h1 s1)) ではなく,(objects (list r)) としてロボットをビューワに表示できる.また, (send r :locate #f(100 0 0)) などの利用も可能になっている.

cascaded-link クラスのメソッドの利用例としては以下ある.:joint-list,:links といった関節リストやリンクリストへのアクセサに加え,関節角度ベクトルへのアクセスを提供する:angle-vector メソッドが重要である.これを引数なしで呼び出せば現在の関節角度が得られ,これに関節角度ベクトルを引数に与えて呼び出せば,その引数が示す関節角度ベクトルをロボットモデルに反映させることができる.

```
$ (objects (list r))
(#<servo-model #X628abb0 0.0 0.0 0.0 / 0.0 0.0 0.0)
;; useful cascaded-link methods
$ (send r :joint-list)
(#<rotational-joint #X6062990 :joint101067152>)
$ (send r :links)
(#<bodyset-link #X62ccb10 :bodyset103598864 0.0 0.0 0.0 / 0.0 0.0 0.0)
#<bodyset-link #X6305830 :bodyset103831600 0.0 0.0 0.0 / 0.524 0.0 0.0>)
$ (send r :angle-vector)
#f(0.0)
$ (send r :angle-vector (float-vector 30))
#f(30.0)
```

18.1.5 cascaded-link を用いたロボット(多リンク系)のモデリング

一方で多リンク系のモデリング用のクラスとして cascaded-link というクラスがある.これには, links, joint-list というスロット変数があり, ここに bodyset-link, ならびに joint のインスタンスのリストをバインドして利用する.以下は, cascaded-linkの子クラスを定義しここでロボットモデリングに関する初期化処理を行うという書き方の例である.

```
(defclass cascaded-link
 :super cascaded-coords
 :slots (links joint-list bodies collision-avoidance-links))
(defmethod cascaded-link
  (:init (&rest args &key name &allow-other-keys)
         (send-super-lexpr :init args)
        self)
 (:init-ending
  ()
   (setq bodies (flatten (send-all links :bodies)))
   (dolist (j joint-list)
     (send (send j :child-link) :add-joint j)
     (send (send j :child-link) :add-parent-link (send j :parent-link))
     (send (send j :parent-link) :add-child-links (send j :child-link)))
   (send self :update-descendants))
(defclass servo-model
 :super cascaded-link
  :slots (h1 s1 j1))
(defmethod servo-model
 (:init ()
   (let ()
     (send-super :init)
     (setq h1 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list (make-hinji))))
     (setq s1 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list (make-servo))))
```

```
(setq j1 (instance rotational-joint :init :parent-link h1 :child-link s1 :axis :z))
    ;; instance cascaded coords
    (setq links (list h1 s1))
    (setq joint-list (list j1))
    (send self :assoc h1)
    (send h1 :assoc s1)
    (send self :init-ending)
    self))
   (send r :j1 :joint-angle 30)
  (:j1 (&rest args) (forward-message-to j1 args))
(setq r (instance servo-model :init))
 このようなクラスを定義して(setq r (instance servo-model :init)) としても同じようにロボット
モデルのインスタンスを作成することができ,先ほどのメソッドを利用できる.クラス定義するメリットは
(:j1 (&rest args) (forward-message-to j1 args)) というメソッド定義により,関節モデルのインスタ
ンスへのアクセサを提供することができる.これにより,特定の関節だけの値を知りたいとき,あるいは値を
セットしたい時には(send r :j1 :joint-angle)や(send r :j1 :joint-angle 30)という指示が可能に
なっている、このロボットを動かす場合は前例と同じように
(objects (list r))
(dotimes (i 300)
  (send r :angle-vector (float-vector (* 90 (sin (/ i 100.0)))))
  (send *irtviewer* :draw-objects))
 などとするとよい.
(setq i 0)
(do-until-key
  (send r :angle-vector (float-vector (* 90 (sin (/ i 100.0))))
  (send *irtviewer* :draw-objects)
  (incf i))
 とすると,次にキーボードを押下するまでプログラムは動きつづける.
 さらに,少し拡張してこれを用いて3リンク2ジョイントのロボットをモデリングした例が以下になる.:joint-
angle とNうメソッドに\#f(0\ 0) とNうベクトルを引数に与えることで全ての関節角度列を指定することが出
来る.
(defclass hinji-servo-robot
  :super cascaded-link)
(defmethod hinji-servo-robot
 (:init
  ()
  (let (h1 s1 h2 s2 l1 l2 l3)
    (send-super :init)
    (setq h1 (make-hinji))
    (setq s1 (make-servo))
    (setq h2 (make-hinji))
    (setq s2 (make-servo))
    (send h2 :locate #f(42 0 0))
    (send s1 :assoc h2)
    (setq 11 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list h1)))
    (setq 12 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list s1 h2)))
    (setq 13 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list s2)))
    (send 13 :locate #f(42 0 0))
    (send self :assoc 11)
```

```
(send 11 :assoc 12)
     (send 12 :assoc 13)
     (setq joint-list
           (list
            (instance rotational-joint
                      :init :parent-link 11 :child-link 12
                      :axis :z)
            (instance rotational-joint
                      :init :parent-link 12 :child-link 13
                      :axis :z)))
     (setq links (list 11 12 13))
     (send self :init-ending)
    )))
(setq r (instance hinji-servo-robot :init))
(objects (list r))
(dotimes (i 10000)
 (send r : angle-vector (float-vector (* 90 (sin (/ i 500.0))) (* 90 (sin (/ i 1000.0)))))
  (send *irtviewer* :draw-objects))
```

18.2 ロボットの動作生成

18.2.1 逆運動学

逆運動学においては、エンドエフェクタの位置・姿勢 $_n^0 H$ からマニピュレータの関節角度ベクトル $\theta=(\theta_1,\theta_2,...,\theta_n)^T$ を求める.

ここで、エンドエフェクタの位置・姿勢rは関節角度ベクトルを用いて

$$r = f(\theta) \tag{1}$$

とかける. Equation 18.2.1 は Equation 18.2.1 のように記述し, 関節角度ベクトルを求める.

$$\boldsymbol{\theta} = \boldsymbol{f}^{-1}(\boldsymbol{r}) \tag{2}$$

における f^{-1} は一般に非線形な関数となる. そこでを時刻 t に関して微分することで, 線形な式

$$\dot{\mathbf{r}} = \frac{\partial \mathbf{f}}{\partial \boldsymbol{\theta}}(\boldsymbol{\theta})\dot{\boldsymbol{\theta}} \tag{3}$$

$$= J(\theta)\theta \tag{4}$$

を得る. ここで, $J(\theta)$ は $m \times n$ のヤコビ行列である. m はベクトル r の次元, n はベクトル θ の次元である. \dot{r} は速度・角速度ベクトルである.

ヤコビ行列が正則であるとき逆行列 $J(\theta)^{-1}$ を用いて以下のようにしてこの線型方程式の解を得ることができる.

$$\dot{\boldsymbol{\theta}} = \boldsymbol{J}(\boldsymbol{\theta})^{-1} \dot{\boldsymbol{r}} \tag{5}$$

しかし、一般にヤコビ行列は正則でないので、ヤコビ行列の疑似逆行列 $J^{\#}(\theta)$ が用いられる (Equation 6).

$$\mathbf{A}^{\#} = \begin{cases} \mathbf{A}^{-1} & (m = n = rank\mathbf{A}) \\ \mathbf{A}^{T} & (\mathbf{A}\mathbf{A}^{T})^{-1}(n > m = rank\mathbf{A}) \\ (\mathbf{A}^{T}\mathbf{A})^{-1}\mathbf{A}^{T} & (m > n = rank\mathbf{A}) \end{cases}$$
(6)

Equation 4 は , m > n のときは Equation 7 を , n >= m のときは Equation 9 を , 最小化する最小二乗解を求める問題と捉え, 解を得る.

$$\min_{\dot{\boldsymbol{\theta}}} \left(\dot{\boldsymbol{r}} - \boldsymbol{J}(\boldsymbol{\theta}) \dot{\boldsymbol{\theta}} \right)^T \left(\dot{\boldsymbol{r}} - \boldsymbol{J}(\boldsymbol{\theta}) \dot{\boldsymbol{\theta}} \right) \tag{7}$$

$$\min_{\dot{\boldsymbol{\theta}}} \quad \dot{\boldsymbol{\theta}}^T \dot{\boldsymbol{\theta}} \\
s.t. \quad \dot{\boldsymbol{r}} = \boldsymbol{J}(\boldsymbol{\theta}) \dot{\boldsymbol{\theta}}$$
(8)

関節角速度は次のように求まる.

$$\dot{\boldsymbol{\theta}} = \boldsymbol{J}^{\#}(\boldsymbol{\theta})\dot{\boldsymbol{r}} + \left(\boldsymbol{E}_n - \boldsymbol{J}^{\#}(\boldsymbol{\theta})\boldsymbol{J}(\boldsymbol{\theta})\right)\boldsymbol{z}$$
(9)

しかしながら、Equation 9 に従って解を求めると、ヤコビ行列 $J(\theta)$ がフルランクでなくなる特異点に近づくと、 $\left|\dot{\theta}\right|$ が大きくなり不安定な振舞いが生じる。そこで、Nakamura et al. の SR-Inverse⁴ を用いることで、この特異点を回避する。

本研究ではヤコビ行列の疑似逆行列 $J^{\#}(\theta)$ の代わりに, Equation 10 に示す $J^{*}(\theta)$ を用いる.

$$\boldsymbol{J}^*(\boldsymbol{\theta}) = \boldsymbol{J}^T \left(\boldsymbol{J} \boldsymbol{J}^T + \epsilon \boldsymbol{E}_m \right)^{-1} \tag{10}$$

これは、Equation 7 の代わりに、Equation 11 を最小化する最適化問題を解くことにより得られたものである.

$$\min_{\dot{\boldsymbol{\theta}}} \{ \dot{\boldsymbol{\theta}}^T \dot{\boldsymbol{\theta}} + \epsilon \left(\dot{\boldsymbol{r}} - \boldsymbol{J}(\boldsymbol{\theta}) \dot{\boldsymbol{\theta}} \right)^T \left(\dot{\boldsymbol{r}} - \boldsymbol{J}(\boldsymbol{\theta}) \dot{\boldsymbol{\theta}} \right) \}$$
(11)

ヤコビ行列 $J(\theta)$ が特異点に近づいているかの指標には可操作度 $\kappa(\theta)^5$ が用いられる (Equation 12).

$$\kappa(\boldsymbol{\theta}) = \sqrt{\boldsymbol{J}(\boldsymbol{\theta})\boldsymbol{J}^T(\boldsymbol{\theta})} \tag{12}$$

微分運動学方程式におけるタスク空間次元の選択行列⁶ は見通しの良い定式化のために省略するが、以降で 導出する全ての式において適用可能であることをあらかじめことわっておく.

18.2.2 基礎ヤコビ行列

一次元対偶を関節に持つマニピュレータのヤコビアンは基礎ヤコビ行列 7 により計算することが可能である. 基礎ヤコビ行列の第 $_j$ 関節に対応するヤコビアンの列ベクトル J_j は

$$\mathbf{J}_{j} = \begin{cases}
\begin{bmatrix}
\mathbf{a}_{j} \\
\mathbf{0}
\end{bmatrix} & \text{if linear joint} \\
\mathbf{a}_{j} \times (\mathbf{p}_{end} - \mathbf{p}_{j}) \\
\mathbf{a}_{j}
\end{bmatrix} & \text{if rotational joint}
\end{cases} (13)$$

と表される. $a_j \cdot p_j$ はそれぞれ第 j 関節の関節軸単位ベクトル・位置ベクトルであり, p_{end} はヤコビアンで運動を制御するエンドエフェクタの位置ベクトルである. 上記では 1 自由度対偶の回転関節・直動関節について導出したが , その他の関節でもこれらの列ベクトルを連結した行列としてヤコビアンを定義可能である . 非全方位台車の運動を表す 2 自由度関節は前後退の直動関節と旋回のための回転関節から構成できる . 全方位台車の運動を表す 3 自由度関節は並進 2 自由度の直動関節と旋回のための回転関節から構成できる . 球関節は姿勢を姿勢行列で , 姿勢変化を等価角軸変換によるものとすると , 3 つの回転関節をつなぎ合わせたものとみなせる .

⁴ Inverse kinematic solutions with singularity robustness for robot manipulator control: Y.Nakamura and H. Hanafusa, Journal of Dynamic Systems, Measurement, and Control, vol. 108, pp 163-171, 1986

⁵ ロボットアームの可操作度, 吉川恒夫, 日本ロボット学会誌, vol. 2, no. 1, pp. 63-67, 1984.

⁶ Hybrid Position/Force Control: A Correct Formuration, William D. Fisher, M. Shahid Mujtaba, The International Journal of Robotics Research, vol. 11, no. 4, pp. 299-311, 1992.

⁷ A unified approach for motion and force control of robot manipulators: The operational space formulation, O. Khatib, IEEE Journal of Robotics and Automation, vol. 3, no. 1, pp. 43-53, 1987.

18.2.3 関節角度限界回避を含む逆運動学

ロボットマニピュレータの軌道生成において、関節角度限界を考慮することはロボットによる実機実験の際 に重要となる。本節では、文献 8 の式および文章を引用しつつ、関節角度限界の回避を含む逆運動学について 説明する.

重み付きノルムを以下のように定義する.

$$\left|\dot{\boldsymbol{\theta}}\right|_{\boldsymbol{W}} = \sqrt{\dot{\boldsymbol{\theta}}^T \boldsymbol{W} \dot{\boldsymbol{\theta}}} \tag{14}$$

ここで, W は $W \in \mathbb{R}^{n imes n}$ であり, 対象で全ての要素が正である重み係数行列である. この W を用いて, $J_{m{W}},\dot{ heta}_{m{W}}$ を以下のように定義する.

$$J_{\mathbf{W}} = JW^{-\frac{1}{2}}, \dot{\boldsymbol{\theta}}_{\mathbf{W}} = W^{\frac{1}{2}}\dot{\boldsymbol{\theta}}$$
 (15)

この $oldsymbol{J_{W}},\dot{oldsymbol{ heta}}_{oldsymbol{W}}$ を用いて、以下の式を得る.

$$\dot{r} = J_{W}\dot{\theta}_{W} \tag{16}$$

$$\dot{\boldsymbol{r}} = \boldsymbol{J}_{\boldsymbol{W}} \dot{\boldsymbol{\theta}}_{\boldsymbol{W}}$$

$$\left| \dot{\boldsymbol{\theta}} \right|_{\boldsymbol{W}} = \sqrt{\dot{\boldsymbol{\theta}}_{\boldsymbol{W}}^{T} \dot{\boldsymbol{\theta}}_{\boldsymbol{W}}}$$

$$(16)$$

これによって線型方程式の解は9から以下のように記述できる.

$$\dot{\boldsymbol{\theta}}_{\boldsymbol{W}} = \boldsymbol{W}^{-1} \boldsymbol{J}^T \left(\boldsymbol{J} \boldsymbol{W}^{-1} \boldsymbol{J}^T \right)^{-1} \dot{\boldsymbol{r}}$$
(18)

また、現在の関節角度 heta が関節角度限界 $heta_{i, ext{max}}, heta_{i, ext{min}}$ に対してどの程度余裕があるかを評価するための関数 $H(\theta)$ は以下のようになる¹⁰).

$$H(\boldsymbol{\theta}) = \sum_{i=1}^{n} \frac{1}{4} \frac{(\theta_{i,\text{max}} - \theta_{i,\text{min}})^2}{(\theta_{i,\text{max}} - \theta_i)(\theta_i - \theta_{i,\text{min}})}$$
(19)

次に Equation 20 に示すような $n \times n$ の重み係数行列 W を考える.

$$\mathbf{W} = \begin{bmatrix} w_1 & 0 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & w_2 & 0 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & w_n \end{bmatrix}$$
 (20)

ここで w_i は

$$w_i = 1 + \left| \frac{\partial \boldsymbol{H}(\boldsymbol{\theta})}{\partial \theta_i} \right| \tag{21}$$

である.

さらに Equation 19 から次の式を得る.

$$\frac{\partial H(\boldsymbol{\theta})}{\partial \theta_i} = \frac{(\theta_{i,\text{max}} - \theta_{i,\text{min}})^2 (2\theta_i - \theta_{i,\text{max}} - \theta_{i,\text{min}})}{4(\theta_{i,\text{max}} - \theta_i)^2 (\theta_i - \theta_{i,\text{min}})^2}$$
(22)

Exploiting Task Intervals for Whole Body Robot Control, Michael Gienger and Herbert Jansen and Christian Goeric In Proceedings of the 2006 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS'06), pp. 2484 - 2490,

⁹ A weighted least-norm solution based scheme for avoiding jointlimits for redundant joint manipulators, Tan Fung Chan and Dubey R.V., Robotics and Automation, IEEE Transactions on, pp. 286-292,1995

¹⁰ Efficient gradient projection optimization for manipulators withmultiple degrees of redundancy, Zghal H., Dubey R.V., Euler J.A., 1990 IEEE International Conference on Robotics and Automation, pp. 1006-1011, 1990.

関節角度限界から遠ざかる向きに関節角度が動いている場合には重み係数行列を変化させる必要はないので、w_iを以下のように定義しなおす.

$$w_{i} = \begin{cases} 1 + \left| \frac{\partial \boldsymbol{H}(\boldsymbol{\theta})}{\partial \theta_{i}} \right| & if \left| \frac{\partial \boldsymbol{H}(\boldsymbol{\theta})}{\partial \theta_{i}} \right| \ge 0 \\ 1 & if \left| \frac{\partial \boldsymbol{H}(\boldsymbol{\theta})}{\partial \theta_{i}} \right| < 0 \end{cases}$$
(23)

この w_i およびW を用いることで関節角度限界回避を含む逆運動学を解くことができる.

18.2.4 衝突回避を含む逆運動学

ロボットの動作中での自己衝突や環境モデルとの衝突は幾何形状モデルが存在すれば計算することが可能である。ここでは Sugiura et al. により提案されている効率的な衝突回避計算^{11 12} を応用した動作生成法を示す。 実際の実装は Sugiura et al. の手法に加え、タスク作業空間の NullSpace の利用を係数により制御できるようにした点や擬似逆行列ではなく SR-Inverse を用いて特異点にロバストにしている点などが追加されている。

18.2.5 衝突回避のための関節角速度計算法

逆運動学計算における目標タスクと衝突回避の統合はリンク間最短距離を用いた blending 係数により行われる. これにより、衝突回避の必要のないときは目標タスクを厳密に満し衝突回避の必要性があらわれたときに目標タスクをあきらめて衝突回避の行われる関節角速度計算を行うことが可能になる. 最終的な関節角速度の関係式は Equation 24 で得られる. 以下では ca の添字は衝突回避計算のための成分を表し, task の部分は衝突回避計算以外のタスク目標を表すことにする.

$$\dot{\boldsymbol{\theta}} = f(d)\dot{\boldsymbol{\theta}}_{ca} + (1 - f(d))\dot{\boldsymbol{\theta}}_{task} \tag{24}$$

blending 係数 f(d) は、リンク間距離 d と閾値 $d_a \cdot d_b$ の関数として計算される (Equation 25).

$$f(d) = \begin{cases} (d - d_a)/(d_b - d_a) & if d < d_a \\ 0 & otherwise \end{cases}$$
 (25)

 d_a は衝突回避計算を行い始める値 (yellow zone 12) であり, d_b は目標タスクを阻害しても衝突回避を行う閾値 (orange zone 12) である.

衝突計算をする 2 リンク間の最短距離・最近傍点が計算できた場合の衝突を回避するための動作戦略は 2 リンク間に作用する仮想的な反力ポテンシャルから導出される.

2 リンク間の最近傍点同士をつなぐベクトル p を用いた 2 リンク間反力から導出される速度計算を Equation 26 に記す.

$$\delta x = \begin{cases} 0 & if |\mathbf{p}| > d_a \\ (d_a/|\mathbf{p}| - 1)\mathbf{p} & else \end{cases}$$
 (26)

これを用いた関節角速度計算は Equation 27 となる.

$$\dot{\boldsymbol{\theta}}_{ca} = \boldsymbol{J}_{ca}^{T} k_{joint} \boldsymbol{\delta} \boldsymbol{x} + (\boldsymbol{E}_{n} - \boldsymbol{J}_{task}^{*} \boldsymbol{J}_{task}) \boldsymbol{J}_{ca}^{T} k_{null} \boldsymbol{\delta} \boldsymbol{x}$$
(27)

¹¹ Real-Time Self Collision Avoidance for Humanoids by means of Nullspace Criteria and Task Intervals, H. Sugiura, M. Gienger, H. Janssen, C. Goerick, Proceedings of the 2006 IEEE-RAS International Conference on Humanoid Robots, pp. 575-580, 2006

¹² Real-time collision avoidance with whole body motion control for humanoid robots, Hisashi Sugiura, Michael Gienger, Herbert Janssen, Christian Goerick, In Proceedings of the 2007 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS'07), pp. 2053 - 2068, 2007

 $k_{joint} \cdot k_{null}$ はそれぞれ反力ポテンシャルを目標タスクの NullSpace に分配するかそうでないかを制御する係数である.

18.2.6 衝突回避計算例

以下ではロボットモデル・環境モデルを用いた衝突回避例を示す。本研究では、ロボットのリンク同士、またはリンクと物体の衝突判定には、衝突判定ライブラリ PQP(A Proximity Query Package) ¹³を用いた。

Fig.19 では $d_a = 200[mm], d_b = 0.1 * d_a = 20[mm], k_{joint} = k_{null} = 1.0$ と設定した. この衝突判定計算では、衝突判定をリンクの設定を

- 1. リンクのリスト n_{ca} を登録
- 2. 登録されたリンクのリストから全リンクのペア $_{n_{ca}}C_2$ を計算
- 3. 隣接するリンクのペア、常に交わりを持つリンクのペアなどを除外

のように行うという工夫を行っている.

Fig.19 例では衝突判定をするリンクを「前腕リンク」「上腕リンク」「体幹リンク」「ベースリンク」の4 つとして登録した。この場合, $_4C_2$ 通りのリンクのペア数から隣接するリンクが除外され,全リンクペアは「前腕リンク-体幹リンク」「前腕リンク-ベースリンク」「上腕リンク-ベースリンク」の3 通りとなる。

Fig.19 の 3 本の線 (赤 1 本, 緑 2 本) が衝突形状モデル間での最近傍点同士をつないだ最短距離ベクトルである。全リンクペアのうち赤い線が最も距離が近いペアであり、このリンクペアより衝突回避のための逆運動学計算を行っている。



☑ 19: Example of Collision Avoidance

¹³ Fast distance queries with rectangular swept sphere volumes, Larsen E., Gottschalk S., Lin M.C., Manocha D, Proceedings of The 2000 IEEE International Conference on Robotics and Automation, pp. 3719-3726, 2000.

18.2.7 非ブロック対角ヤコビアンによる全身協調動作生成

ヒューマノイドは枝分かれのある複雑な構造を持ち、複数のマニピュレータで協調して動作を行う必要がある $(\mathrm{Fig.}20\)$.



☑ 20: Duplicate Link Sequence

複数マニピュレータの動作例として、

- リンク間に重複がない場合 それぞれのマニピュレータについて Equation 5 式を用いて関節角速度を求める. もしくは、複数の式を 連立した方程式 (ヤコビアンはブロック対角行列となる) を用いて関節角速度を求めても良い.
- リンク間に重複がある場合 リンク間に重複がある場合は、リンク間の重複を考慮したヤコビアンを考える必要がある。例えば、双腕動作を行う場合、左腕のマニピュレータのリンク系列と右腕のマニピュレータのリンク系列とで、体幹部リンク系列が重複し、その部位は左右で協調して関節角速度を求める必要がある。

次節ではリンク間に重複がある場合の非ブロック対角なヤコビアンの計算法およびそれを用いた関節角速度計算法を述べる(前者の重複がない場合も以下の計算方法により後者の一部として計算可能である).

18.2.8 リンク間重複があるヤコビアン計算と関節角度計算

微分運動学方程式を求める際の条件を以下に示す.

- ▼コピュレータの本数 L本
- 全関節数 N個
- マニピュレータの先端速度・角速度ベクトル $[\xi_0^T,...,\xi_{L-1}^T]^T$
- 各関節角速度ベクトル $[\dot{\boldsymbol{\theta}_0}^T,...,\dot{\boldsymbol{\theta}_{L-1}}^T]^T$
- 関節の添字和集合 $S=\{0,\dots,N-1\}$ ただし、マニピュレータiの添字集合 S_i を用いてSは $S=S_0\cup\dots\cup S_{L-1}$ と表せる.

• S に基づく関節速度ベクトル $[\dot{\theta}_0,...,\dot{\theta}_{N-1}]^T$

とする.

運動学関係式は Equation 28 のようになる.

$$\begin{bmatrix} \boldsymbol{\xi}_0 \\ \vdots \\ \boldsymbol{\xi}_{L-1} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \boldsymbol{J}_{0,0} & \dots & \boldsymbol{J}_{0,N-1} \\ \vdots & \boldsymbol{J}_{i,j} & \vdots \\ \boldsymbol{J}_{L-1,0} & \dots & \boldsymbol{J}_{L-1,N-1} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \dot{\theta}_0 \\ \vdots \\ \dot{\theta}_{N-1} \end{bmatrix}$$
(28)

小行列 $J_{i,j}$ は以下のように求まる.

$$\mathbf{J}_{i,j} = \begin{cases}
\mathbf{J}_j & \text{if } j\text{-th joint } \in i\text{-th link array} \\
\mathbf{0} & \text{otherwise}
\end{cases} \tag{29}$$

ここで, J_j は Equation 13 のもの.

Equation 28 を単一のマニピュレータの逆運動学解法と同様に SR-Inverse を用いて関節角速度を求めること ができる.

ここでの非ブロック対角ヤコビアンの計算法は、アーム・多指ハンドの動作生成14において登場する運動学 関係式から求まるヤコビアンを導出することが可能である.

18.2.9 ベースリンク仮想ジョイントを用いた全身逆運動学法

一般に関節数が N であるのロボットの運動を表現するためにはベースリンクの位置姿勢と関節角自由度を 合わせた N+6 個の変数が必要である、ベースリンクとなる位置姿勢の変数を用いたロボットの運動の定式化 は宇宙ロボット 15 だけでなく、環境に固定されないヒューマノイドロボット 16 の場合にも重要である。

ここでは腕・脚といったマニピュレータにベースリンクに3自由度の直動関節と3自由度の回転関節が仮想 的に付随したマニピュレータ構成を考える (Fig.21). 上記の仮想的な 6 自由度関節を本研究ではベースリンク 仮想ジョイントと名づける. ベースリンク仮想ジョイントを用いることによりヒューマノイドの腰が動き全身 関節が駆動され、運動学、ひいては動力学的な解空間が拡充されることが期待できる.

18.2.10 ベースリンク仮想ジョイントヤコビアン

ベースリンク仮想ジョイントのヤコビアンは基礎ヤコビ行列の計算 (Equation 13) を利用し,絶対座標系 x , y , z 軸の直動関節と絶対座標系 x , y , z 軸回りの回転関節をそれぞれ連結した 6 imes 6 行列である.ちなみ に、並進・回転成分のルートリンク仮想ジョイントのヤコビアンは以下のように書き下すこともできる.

$$\boldsymbol{J}_{B,l} = \begin{bmatrix} \boldsymbol{E}_3 & -\hat{\boldsymbol{p}}_{B\to l} \\ \mathbf{0} & \boldsymbol{E}_3 \end{bmatrix}$$
(31)

 $oldsymbol{p}_{B
ightarrow l}$ はベースリンク位置から添字 l で表現する位置までの差分ベクトルである.

¹⁴ アーム・多指ハンド機構による把握と操り、永井 清, 吉川 恒夫, 日本ロボット学会誌, vol. 13, no. 7, pp. 994-1005, 1995.
15 一般化ヤコビ行列を用いた宇宙用ロボットマニピュレータの分解速度制御, 梅谷 陽二, 吉田 和哉, 日本ロボット学会誌, vol. 4, no. 7, pp. 63-73, 1989.

⁵ Control of Free-Floating Humanoid Robots Through Task Prioritization, Luis Sentis and Oussama Khatib, Proceedings of The 2005 IEEE International Conference on Robotics and Automation, pp. 1718-1723, 2005



図 21: Concept of the Virtual Joint of the Base Link (Left figure) Overview of the Robot Model (Right figure) Skeleton Figure of Robot Model with the Virtual Joint

18.2.11 マスプロパティ計算

複数の質量・重心・慣性行列を統合し単一の質量・重心・慣性行列の組 $[m_{new},c_{new},I_{new}]$ を計算する演算関数を次のように定義する .

$$[m_{new}, \boldsymbol{c}_{new}, \boldsymbol{I}_{new}] = AddMassProperty([m_1, \boldsymbol{c}_1, \boldsymbol{I}_1], \dots, [m_K, \boldsymbol{c}_K, \boldsymbol{I}_K])$$
(32)

これは次のような演算である.

$$m_{new} = \sum_{j=1}^{K} m_j \tag{33}$$

$$\boldsymbol{c}_{new} = \frac{1}{m_{new}} \sum_{j=1}^{K} m_j \boldsymbol{c}_j \tag{34}$$

$$I_{new} = \sum_{j=1}^{K} (I_j + m_j D(c_j - c_{new}))$$
(35)

ここで , $oldsymbol{D}(oldsymbol{r}) = \hat{oldsymbol{r}}^T\hat{oldsymbol{r}}$ とする .

18.2.12 運動量・角運動量ヤコビアン

シリアルリンクマニピュレータを対象とし,運動量・角運動量ヤコビアンを導出する.運動量・原点まわりの角運動量を各関節変数で表現し,その偏微分でヤコビアンの行を計算する.

第j関節の運動変数を θ_i とする.まず,回転・並進の1自由度関節を考える.

$$\mathbf{P}_{j} = \begin{cases} \mathbf{a}_{j} \dot{\theta}_{j} \times (\tilde{\mathbf{c}}_{j} - \mathbf{p}_{j}) \tilde{m}_{j} & \text{if rotational joint} \\ \mathbf{a}_{j} \dot{\theta}_{j} \tilde{m}_{j} & \text{if linear joint} \end{cases}$$
(36)

$$L_{j} = \begin{cases} \tilde{c}_{j} P_{j} + \tilde{I}_{j} a_{j} \dot{\theta}_{j} & \text{if rotational joint} \\ \mathbf{0} & \text{if linear joint} \end{cases}$$
(37)

ここで, $[\tilde{m}_j, \tilde{e}_j, \tilde{I}_j]$ は $\mathrm{AddMassProperty}$ 関数に第 j 関節の子リンクより末端側のリンクのマスプロパティを与えたものであり,実際には再帰計算により計算する 17 .これらを $\dot{\theta}_j$ で割ることによりヤコビアンの各列ベクトルを得る.

$$\boldsymbol{m}_{j} = \begin{cases} \boldsymbol{a}_{j} \times (\tilde{\boldsymbol{c}}_{j} - \boldsymbol{p}_{j})\tilde{m}_{j} & \text{if rotational joint} \\ \boldsymbol{a}_{j}\tilde{m}_{j} & \text{if linear joint} \end{cases}$$
(38)

$$\boldsymbol{h}_{j} = \begin{cases} \tilde{\boldsymbol{c}}_{j} \times \boldsymbol{m}_{j} + \tilde{\boldsymbol{I}}_{j} \boldsymbol{a}_{j} & \text{if rotational joint} \\ \boldsymbol{0} & \text{if linear joint} \end{cases}$$
(39)

これより慣性行列は次のように計算できる.

$$\boldsymbol{M}_{\dot{\boldsymbol{\theta}}} = [\boldsymbol{m}_1, \dots, \boldsymbol{m}_N] \tag{40}$$

$$\boldsymbol{H}_{\dot{\boldsymbol{\rho}}} = [\boldsymbol{h}_1, \dots, \boldsymbol{h}_N] - \hat{\boldsymbol{p}}_G \boldsymbol{M}_{\dot{\boldsymbol{\rho}}} \tag{41}$$

ここでは,全関節数を N とした.また,ベースリンクは直動関節 x,y,z 軸,回転関節 x,y,z 軸をもつと考え整理し,次のようになる.

$$\begin{bmatrix} M_B \\ H_B \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} M_r \mathbf{E}_3 & -M_r \hat{\mathbf{p}}_{B \to G} \\ \mathbf{0} & \tilde{\mathbf{I}} \end{bmatrix}$$
(42)

これを用いて重心まわりの角運動量・運動量は次のようになる.

$$\begin{bmatrix} \mathbf{P} \\ \mathbf{L} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \mathbf{M}_B & \mathbf{M}_{\dot{\boldsymbol{\theta}}} \\ \mathbf{H}_B & \mathbf{H}_{\dot{\boldsymbol{\theta}}} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \boldsymbol{\xi}_B \\ \dot{\boldsymbol{\theta}} \end{bmatrix}$$
(43)

ここでヒューマノイドの全質量 M_r , 重心位置 p_G , 慣性テンソル $ilde{I}$ は次のように全リンクのマスプロパティ演算より求める .

$$[M_r, \boldsymbol{p}_G, \tilde{\boldsymbol{I}}] = AddMassProperty([m_1, \boldsymbol{c}_1, \boldsymbol{I}_1], \dots, [m_N, \boldsymbol{c}_N, \boldsymbol{I}_N])$$

$$(44)$$

18.2.13 重心ヤコビアン

重心ヤコビアンは重心速度と関節角速度の間のヤコビアンである。本論文ではベースリンク仮想ジョイントを用いるため,ベースリンクに 6 自由度関節がついたと考えベースリンク速度角速度・関節角速度の重心速度に対するヤコビアンを重心ヤコビアンとして用いる。具体的には,ベースリンク成分 M_B と使用関節について抜き出した成分 M_B' による運動量ヤコビアンを全質量で割ることで重心ヤコビアンを計算する。

$$J_G = \frac{1}{M_r} \left[\begin{array}{cc} M_B & M'_{\dot{\theta}} \end{array} \right] \tag{45}$$

18.3 ロボットの動作生成プログラミング

18.3.1 三軸関節ロボットを使ったヤコビアン,逆運動学の例

3 軸関節をもつロボットを定義し,逆運動学やヤコビアンの計算例を紹介する. ロボットの定義は以下の用になる.

¹⁷ Resolved Momentum Control:Humanoid Motion Planning based on the Linear and Angular Momentum, S.Kajita, F.Kanehiro, K.Kaneko, K.Fujiwara, K.Harada, K.Yokoi,H.Hirukawa, In Proceedings of the 2003 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS'03), pp. 1644-1650, 2003

```
(defclass 3dof-robot
  :super cascaded-link
  :slots (end-coords 11 12 13 14 j1 j2 j3))
(defmethod 3dof-robot
  (:init ()
   (let (b)
     (send-super :init)
     (setq b (make-cube 10 10 20))
     (send b :locate #f(0 0 10))
     (send b :set-color :red)
     (setq 14 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list b) :name '14))
     (setq end-coords (make-cascoords :pos #f(0 0 20)))
     (send 14 :assoc end-coords)
(send 14 :locate #f(0 0 100))
     (setq b (make-cube 10 10 100))
     (send b :locate #f(0 0 50))
     (send b :set-color :green)
     (setq 13 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list b) :name '13))
     (send 13 :assoc 14)
     (send 13 :locate #f(0 0 100))
     ;; (setq b (make-cube 10 10 100))
     (send b :locate #f(0 0 50))
     (send b :set-color :blue)
     (setq 12 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list b) :name '12))
     (send 12 :assoc 13)
     (send 12 :locate #f(0 0 20))
     (setq b (body+ (make-cube 10 10 20 :pos #f(0 0 10)) (make-cube 300 300 2)))
     (send b :set-color :white)
     (setq 11 (instance bodyset-link :init (make-cascoords) :bodies (list b) :name '12))
     (send 11 :assoc 12)
     (setq j1 (instance rotational-joint :init :name 'j1
                :parent-link 11 :child-link 12 :axis :y :min -100 :max 100)
          j2 (instance rotational-joint :init :name 'j2
                :parent-link 12 :child-link 13 :axis :y :min -100 :max 100)
          j3 (instance rotational-joint :init :name 'j3
                :parent-link 13 :child-link 14 :axis :y :min -100 :max 100))
     (setq links (list 11 12 13 14))
     (setq joint-list (list j1 j2 j3))
     (send self :init-ending)
    self))
  (:end-coords (&rest args) (forward-message-to end-coords args))
  ここではロボットの手先の座標を end-coords というスロット変数に格納し,さらにこれにアクセスするた
めのメソッドを用意してある.
 これまでと同様、
(setq r (instance 3dof-robot :init))
(objects (list r))
(send r :angle-vector #f(30 30 30))
  としてロボットモデルの生成,表示,関節角度の指定が可能である.さらに,
(send (send r :end-coords) :draw-on :flush t)
  とすると,ロボットの end-coords(端点座標系)の表示が可能であるが,マウスイベントが発生すると消え
てしまう. 恒久的に表示するためには
(objects (list r (send r :end-coords)))
```

とするとよい.

次に、ヤコビアン、逆運動学の例を示す、まず基本になるのが、

```
(send r :link-list (send r :end-coords :parent))
```

として得られるリンクのリストである.これはロボットのルート(胴体)から引数となるリンクまでのたどれるリンクを返す.

:calc-jacobian-from-link-list メソッドはリンクのリストを引数にとり,この各リンクに存在するジョイント(関節)に対応するヤコビアンを計算することができる.また,:move-target キーワード引数でエンドエフェクタの座標系を指定してる.その他のキーワード引数については後述する.

ここではリンクの長さ (ジョイントの数) は 3 個なので 6 行 3 列のヤコビアン (j) が計算される.これの逆行列 (j#) を作り,位置姿勢の 6 自由度の目標速度・角速度 $(\#f(1\ 0\ 0\ 0\ 0\ 0))$ を与えると,それに対応する関節速度 (da) が計算でき,これを現在の関節角度に足している $((v+(send\ r\ :angle-vector)\ da))$.

次に,ロボットの端点作業の位置は合わせるが姿勢は拘束せず任意のままでよい,という場合の例を示す.ここでは,:calc-jacobian-from-link-listのオプショナル引数として:rotation-axis,:translation-axisがあり,それぞれ位置,姿勢での拘束条件を示す.tは三軸拘束,nilは拘束なし,その他に:x,:y,:zを指定することができる.

ここでは位置の三軸のみを拘束した 3 行 3 列のヤコビアンを計算し,これの逆行列からロボットの関節に速度を与えている.さらに,ここでは

```
(send *irtviewer* :draw-objects :flush nil)
```

として*irtviewer*に画面を描画しているが,実際にディスプレイに表示するフラッシュ処理は行わず,その次の行の

```
(send c :draw-on :flush t)
```

で目標座標は表示し,かつフラッシュ処理を行っている.

上記の計算をまとめた逆運動学メソッドが:inverse-kinematicsである.第一引数に目標座標系を指定し,ヤコビアン計算のときと同様にキーワード引数で:move-target,:translation-axis,:rotation-axisを指定する.また,:debug-viewキーワード引数にtを与えると計算中の様子をテキスト並びに視覚的に提示してくれる.

```
(setq c (make-cascoords :pos #f(100 0 0) :rpy (float-vector 0 pi 0)))
(send r :inverse-kinematics c
     :link-list (send r :link-list (send r :end-coords :parent))
     :move-target (send r :end-coords)
     :translation-axis t
     :rotation-axis t
     :debug-view t)
 逆運運動学が失敗する場合のサンプルとして以下のプログラムを見てみよう。
(dotimes (i 400)
  (setq c (make-cascoords
            :pos (float-vector (+ 100 (* 80 (sin (/ i 100.0)))) 0 0)
            :rpy (float-vector 0 pi 0)))
  (send r :inverse-kinematics c
       :link-list (send r :link-list (send r :end-coords :parent))
       :move-target (send r :end-coords) :translation-axis t :rotation-axis t)
  (x::window-main-one)
  (send *irtviewer* :draw-objects :flush nil)
  (send c :draw-on :flush t)
  このプログラムを実行すると以下のようなエラーが出てくる.
;; inverse-kinematics failed.
;; dif-pos : #f(11.7826 0.0 0.008449)/(11.7826/1)
;; dif-rot : #f(0.0 2.686130e-05 0.0)/(2.686130e-05/0.017453)
   coords: #<coordinates #X4bcccb0 0.0 0.0 0.0 / 0.0 0.0 0.0>
;; angles: (14.9993 150 15.0006)
;; args: ((#<cascaded-coords #X4b668a0 39.982 0.0 0.0 / 3.142 1.225e-16 3.14 2>):link-list (#<bodyset-link #X4cf8e60 12 0.0 0.0 20.0 / 0.0 0.262 0.0> #<bodyset-link #X4cc8008 13 25.866 0.0 116.597 / 3.142 0.262 3.142> #<bodyset-link #X4
c7a0d0 14 51.764 0.0 20.009 / 3.142 2.686e-05 3.142>) :move-target;; #<cascaded-
coords #X4c93640 51.764 0.0 0.009 / 3.142 2.686e-05 3.142> :translation-axis t :
rotation-axis t)
  これは,関節の駆動範囲の制限から目標位置に手先が届かない状況である.このような場面では,例えば,
手先の位置さえ目標位置に届けばよく姿勢を無視してよい場合:rotation-axis nil と指定することができる.
  また,:thre や:rthre を使うことで逆運動学計算の終了条件である位置姿勢の誤差を指定することができ
る.正確な計算が求められていない状況ではこの値をデフォルトの1.(deg2rad 1)より大きい値を利用する
のもよい.
  また,逆運動学の計算に失敗した場合,デフォルトでは逆運動学計算を始める前の姿勢まで戻るが,:revert-if-fail
というキーワード引数を nil と指定すると,指定されたの回数の計算を繰り替えしたあと,その姿勢のまま関
数から抜けてくる.指定の回数もまた,:stopというキーワード引数で指定することができる.
```

(setq c (make-cascoords :pos #f(300 0 0) :rpy (float-vector 0 pi 0)))
(send r :inverse-kinematics c
 :link-list (send r :link-list (send r :end-coords :parent))
 :move-target (send r :end-coords)
 :translation-axis t
 :rotation-axis nil

18.3.2 irteus のサンプルプログラムにおける例

cascaded-coords クラスでは

• (:link-list (to &optional form))

:revert-if-fail nil)

• (:calc-jacobian-from-link-list (link-list &key move-target (rotation-axis nil)))

というメソッドが用意されている.

前者はリンクを引数として,ルートリンクからこのリンクまでの経路を計算し,リンクのリストとして返す. 後者はこのリンクのリストを引数とし,move-target 座標系をに対するヤコビアンを計算する.

concatenate result-type a b は a b を連結し result-type 型に変換し返し, scale a b はベクトル b の全ての要素をスカラー a 倍し, matrix-log は行列対数関数を計算する.

```
(if (not (boundp '*irtviewer*)) (make-irtviewer))
(load "irteus/demo/sample-arm-model.1")
(setq *sarm* (instance sarmclass :init))
(send *sarm* :reset-pose)
(setq *target* (make-coords :pos #f(350 200 400)))
(objects (list *sarm* *target*))
(do-until-key
  ;; step 3
  (setq c (send *sarm* :end-coords))
  (send c :draw-on :flush t)
  ;; step 4
  ;; step 4
  (setq dp (scale 0.001 (v- (send *target* :worldpos) (send c :worldpos))) ;; mm->m
       dw (matrix-log (m* (transpose (send c :worldrot)) (send *target* :worldrot))))
  (format t "dp = ~7,3f ~7,3f ~7,3f, dw = ~7,3f ~7,3f ~7,3f ~%"
          (elt dp 0) (elt dp 1) (elt dp 2)
          (elt dw 0) (elt dw 1) (elt dw 2))
  (when (< (+ (norm dp) (norm dw)) 0.01) (return))
  ;; step 6
  (setq 11 (send *sarm* :link-list (send *sarm* :end-coords :parent)))
  (setq j (send *sarm* :calc-jacobian-from-link-list
                11 :move-target (send *sarm* :end-coords)
                :trnaslation-axis t :rotation-axis t))
  (setq q (scale 1.0 (transform (pseudo-inverse j) (concatenate float-vector dp dw))))
  ;; step 7
  (dotimes (i (length 11))
   (send (send (elt ll i) :joint) :joint-angle (elt q i) :relative t))
  (send *irtviewer* :draw-objects)
  (x::window-main-one))
```

実際のプログラミングでは:inverse-kinematics というメソッドが用意されており,ここでは特異点や関節リミットの回避,あるいは自己衝突回避等の機能が追加されている.

18.3.3 実際のロボットモデル

実際のロボットや環境を利用した実践的なサンプルプログラムを見てみよう.

まず,最初はロボットや環境のモデルファイルを読み込む.これらのファイルは\$EUSDIR/modelsに,これらのファイルをロードしインスタンスを生成するプログラムは以下のように書くことができる. (room73b2) や (h7) はこれらのファイル内で定義されている関数である. ロボットのモデル (robot-model) は irtrobot.1 ファイルで定義されており, cascaded-link クラスの子クラスになっている. ロボットとは larm, rarm, lleg, rleg, head のリンクのツリーからなるものとして定義されており, (send *robot*: larm) や (send *robot*: head) としてロボットのリム (limb) にアクセスでき,右手の逆運動学,左手の逆運動学等という利用方法が可能になっている.

```
(load "models/room73b2-scene.1")
(load "models/h7-robot.1")
(setq *room* (room73b2))
(setq *robot* (h7))
(objects (list *robot* *room*))
```

ロボットには:reset-pose というメソッドがありこれで初期姿勢をとることができる.

```
(send *robot* :reset-pose)
```

次に,ロボットを部屋の中で移動させたい.部屋内の代表的な座標は(send *room* :spots)で取得できる.この中から目的の座標を得る場合はその座標の名前を引数として:spot メソッドを呼び出す.ちなみに,このメソッドの定義はprog/jskeus/irteus/irtscene.1 にあり

```
(defmethod scene-model
  (:spots
   (&optional name)
   (append
    (mapcan
    #'(lambda(x)(if (derivedp x scene-model) (send x :spots name) nil))
    (mapcan #'(lambda (o)
(if (and (eq (class o) cascaded-coords)
 (or (null name) (string= name (send o :name))))
    (list o)))
   objs)))
  (:spot
   (name)
   (let ((r (send self :spots name)))
     (case (length r)
       (0 (warning-message 1 "could not found spot(~A)" name) nil)
       (1 (car r))
       (t (warning-message 1 "found multiple spot \tilde{A} for given name(\tilde{A})" r name) (car r)))))
 )
```

となっている.

ロボットもまた coordinates クラスの子クラスなので:move-to メソッドを利用できる.また,このロボットの原点は腰にあるので足が地面につくように:locate メソッドを使って移動する.

```
(send *robot* :move-to (send *room* :spot "cook-spot") :world)
(send *robot* :locate #f(0 0 550))
```

現状では*irtviewer*の画面上でロボットが小さくなっているので,以下のメソッド利用し,ロボットが画面いっぱいになるように調整する.

```
(send *irtviewer* :look-all
          (geo::make-bounding-box
          (flatten (send-all (send *robot* :bodies) :vertices))))
```

次に環境中の物体を選択する.ここでは:object メソッドを利用する.これは,:spots,:spot と同様の振る舞いをするため,どのような物体があるかは,(send-all (send *room* :objects):name)として知ることができる.room73b2-kettleの他にroom73b2-mug-cupやroom73b2-knife等を利用するとよい.

```
(setq *kettle* (send *room* :object "room73b2-kettle"))
```

環境モデルの初期化直後は物体は部屋に assoc されているため,以下の用に親子関係を解消しておく.こうしないと物体を把持するなどの場合に問題が生じる.

```
(if (send *kettle* :parent) (send (send *kettle* :parent) :dissoc *kettle*))
```

ロボットの視線を対象物に向けるためのメソッドとして以下のようなものがある.

```
(send *robot* :head :look-at (send *kettle* :worldpos))
```

対象物体には,その物体を把持するための利用したらよい座標系が:handle メソッドとして記述されている場合がある.このメソッドはリストを返すため以下の様に(car (send *kettle* :handle))としてその座標系を知ることができる.この座標がどこにあるか確認するためには(send (car (send *kettle* :handle)):draw-on :flustとするとよい.

したがってこの物体手を伸ばすためには

```
(send *robot* :larm :inverse-kinematics (car (send *kettle* :handle)) :link-list (send *robot* :link-list (send *robot* :larm :end-coords :parent)) :move-target (send *robot* :larm :end-coords) :rotation-axis :z :debug-view t)

となる .
ここで , ロボットの手先と対象物体の座標系を連結し ,

(send *robot* :larm :end-coords :assoc *kettle*)

以下の様にして世界座標系で 100[mm] 持ち上げることができる .

(send *robot* :larm :move-end-pos #f(0 0 100) :world :debug-view t :look-at-target t)
```

:look-at-target は移動中に首の向きを常に対象を見つづけるようにするという指令である.

18.4 ロボットモデル

ロボットの身体はリンクとジョイントから構成されるが、それぞれ bodyset-link と joint クラスを利用し モデル絵を作成する。ロボットの身体はこれらの要素を含んだ cascaded-link という,連結リンクとしてモ デルを生成する.

実際には joint は抽象クラスであり rotational-joint,linear-joint, wheel-joint,omniwheel-joint, sphere-joint を選択肢、また四肢を持つロボットの場合は cascaded-link ではなく robot-model クラスを利用する。

joint [75]

:super propertied-object

:slots parent-link child-link joint-angle min-angle max-angle default-coords joint-velocity joi

[メソッド]

:init &key (name (intern (format nil joint A (system:address self)) KEYWORD)) ((:child-link clink)) ((:parent-link plink)) (min -90) (max 90) ((:max-joint-velocity mjv)) ((:max-joint-torque mjt)) ((:joint-min-max-table mm-table)) ((:joint-min-max-target mm-target)) &allow-other-keys [メッド]

abstract class of joint, users need to use rotational-joint, linear-joint, sphere-joint, 6dof-joint, wheel-joint or omniwheel-joint. use :parent-link/:child-link for specifying links that this joint connect to and :min/:min for range of joint angle in degree.

:min-angle $\&optional\ v$

If v is set, it updates min-angle of this instance. :min-angle returns minimal angle of this joint in degree.

:max-angle &optional v [メソッド]

If v is set, it updates max-angle of this instance. :max-angle returns maximum angle of this joint in degree.

:parent-link &rest args [メソッド]

Returns parent link of this joint. if any arguments is set, it is passed to the parent-link.

:child-link &rest args Returns child link of this joint. if any arguments is set, it is passed to the child-link.	[メソッド]
:calc-dav-gain dav i periodic-time	[メソッド]
:joint-dof nil	[メソッド]
:speed-to-angle $\mathscr{C}rest\ args$	[メソッド]
:angle-to-speed &rest args	[メソッド]
:calc-jacobian &rest args	[メソッド]
:joint-velocity $\mathscr{C}optional\ jv$	[メソッド]
:joint-acceleration &optional ja	[メソッド]
:joint-torque ${\it Coptional\ jt}$	[メソッド]
:max-joint-velocity &optional mjv	[メソッド]
:max-joint-torque &optional mjt	[メソッド]
:joint-min-max-table &optional mm-table	[メソッド]
:joint-min-max-target &optional mm-target	[メソッド]
$: joint-min-max-table-angle-interpolate \ \textit{target-angle min-or-max}$	[メソッド]
$\textbf{:joint-min-max-table-min-angle} \ \mathscr{C}optional \ (target-angle \ (send \ joint-min-max-target \ :joint-angle))$	[メソッド]
$: joint-min-max-table-max-angle \ \mathscr{C}optional \ (target-angle \ (send \ joint-min-max-target \ : joint-angle))$	[メソッド]
rotational-joint	[クラス]
:super joint	
:slots axis	

ソッド

create instance of rotational-joint. : axis is either (:x, :y, :z) or vector. : min-angle and :max-angle takes in radius, but velocity and torque are given in SI units.

 $\textbf{:joint-angle} \ \mathscr{C}optional \ v \ \mathscr{C}key \ relative \ \mathscr{C}allow-other-keys$

[メソッド]

Return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint angle. v is rotational value in degree.

:joint-dof nil

Returns DOF of rotational joint, 1.

 $: {\bf calc\text{-}angle\text{-}speed\text{-}gain}\ dav\ i\ periodic\text{-}time$

[メソッド]

:speed-to-angle v [メソッド]
:angle-to-speed v [メソッド]
:calc-jacobian $\operatorname{\mathscr{C}rest\ args}$

linear-joint [クラス]

:super **joint** :slots axis

 $\begin{array}{l} \textbf{:init} \ \textit{\& trest args} \ \textit{\& key} \ ((:axis \ ax) : z) \ ((:max\mbox{-}joint\mbox{-}velocity \ mjv) \ (/ \ pi \ 4)) \ ((:max\mbox{-}joint\mbox{-}torque \ mjt) \ 100) \ \textit{\& allow-other-keys} \\ \boxed{\bigstar} \end{array}$

ソッド

Create instance of linear-joint. :axis is either (:x, :y, :z) or vector. :min-angle and :max-angle takes in [mm], but velocity and torque are given in SI units.

:joint-angle & optional v & key relative & allow-other-keys
return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint angle. v is linear value in [mm].

:joint-dof nil

Returns DOF of linear joint, 1.

:calc-angle-speed-gain dav i periodic-time [メソッド]

:speed-to-angle v [メソッド]

:angle-to-speed v [$\mathsf{X}\mathsf{Y}\mathsf{y}\mathsf{F}$]

:calc-jacobian &rest args

wheel-joint [クラス]

:super joint :slots axis

:init &rest args &key (min (float-vector *-inf**-inf*)) (max (float-vector *inf**inf*)) ((:max-joint-velocity mjv) (float-vector (/ 0.08 0.05) (/ pi 4))) ((:max-joint-torque mjt) (float-vector 100 100)) &allow-other-keys [メソッド]

Create instance of wheel-joint.

:joint-angle Coptional v Ckey relative Callow-other-keys

[メソッド]

return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint angle. v is joint-angle vector, which is (float-vector translation-x[mm] rotation-z[deg])

:joint-dof nil [メソッド]

Returns DOF of linear joint, 2.

:calc-angle-speed-gain dav i periodic-time [メソッド]

:speed-to-angle dv [メソッド]

:angle-to-speed dv [メソッド]

:calc-jacobian fik row column joint paxis child-link world-default-coords child-reverse move-target transform-coords rotation-axis translation-axis tmp-v0 tmp-v1 tmp-v2 tmp-v3 tmp-v3b tmp-m33 [メッド]

omniwheel-joint

[クラス]

:super **joint** :slots axis

:init &rest args &key (min (float-vector *-inf**-inf**-inf**)) (max (float-vector *inf**inf**inf*)) ((:max-joint-velocity mjv) (float-vector (/ 0.08 0.05) (/ 0.08 0.05) (/ pi 4))) ((:max-joint-torque mjt) (float-vector 100 100 100)) & & [メソッド]

create instance of omniwheel-joint.

:joint-angle $\mathscr{C}optional\ v\ \mathscr{C}key\ relative\ \mathscr{C}allow-other-keys$

[メソッド]

return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint angle. v is joint-angle vector, which is (float-vector translation-x[mm] translation-y[mm] rotation-z[deg])

:joint-dof nil [メソッド]

Returns DOF of linear joint, 3.

:calc-angle-speed-gain $dav \ i \ periodic-time$

[メソッド]

:speed-to-angle dv [メソッド]

:angle-to-speed dv [メソッド]

:calc-jacobian fik row column joint paxis child-link world-default-coords child-reverse move-target transform-coords rotation-axis translation-axis tmp-v0 tmp-v1 tmp-v2 tmp-v3 tmp-v3b tmp-m33 [メソッド]

sphere-joint

[クラス]

:super **joint** :slots axis

Create instance of sphere-joint. min/max are defiend as a region of angular velocity in degree.

:joint-angle & optional v & key relative & allow-other-keys

「メソッド]

return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint angle. v is joint-angle vector by axis-angle representation, i.e (scale rotation-angle-from-default-coords[deg] axis-unit-vector)

:joint-angle-rpy &optional v &key relative

[メソッド]

Return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint-angle vector by RPY representation, i.e. (float-vector yaw[deg] roll[deg] pitch[deg])

:joint-dof nil

Returns DOF of linear joint, 3.

:joint-euler-angle &key (axis-order '(:z:y:x)) ((:child-rot m) (send child-link:rot)) [メソッド]

Return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint-angle vector by euler representation.

:calc-angle-speed-gain dav i periodic-time [メソッド]

:speed-to-angle dv [メソッド]

:angle-to-speed dv [メソッド]

:calc-jacobian fik row column joint paxis child-link world-default-coords child-reverse move-target transform-coords rotation-axis translation-axis tmp-v0 tmp-v1 tmp-v2 tmp-v3 tmp-v3b tmp-m33 [メソッド]

6dof-joint [クラス]

:super **joint** :slots axis

 $\textbf{:joint-angle} \ \mathcal{C}optional \ v \ \mathcal{C}key \ relative \ \mathcal{C}allow-other-keys$

[メソッド]

Return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint angle vector, which is 6D vector of 3D translation[mm] and 3D rotation[deg], i.e. (find-if #'(lambda (x) (eq (send (car x) :name) 'sphere-joint)) (documentation :joint-angle))

:joint-angle-rpy &optional v &key relative

[メソッド]

Return joint-angle if v is not set, if v is given, set joint angle. v is joint-angle vector, which is 6D vector of 3D translation[mm] and 3D rotation[deg], for rotation, please see (find-if #'(lambda (x) (eq (send (car x) :name) 'sphere-joint)) (documentation :joint-angle-rpy))

:joint-dof nil [メソッド]

Returns DOF of linear joint, 6.

:calc-angle-speed-gain dav i periodic-time [メソッド]

:speed-to-angle dv [メソッド]

:angle-to-speed dv [メソッド]

:calc-jacobian fik row column joint paxis child-link world-default-coords child-reverse move-target transform-coords rotation-axis translation-axis tmp-v0 tmp-v1 tmp-v2 tmp-v3 tmp-v3a tmp-v3b tmp-m33 [メッド]

bodyset-link [クラス]

:super bodyset

solots joint parent-link child-links analysis-level default-coords weight acentroid inertia-tense

:init coords & erest args & key ((:analysis-level level) :body) ((:weight w) 1) ((:centroid c) #f(0.0 0.0 0.0)) [メソッド] ((:inertia-tensor i) (unit-matrix 3)) & allow-other-keys Create instance of bodyset-link. :worldcoords &optional (level analysis-level) [メソッド] Returns a coordinates object which represents this coord in the world by concatenating all the cascoords from the root to this coords. :analysis-level & optional v [メソッド] Change analysis level :coords only changes kinematics level and :body changes geometry too. :weight &optional w [メソッド] Returns a weight of the link. If w is given, set weight. :centroid &optional c [メソッド] Returns a centroid of the link. If c is given, set new centroid. :inertia-tensor &optional i [メソッド] Returns a inertia tensor of the link. If c is given, set new intertia tensor. :joint &rest args [メソッド] Returns a joint associated with this link. If args is given, args are forward to the joint. [メソッド] :add-joint jSet j as joint of this link :del-joint nil [メソッド] Remove current joint of this link [メソッド] :parent-link nil Returns parent link :child-links nil [メソッド] Returns child links :add-child-links l[メソッド] Add l to child links [メソッド] :add-parent-link lSet l as parent link :del-child-link l[メソッド] Delete l from child links :del-parent-link nil [メソッド] Delete parent link :default-coords $&optional\ c$ [メソッド] cascaded-link [クラス] cascaded-coords :super

links joint-list bodies collision-avoidance-links end-coords-list

:slots

:init &rest args &key name &allow-other-keys

[メソッド]

Create cascaded-link.

[メソッド] :init-ending nil

This method is to called finalize the instantiation of the cascaded-link. This update bodies and childlink and parent link from joint-list

:links &rest args [メソッド]

Returns links, or args is passed to links

:joint-list &rest args [メソッド]

Returns joint list, or args is passed to joints

[メソッド] :link name

Return a link with given name.

:joint name [メソッド]

Return a joint with given name.

:end-coords name [メソッド]

Returns end-coords with given name

:bodies &rest args [メソッド]

Return bodies of this object. If args is given it passed to all bodies

:faces nil [メソッド]

Return faces of this object.

:angle-vector & optional vec (angle-vector (instantiate float-vector (calc-target-joint-dimension joint-list))) [メソッド]

Returns angle-vector of this object, if vec is given, it updates angles of all joint. If given angle-vector violate min/max range, the value is modified.

:link-list to Coptional from

[メソッド]

Find link list from to link to from link.

:plot-joint-min-max-table joint0 joint1 [メソッド]

Plot joint min max table on Euslisp window.

:calc-jacobian-from-link-list link-list &rest args &key move-target (transform-coords move-target) (rotationaxis (cond ((atom move-target) nil) (t (make-list (length move-target))))) (translation-axis (cond ((atom move-target) t) (t (make-list (length move-target) :initial-element t)))) (col-offset 0) (dim (send self :calctarget-axis-dimension rotation-axis translation-axis)) (fik-len (send self:calc-target-joint-dimension link-list)) fik (tmp-v0 (instantiate float-vector 0)) (tmp-v1 (instantiate float-vector 1)) (tmp-v2 (instantiate float-vector 2)) (tmp-v3 (instantiate float-vector 3)) (tmp-v3a (instantiate float-vector 3)) (tmp-v3b (instantiate floatvector 3)) (tmp-m33 (make-matrix 3 3)) & allow-other-keys ソッド

Calculate jacobian matrix from link-list and move-target. Unit system is [m] or [rad], not [mm] or

:inverse-kinematics target-coords &rest args &key (stop 50) (link-list) (move-target) (debug-view) (warnp t)

(revert-if-fail t) (rotation-axis (cond ((atom move-target) t) (t (make-list (length move-target) :initial-element t)))) (translation-axis (cond ((atom move-target) t) (t (make-list (length move-target) :initial-element t)))) (joint-args) (thre (cond ((atom move-target) 1) (t (make-list (length move-target) :initial-element 1)))) (rthre (cond ((atom move-target) (deg2rad 1)) (t (make-list (length move-target) :initial-element (deg2rad 1))))) (union-link-list) (centroid-thre 1.0) (target-centroid-pos) (centroid-offset-func) (cog-translation-axis :z) (dump-command t) (periodic-time 0.5) & allow-other-keys

Move move-target to target-coords.

:inverse-kinematics-for-closed-loop-forward-kinematics target-coords &rest args &key (move-target) (link-list) (move-joints-hook) (additional-weight-list) (constrained-joint-list) (constrained-joint-angle-list) &allow-other-keys

[メ

Solve inverse-kinematics for closed loop forward kinematics. Move move-target to target-coords with link-list. link-list loop should be close when move-target reachs target-coords. constrained-joint-list is list of joints specified given joint angles in closed loop. constrained-joint-angle-list is list of joint-angle for constrained-joint-list.

:update-descendants &rest args [メソッド]

:find-link-route to Eoptional from [メソッド]

:make-joint-min-max-table l0 l1 joint0 joint1 &key (fat 0) (fat2 nil) (debug nil) (margin 0.0) (overwrite-collision-model nil) [メソド]

:make-min-max-table-using-collision-check l0 l1 joint0 joint1 joint-range0 joint-range1 min-joint0 min-joint1 fat fat2 debug margin

:plot-joint-min-max-table-common joint0 joint1 [メソッド]

:calc-target-axis-dimension rotation-axis translation-axis [メソット]

:calc-union-link-list link-list [メソッド]

:calc-target-joint-dimension link-list [メソッド]

:calc-inverse-jacobian jacobi &rest args &key ((:manipulability-limit ml) 0.1) ((:manipulability-gain mg) 0.001) weight debugview ret wmat tmat umat umat2 mat-tmp mat-tmp-rc tmp-mrr tmp-mrr2 &allow-other-keys [メソッド]

:calc-gradh-from-link-list link-list & optional (res (instantiate float-vector (length link-list))) [メソッド]

:calc-joint-angle-speed union-vel &rest args &key angle-speed (angle-speed-blending 0.5) jacobi jacobi# null-space i-j#j debug-view weight wmat tmp-len tmp-len2 fik-len &allow-other-keys

:calc-joint-angle-speed-gain union-link-list dav periodic-time [メソッド]

:collision-avoidance-links &optional l [メソッド]

:collision-avoidance-link-pair-from-link-list link-lists &key obstacles ((:collision-avoidance-links collision-links) collision-avoidance-links) debug [メリド]

 $\textbf{:} \textbf{collision-avoidance-calc-distance} \ \mathscr{C} \textit{rest args} \ \mathscr{C} \textit{key union-link-list (warnp t) ((:collision-avoidance-link-pair pair-list))} \ \mathscr{C} \textit{allow-avoidance-link-pair pair-list))} \ \mathscr{C} \textit{loss} \textit{$

other-keys ソッド

:collision-avoidance-args $pair\ link$ -list

[メソッド]

:collision-avoidance &rest args &key avoid-collision-distance avoid-collision-joint-gain avoid-collision-null-gain ((:collision-avoidance-link-pair pair-list)) (union-link-list) (link-list) (weight) (fik-len (send self :calc-target-joint-dimension union-link-list)) debug-view &allow-other-keys

[メソッド]

:move-joints union-vel &rest args &key union-link-list (periodic-time 0.05) (joint-args) (debug-view nil) (move-joints-hook) &allow-other-keys

:find-joint-angle-limit-weight-old-from-union-link-list union-link-list

[メソッド]

:reset-joint-angle-limit-weight-old union-link-list

[メソッド]

:calc-weight-from-joint-limit avoid-weight-gain fik-len link-list union-link-list debug-view weight tmp-weight tmp-len [メッド]

:calc-inverse-kinematics-weight-from-link-list link-list link-list (avoid-weight-gain 1.0) (union-link-list (send self :calc-union-link-list)) (fik-len (send self :calc-target-joint-dimension union-link-list)) (weight (fill (instantiate float-vector fik-len) 1)) (additional-weight-list) (debug-view) (tmp-weight (instantiate float-vector fik-len)) (tmp-len (instantiate float-vector fik-len)) [メリド]

 $: \textbf{calc-nspace-} from\textbf{-} joint\textbf{-} limit \ avoid-nspace-gain \ union-link-list \ weight \ debug-view \ tmp-nspace-gain \ union-link-list \ debug-view \ tmp-nspace-gain \ union-link-list \ debug-view \ tmp-nspace-gain \ union-link-list \ debug-v$

[メソッド]

:calc-inverse-kinematics-nspace-from-link-list link-list &key (avoid-nspace-gain 0.01) (union-link-list (send self :calc-union-link-list link-list)) (fik-len (send self :calc-target-joint-dimension union-link-list)) (null-space) (debug-view) (additional-nspace-list) (cog-gain 0.0) (target-centroid-pos) (centroid-offset-func) (cog-translation-axis :z) (weight (fill (instantiate float-vector fik-len) 1.0)) (update-mass-properties t) (tmp-nspace (instantiate float-vector fik-len)) [メソッド]

:move-joints-avoidance union-vel &rest args &key union-link-list link-list (fik-len (send self :calc-target-joint-dimension union-link-list)) (weight (fill (instantiate float-vector fik-len) 1)) (null-space) (avoid-nspace-gain 0.01) (avoid-weight-gain 1.0) (avoid-collision-distance 200) (avoid-collision-null-gain 1.0) (avoid-collision-joint-gain 1.0) ((:collision-avoidance-link-pair pair-list) (send self :callision-avoidance-link-pair-from-link-list link-list :obstacles (cadr (memq :obstacles args)) :debug (cadr (memq :debug-view args)))) (cog-gain 0.0) (target-centroid-pos) (centroid-offset-func) (cog-translation-axis :z) (additional-weight-list) (additional-nspace-list) (tmp-len (instantiate float-vector fik-len)) (tmp-len2 (instantiate float-vector fik-len)) (tmp-weight (instantiate float-vector fik-len)) (tmp-mcc (make-matrix fik-len fik-len)) (tmp-mcc2 (make-matrix fik-len fik-len)) (debug-view) (jacobi) &allow-other-keys

:inverse-kinematics-args &rest args &key union-link-list rotation-axis translation-axis &allow-other-keys

[メソッド]

:draw-collision-debug-view nil

[メソッド]

:inverse-kinematics-loop dif-pos dif-rot &rest args &key (stop 1) (loop 0) link-list move-target (rotation-axis (cond ((atom move-target) t) (t (make-list (length move-target) :initial-element t)))) (translation-axis (cond ((atom move-target) t) (t (make-list (length move-target) :initial-element t)))) (thre (cond ((atom move-target) 1) (t (make-list (length move-target) :initial-element 1)))) (dif-pos-ratio 1.0) (dif-rot-ratio 1.0) union-link-list target-coords (jacobi) (additional-check) (centroid-thre 1.0) (target-centroid-pos) (centroid-offset-func) (cog-translation-axis :z) debug-view ik-args &allow-other-keys

:ik-convergence-check success dif-pos dif-rot rotation-axis translation-axis thre rthre centroid-thre target-centroid-pos centroid-offset-func cog-translation-axis & (update-mass-properties t) [メソッド]

:calc-vel-from-pos dif-pos translation-axis &rest args &key (p-limit 100.0) (tmp-v0 (instantiate float-vector 0)) (tmp-v1

```
(instantiate float-vector 1)) (tmp-v2 (instantiate float-vector 2)) (tmp-v3 (instantiate float-vector 3)) & allow-other-keys
                                                                                                                                                                                                                                 人
:calc-vel-from-rot dif-rot rotation-axis &rest args &key (r-limit 0.5) (tmp-v0 (instantiate float-vector 0)) (tmp-v1 (instantiate
float-vector 1)) (tmp-v2 (instantiate float-vector 2)) (tmp-v3 (instantiate float-vector 3)) & allow-other-keys
                                                                                                                                                                                                                     [メソッド]
:collision-check-pairs &key ((:links ls) (cons (car links) (all-child-links (car links))))
                                                                                                                                                                                                                     [メソッド]
:self-collision-check &key (mode :all) (pairs (send self :collision-check-pairs)) (collision-func 'pqp-collision-check) [メソッド]
:calc-grasp-matrix contact-points & optional (ret (make-matrix 6 (*6 (length contact-points))))
                                                                                                                                                                                                                     [メソッド]
eusmodel-validity-check robot
                                                                                                                                                                                                                          [関数]
            Check if the robot model is validate
calc-jacobian-default-rotate-vector pasis world-default-coords child-reverse transform-coords tmp-v3 tmp-m33
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
coords rotation-axis translation-axis tmp-v0 tmp-v1 tmp-v2 tmp-v3 tmp-v3a tmp-v3b tmp-m33 mil calc-jacobian-rotational fik row column joint paxis child-link world-default-coords child-reverse move-target transform-
rotation-axis translation-axis tmp-v0.tmp-v1.tmp-v2 tmp-v3 tmp-v3 tmp-u3b tmp-m33 mp-u3b tmp-m33 mp-u3b tmp-m3 tmp-m3 tmp-w2 tmp-m3 tmp-u3b tmp-m3 t
_{\mathrm{nil}}
        {\bf calc\text{-}angle\text{-}speed\text{-}gain\text{-}scalar}\ j\ dav\ i\ periodic\text{-}time
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
        calc-angle-speed-gain-vector j day i periodic-time
nil
        all-child-links s &optional (pred #'identity)
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
nil
        calc-dif-with-axis dif axis &optional tmp-v0 tmp-v1 tmp-v2
nil
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
_{\mathrm{nil}}
        calc-target-joint-dimension joint-list
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
nil
        {\bf calc\text{-}joint\text{-}angle\text{-}min\text{-}max\text{-}for\text{-}limit\text{-}calculation}\ j\ kk\ jamm
nil
        joint-angle-limit-weight j-l Goptional (res (instantiate float-vector (calc-target-joint-dimension j-l)))
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
        joint-angle-limit-nspace j-l & optional (res (instantiate float-vector (calc-target-joint-dimension j-l)))
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
           iqn-axis (t t)) (translation-axis (t t)) (fik (màke-matrix (send robot :càlc-targét-axis-dimension rotation-axis translation-
(send robot :calc-target-joint-dimension link-list))
(send robot :calc-target-joint-dimension link-list))
coords)
nil append-obj-virtual-joint link-list target-coords & (yoint-class 6dof-joint) (joint-args) (vplink) (vplink-coords) (vclink-
(vplink-coords) (vclink-coords) (vclink-coords) (ink-list target-coords & link-coords (foot-joint) (joint-args '(nil)) (vplink) (vplink)
        eusmodel-validity-check-one robot
                                                                                                                                                                                                                             [関数]
nil
                 bodyset
_{\rm nil}
                                                                                                                                                                                                                      [クラス]
                                                                  cascaded-coords
                                           :super
                                                                   (geometry::bodies :type cons)
                                           :slots
:init coords & rest arqs & key (name (intern (format nil bodyset A (system:address self)) KEYWORD))
                                                                                                                                                                                                                 [メソッド]
((:bodies geometry::bs)) & allow-other-keys
            Create bodyset object
:bodies &rest args
                                                                                                                                                                                                                     [メソッド]
:faces nil
                                                                                                                                                                                                                     [メソッド]
:worldcoords nil
                                                                                                                                                                                                                     [メソッド]
                                                                                                                                                                                                                     [メソッド]
:draw-on &rest args
```

[関数] midcoords geometry::c1 geometry::c2 Returns mid (or p) coordinates of given two coordinates c1 and c2 orient-coords-to-axis geometry::target-coords geometry::v &optional (geometry::axis :z) [関数] orient 'axis' in 'target-coords' to the direction specified by 'v' destructively. 'v' must be non-zero vector. geometry::face-to-triangle-aux geometry::f [関数] triangulate the face. [関数] geometry::face-to-triangle geometry::f convert face to set of triangles. geometry::face-to-tessel-triangle geometry::f geometry::num [関数] return polygon if triangable, return nil if it is not. body-to-faces geometry::abody [関数] return triangled faces of given body make-sphere geometry::r &rest args [関数] make sphere of given r make-ring geometry::ring-radius geometry::pipe-radius &rest args &key (geometry::segments 16) [関数] make ring of given ring and pipe radius **x-of-cube** *qeometry::cub* [関数] return x of cube. y-of-cube geometry::cub [関数] return y of cube. **z-of-cube** geometry::cub [関数] return z of cube. height-of-cylinder geometry::cyl [関数] return height of cylinder. radius-of-cylinder qeometry::cyl [関数] return radius of cylinder. radius-of-sphere geometry::sp [関数] return radius of shape. geometry::make-faceset-from-vertices geometry::vs [関数] create faceset from vertices. matrix-to-euler-angle geometry::m geometry::axis-order [関数] return euler angle from matrix. [関数] **geometry::quaternion-from-two-vectors** geometry::a geometry::b Compute quaternion which rotate vector a into b. transform-coords geometry::c1 geometry::c2 &optional (geometry::c3 (let ((geometry::dim (send geometry::c1 :dimension))) (instance coordinates :newcoords (unit-matrix geometry::dim) (instantiate float-vector geometry::dim)))) [関数]

geometry::face-to-triangle-rest-polygon geometry::f geometry::num geometry::edgs

[関数]

nil	${\bf geometry::} {\bf face\text{-}to\text{-}triangle\text{-}make\text{-}simple} \ \textit{geometry::} f$	[関数]
nil	body-to-triangles geometry::abody &optional (geometry::limit 50)	[関数]
nil	${\bf geometry::} triangle-to-triangle \ \textit{geometry}:: a face \ \mathscr{C}optional \ (\textit{geometry}:: limit \ 50)$	[関数]
nil	${f robot-model}$	[クラス]

:super cascaded-link

:slots larm-end-coords rarm-end-coords lleg-end-coords rleg-end-coords head-end-coords tor

:camera sensor-name
Returns camera with given name

:force-sensor sensor-name
Returns force sensor with given name

:imu-sensor sensor-name

[メソッド]

Returns imu sensor of given name

:force-sensors nil [メソッド]

Returns force sensors.

:imu-sensors nil [メソッド]

Returns imu sensors.

:cameras nil

Returns camera sensors.

:look-at-hand l/r [メソッド]

look at hand position, l/r supports :rarm, :larm, :arms, and '(:rarm :larm)

:inverse-kinematics target-coords &rest args &key look-at-target (move-target) (link-list (if (atom move-target) (send self:link-list (send move-target :parent)) (mapcar #'(lambda (mt) (send self:link-list (send mt :parent))) move-target))) &allow-other-keys

solve inverse kinematics, move move-target to target-coords look-at-target suppots t, nil, float-vector, coords, list of float-vector, list of coords link-list is set by default based on move-target ->root link link-list

:inverse-kinematics-loop dif-pos dif-rot &rest args &key target-coords debug-view look-at-target (move-target) (link-list (if (atom move-target) (send self:link-list (send move-target:parent)) (mapcar #'(lambda (mt) (send self:link-list (send mt:parent))) move-target))) &allow-other-keys [メソッド]

move move-target using dif-pos and dif-rot, look-at-target supports t, nil, float-vector, coords, list of float-vector, list of coords link-list is set by default based on move-target ->root link link-list

:look-at-target look-at-target &key (target-coords) [メソッド

move robot head to look at targets, look-at-target support t/nil float-vector coordinates, center of list of float-vector or list of coordinates

:init-pose nil [メソッド]

Set robot to initial posture.

:torque-vector & key (force-list) (moment-list) (target-coords) (debug-view nil) (calc-statics-p t) (dt 0.005) (av (send self :angle-vector)) (root-coords (send (car (send self :links)) :copy-worldcoords)) (calc-torque-buffer-args (send self :calc-torque-buffer-args)) [メッド]

Returns torque vector

:calc-force-from-joint-torque limb all-torque &key (move-target (send self limb :end-coords)) (use-torso) [メソッド]

Calculates end-effector force and moment from joint torques.

:fullbody-inverse-kinematics target-coords &rest args &key (move-target) (link-list) (min (float-vector 500 -500 -500 -20 -20 -10)) (max (float-vector 500 500 25 20 20 10)) (root-link-virtual-joint-weight #f(0.1 0.1 0.1 0.5 0.5)) (target-centroid-pos (apply #'midpoint 0.5 (send self:legs:end-coords:worldpos))) (coggain 1.0) (centroid-thre 5.0) (additional-weight-list) (joint-args nil) &allow-other-keys

[メソド]

fullbody inverse kinematics for legged robot. necessary args: target-coords, move-target, and link-list must include legs' (or leg's) parameters ex. (send *robot*:fullbody-inverse-kinematics (list rarm-tc rleg-tc lleg-tc):move-target (list rarm-mt rleg-mt lleg-mt):link-list (list rarm-ll rleg-ll))

:print-vector-for-robot-limb vec

[メソッド]

Print angle vector with limb alingment and limb indent. For example, if robot is rarm, larm, and torso, print result is: $\#f(rarm-j0 \dots rarm-jN larm-j0 \dots larm-jN torso-j0 \dots torso-jN)$

:calc-zmp-from-forces-moments forces moments &key (wrt :world) (limbs '(:rleg :lleg)) (force-sensors (mapcar #'(lambda (l) (send self :force-sensor l)) limbs)) (cop-coords (mapcar #'(lambda (l) (send self l :end-coords)) limbs)) (fz-thre 0.001) (limb-cop-fz-list (mapcar #'(lambda (fs f m cc) (let ((fsp (scale 0.001 (send fs :worldpos))) (nf (send fs :rotate-vector f)) (nm (send fs :rotate-vector m))) (send self :calc-cop-from-force-moment nf nm fs cc :fz-thre fz-thre :return-all-values t))) force-sensors forces moments cop-coords)) [メソッド]

Calculate zmp[mm] from sensor local forces and moments If force_z is large, zmp can be defined and returns 3D zmp. Otherwise, zmp cannot be defined and returns nil.

:foot-midcoords &optional (mid 0.5)

「メソッド]

Calculate midcoords of :rleg and :lleg end-coords. In the following codes, leged robot is assumed.

:fix-leg-to-coords fix-coords & Optional (l/r:both) & key (mid 0.5) & allow-other-keys

Fix robot's legs to a coords In the following codes, leged robot is assumed.

:move-centroid-on-foot leg fix-limbs &rest args &key (thre (mapcar #'(lambda (x) (if (memq x '(:rleg :lleg)) 1 5)) fix-limbs)) (rthre (mapcar #'(lambda (x) (deg2rad (if (memq x '(:rleg :lleg)) 1 5))) fix-limbs)) (mid 0.5) (target-centroid-pos (if (eq leg :both) (apply #'midpoint mid (mapcar #'(lambda (tmp-leg) (send self tmp-leg :end-coords :worldpos)) (remove-if-not #'(lambda (x) (memq x '(:rleg :lleg))) fix-limbs))) (send self leg :end-coords :worldpos))) (fix-limbs-target-coords (mapcar #'(lambda (x) (send self x :end-coords :copyworldcoords)) fix-limbs)) (root-link-virtual-joint-weight #f(0.1 0.1 0.0 0.0 0.0 0.5)) &allow-other-keys [メソド]

Move robot COG to change centroid-on-foot location, leg: legs for target of robot's centroid, which should be:both,:rleg, and:lleg. fix-limbs: limb names which are fixed in this IK.

:calc-walk-pattern-from-footstep-list footstep-list &key (default-step-height 50) (dt 0.1) (default-step-time 1.0) (solve-angle-vector-args) (debug-view nil) ((:all-limbs al) '(:rleg :lleg)) ((:default-zmp-offsets dzo)

(mapcan #'(lambda (x) (list x (float-vector 0 0 0))) al)) (init-pose-function #'(lambda nil (send self :move-centroid-on-foot :both '(:rleg :lleg)))) (start-with-double-support t) (end-with-double-support t) (ik-thre 1) (ik-rthre (deg2rad 1)) (calc-zmp t)

Calculate walking pattern from foot step list and return pattern list as a list of angle-vector, root-coords, time, and so on.

:gen-footstep-parameter &key (ratio 1.0)

[メソッド]

Generate footstep parameter

*:go-pos-params->footstep-list xx yy th &key ((:footstep-parameter prm) (send self :footstep-parameter)) ((:default-half-offset defp) (cadr (memq :default-half-offset prm))) ((:forward-offset-length xx-max) (cadr (memq :forward-offset-length prm))) ((:outside-offset-length yy-max) (cadr (memq :outside-offset-length prm)))) ((:rotate-rad th-max) (abs (rad2deg (cadr (memq :rotate-rad prm))))) (gen-go-pos-step-node-func #'(lambda (mc leg leg-translate-pos) (let ((cc (send (send mc :copy-worldcoords) :translate (cadr (assoc leg leg-translate-pos))))) (send cc :name leg) cc)))

Calculate foot step list from goal x position [mm], goal y position [mm], and goal yaw orientation [deg].

:support-polygons nil

ソッド

[メソッド]

Return support polygons.

:support-polygon name

[メソッド]

Return support polygon with given name.

:make-default-linear-link-joint-between-attach-coords attach-coords-0 attach-coords-1 end-coords-name linear-joint-name

Make default linear arctuator module such as muscle and cylinder and append lins and joint-list. Module includes parent-link =>(j0)=>l0=>(j1)=>l1 (linear actuator) =>(j2)=>l2=>end-coords. attach-coords-0 is root side coords which linear actuator is attached to. attach-coords-1 is end side coords which linear actuator is attached to. end-coords-name is the name of end-coords. linear-joint-name is the name of linear actuator.

:init-ending nil	[メソッド]
:limb limb method &rest args	[メソッド]
:inverse-kinematics-loop-for-look-at limb &rest args	[メソッド]
:gripper limb &rest args	[メソッド]
:get-sensor-method sensor-type sensor-name	[メソッド]
$: {\tt get-sensors-method-by-limb}\ sensors-type\ limb$	[メソッド]
:larm &rest args	[メソッド]
:rarm &rest args	[メソッド]
:lleg &rest args	[メソッド]
:rleg &rest args	[メソッド]

:head &rest args	[メソッド]
:torso &rest args	[メソッド]
:arms &rest args	[メソッド]
:legs &rest args	[メソッド]
:joint-angle-limit-nspace-for-6dof &key (avoid-nspace-gain 0.01) (limbs '(:rleg :lleg))	[メソッド]
:joint-order limb &optional jname-list	[メソッド]
:draw-gg-debug-view end-coords-list contact-state rz cog pz czmp dt	[メソッド]
: footstep-parameter nil	[メソッド]
:make-support-polygons nil	[メソッド]
:make-sole-polygon name make-default-robot-link len radius axis name Coptional extbody	[メソッド] [関数]
nil	

18.5 センサモデル

: slots

bumper-threshold

sensor-mod	el			[クラス]
	:super	\mathbf{body}		
	:slots	data profile		
:profile &optional p				[メソッド]
:signal rawinfo				[メソッド]
$: \mathbf{simulate} \ model$				[メソッド]
:read nil				[メソッド]
:draw-sensor v				[メソッド]
:init shape &key nam	e Eallow-oth	er-keys		[メソッド]
bumper-mo	del			[クラス]
	:super	sensor-model		

[メソッド] :init b &rest args &key ((:bumper-threshold bt) 20) name Create bumper model, b is the shape of an object and bt is the threshold in distance[mm]. :simulate objs [メソッド] Simulate bumper, with given objects, return 1 if the sensor detects an object and 0 if not. : $draw \ vwer$ [メソッド] :draw-sensor vwer [メソッド] camera-model [クラス] sensor-model :super (vwing :forward (:projection :newprojection :view :viewpoint :view-direction :viewdist :slots :init b & rest args & key ((:width pw) 320) ((:height ph) 240) (view-up #f(0.0 1.0 0.0)) (viewdistance 5.0) (hither 100.0) (yon 10000.0) & allow-other-keys [メソッド] Create camera model. b is the shape of an object :width nil [メソッド] Returns width of the camera in pixel. :height nil [メソッド] Returns height of the camera in pixel. :fovy nil [メソッド] Returns field of view in degree [メソッド] :cx nil Returns center x. [メソッド] :cy nil Returns center y. :fx nil [メソッド] Returns focal length of x. :fy nil [メソッド] Returns focal length of y. [メソッド] :screen-point pos Returns point in screen corresponds to the given pos. :3d-point x y d[メソッド] Returns 3d position [メソッド] Returns ray vector of given x and y. :viewing &rest args [メソッド] :draw-on &rest args &key ((:viewer vwer) *viewer*) &allow-other-keys [メソッド] :draw-sensor vwer &key flush (width 1) (color (float-vector 1 1 1)) [メソッド]

:draw-objects vwr objs [メソッド] :get-image $vwr \ \mathcal{C}key \ (points) \ (colors)$ [メソッド] make-camera-from-param &key pwidth pheight fx fy cx cy (tx 0) (ty 0) parent-coords name [関数] Create camera object from given parameters. 環境モデル 18.6 scene-model [クラス] :super cascaded-coords :slots name objs :init &rest args &key ((:name n) scene) ((:objects o)) [メソッド] Create scene model :objects nil [メソッド] Returns objects in the scene. :find-object name [メソッド] Returns objects with given name. :spots &optional name [メソッド] Returns spots in the scene. If name is given returns spot of given name. [メソッド] :object name Returns object of given name. [メソッド] :spot name Returns scene of given name. :bodies nil [メソッド] 動力学計算・歩行動作生成 18.7 riccati-equation [クラス] propertied-object :super :slots a b c p q r k a-bkt r+btpb-1 :init aa bb cc qq rr [メソッド] :solve nil[メソッド]

[クラス]

preview-control

:super riccati-equation

:slots $\,$ xk uk delay f1-n p1-n dim cog-z zmp-z

:init dt _zc &key (q 1) (r 1.000000e-06) ((:delay d) 1.6) (init-xk (float-vector 0 0 0)) ((:a _a) (make-matrix 3 3 (list (list 1 dt (*0.5 dt dt)) (list 0 1 dt) (list 0 0 1)))) ((:b _b) (make-matrix 3 1 (list (list (*(/ 1.0 6.0) dt dt dt)) (list (*0.5 dt dt)) (list (#0.5 dt dt)))) ((:c _c) (make-matrix 1 3 (list (list 1.0 0.0 (- (/ _zc (elt *g-vec*2))))))) [メソッド]

:delay nil			[メソッド]
:refcog nil			[メソッド]
:cart-zmp &optional	(_c c)		[メソッド]
:last-refzmp nil			[メソッド]
:current-refzmp nil			[メソッド]
:calc-f nil			[メソッド]
:calc-u nil			[メソッド]
:calc-xk nil			[メソッド]
:update-xk p			[メソッド]
:cog-z nil			[メソッド]
:update-cog-z zc			[メソッド]
extended-pi	review-	-control	[クラス]
•	:super	preview-control	,
	:slots	orga orgb orgc xk*	
:init dt zc &key (q 1.	0) (r 1.0000	00e-06) ((:delay d) 1.6) (init-xk (float-vector 0 0 0))	[メソッド]
:cart-zmp nil			[メソッド]
:calc-f nil			[メソッド]
:calc-u nil			[メソッド]
:calc-xk nil			[メソッド]
preview-dyi	namics	-filter	[クラス]
	:super	propertied-object	
	:slots	avs counter finishedp preview-controller	

:finishedp nil	[メツッド]
:av nil	[メソッド]
:cart-zmp nil	[メソッド]
:refcog nil	[メソッド]
:cog-z nil	[メツッド]
:update av p	[メソッド]
gait-generator	[クラス]
:super propertied-object	
:slots robot dt footstep-node-list support-leg-list support	-leg-coords-list swing-leg-dst-coords
: $\mathbf{init}\ rb\ _dt$	[メソッド]
$: {\tt get-footstep-limbs} \ fs$	[メツッド]
$: {\tt get-counter-footstep-limbs} \ fs$	[メソッド]
:get-limbs-zmp-list limb-coords limb-names	[メソッド]
:get-limbs-zmp limb-coords limb-names	[メソッド]
:get-swing-limbs $limbs$	[メソッド]
:initialize-gait-parameter fsl time cog &key ((:default-step-height dsh) 50) ((:default-double-step-height dsh) 50) ((:default-double-s	pat-vector 0 0 0))) al)) (q 1.0)
:finalize-gait-parameter nil	[メツッド]
:make-gait-parameter nil	[メツッド]
:calc-current-swing-leg-coords ratio src dst &key (type :shuffling) (step-height default-step-h	neight) [メソッド]
:calc-ratio-from-double-support-ratio nil	[メツッド]
:calc-current-refzmp prev cur next	[メソッド]
:calc-one-tick-gait-parameter $type$	[メソッド]
:proc-one-tick &key (type :shuffling) (solve-angle-vector :solve-av-by-move-centroid-on-foot) (snil)	solve-angle-vector-args) (debug [メソッド]
$: \mathbf{update\text{-}current\text{-}gait\text{-}parameter}\ \mathit{nil}$	[メソッド]

:solve-angle-vector support-leg support-leg-coords swing-leg-coords cog &key (solve-angle-vector :solve-av-by-move-centroid-on-foot) (solve-angle-vector-args) [メソッド]

:solve-av-by-move-centroid-on-foot support-leg support-leg-coords swing-leg-coords cog robot &rest args &key (cog-gain 3.5) (stop 100) (additional-nspace-list) &allow-other-keys

:cycloid-midpoint ratio start goal height &key (top-ratio 0.5)

[メソッド]

:cycloid-midcoords ratio start goal height &key (top-ratio 0.5)

[メソッド]

calc-inertia-matrix-rotational mat row column paxis m-til c-til i-til axis-for-angular child-link world-default-coords translation-axis rotation-axis tmp-v0 tmp-v1 tmp-v2 tmp-va tmp-vb tmp-vc tmp-vd tmp-m [関数]

axis rotation-axis tmp-v0 tmp-v1 tmp-v2 tmp-va tmp-vb tmp-vc tmp-vd tmp-m nil calc-inertia-matrix-linear mat row column paxis m-til c-til axis-for-angular child-link world-default-coords translation-

 $_{\mathrm{nil}}$

19 ロボットビューワ

x::irtviewer [クラス]

:super x:panel

 $\hbox{::slots} \qquad \hbox{x::viewer x::objects x::draw-things x::previous-cursor-pos x::left-right-angle x::up-downleft} \\$

:create &rest args &key (x::title IRT viewer) (x::view-name (gensym title)) (x::hither 200.0) (x::yon 50000.0) (x::width 500) (x::height 500) ((:draw-origin do) 150) ((:draw-floor x::df) nil) & allow-other-keys [メソッド] [メソッド] :viewer &rest args :redraw nil[メソッド] [メソッド] :expose x:event $: {\bf resize} \ x :: new width \ x :: new height$ [メソッド] :configure notify x:event[メソッド] :viewtarget &optional x::p [メソッド] [メソッド] :viewpoint &optional x::p $: \mathbf{look1} \ \ \mathscr{C}optional \ (x::vt \ x::viewtarget) \ (x::lra \ x::left-right-angle) \ (x::uda \ x::up-down-angle)$ [メソッド] :look-all $\&optional \ x::bbox$ [メソッド] :move-viewing-around-viewtarget $x:event \ x::x \ x::y \ x::dx \ x::dy \ x::vwr$ [メソッド] [メソッド] :set-cursor-pos-event x:event $: \mathbf{move\text{-}coords\text{-}event} \ x : event$ [メソッド]

:draw-event x:event[メソッド] :draw-objects &rest args [メソッド] :objects &rest args [メソッド] :select-drawmode x::mode[メソッド] :flush nil [メソッド] :change-background x::col[メソッド] viewer-dummy [クラス] propertied-object :super :slots nil :nomethod &rest args [メソッド] irtviewer-dummy [クラス] propertied-object :super :slots objects draw-things :objects &rest args [メソッド] :nomethod &rest args [メソッド]

make-irtviewer &rest args

[関数]

Create irtviewer :view-name title :hither near cropping plane :yon far cropping plane :width width of the window :height height of the window :draw-origin size of origin arrow, use nil to disable it :draw-floor use t to view floor

x::make-lr-ud-coords x::lra x::uda [関数]

nil x::draw-things x::objs [関数] objects & optional (objs t) vw [関数] make-irtviewer-dummy &rest args [関数]

 $_{\rm nil}$

干渉計算 20

干渉計算には2組の幾何モデルが交差するかを判定する物である.irteus ではノースカロライナ大学のLin 氏らのグループにより開発された PQP を他言語インターフェースを介して利用できるようにしてある.(他の 干渉計算ソフトウェアパッケージについては http://gamma.cs.unc.edu/research/collision/に詳しい.) PQP は(1)2つのモデルが交差するかを判定する衝突検出,(2)2つのモデル間の最初距離を算出する距離計算,(3) 2つのモデルがある距離以下であるかを判定する近接検証,等の3つ機能を提供する.

PQP ソフトウェアパッケージの使い方は irteus/PQP/README.txt に書いてあり, irteus/PQP/src/PQP.h を読むことで理解できるようになっている.

20.1 irteus から PQP の呼び出し

irteus で PQP を使うためのファイルは CPQP.C, euspqp.c, pqp.l からなる . 2 つの幾何モデルが衝突してしるか否かを判定するためには ,

を呼び出せば良い . r1,r1,r2,t1 はそれぞれの物体の並進ベクトル , 回転行列となり , (get model1 :pqpmodel) で PQP の幾何モデルへのポインタを参照する . このポインタは:make-pqpmodel メソッドの中で以下のよう計算される .

```
(defmethod cascaded-coords
  (:make-pqpmodel
   (&key (fat 0))
   (let ((m (pqpmakemodel))
         vs v1 v2 v3 (id 0))
     (setf (get self :pqpmodel) m)
     (pqpbeginmodel m)
     (dolist (f (send self :faces))
       (dolist (poly (face-to-triangle-aux f))
         (setq vs (send poly :vertices)
               v1 (send self :inverse-transform-vector (first vs))
               v2 (send self :inverse-transform-vector (second vs))
               v3 (send self :inverse-transform-vector (third vs)))
         (when (not (= fat 0))
           (setq v1 (v+ v1 (scale fat (normalize-vector v1)))
                 v2 (v+ v2 (scale fat (normalize-vector v2)))
                 v3 (v+ v3 (scale fat (normalize-vector v3)))))
         (pqpaddtri m v1 v2 v3 id)
         (incf id)))
     (pqpendmodel m)
```

ここでは,まず (pqpmakemodel) が呼び出されている.pqpmakemodel の中では,euqpqp.c で定義されている,

```
pointer PQPMAKEMODEL(register context *ctx, int n, register pointer *argv) {
    int addr = PQP_MakeModel();
    return makeint(addr);
}

が呼び出されており、これは、CPQP.Cの
PQP\_Model *PQP_MakeModel()
{
    return new PQP_Model();
}
```

が呼ばれている. $PQP_Model()$ は PQP.h で定義されているものであり,この様にして euslisp 内の関数が実際の PQP ライブラリの関数に渡されている以降, $(pqpbeginmodel\ m)$ で PQP の幾何モデルのインスタンスを作成し, $(pqpaddtri\ m\ v1\ v2\ v3\ id)$ として面情報を登録している.

20.2 ロボット動作と干渉計算

ハンドで物体をつかむ,という動作の静的なシミュレーションを行う場合に手(指)のリンクと対象物体の 干渉を調べ,これが起こるところで物体をつかむ動作を停止させるということが出来る.

```
(objects (list *sarm* *target*))
(send *sarm* :solve-ik *target* :debug-view t)
(while (> a 0)
  (if (pqp-collision-check-objects
       (list (send *sarm* :joint-fr :child-link)
(send *sarm* :joint-fl :child-link))
       (list *target*))
      (return))
  (decf a 0.1)
  (send *irtviewer* :draw-objects)
  (send *sarm* :move-fingers a))
(send *sarm* :end-coords :assoc *target*)
(dotimes (i 100)
  (send *sarm* :joint0 :joint-angle 1 :relative t)
  (send *irtviewer* :draw-objects))
(send *sarm* :end-coords :dissoc *target*)
(dotimes (i 100)
  (send *sarm* :joint0 :joint-angle -1 :relative t)
  (send *irtviewer* :draw-objects))
 同様の機能が,"irteus/demo/sample-arm-model.1"ファイルの:open-hand,:close-hand というメソッドで提
供されている.
```

return nil or t

pqp-collision-check geometry::model1 geometry::model2 &optional (geometry::flag geometry::pqp_first_contact) &key (geometry::fat 0) (geometry::fat 2 nil) [関数]

2) pqp-collision-distance geometry::model1 geometry::model2 &key (geometry::fat 0) (geometry::fat2 nil) (geometry::qsize

nil

21 BVH データ

bvh-link [75]

 $: super \qquad \textbf{bodyset-link}$

:slots type offset channels neutral

:init name typ offst chs parent children

[メソッド]

[クラス]

create link for byh model

:type nil

:offset nil [メソッド]

:channels nil

bvh-sphere-joint

super sphere-joint

:slots axis-order byh-offset-rotation

:init &rest args &key (order (list :z :x :y)) ((:bvh-offset-rotation bvh-rotation) (unit-matrix 3)) &allow-other-人 keysソッド create joint for byh model :joint-angle-bvh $&optional \ v$ [メソッド] :joint-angle-byh-offset $\mathscr{C}optional\ v$ [メソッド] :joint-angle-bvh-impl v bvh-offset [メソッド] :axis-order nil [メソッド] :bvh-offset-rotation nil[メソッド] bvh-6dof-joint [クラス] 6dof-joint :super scale axis-order byh-offset-rotation :slots :init &rest args &key (order (list :x :y :z :z :x :y)) ((:scale scl)) ((:bvh-offset-rotation bvh-rotation) (unit-matrix 3)) &allowother-keys ソッド :joint-angle-bvh $@optional \ v$ [メソッド] :joint-angle-byh-offset $\mathscr{C}optional\ v$ [メソッド] :joint-angle-bvh-impl v bvh-offset [メソッド] :axis-order nil[メソッド] :bvh-offset-rotation nil[メソッド] bvh-robot-model [クラス] :super robot-model :slots nil :init &rest args &key tree coords ((:scale scl)) [メソッド] create robot model for byh model $\textbf{:make-bvh-link} \ tree \ \&key \ parent \ ((:scale \ scl))$ [メソッド] $\textbf{:angle-vector} \ \textit{\&optional vec (angle-vector (instantiate float-vector (calc-target-joint-dimension joint-list)))}$ [メソッド] [メソッド] :dump-joints links &key (depth 0) (strm *standard-output*) $\textbf{:dump-hierarchy} \ \mathscr{C}optional \ (strm *standard-output*)$ [メソッド] [メソッド] :dump-motion &optional (strm *standard-output*)

:copy-state-to robot	[メソッド]
:fix-joint-angle i limb joint-name joint-order a	[メソッド]
:fix-joint-order jo limb	[メソッド]
:bvh-offset-rotate name	[メソッド]
$: \textbf{init-end-coords} \ \mathit{nil}$	[メソッド]
:init-root-link nil	[メソッド]
motion-capture-data	[クラス]
:super propertied-object :slots frame model animation	[, , ,
:init fname &key (coords (make-coords)) ((:scale scl))	[メソッド]
:model &rest args	[メソッド]
:animation & rest args	[メソッド]
:frame $Coptional f$	[メソッド]
$\textbf{:frame-length}\ nil$	[メソッド]
:animate &rest args &key (start 0) (step 1) (end (send self :frame-length)) (interval 20) &allow-other-keys	[メソッド]
rikiya-bvh-robot-model	[クラス]
:super bvh-robot-model :slots nil	, ,
:init &rest args	[メソッド]
tum-bvh-robot-model	[4 - -]
	[クラス]
:super bvh-robot-model :slots nil	
:init &rest args	[メソッド]
cmu-bvh-robot-model	[クラス]
:super bvh-robot-model	
:slots nil	
:init &rest args	[メソッド]
read-bvh fname &key scale	[関数]

read byh file bvh2eus fname &rest args [関数] read by file and anmiate robot model in the viewer load-mcd fname &key (scale) (coords) (bvh-robot-model-class bvh-robot-model) [関数] load motion capture data parse-bvh-sexp src &key ((:scale scl)) [関数] make-bvh-robot-model bvh-data &rest args [関数] nil Collada データ 22 collada::eusmodel-description collada::model [関数] convert a 'model' to eusmodel-description collada::eusmodel-link-specs collada::links [関数] convert 'links' to <link-specs>

 ${\bf collada::eusmodel\text{-}joint\text{-}specs}\ \mathit{collada::joints}$

convert 'joints' to <joint-specs>

collada::eusmodel-description->collada name collada::description &key (scale 0.001)

convert eusmodel-description to collada sxml

collada::matrix->collada-rotate-vector collada::mat

[関数]

[関数]

convert a rotation matrix to axis-angle.

convert irtmodel to collada model. (convert-irtmodel-to-collada irtmodel-file-path & optional (output-full-dir (send (truename "./") :namestring)) (model-name))

collada::symbol->string collada::sym

[関数]

[関数] nil collada::->string collada::val collada::string-append &rest args [関数] nil ${f collada::make-attr}\ collada::l\ collada::ac$ [関数] collada::make-xml collada::x collada::bef collada::aft nil [関数] collada::sxml->xml collada::sxmlnil [関数] nil ${f collada::xml-output-to-string-stream}\ collada::ss\ collada::l$ [関数] collada::cat-normal collada::l collada::s nil [関数] $_{\rm nil}$ ${f collada::cat-clark}$ collada::l collada::s collada::i[関数] nil ${\bf collada:: verificate\text{-}unique\text{-}strings}\ \textit{names}$ [関数] nil collada::eusmodel-link-spec collada::link [関数] ${\bf collada::eusmodel\text{-}mesh\text{-}spec}\ \mathit{collada::link}$ nil [関数] nil collada::eusmodel-joint-spec collada::_joint [関数] collada::eusmodel-limit-spec collada::-joint [関数] nil nil ${\bf collada::eusmodel-endcoords-specs}\ collada::model$ [関数] ${\bf collada:: eus model-link-description}\ collada:: description$ [関数] nil ${\bf collada::eusmodel-joint-description}\ \ collada::description$ [関数]

nil	${\bf collada:: eus model-end coords-description} \ \ collada:: description$	[関数]
nil	collada::setup-collada-filesystem collada::obj-name collada::base-dir	[関数]
nil	collada::range2 collada::n	[関数]
nil	eus2collada collada::obj collada::full-root-dir &key (scale 0.001) (collada::file-suffix .dae)	[関数]
nil	collada::collada-node-id collada::link-descrption	[関数]
nil	collada::collada-node-name collada::link-descrption	[関数]
nil	collada::links-description->collada-library-materials collada::links-desc	[関数]
nil	collada::link-description->collada-materials collada::link-desc	[関数]
nil	collada::mesh-description->collada-material collada::mat collada::effect	[関数]
	collada::links-description->collada-library-effects collada::links-desc	[関数]
nil		
nil	collada::link-description->collada-effects collada::link-desc	[関数]
nil	collada::mesh-description->collada:effect collada::mesh id	[関数]
nil	collada::matrix->collada-string collada::mat	[関数]
nil	collada::find-parent-liks-from-link-description collada::target-link collada::desc	[関数]
nil	collada::eusmodel-description->collada-node-transformations collada::target-link collada::desc	[関数]
nil	${\bf collada::eusmodel\text{-}description\text{-}>} {\bf collada::} target\text{-}link\ collada::} desc$	[関数]
nil	${\bf collada:: eusmodel-description-} {\bf collada-library-visual-scenes} \ name \ collada:: desc$	[関数]
nil	collada::mesh-description->instance-material collada::s	[関数]
nil	${\bf collada:: link-description-> collada-bind-material} \ \ collada:: link$	[関数]
nil	${\bf collada:: eus model-description-> collada:: library-kine matics-scenes \ \it name \ collada:: description-> collada:: descr$	[関数]
nil	${\bf collada:: eus model-description-} {\bf collada-library-kine matics-models} \ \it name \ collada:: desc$	[関数]
nil	${\bf collada:: eus model-description-} {\bf collada:: desc}$	[関数]
nil	${\bf collada:: eus model-description-} {\bf collada-library-physics-scenes} \ \it name \ collada:: desc$	[関数]
nil	${\bf collada:: eus model-description-} {\bf collada-library-physics-models} \ name \ collada:: desc$	[関数]
nil	${\bf collada::} find \textbf{-root-link-from-joints-description} \ \ collada:: find -root-link-from-joints-descr$	[関数]
nil	${\bf collada::} find-link-from-links-description \ name \ collada:: links-description$	[関数]
nil	${\bf collada:: eus model-description-> collada-links} \ \ collada:: description$	[関数]
nil	${\bf collada::} find-{\bf joint-from-link-description}\ \ collada:: target\ \ collada:: joints$	[関数]
nil	${\bf collada::} find-{\bf child-link-descriptions} \ \ collada::parent \ \ collada::links \ \ collada::joints$	[関数]
nil	${\bf collada:: eusmodel-description-> collada-library-articulated-systems}\ \ collada:: desc\ \ name$	[関数]
nil	$\textbf{collada::} \textbf{eusmodel-endcoords-description-} \textbf{openrave-manipulator} \ \textit{collada::} end-\textit{coords} \ \textit{collada::} description$	[関数]
nil	${\bf collada:: eusmodel-description-} {\bf collada:: links-tree} \ \ collada:: target \ \ collada:: links \ \ collada:: joints$	[関数]
nil	${\bf collada::joints-description-} {\bf collada::joints-} desc$	[関数]
nil	collada::joint-description->collada-instance-joint collada::joint-desc	· [関数]
nil	collada::eusmodel-description->collada-library-joints collada::description	[関数]
nil	collada::joints-description->collada-joints collada::joints-description	[関数]
nil	collada::collada::joint-id collada::joint-description	[関数]
nil	collada::joint-description->collada::joint-description	[関数]
nil	collada::linear-joint-description->collada:joint collada::joint-description	[関数]
nil	collada::rotational-joint-description->collada::joint-description	[関数]
nil	collada::eusmodel-description->collada-scene collada::description	[関数]
nil	collada::eusmodel-description->collada-library-geometries collada::description	[関数]
nil	collada::collada-geometry-id-base collada::link-descrption	[関数]
nil	collada::collada-geometry-name-base collada::link-descrption	[関数]
nil	collada::links-description->collada-geometries collada::links-description	[関数]
nil	collada::mesh-object->collada-mesh collada::mesh id	[関数]
nil	collada::link-description->collada-geometry collada::link-description	[関数]
nil	collada::mesh->collada-indices collada::mesh	[関数]
nil nil	collada::mesh-vertices->collada-string collada::mesh	[関数]
nil	collada::mesh-normals->collada-string collada::mesh	[関数]
nil	collada::float-vector->collada-string collada::v	[関数]
nil	collada::enum-integer-list collada::n	[関数]
nil	${\bf collada::search-minimum-rotation-matrix}\ \ collada::mat$	[関数]

nil collada::estimate-class-name collada::model-file [関数]
nil collada::remove-directory-name fname [関数]

nil

23 ポイントクラウドデータ

pointcloud [クラス]

:super cascaded-coords

:slots parray carray narray curvature poolor psize awidth asize box height width view-coord

:init &rest args &key ((:points mat)) ((:colors cary)) ((:normals nary)) ((:curvatures curv)) ((:height ht)) ((:width wd)) (point-color (float-vector 0 1 0)) (point-size 2.0) (fill) (arrow-width 2.0) (arrow-size 0.0) [メソド]

Create point cloud object

:size-change &optional wd ht

[メソッド]

change width and height, this method does not change points data

:points & optional pts wd ht
replace points, pts should be list of points or ntimes matrix

[メソッド]

:colors & coptional cls
replace colors, cls should be list of points or ntimes matrix

[メソッド]

:normals &optional nmls

[メソッド]

replace normals by, nmls should be list of points or ntimes3 matrix

:point-list &optional (remove-nan)

[メソッド]

return list of points

:color-list nil

[メソッド]

return list of colors

:normal-list nil

[メソッド]

return list of normals

:centroid nil

[メソッド]

retrun centroid of this point cloud

:filter &rest args &key create &allow-other-keys

[メソッド]

this method can take the same keywords with :filter-with-indices method. if :create is true, return filtered point cloud and original point cloud does not change.

:filter-with-indices idx-lst &key (create) (negative)

[メソッド]

filter point cloud with list of index (points which are indicated by indices will remain). if :create is true, return filtered point cloud and original point cloud does not change. if :negative is true, points which are indicated by indices will be removed.

:filtered-indices &key key ckey nkey pckey pnkey pcnkey negative &allow-other-keys [メソッド] create list of index where filter function retrun true. key, ckey, nkey are filter function for points, colors, normals. They are expected to take one argument and return t or nil. pckey, pnkey are filter function for points and colors, points and normals. They are expected to take two arguments and return t or nil. penkey is filter function for points, colors and normals. It is expected to take three arguments and return t or nil. [メソッド] :step step &key (fixsize) (create) downsample points with step [メソッド] :copy-from pcupdate object by pc [メソッド] :transform-points coords &key (create) transform points and normals with coords. if :create is true, return transformed point cloud and original point cloud does not change. [メソッド] :box nil [メソッド] :vertices nil [メソッド] :size nil[メソッド] :width nil[メソッド] [メソッド] :height nil:view-coords &optional vc [メソッド] :curvatures &optional curv [メソッド] [メソッド] :curvature-list nil [メソッド] $\textbf{:point-color} \ \mathscr{C}optional \ pc$ $\textbf{:point-size} \ \mathscr{C}optional \ ps$ [メソッド] [メソッド] :axis-length &optioanl al $: \!\! \mathbf{axis\text{-}width} \ \mathcal{C}optional \ aw$ [メソッド] :clear-color nil[メソッド] :clear-normal nil[メソッド] [メソッド] :append nil

:append-list nil[メソッド] :nfilter &rest args [メソッド] :viewangle-inlier &key (min-z 0.0) (hangle 44.0) (vangle 35.0) [メソッド] :image-position-inlier &key (ipkey) (height 144) (width 176) (cy (/ (float (- height 1)) 2)) (cx (/ (float (- width 1)) 2)) [メゾッド] negative:image-circle-filter dist &key (height 144) (width 176) (cy (/ (float (- height 1)) 2)) (cx (/ (float (- width 1)) 2)) create negative[メソッド] :step-inlier step offx offy [メソッド] :generate-color-histogram-hs &key (h-step 9) (s-step 7) (hlimits (cons 360.0 0.0)) (vlimits (cons 1.0 0.15)) (slimits (cons 1.0 0.25)) (rotate-hue) (color-scale 255.0) (sizelimits 1) [メソッド] :convert-to-world &key (create) [メソッド] $: \mathbf{drawnormalmode} \ \mathscr{C}optional \ mode$ [メソッド] $\textbf{:transparent} \ \mathcal{C}optional \ trs$ [メソッド] :draw vwer [メソッド]

24 グラフ表現

:neighbors &optional args

node	[クラス]
------	-------

 $: \mathbf{super} \qquad \mathbf{propertied\text{-}object}$

:slots arc-list

:init n	[メソッド]
:arc-list nil	[メソッド]
:successors nil	[メソッド]
:add-arc a	[メソッド]
:remove-arc a	[メソッド]
:remove-all-arcs nil	[メソッド]
:unlink n	[メソッド]
$:$ add-neighbor $n \mathcal{E}optional a$	[メソッド]

[メソッド]

arc			[クラス]
	:super	propertied-object	
	:slots	from to	
:init from_ to_			[メソッド]
:from nil			[77] [9]
:irom mi			[メソッド]
:to nil			[メソッド]
:prin1 &optional (str	m t) Erest n	usgs	[メソッド]
directed-gra	aph		[クラス]
8	:super	propertied-object	[,,,,]
	:slots	nodes	
:init nil			[メソッド]
:successors node &re	est args		[メソッド]
:node name			[メソッド]
:nodes &optional arg			[メソッド]
:add-node n			[メソッド]
			[./.\/ 9]
:remove-node n			[メソッド]
:clear-nodes nil			[メソッド]
:add-arc-from-to fro	om to		[メソッド]
aud-arc-iroin-to y/c	<i>in to</i>		[2,2,2,1]
:remove-arc arc			[メソッド]
:adjacency-matrix	nil		[メソッド]
y y			[, , , , ,
: adjacency-list nil			[メソッド]
:write-to-dot fname	Coptional re	sult-path (title output)	[メソッド]
:write-to-pdf fname	Coptional re	sult-path (title (string-right-trim .pdf fname))	[メソッド]
$\operatorname{costed-arc}$			[クラス]
	:super	arc	
	:slots	cost	

:init from to c			[メツッド]
:cost nil			[メソッド]
costed-grap	\mathbf{h}		[クラス]
	:super	directed-graph	
	:slots	nil	
:add-arc from to cos	t Ekey (both	nil)	[メソッド]
:add-arc-from-to fro	om to cost &	Skey (both nil)	[メソッド]
:path-cost from arc	to		[メソッド]
graph			[クラス]
2	:super	$\operatorname{costed-graph}$	
	:slots	start-state goal-state	
:goal-test gs			[メソッド]
:path-cost from arc to			[メソッド]
:start-state &optional arg			[メソッド]
:goal-state &optional arg			[メソッド]
:add-arc from to &ke	ey (both nil)		[メソッド]
:add-arc-from-to fro	om to Ekey	(both nil)	[メソッド]
arced-node			[クラス]
	:super	node	
	:slots	nil	
:init Ekey name			[メソッド]
:find-action n			[メソッド]
:neighbor-action-al	ist nil		[メソッド]
solver-node			[クラス]
	:super	propertied-object	
	:slots	state cost parent action memorized-path	
:init st &key ((:cost c) 0) ((:parent p) nil) ((:action a) nil)			[メソッド]

:path & optional (prev nil)				
:expand prblm &rest args				
:state &optional arg	:state &optional arg			
:cost &optional arg				
:parent Coptional arg				
:action & optional arg				
solver			[クラス]	
	super slots	propertied-object nil		
:init nil			[メソッド]	
:solve prblm			[メソッド]	
:solve-by-name prblm s g &key (verbose nil)			[メソッド]	
graph-search-solver				
	super	solver		
:5	slots	open-list close-list		
$: \mathbf{solve\text{-}init}\ prblm$			[メソッド]	
:find-node-in-close-list n			[メソッド]	
:solve prblm &key (verbose nil)				
$: {\bf add-to-open-list} \ obj/list$				
:null-open-list? nil				
:clear-open-list nil				
$: {\bf add\text{-}list\text{-}to\text{-}open\text{-}list} \ \textit{lst}$				
$: {\bf add-object-to-open-list} \ \mathit{lst}$				
:pop-from-open-list &key (debug)				
:open-list &optional arg				
:close-list &optional arg				
breadth-first-graph-search-solver				

:super **graph-search-solver** :slots nil

:slots

nil

:init nil			[メソッド]
:clear-open-list nil			
$: {\bf add\text{-}list\text{-}to\text{-}open\text{-}list} \ \mathit{lst}$			[メソッド]
:add-object-to-open-list obj			[メソッド]
:pop-from-open-list &key (debug)			[メソッド]
depth-first-g	:super	earch-solver graph-search-solver nil	[クラス]
:init nil			[メソッド]
:clear-open-list nil			[メソッド]
$: \mathbf{add\text{-}list\text{-}to\text{-}open\text{-}list} \ \mathit{lst}$			[メソッド]
: add-object-to-open-list obj			
:pop-from-open-list &key (debug)			[メソッド]
best-first-gr	:super	arch-solver graph-search-solver aproblem	[クラス]
:init p			[メソッド]
:clear-open-list nil			[メソッド]
$: {\bf add\text{-}list\text{-}to\text{-}open\text{-}list} \ \mathit{lst}$			[メソッド]
: add-object-to-open-list obj			
:pop-from-open-list &key (debug nil)			
:fn <i>n p</i>			[メソッド]
a*-graph-search-solver			
	:super	best-first-graph-search-solver	

:init p [$\cancel{\times} \cancel{\vee} \cancel{\vee} \cancel{\vdash}$]

:fn n p &key (debug nil) [メソッド]

:gn n p [メソッド]

:hn n p

25 irteus 拡張

25.1 GL/X 表示

gl::glvertices [クラス]

:super cascaded-coords

 $: slots \qquad \qquad gl:: mesh-list \ gl:: filename \ gl:: bbox$

:set-color gl::color &optional (gl::transparent)

[メソッド]

set color as float vector of 3 elements, and transparent as float, all values are betwenn 0 to 1

:actual-vertices nil [メソッド]

return list of vertices(float-vector), it returns all vertices of this object

:calc-bounding-box nil

[メソッド]

[メソッド]

calculate and set bounding box of this object

:vertices nil

return list of vertices (float-vector), it returns vertices of bounding box of this object

:reset-offset-from-parent nil

[メソッド]

move vertices in this object using self transformation, this method change values of vertices. coordinates's method such as :transform just change view of this object

: expand-vertices nil

[メソッド]

expand vertices number as same number of indices, it enable to set individual normal to every vertices

:use-flat-shader nil [メソッド]

use flat shader mode, use opengl function of glShadeModel(GL_FLAT)

:use-smooth-shader nil [メソッド]

use smooth shader mode, use opengl function of glShadeModel(GL_SMOOTH) default

:calc-normals & optional (gl::force nil) (gl::expand t) (gl::flat t)

[メソッド]

normal calculation if force option is true, clear current normalset. if exapnd option is ture, do :expand-vertices. if flat option is true, use-flat-shader

 $\textbf{:convert-to-faces} \ \ \mathscr{C}rest \ args \ \ \mathscr{C}key \ (gl::wrt : local) \ \ \mathscr{C}allow-other-keys$

[メソッド]

create list of faces using vertices of this object

[メソッド] :convert-to-faceset &rest args create faceset using vertices of this object :set-offset gl::cds [メソッド] move vertices in this object using given coordinates, this method change values of vertices. coordinates's method such as :transform just change view of this object [メソッド] :glvertices &optional (name) (gl::test #'string=) create individual glvertices objects from mesh-list. if name is given, search mesh has the same name [メソッド] :append-glvertices gl::glv-lst append list of glvertices to this object $\textbf{:init} \ \textit{gl::mlst} \ \textit{\&trest} \ \textit{args} \ \textit{\&tkey} \ ((\textit{:filename} \ \textit{gl::fn})) \ \textit{\&tallow-other-keys}$ [メソッド] [メソッド] :filename &optional gl::nm :expand-vertices-info gl::minfo [メソッド] :faces nil [メソッド] :draw-on &key ((:viewer gl::vwer) *viewer*) [メソッド] [メソッド] : $\mathbf{draw}\ gl::vwr\ \mathcal{C}rest\ args$ $\textbf{:} \textbf{collision-check-objects} \ \mathscr{C}rest \ args$ [メソッド] :box nil [メソッド] gl::glbody [クラス] body :super :slots gl::glvertices :glvertices &rest args [メソッド] :draw gl::vwr[メソッド] [メソッド] :set-color &rest args [関数] $gl::find-color \ gl::color$ returns color vector of given color name, the name is defiend in https://github.com/euslisp/jskeus/blob/master/in gl::transparent gl::abody gl::param [関数] Set abody to transparent with param gl::make-glvertices-from-faceset gl::fs &key (gl::material) [関数] returns glvertices instance fs is geomatry::faceset gl::make-glvertices-from-faces gl::flst &key (gl::material) [関数] returns glvertices instance flst is list of geomatry::face

[関数]

gl::set-stereo-gl-attribute nil

 ${\bf gl::reset\text{-}gl\text{-}attribute}\ \mathit{nil}$ [関数] $_{\mathrm{nil}}$ nil gl::delete-displaylist-id gl::dllst[関数] gl::draw-globjects gl::vwr gl::draw-things &key (gl::clear t) (gl::flush t) (gl::draw-origin 150) (gl::draw-floor nil) [関数] nil gl::draw-glbody gl::vwr gl::abody[関数] $_{\mathrm{nil}}$ x::tabbed-panel [クラス] nil x:panel :super x::tabbed-buttons x::tabbed-panels x::selected-tabbed-panel :slots :create &rest args [メソッド] :add-tabbed-panel name [メソッド] $\textbf{:} \textbf{change-tabbed-panel} \ \textit{x::} obj$ [メソッド] $\textbf{:tabbed-button}\ name\ \mathscr{C}rest\ args$ [メソッド] :tabbed-panel name &rest args [メソッド] $\mathbf{:resize}\ x{::}w\ h$ [メソッド] x::panel-tab-button-item [クラス] x:button-item :super : slots $_{\rm nil}$:draw-label $\&optional\ (x::state\ :up)\ (x::offset\ 0)$ [メソッド] x::window-main-one &optional fd [関数] x::event-far x::e[関数] nil \mathbf{x} ::event-near x::e[関数] nil ユーティリティ関数 25.2 mtimer [クラス] object :super buf : slots:init nil [メソッド] Initialize timer object. :start nil [メソッド] Start timer. [メソッド] :stop nil

Stop timer and returns elapsed time in seconds.

permutation lst n[関数] Returns permutation of given list combination lst n[関数] Returns combination of given list find-extreams datum &key (key #'identity) (identity #'=) (bigger #'>) [関数] Returns the elements of datum which maximizes key function eus-server & optional (port 6666) & key (host (unix:gethostname)) [関数] Create euslisp interpreter server, data sent to socket is evaluated as lisp expression connect-server-until-success host port &key (max-port (+ port 20)) (return-with-port nil) [関数] Connect euslisp interpreter server until success format-array arr & optional (header) (in 7) (fl 3) (strm *error-output*) (use-line-break t) [関数] print formatted array his2rgb h & optional (i 1.0) (s 1.0) ret [関数] convert his to rgb $(0 \le h \le 360, 0.0 \le i \le 1.0, 0.0 \le s \le 1.0)$ hvs2rgb h & optional (i 1.0) (s 1.0) ret [関数] convert hvs to rgb (0 <= h <= 360, 0.0 <= i <= 1.0, 0.0 <= s <= 1.0) rgb2his r &optional g b ret [関数] convert rgb to his $(0 \le r,g,b \le 255)$ rgb2hvs r &optional g b ret [関数] convert rt to hvs $(0 \le r,g,b \le 255)$ color-category10 i [関数] Choose good color from 10 colors color-category 20 i[関数] Choose good color from 20 colors make-robot-model-from-name name &rest args [関数] make a robot model from string: (make-robot-model "pr2") forward-message-to to args [関数] forward-message-to-all to args [関数] nil mapjoin expr seq1 seq2 [関数] nil need-thread n & optional (lsize (*512 1024)) (csize lsize) [関数] piped-fork-returns-list cmd &optional args [関数] nil 数学関数 25.3

[関数]

[関数]

inverse-matrix mat

diagonal v

returns inverse matrix of mat

```
make diagonal matrix from given vector, diagonal \#f(1\ 2) \rightarrow \#2f((1\ 0)(0\ 2))
                                                                                                    [関数]
minor-matrix m ic jc
     return a matrix removing ic row and jc col elements from m
atan2 y x
                                                                                                     [関数]
     returns at an 2 of y and x (atan (/y x))
outer-product-matrix v &optional (ret (unit-matrix 3))
                                                                                                     [関数]
     returns outer product matrix of given v
     matrix(a) v = a *v
     0 -w2 w1
     w2 0 -w0
     -w1 w0 0
matrix2quaternion m
                                                                                                     [関数]
     returns quaternion of given matrix
quaternion2matrix q
                                                                                                     [関数]
     returns matrix of given quaternion
                                                                                                    [関数]
matrix-log m
     returns matrix log of given m, it returns [-pi, pi]
matrix-exponent omega & optional (p 1.0)
                                                                                                     [関数]
     returns exponent of given omega
midrot p r1 r2
                                                                                                    [関数]
     returns mid (or p) rotation matrix of given two matrix r1 and r1
pseudo-inverse mat &optional weight-vector ret wmat mat-tmp
                                                                                                    [関数]
     returns pseudo inverse of given mat
sr-inverse mat Eoptional (k 1.0) weight-vector ret wmat tmat umat umat2 mat-tmp mat-tmp-rc mat-tmp-rr
                                                                                                     [関数]
mat-tmp-rr2
     returns sr-inverse of given mat
manipulability jacobi &optional tmp-mrr tmp-mcr
                                                                                                     [関数]
     return manipulability of given matrix
                                                                                                    [関数]
random-gauss & optional (m 0) (s 1)
     make random gauss, m:mean s:standard-deviation
gaussian-random dim Goptional (m 0) (s 1)
                                                                                                    [関数]
     make random gauss vector, replacement for quasi-random defined in matlib.c
normalize-vector v & optional r (eps 1.000000e-20)
                                                                                                    [関数]
     calculate normalize-vector \#f(0\ 0\ 0) -> \#f(0\ 0\ 0).
\mathbf{pseudo-inverse-org}\ m\ \mathscr{C}optional\ ret\ winv\ mat\text{-}tmp\text{-}cr
                                                                                                     [関数]
nil sr-inverse-org mat Goptional (k 1) me mat-tmp-cr mat-tmp-rr
                                                                                                      [関数]
   eigen-decompose m
                                                                                                      [関数]
```

[関数]

nil lms point-list

lms-estimate res point-[関数] [関数] ${\bf lms\text{-}error}\ \mathit{result}\ \mathit{point\text{-}list}$ error) (lms-estimate-func #'lms-estimate) nil 'lmeds point-list ekey (num 5) (err-rate 0.3) (iteration) (ransac-threshold) (lms-func #'lms) (lmeds-error-func #'lmeds-error-func #'lmeds-error-func #'lmeds-error-func #'lmeds-error-func #'lms-estimate) ${\bf lmeds\text{-}error}\ \textit{result\ point-list\ } \mathcal{C}key\ (\textit{lms-estimate-func\ }\#'\textit{lms-estimate})$ [関数] $_{\rm nil}$ lmeds-error-mat result mat &key (lms-estimate-func #'lms-estimate) [関数] nil $_{\mathrm{nil}}$ 25.4 画像関数 ${\bf read\text{-}image\text{-}file}\; fname$ [関数] read image of given fname. It returns instance of grayscale-image or color-image24. write-image-file fname image::img [関数] write img to given fname ${\bf read\text{-}png\text{-}file}\; fname$ [関数]

[関数]

 $\mathbf{write\text{-}png\text{-}file}\; fname\; image{::}img$

nil